

平成18年度国際子ども図書館
児童文学連続講座講義録

絵本の愉しみ

—イギリス絵本の伝統に学ぶ—



2007年10月

国立国会図書館国際子ども図書館



コールデコット 『ハートのクイーン』 (*The Queen of Heart* 当館請求記号 Y17-B3660)
p.26参照



コールデコット 『ハートのクイーン』 (同上) p.26参照



コールデコット 『乳しぼり娘』
(*The Milkmaid* 当館請求記号 Y17-A6553) p.132参照

平成18年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録

「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」

目 次

刊行にあたって	齋藤友紀子	3
凡例		4
ランドルフ・コールデコット	吉田 新一	6
ビアトリクス・ポター	吉田 新一	29
エドワード・アーディゾーニ	吉田 新一	53
チャールズ・キーピングー自己表現としての絵本ー	三宅 興子	82
シャーリー・ヒューズ ー英国で最も敬愛される絵本画家ー	灰島 かり	104
アンソニー・ブラウンの画像分析 ーイギリス絵本の伝統と革新ー	藤本 朝巳	123
国際子ども図書館のコレクションから ーコールデコット、ポター、 アーディゾーニ関連資料ー	千代 由利	142
絵本ギャラリーの紹介	小沼 里子	165
講師略歴		172

「児童文学連続講座講義録」の刊行にあたって

国際子ども図書館は、全国の各種図書館等で児童サービスに従事している図書館員を対象に、国内外の児童書・児童文学に関する幅広い知識の涵養を目的として「児童文学連続講座」を毎年開催しています。

第1回（平成16年度）は「ファンタジーの誕生と発展」、第2回（平成17年度）は、「日本児童文学の流れ」を総合テーマとして設定しました。平成18年度の第3回は、総合テーマを「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」とし、19世紀から現在までのイギリスの絵本作家の中から特に興味深い6名を選んで、イギリス絵本の伝統と特徴を辿ってみました。

講座の前半では、総合監修をお願いした吉田新一講師に、イギリス絵本の伝統を築き、継承した代表的な作家である、ランドルフ・コールデコット、ビアトリクス・ポター、エドワード・アーディゾーニの人と作品について講義していただきました。また、後半では、第二次世界大戦後の現代イギリス絵本を発展させた3名の絵本作家を取り上げ、三宅興子講師には、「チャールズ・キーピングー自己表現としての絵本ー」、灰島かり講師には、「シャーリー・ヒューズー英国で最も敬愛される絵本画家ー」、藤本朝巳講師には、「アンソニー・ブラウンの画像分析ーイギリス絵本の伝統と革新ー」というテーマで講義していただきました。

この講座は、当館が広く内外から収集した児童書を紹介し、国際子ども図書館の業務・サービスに対する理解を深めていただくことも目的としています。各講師にも、当館所蔵資料を講義で取り上げていただいておりますが、国際子ども図書館職員による関連資料紹介や利用ガイダンスも科目に加えております。今回は、「国際子ども図書館のコレクションからーコールデコット、ポター、アーディゾーニ関連資料ー」及び「絵本ギャラリーの紹介」を科目としました。

「児童文学連続講座」はおかげさまで毎年好評を得ておりますが、場所や時間の制約もあり、受講できる人は限られております。講座の成果をより多くの方々に享受していただきたく、第3回の本講座につきましても講義録を刊行いたしました。本と子どもをつなぐ仕事に携わっておられる皆様の日々の活動のお役に立つことができれば、これに勝る喜びはありません。

末尾ながら、お忙しい中、快く講師をお引き受けいただき、本講座を実りあるものにするためにご尽力いただきました講師の皆様に、厚く御礼申し上げます。

平成19年10月

国立国会図書館国際子ども図書館長

齋藤 友紀子

凡例

- 本書は、平成18年10月16日から18日の3日間にわたって国際子ども図書館で開催しました「国際子ども図書館児童文学連続講座—国際子ども図書館所蔵資料を使って（総合テーマ：絵本の愉しみ—イギリス絵本の伝統に学ぶ—）」の講義録です。
*次ページの日程表もあわせてご参照ください。
- 講義当日に各講師が配布した「レジюме」、「紹介資料リスト」もあわせて掲載しました。「レジюме」は講義本文の前に、「紹介資料リスト」は講義本文の末尾に掲載しています。
- 「紹介資料リスト」は、講義の中で紹介された資料についてリスト化したものです。書誌事項は、原則として国立国会図書館の目録の表記を採用しました（ただし、出版年は西暦に統一しました）。邦訳があるものは、原書と邦訳を組にして表にしました（所蔵資料を掲載しましたので、原書の書誌事項は初版本とは異なる場合があります）。
*所蔵のない原書の書誌事項については、『世界児童・青少年文学情報大事典』（勉誠出版）、OCLC（Online Computer Library Center）の目録等を参考にしました。
- 「紹介資料リスト」の「請求記号」の項には、国際子ども図書館の請求記号を記載しました。国際子ども図書館が所蔵しない場合は、国立国会図書館東京本館の請求記号を記載し、（本館）と付記しました（所蔵状況：平成19年7月現在）。

平成18年度児童文学連続講座「絵本の愉しみーイギリス絵本の伝統に学ぶー」 日程表

総合監修 吉田 新一（国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授）

○1日目 10月16日（月）

時 間	内 容	講 師
9時30分～ 10時30分	開会の挨拶・諸連絡 及び受講者自己紹介	国際子ども図書館職員
10時45分～ 12時45分	ランドルフ・コールデコット	吉田新一（国立国会図書館客員調査員、 立教大学名誉教授）
14時15分～ 16時15分	ビアトリクス・ポター	吉田新一
16時30分～ 17時30分	国際子ども図書館のコレクションから ーコールデコット、ポター、アーディ ゾーニ関連資料ー	千代由利（国際子ども図書館職員）

○2日目 10月17日（火）

時 間	講義名	講 師
10時～12時	エドワード・アーディゾーニ	吉田新一
13時～14時	①国際子ども図書館館内見学 ②講義紹介資料の自由閲覧等 (①②は選択とする)	国際子ども図書館職員
14時～16時	チャールズ・キーピング ー自己表現としての絵本ー	三宅興子（梅花女子大学大学院教授）
16時15分～17時	絵本ギャラリーの紹介	小沼里子（国際子ども図書館職員）

○3日目 10月18日（水）

時 間	講義名	講 師
10時～12時	シャーリー・ヒューズ ー英国で最も敬愛される絵本画家ー	灰島かり（翻訳家）
13時～15時	アンソニー・ブラウンの画像分析 ーイギリス絵本の伝統と革新ー	藤本朝巳（フェリス女学院大学教授）
15時～15時40分	休憩、修了証書授与	
15時40分～17時	研修生意見交換会	吉田新一、国際子ども図書館職員

レジュメ

ランドルフ・コールデコット

吉田 新一

ページを順にめくることでくことばと絵による語り>を楽しませてくれるのを、現代絵本の基本と考えるならば、それを十全に、理想的に具体化して、その後の絵本発展の原動力となったのが、ランドルフ・コールデコットの絵本でした。その絵本作りの妙技を愉しみながら、絵本の基本について考えてみます。

◎ランドルフ・コールデコット (Randolph Caldecott 1846-1886) の絵本 (全16冊)

- 1878 『ジョン・ギルピンのこっけいな出来事』
The Diverting History of John Gilpin (Y17-B1649 ; 821.65-d)
『ジャックがたてた家』 The House that Jack Built
- 1879 『森のふたりの幼い子ども』 The Babes in the Wood (VZ1-196)
『狂った犬の死に捧げる唄』 An Elegy on the Death of a Mad Dog
- 1880 『3人のゆかいな狩人』 The Three Jovial Huntsmen
『6ペンスで唄をうたおう』 Sing a Song for Sixpence
- 1881 『ハートのクイーン』 The Queen of Hearts (Y17-B3660)
『農家の若者』 The Farmer's Boy
- 1882 『乳しぼり娘』 The Milkmaid (Y17-A6553 ; Y9-N04-H48)
『ヘイ・ディドル・ディドル／ベイビー・バンティング』
Hey Diddle Diddle／Baby Bunting
- 1883 『かえるくん 恋をさがしに』 A Frog He would a-Wooing Go
『キツネが牧師さんちの門をとびこえる』
The Fox Jumps over the Parson's Gate (Y17-B3615)
- 1884 『おいで 若い娘と息子たち』 Come Lasses and Lads (Y17-A7791)
『棒馬にのってバンベリ・クロスへ／農夫は灰色の雌馬で出かけて行った』
Ride a-Cock Horse to Banbury Cross／A Farmer Went Trotting upon His Grey Mare
(Y17-A6554)
- 1885 『女の誉れ メアリー・ブレイズ夫人に捧げる唄』
An Elegy on the Glory of Her Sex Mrs. Mary Blaize
『おえらいパンジャンドラム そのお方』 The Great Panjandrum Himself

[以上16冊は、『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく オリジナル復刻版』（福音館書店）
(Y17-A7360 ; YZ726.62-コル) で、まとめて見ることができる。]

◎作品を合本したもの

- 1879 R. Caldecott's Picture Book (1878年と79年の4冊)
 1881 R. Caldecott's Picture Book No.2 (1880年と81年の4冊)
 1881 R. Caldecott's First Collection of Pictures and Songs (VZ1-197 ; VZ1-198)
 1883 The Hey Diddle Diddle Picture Book by R. Caldecott (1878～81年の8冊)
 1885 R. Caldecott's Second Collection of Pictures and Songs (VZ1-199 ; VZ1-200)
 1885 The Panjandrum Picture Book by R. Caldecott (1882～85年の8冊) (VZ1-201)
 1887 The Complete Collection of Randolph Caldecott's Pictures and Songs
 1995 Randolph Caldecott Ride-a-Cock Horse and Other Rhymes and Stories,
 (Children's Classics Everyman's Library) (Y17- A1043 ; Y17-A6554)

◎スケッチ集

- 1883 A Sketch-Book of R. Caldecott's (Y17-B3661)
 1889 Randolph Caldecott's Sketches (second ed.1912)

◎イラストレーションをつけた作品

- 1873 The Harz Mountain, A Tour in the Toy Country, by Henry Blackburn
 1875 Old Christmas, From the Sketch Book of Washington Irving (KS159-12)
 1876 Bracebridge Hall, by Washington Irving
 1878 North Italian Folk, Sketches of Town and Country Life by Mrs. Comyns Carr
 1880 Breton Folk, An Artistic Tour in Brittany, by Henry Blackburn
 1883 Some of Aesop's Fables with Modern Instances, from new Translations by Alfred
 Caldecott, M.A.
 1883 Jackanapes, by Juliana Horatia Ewing (VZ1-367 ; VZ1-368)
 1883 Daddy Darwin's Dovecot, A Country Tale, by Juliana Horatia Ewing (VZ1-365)
 1885 Lob Lie-by-the-Fire, or The Luck of Lingborough, by J. H. Ewing (VZ1-372)
 1885 Juliana Horatia Ewing and Her Books, by Horatia K. F. Gatty (VZ1-439)
 1886 Jack and the Bean-Stalk, English Hexameters, by Hallam Tennyson

Randolph Caldecott, A Personal Memoir of His Early Art Career, by Henry Blackburn
 (YZ726.6C-B4)

『百年前の絵本－R・コールデコットの前半生』高橋誠、桑子利男共訳 ブック・グローブ
 社 (YZ726.62- コル)

◎手紙集

- 1976 Yours Pictorially, Illustrated Letters of Randolph Caldecott,
 ed. by Michael Hutchins

◎ロンドン『グラフィック』誌へ寄稿した絵の選集

- 1883 Randolph Caldecott's "Graphic" Pictures
 1887 More "Graphic" Pictures
 1888 Randolph Caldecott's Last "Graphic" Pictures

1888 Gleaning from the “Graphic” by Randolph Caldecott

◎研究書

- 1946 Randolph Caldecott, An Appreciation, by Mary Gould Davis (YZ726. 6C-B6)
- 1976 Randolph Caldecott ‘Lord of the Nursery’, by Rodney K. Engen (Y6-A78)
- 1978 The Randolph Caldecott Treasury, selected & edited by Elizabeth T. Billington, with an Appreciation by Maurice Sendak
- 1986 Sing a Song for Sixpence, The English Picture Book Tradition and Randolph Caldecott, by Brian Alderson
『6ペンスの唄をうたおう：イギリス絵本の伝統とコールデコット』オルダーソン著 吉田新一訳 日本エディタースクール出版部 (YZ726.5-オル)
- 2004 Randolph Caldecott, An Illustrated Life, by Claudette Hegel
- 2004 Randolph Caldecott and the Story of the Caldecott Medal by John Bankston
『現代絵本の父 ランドルフ・コールデコットの生涯と作品』吉田新一訳・解説 絵本の家 (YZ726.62-ラン)

◎邦訳

- 『ジョン・ギルピンのゆかいなお話』（よしだしんいちやく ほるぷクラシック絵本 ほるぷ出版）(Y18-1450)
改訳『ジョン・ギルピンのこっけいなできごと』（ラボ教育センター『Sounds in Kiddyland: Series 30』2005年6月 所収）
- 「16冊の絵本の全訳（吉田新一）」（福音館書店『コールデコットの絵本』解説書 2001年5月 所収）(Y17-A7360)
- 『近代絵本の父 コールデコット絵本名作集』（寺岡襄訳 京都書院 1999年3月）
（六ペンスの歌うたおうよ/ハートのクイーン/ジャックが建てた家/猫にヴァイオリン 坊やのおくるみ/三人の陽気な狩人さん/狂った犬の死を悼む歌/森の中の子ども/ジョン・ギルピンのゆかいな一日 を収録。）
- 「絵本の歴史カレンダー（1）コールデコット」（島多代訳 東京子ども図書館 1998年）
（かえるくん恋をさがしに/おいで娘さんと若者たち/おえらいパンジャンドラム そのお方を収録。）

ランドルフ・コールデコット

吉田 新一



今年の連続講座について

皆さん、この講座では固くならず ゆっくりと絵本を味わっていただきたいと思います。

ただいま紹介がありましたように、私自身は昨年、国際子ども図書館（以下、当館）が所蔵する日本の第二次世界大戦中の絵本について、お話をいたしました。その時代は自分の少年時代でもありましたから、特別な愛着と関心をもちながら、調査の中間報告をいたしました。で、昨年が日本についてでしたので、今年は海外の絵本に焦点を当てた連続講座を企画してみました。

海外の絵本では、先進国であるイギリス、それから続いて、ユニークな伝統を持つアメリカの絵本、ということになるでしょうから、まずはイギリスの絵本を、特にその伝統に注目しつつ考察をしてみたいと思います。と言いましても、私はどちらかというと古典の方に目を向けてきましたので、第二次世界大戦後の新しい作家たちについては、より詳しい方々にお願いして、イギリスの絵本の伝統を探ってみることにいたしました。

ご存知と思いますが、第二次世界大戦が終ってイギリスがイラストレーションの第2の黄金期を迎えた時に、ブライアン・ワイルドスミス、ジョン・バーニング、チャールズ・キーピングという三羽鳥が出てまいりました。そのうちのキーピングは、残念ながら早くに亡くなって活動が完結しております。ワイルドスミスとバーニングは今も元気に活躍しておりますが、イギリスでは、<作家研究>といいますと、物故作家を対象にします。現役の作家については、研究ではなく批評という形で対応するという区別があります。そこでここでは、チャールズ・キーピングを取り上げることになりました。キーピングについては三宅興

子さんが一番精通していらっしゃるの、ご担当をお願いしました。

キーピングより後に活躍をはじめ、現に旺盛に活躍している絵本作家の一人にシャーリー・ヒューズがおります。たまたま最近灰島かりさんが『絵本翻訳教室へようこそ』（研究社 2005）というひじょうに良い本をお書きになりましたが、そこでこの絵本作家を取り上げておられます。ヒューズは日本では一冊しか絵本が翻訳されていなくて、あまり知られていませんが、実はイギリスでは絶大な人気を誇る国民的作家なのです。これはもう灰島かりさんにしっかりと紹介していただかなければなりません。イギリス絵本の伝統における<イギリス性>についてもお話しいただけるのではないかと思います。

最後に、もっと新しい作家で評価が高く、国際アンデルセン賞画家賞を受賞しているアンソニー・ブラウンを取り上げてみました。これは直接ブラウンさんと親交のある藤本朝巳さんが最適の方でしょう。今年の夏もイギリスへ行かれて、新情報を得てきておられるので、ホットなお話もうかがえると思います。なお、クエンティン・ブレイクも入れたかったのですが、時間の関係で今回は残念ながら割愛といたしました。

第二次世界大戦後の現代イギリス絵本で注目すべき以上の3作家に対して、それ以前のイギリス絵本の歩みと言いますと、19世紀にランドルフ・コールデコット、20世紀初めにビアトリクス・ポター、そして第二次世界大戦後へ伝統をつないだエドワード・アーディゾーニ、このビッグ・スリーによって築かれたイギリス絵本の特徴と伝統を、これから私が分担させていただくことにいたします。

コールデコットについて

では、コールデコットから始めさせていただきます。アメリカの有名な絵本賞「ランドルフ・コールデコット賞」で名前はよくご存知の作家でしょう。しかし、どんな生涯を送り、どんな絵本を残した人かはあまり知られていないように思います。先ほど、村山隆雄当館館長（当時）が取り上げてくださった、今年私が出しました『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品：現代絵本の父』（ジョン・バンクストン著 吉田新一訳・解説 絵本の家 2006）をご覧ください。これは日本語で読める最初のコールデコット伝だと思います。

お手元のレジユメで、コールデコットが残した作品を一覧にしてみました。多くは古書でなければ手に入りませんが、幸いコールデコットの絵本全16冊は、先年福音館書店から復刻版が出ましたから、それを活用なさってください（『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』2001）。ただし、原本の復刻版ですから、文は全部英語です。若干方言などは入っていますが、読みやすい英語ですし、マザーグースの唄などが多いので、どうか敬遠なさらず原本でお楽しみください。邦訳については、お手元のレジユメの最後に一括しておきました。

ここではコールデコットの絵本をスライドで見ながら、コールデコットが演じた世界を、ご一緒に楽しみ、学んでまいりましょう。（当『講義録』の読者は、コールデコットの絵本を開いて以下の話をお読みください。）

16冊のどれを取り上げても、それぞれにおもしろいのですが、実は先ほどの『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品：現代絵本の父』の中で、3冊（『ジョン・ギルピンのこっけいな出来事』『ジャックがたてた家』『かえるくん 恋をさがしに』）をやや丁寧に絵解きしておきましたので、重複しないように、それ以外の作品を、ここでは取り上げることにいたします。

『ヘイ・デイドル・デイドル』

最初は、コールデコットの作品中一番ポピュラーな作品で（私は自分の『絵本の魅力』（日本

エディタースクール出版部 1984）の中でも取り上げましたが）、『ヘイ・デイドル・デイドル』（*Hey Diddle Diddle*, 1882 『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』福音館書店 2001 所収）を、今日のイントロダクションとして取り上げてみます。テキスト（日本語直訳）は以下のようです。

ヘイ・デイドル・デイドル
ネコとヴァイオリン
メウシが月をとびこした
ちいさいイヌがわらったよ
そんな冗談を見せられて
そして、お皿とお匙がかけおちだ。

たったこれだけの唄です。「ヘイ・デイドル・デイドル」は口調がとてもしっかりです。が、意味はありません。マザーグースの唄は、最初にこういう口調のいいことばで始まるのが非常に多いですね。後で紹介する『6ペンスで唄をうたおう』（*Sing a Song for Sixpence*）の1行目も、子どもは最初に聞くと、もう一日中そればかり唱えつづけていると言われています。口調がよく覚えやすく、生理的に快感がある響きなので、自分でもすぐに唱えたくくなります。私は小さい頃、母親に「たあんき、ぼうんき、たんころりん」と始まる唄を覚えてもらいましたが、その「たあんき、ぼうんき、たんころりん」、意味はほとんどないのですが、口調がよくて、一人でよく「たあんき ぼうんき たんころりん」と唱えていたのを思い出します。この「ヘイ・デイドル・デイドル」も、同じく意味ではなくて、響きが魅力のことばです。日本語訳では、例えば、大正期に竹友藻風さんがこれを「トチツルテン」なんて訳しておられましたが、後に出てくるヴァイオリンの音色を連想して三味線の音にもっていったのでしょうか。

次の「ネコとヴァイオリン」ですが、これは単に＜ネコとヴァイオリン＞でして、ネコがヴァイオリンを弾いたとも、いわんやヴァイオリンがネコを弾いたとも言っていません。ネコとヴァイオリンと、即物的な名詞が二つ並んでいるだけです。聞き手は＜ネコとヴァイオリン＞がどうしたのか

と思って、次へ移ると「メウシが月をとびこした」という、全く別なフレーズが出てきて、えっ！と
 思っていると、今度は「ちいさいイヌがわらったよ」とくる、これまた前とは関係ないフレーズです。こちらはまだ＜ネコとヴァイオリン＞にこだわっているのに、次は「そんな冗談を見せられて」
 です。＜そんな冗談＞ってどんな冗談？と思う間もなく、「そして、お皿とお匙がかけおちだ」で、
 唄は終わってしまうのです。

どうして、こういうバラバラでノンセンスな唄が、できたのでしょうか？英文を読むと、“Hey, diddle, diddle, The Cat and the Fiddle,” この、
 Fiddleというのは、ヴァイオリンと同義語ですが、diddleと出たから、Fiddleが出てきたのです。英語でこういうのを韻を踏むと言います。唄を文字で行分
 に行分と書くと、二つの行の最後が「デイドル／フィドル」と最後の音が重なります、これを脚韻と呼びます。英語のことばのリズムは、
 こういう押韻と、もう一つアクセント（ストレス・アクセントとアンストレス・アクセント）で生まれるのです。それに対して、日本語のリズムは、
 七五調とか、五、七、五、七、七のような、音の数でリズムを出しています。いずれにしても、ことばの意味ではなくて、響きが同じ響き
 を呼んでいく、＜意味＞ではなくて、＜音＞が優先するのです。意味は二の次なので、意味をとろうとすると、ノンセンスになってしまうの
 ですね。

次のフレーズ“The Cow jumped over the Moon,”では、Moonが、唄の最後のSpoonの音おんを引き出してきます。そして、Spoonときたので、
 こんどは意味の連想でDishが出てきたのでしょうか。このように音と意味の連想連鎖で、この＜唄＞は成り立っているのです。
 ですから、意味だけで解釈しようとする、全然バラバラで、支離滅裂な内容になってしまうのです。英語のノンセンスはこうして誕生する
 のです。ノンセンスはつまり＜ことばのゲーム＞ということになります。意味でなくて、音を中心に唱えてみると、テンポもリズムも
 とても快適で、心地よい世界にひたれるのです。

さてこのように一見意味の上ではバラバラな内容のものですが、それをコールデコットはどう料理しているのでしょうか。彼は、
 絵でもって料理し

ているので、イラストレーションをずっと見ていくことにしましょう。

まず表紙の絵から。この本には『ヘイ・デイドル・デイドル』のほかに、もう一つ『ベイビー・バンティング』という別の唄が入っていて、
 そちらは後から読みますが、二つの話の内容が、表紙に描かれています。表紙の絵でまずわかるのは、「ネコとヴァイオリン」
 ですが、やっぱりネコがヴァイオリンを弾くと解されていますね。そうだとすると、日本語訳も「ネコにヴァイオリン」と
 訳した方がいいかもしれませんね。もう一つの方の唄『ベイビー・バンティング』、このことばは赤ちゃんが着るおくるみのこと
 ですから、絵ではそれを着ている赤ちゃんが登場しています。『ベイビー・バンティング』の最初の出だしは“Bye, Baby Bunting!”
 と、これも口調のいいことばで、意味より響きが優先です。

表紙を開けます。見開き左側のページ下に、“Hey, diddle diddle,”と文字があって、絵は、ネコがヴァイオリンと弓を持って、
 子どもたちに演奏をお聞かせしますから、どうぞこちらへおいでくださいと、招待している図ですね。

右側のページを見ると、ネコがテーブルの上に乗ってヴァイオリンを弾き始めています。今から130年も前の絵本
 ですから、ソノシートのようなものは付いていません。が、絵を見ていれば、自ずと音が聞こえてくるでしょう。手前で踊っている
 三人の子どもたち、後ろでは二人が踊っていますね。今、三人の子どもと言いましたけれども、手前向かって左側は人形
 ですよ。しかも相当積極的に踊っていて、元気潑刺はつらつです。また、後ろのラッパを持った男の子なんか、狂った
 ようで、文字通り＜手の舞い足の踏む所を知らず＞状態です。みんなネコの奏でるマジカルな曲にあてられて、人形まで
 生き返ってしまっています。日本で鍋島の猫騒動ねこさわどくという、化け猫になりますが、イギリスのこの猫は化け猫ではなく、
 みんなを活気づけ陽気にさせる愉快的な音楽師です。さっき“The Cat and the Fiddle”を「ネコにヴァイオリン」と
 訳してみましたが、これは「ネコに小判」を連想させ、それを反連想すると、小判どころかここではヴァイオリンを巧みに弾きこなす
 天才ネコが

登場、というところで、ヴァイオリンを武器にこのネコは、なにを始めるのでしょうか。すでに子どもたち（と人形）を踊らせてしまっています。

絵をさらに見ますと、テーブルの向うで頬杖について踊らない子がいます。これもまた面白い。踊る阿呆に見る阿呆です。隣の額だけ見えている子は、一見ミソッカスとみえて、実は唯一ネコそのものに興味を持っている子かもしれません。

後ろで踊っている女の子、手に団扇を持っています。これは小さいジャポニズムです。後で見る『ハートのクイーン』という絵本の中でも、日本の扇子が一寸描かれています。19世紀の後半から20世紀へかけて西洋美術は、ジャポニズムのブームになるわけですが、子どもの本のイラストレーションでもジャポニズムは顕著で、ウォルター・クレインの絵本の中にはもっと積極的に日本の風物が入っていて、浮世絵の影響が顕著に見られます。コールデコットも、東洋ものをちょっと入れてハイカラ感を出したのかもしれませんが。

ところで、子どもたちの背後には、なにやらご馳走が並んでいます。向うに立っている女性は、子どもたちの内の誰かの世話役（ナース）あるいは母親、いや、服装からナースでしょう。彼女が子どもたちに「さあ皆さん、お遊びがすんだらば、一緒にお夕食にしましょうね」と言っている、その声も聞いてください。

ここで私の経験を参考にさせていただきたいのですが、もう35年も前、初めてイギリスへ行ったとき、私を車に乗せてくれていた男性が、急にスピードをあげて、帰宅を急いだのです。そして、家に着いたのがちょうど午後5時。幼稚園へ行く年頃のお子さんに、お母さんが夕食を出しているところでした。お父さんはそれに間に合うように帰宅を急いだのです。イギリスの中流以上の家庭では、幼い子の夕食は午後5時で、両親が子どもと一日の出来事などを話しあう大切な時間なのです。食事がすむと子どもは寝室へ送られて、後は大人たちの時間になります。こうしたイギリス人の生活習慣を知ると、ここの子ども部屋のようすから、今は午後5時少し前だと察しられます。そのことは、このイラストレーションを絵解きするのに大切な点なのです。コールデコットはこの

一見ノンセンスな唄の語りに、〈時間〉という要素を導入しているからです。

ページを進めると、今度はネコが演奏会用の燕尾服を着て登場です。後ろにいる奥さんネコと子ネコたちはお父さんネコの晴れ姿にたじろいでいるようすです。奥さんネコは「まあ、お父さん、〈馬子にも衣装〉って言うけれど、立派になったわね」などと言っているみたいです。子ネコの一匹が尻尾を立ててお父さんに近寄り、「ちょっとさわらせて」と言っているようすです。お父さんも、これから本番だ！と張り切っていますね。

見開きの右側ページを見ると、服装から判断して〈流しの楽師〉とおぼしき男性が、ヴァイオリンの前で、何か思案にくれているようすです。文字の方を見ると、“The Cat and the Fiddle,”の“The Cat”がネコの絵の下で、“and the Fiddle,”の文字が、楽師の手放しているヴァイオリンの下に配されています。文字と絵がちやんと〈ネコ〉と〈ヴァイオリン〉とその通り合っていて見事です。

楽器を手から放すことは、演奏しないことの意味表示です。例えば、『旧約聖書』の詩篇の137に、豎琴を柳の枝にかけるといふ表現があります。これは祖国を追われた民が、豎琴を柳の枝にかけ（すなわち、手放し）て、シオンの地にもどるまでは絶対に喜びの調べを奏でないという、強い意思表示なのです。同様に、楽器を手放しているということは、演奏はない、ということここでは表わしています。ここのコンテキストでは、今夜は楽師はネコにおかぶを奪われて、流しの商売があがったりになったことを表しています。それで、楽師の後にいる女性、奥さんでしょうか娘さんでしょうか、「そんなにしょげていないで！仕事をしないでいい日なんてめったにないのだから、今晚はのんびりなさいよ、ネコさまのおかげと思って！」と言って慰めている、と私は読みます。

次は「メウシが月をとびこした」の場面。右ページはテキストが文字通り絵に描かれています。『ハイ・デイドル・デイドル』はもっともポピュラーなわらべ唄ですから、英米のわらべ唄絵本にはよく出てきますが、ほとんどが〈月を飛び越す〉、すなわち宇宙空間をメウシがふっ飛んでいく絵が

描かれています。ファンタスティックな唄ですからそれでいいのですが、コールデコットのこの絵はひじょうに現実的です。手前の後ろ向きの女性は、服装から乳しぼり娘 (Milkmaid) ですが、たった今乳をしぼりおえたメウシが、下半身が軽くなったためか、後ろ足を上げて月を飛び越したように見えて、びっくり仰天、思わずしぼりたての乳の入った桶を手放してしまいました。乳はさっと地上へこぼれます。が、メウシは月を飛び越してはいません、目の錯覚です。でも、地平線を昇ってくる月には、顔がありますね。やっぱりファンシフルな世界の出来事としても描かれているのです。

この見開き、左のカラー絵では、ネコが屋外へ出て、庭のレンガ塀でマジカル・ソングを演奏しています。浮かれているのは家畜たち。みな農家で飼われている類の動物たちです。ことばに出てこない動物たちも交じっています。そこへ、メウシも跳ねて踊りながら参入してきました。これでメウシは先ほど下半身が軽くなって跳ねだしたのでは？と言ったのは誤りで、ネコのマジカル・ソングに誘われて踊りだしたのです！

ちょっとここで別なことをお話ししますが、コールデコットは絵にサインを入れるときに、ひじょうに神経をつかっています。無神経なサインの入れ方なら入れない方がいい、と手紙で書いています。この絵では、煉瓦塀のレンガの一つにさりげなく入れてありますね。他のページでも、そのつもりでサインを見てみると、さすがによく考えて入れているのがわかります。そんなところにも気をつけて、絵をご覧になってみてください。

さて、このくだりでも、＜時間＞を考えてみましょう。月の出は毎日異なりますから、断定できませんが、先の午後5時より後の時間であることは確かです。そして、この後のシーンへ移っていくシークエンスで、私は午後8時前後と想像します。イギリスでは夏場はまだ明るい時間ですが、家畜たちは間もなく眠りにつく時間、敢えて言えば、動物たちの寝る前のひとはしゃぎの時と、現実的に考えてみましょう。

ところで、もう一つこの見開きページについて申し上げたいことがあります。上の説明からも

おわかりのように、ストーリーの進行から言って、右の単色画が本来なら左側にあって、カラー絵が右側にあるのが、話の順序ですね。でもそうっていない訳を、ご説明しましょう。絵本の真ん中のページ、ということは、この唄の終りと、次の『ベイビー・バンティング』のタイトル・ページの見開きのところを開いてみると、中央に閉じ糸があります。そこから本全体が、カラー印刷の片と単色印刷の片と交互に重ねられて、この真ん中で畳んで綴じられていることがわかります。こうした物理的な理由から、コールデコットがたまたまカラー絵で描いたものが左に、単色で描いたものが右に、ここで見ている見開きページのように、絵の位置が左右逆になってしまいます。印刷技術の初期段階に誕生した絵本ですから、これは編集ミスではなく、やむをえない事態とと思ってください。

次へ進みましょう。今度の見開きでは、「小犬が笑った」というページと、右側の「そんな冗談を見せられて」“to see such fun,”のページです。「そんな冗談」ということばだけでは、どんな冗談かあいまいでしたが、絵を見れば、さきほど乳しぼり娘が手放してしまった桶からこぼれたミルクを、ブタが走り寄って舐めている、それをメウシがあっけにとられて見ている。これが「そんな冗談」であると、絵が語っていますね。この見開きは＜そんな冗談＞を見て、小犬が笑っている、と見開き左右のスペースをつなげて効果的に語られています。こういうふうに見開きを効果的に生かした使い方は、コールデコットが初めておこなったテクニックだと思います。こういう例はコールデコットの絵本には他にもありますが、こういう見開きページの生かし方という点でも、コールデコットが現代絵本の父と言える一つではないかと思います。

次の見開きは、ことばの通り、お皿とお匙のかけおち図です。ここではネコは屋内にもどってヴァイオリンを弾いています。浮かれ出したのは、無機物である食器類です。日本では、草木も眠る丑三つ時 (午前2時) が一番マジカルなタイムですが、西洋ではシンデレラ話などのように、真夜中12時がマジカルなことの起こるときです。くる

み割り人形が活動をはじめ、びっくり箱の蓋がぱっと開いて・・・という時間です。従って食器戸棚からお皿たちが踊り出すのは、真夜中の12時過ぎということになります。

こうしてネコは、午後5時少し前から真夜中の12時過ぎまで、ヴァイオリンでマジカルな曲を弾いて、子どもたち、家畜たち、食器たちをつぎつぎ踊らせてきたのでした。いかがでしょう、ことばだけ聞いていたときには、内容がバラバラな、意味不明のノンセンス唄と愚かっていたのが、時間を導入して描かれたイラストレーションを見ると、「そして、それから」と連続したシーケンスのストーリーになっているではありませんか。重ねて言いますが、〈絵〉がそれをして見せてくれたのです。

しかし、絵本の〈絵〉はまだストーリーをつづけています。他の食器たちが浮かれ騒いでいる隙に、かねてから示し合わせていたらしき〈サラオさん〉と〈サジコさん〉が駆け落ちして、二人きりになれたのを喜び合っているハッピーエンド、しかし、その後にもう一場面、続きの〈絵〉があります。

たった今、幸せの絶頂にいたはずの二人に、なんとなんと悲劇が起こっているのです！両親らしきナイフとフォークがサジコさんを連れ去っていきます。父なるナイフの顔は、目を吊り上げ、口をへ字にしています。「はしたない、あんな男、蹴飛ばしちまえ」とでもいいながらでしょうか。まさかお父さんがサラオさんを蹴飛ばしたとは思いませんがね。しかし、サラオさんは床に倒れ、10片に砕けています！小皿たちは駆け寄って嘆き悲しんでいます。

テキストにはないこんな結末を付け加えるなんて、なんと意地悪なんだろうと思いますか？コールデコットを高く評価しているモーリス・センダックは、この1枚をつけ加えたところが、いかにもコールデコットらしくユニークですごい、と言っています。コールデコットはひじょうにバランス感覚のある人だ、人生はハッピーエンドも結構だが、必ずしもハッピーエンドで終るとはかぎらない。幸福と背中あわせに不幸もある。だから常に、片方だけを見るのではなく、人生の両面を

バランスよく見るのが賢い知恵で、それがコールデコットのバランス感覚だ。物事の反面だけでなく、全体を常に見る、すなわち whole truth (全面的真理) が描ける人だ、とセンダックは言うのです。これは実はコールデコットの、というよりも、イギリス人のバランス感覚、いわゆるイギリス的ユーモア感覚なのです。だからこのように、〈余分と思える〉一枚の絵を、敢えてストーリーの最後に添えること、これすなわち、コールデコットの〈Englishness〉であると、私は思います。

whole truthで思い出しました。イギリスのオルダス・ハックスリイという作家が、D.H. ロレンスの書簡集を編んだとき、その解説文で whole truth ということばを使っていました。ハックスリイ曰く、ギリシャの叙事詩ホメロスで、ホメロスが難船して、自分一人が陸に上がって助かったそのとき、疲れのために彼はまず熟睡をした、そして目覚めてから、仲間がすべて死んでしまったことを慟哭する。これは whole truth だとハックスリイは言うのです。凡庸な作家だったら、自分だけが助かって仲間がみな死んでしまったことを嘆き悲しみ、泣き疲れて眠りに落ちていく、そういう描き方をするに違いない、が、それはセンチメンタルで真実ではない、半面の真理しか描いていないということです。センダックのいう全面的真理ということばの意味を理解するのに、ハックスリイのいう whole truth ということばの使い方が役立つと思います。

子どもの本は、どちらかというあまり暗い面を見せないようにしているけれども、コールデコットの絵本には、バランス感覚をもって人生を見る目が生きている、というのがセンダックの言わんとするところではないでしょうか。くどいようですが、『ヘイ・デイドル・デイドル』の最後に加えられた絵は、表面的な教訓絵では決してありません。イギリス人がもっている深いモラルから出てくる、いわば〈処世智〉であるというのが、センダックの指摘であると、私は解しています。

『ベイビー・バンティング』

では次の『ベイビー・バンティング』(Baby Bunting, 1882 前掲『コールデコットの絵本：

現代絵本の扉をひらく』 所収) へ移りましょう。

バイ・ベイビー・バンティング！
 父さん出かける 狩りをしに
 ウサギの毛皮を 手に入れようと
 かわいいベイビーに 着せようと。

英語は“Father’s gone a-hunting,” (父さんは狩りに出かけた) という文から始まって、“Gone to fetch a Rabbit-skin” (ウサギの毛皮を取りに出かけた)、“To wrap the Baby Bunting in.” (赤ちゃんを包むために) と続き、全体がワン・センテンスです。

まずタイトル・ページ、内表紙ですね。赤ちゃんはもうおくるみを着せてもらっています。ページをめくると、最初のフレーズ“Bye, Baby Bunting!” が出てきます。これは「ハイ・ディドル・ディドル」と同じく口調のいいことばです。“Bye, Bye” というのは、赤ちゃんが「アバ、アバ」という、幼児の喃語に似ています。絵は、歩き始めたばかりの幼児が旗を持って調子を取りながら歩きはじめたところで、乳母がうしろから「アンヨはオジョズ」と言いながら、転びはしないか気づかってついていくところです。

右側のカラー絵は、この家の子ども部屋です。幼児にはお兄ちゃんがいて棒馬にまたがり、「ハイドー！」と言っているのでしょうか。子ども部屋ですから、暖炉には高い炉格子がついています。壁には子ども部屋にふさわしい絵が掛けられ、人形の家などもあります。乳母も二人の子どもそれぞれについていて、この家庭では子どもを大切に、子ども中心主義の家庭と読めます。同時代の、ケイト・グリーンウェイの作品ほどに派手ではありませんが、乳母の着ている服も、こざっぱりとして素適です。

次の見開きは、この家の主人、お父さんがいよいよ狩りに出かけるところです。身支度は万端整いました。“Father’s” の文字が絵の下に書かれ、右側の絵の下には“gone” の文字が。その出かけた (gone) ようすが、絵に描かれていますが、いかにも勇み立ち、意気込んでいく感じが、お父さんの乗馬靴のかかとによく表されています。獵

犬も遅れじとついていきます。ウサギ狩りにかける意気込みがユーモラスに描き出されていますね。

次は、獵場に到着した場面です。左ページの下に“a-hunting,” の文字が書かれていて、お父さんは念をいれてもう一度獵銃のチェックです。獵犬の方は早くも獲物探しにかかっています。右ページのカラー絵で、いよいよウサギ狩りのスタートです。

コールデコットは、描く「線は少なければ少ないほど、犯す過ちは少ない」と言っていました。福音館書店の復刻版18ページの獵場到着の場面を見ると、文字通りごく少ない線で、風景の広がり、奥行きを描き出しています。余白の活用をよく知っていた画家と思います。また、19ページのカラー絵では、コールデコットが馬を描くのに巧みであったことがよくわかります。

次なる20、21ページの見開きですが、左ページに“Gone to fetch” があって、絵は獵犬と馬上の父さんがわが家のある村へもどってきたところです。すなわち、時間は過ぎ、帰宅の時刻になったのです。獲物は一匹も得られなかったのです！出立のときのあの意気込みはどこへ行ったのでしょうか。そして右ページを見ると、そんな父さんを待ち受けていたかのように、ウサギの毛皮屋 (Dealer in Hare and Rabbit Skins) のかみさんが店先へ出て、ウサギの毛皮をさげて、これを買ってらっしゃい、と誘っています。獵犬はむなししい日の後で、獲物に飢えているかのように毛皮に飛びついています。その下の文字“a Rabbit-skin” は、文字通り「ウサギの毛皮」。この文字は左ページの“Gone to fetch” につながるのですから、「父さんはウサギの毛皮を取りにでかけていった」と、なんとも皮肉な文に変身しています。言うまでもなく、コールデコットは、「父さんが子どもにウサギの毛皮を着せてやろうと、ウサギ狩りに出かけた」という文意をひっくりかえして、「獲物が得られなくて、売り物の毛皮を買って着せた」と、イラストレーションで語って見せたのです。

実はセンダックも、彼の『子守唄と夜の唄』 (Lullabies and Night Songs, 1965 邦訳なし)

『6ペンスで唄をうたおう』

それでは、今度は『6ペンスで唄をうたおう』
(*Sing a Song for Sixpence*, 1880 『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』所収)を愉しんでみましょう。訳を読みます。

6ペンスで唄をうたおう
ポケットいっぱいのライ麦
20と4羽のクロウタドリ
焼いてパイにして

そのパイあけたらば
鳥たちがうたいはじめた
こんなめずらしいパイ
キングに献上しては？

キングはお仕事部屋で
お金のお勘定
クイーンは居間で
蜂蜜パンをめしあがってる。

庭ではお女中さんが
洗濯物を干していた
そこへクロウタドリが飛んできて
彼女の鼻をもぎ取った

けれどもミソサザイが
その鼻をくっつけてくれたよ。

6ペンスの唄とはおもしろいですね。なぜかイギリスのわらべ唄に6ペンスがよく出てきます。例えば、「曲がり男が歩いていく」(There was a crooked man, and he walked a crooked mile)という唄の中では<曲がった6ペンス>を見つめます(He found a crooked sixpence)。また、“I love sixpence, jolly little sixpence,”という唄もあります。sixpenceという語には、耳にとっても心地よい響きがあって、それでこのことばが好まれるようです。なお、sixpenceという白銅貨は、現在は使われていない昔の硬貨です。

まず『6ペンスで唄をうたおう』の表紙です。ここに*Sing a Song for Sixpence*とタイトルが書

いてありますが、forだけ書体が他の文字と違うでしょう。この唄、普通はforのところはofですが、コールデコットはそこをforに変えましたよ、と字体を変えて断っているのです。では、forに変えるとどうということになるか。中学校の英文法をちょっと思い出していただいて、英語の熟語に「探す」という意味のlook forがあります。このときのforは<～を求めて>という意味で、<求めて見る>から「探す」ということになるのです。*Sing a song for Sixpence*では、「6ペンスの唄を一つうたえ」という意味だったのが、ofをforにかえると「6ペンスを求めて一曲、唄をうたえ」という意味になります。

そのことを了解して、表紙を開き、最初の絵を見ると、お婆さまが子どもたちを前にして、右手の指先に丸いものを持ってなにか言っていますね。そのお婆さまのことばが、タイトルのフレーズなのです。「さあ、皆さん、お唄をうたってごらんなさい、一番お上手にうたえた方に、これごほうびにさしあげますよ」。丸いものが6ペンス硬貨なのです。お婆さまは子どもたちに唄合戦を誘っているのです。

ついでに、私はこの絵でこんな読みもしてみたくなるのですが、背後の壁に、美男子の肖像画がかかっていますね、これはきっと、お婆さまの若い頃のご主人の肖像画でしょう、でもそのご主人はもう亡くなられて、今はお婆さまは孫やそのお友だちである子どもたちを相手に、こうして余暇を過ごしているのでしょうか。また、ここでも画家のサインが、床に落ちている本に描かれていますね。小犬二匹も神妙にというかおとなしく、お婆さまの話の聞いているようすが、ユーモラスです。

見開きの右ページを見ると、どうやらお婆さまの目の前にいた女の子が、ごほうびを獲得したらしいですね。お婆さまの椅子のうしろにいた女性が、この子のナースだったらしく少女をつれて散歩に出たのでしょうか、たまたま出会った農夫に、少女がもらった6ペンス硬貨をあげています。農夫の方は嬉しそうに手を出しています。

見開きの左右の絵からどのようなお話を想像しますか、私は自分の子ども時代を思い出します。私は満州事変が始まった昭和6年に生まれまし

た。両親が明治生まれで、父親は私みたいな地味な仕事でしたから、割合と固い家庭でした。小学校に入っても「子どもはお金のことを言うものではありません」と言われ、「何がいくらだ」などと金銭のことを口にするのと叱られました。

年の離れた姉が二人いて、お正月になると、姉二人にはお札でお年玉が出て、私はお相伴で硬貨の小銭で、「坊やの方がたくさんあってよかったね」なんて言われて、お年玉をもらいましたが、親がすぐ「でも、持っているとなくなるから、貯金しましょうね」と貯金箱へ入れさせられました。「欲しいものがあったら買ってあげるから」と言われて、親は現金を子どもには持たせたりませんでした。＜買い食い＞なんかさせてもらったことはありませんでした。昭和一桁時代の、東京山の手の家庭はそんな風でした。

そういう私自身の経験からこの絵を読むと、このナースも、まだ幼いこの子にお金のことなど知って欲しくなかったのだと思います。だにお婆ちゃまはお金などくださったのです。今は早くそんなくお金＞なんか忘れさせなくては、と思っているところへ、向うから貧しそうなる農夫がやってきました、とっさに彼女は「あのおじちゃまに、その丸い物をあげましょう、きつとよろこぶわよ」などと言ったのでしょう。子どもは言われた通りにすると、「いただいてよろしいのですか」と農夫は6ペンスを受け取ります。ナースは「喜んだでしょう？よかったわね」と言って、子どもの手からお金が消え、ほっとしたことでしょう。私の経験がこの絵の解釈によく役立ったと思います。

こういうわけで、お婆さまから出た＜6ペンス＞が、子どもの手から農夫の手へ移りました。農夫は不意の収入で、ポケットいっぱいライ麦を買い帰宅します。そして、ライ麦をお土産として子どもたちに渡します。福音館書店の復刻版4ページ、5ページの見開きです。一番下の子がお父さんのライ麦のお蔵に取りついているのが、ほほえましいですね。お父さんはライ麦でパイの中身に使うクロウタドリを取ってこいと、子どもたちに言っているのです。

子どもたちは餌で釣ってクロウタドリを24羽獲得します（6～7ページ）。絵には鳥がちゃんと

24羽描かれています。24羽と書いてあったなら、絵にちゃんと24羽、過不足なく描かれていないと、子どもは納得しません。昔、わが子にマックロスキーの『かもさんおとおり』（*Make Way for Ducklings*, 1941）を読んでやったとき、カモのマラード夫妻に8羽の子ガモが生まれてからは、毎ページ子ガモの数を8羽数えなければ次のページへ進めませんでした。

こうしてお母さんがパイ焼きを始めます（8ページ）。子どもは早く食べたくて待っています（9ページ）。お父さんがパイを開きます、すると鳥たちが歌いだしたのです（10～11ページ）。お父さんは突如、「こんなめずらしいパイはキングに献上しなくては」と言い出して、パイをそっくり持って走り出しました。子どもたちはナイフとフォークを持って、「一切れでいいから置いていって、お父さん」と追いかけます。お母さんも取りすがって、「私はいいから、子どもにだけ置いていってやってくださいーい」と取りすがっています（12ページ）。しかし、お父さんはそれらを振り切って、キングのお住まいに到着、侍従にパイを差し出しています。お母さんは「まったくうちのお父さんは、がんこなんだから」とあきらめの態。子どもも「だめだったかー！」と、指を舐め、匙を後ろにさげて、いかにも残念そうです（13ページ）。

ここまで絵を読んできて、私はとてもイギリス人らしさが出ていると思います。もしこの6ペンス、子どもが握ったままでしたら、いつまでたっても6ペンスです。しかし、これが農夫の手に渡りました。いわば農夫に＜投資＞したことになります。農夫はライ麦に＜投資＞し、さらにライ麦が＜投資＞され、24羽のクロウタドリも取れました。それで出来上がったパイ。なんとクロウタドリが焼けないで歌いだすという、珍品のパイになりました。これを家で食べてしまえば、それで終り、一家を支えるお父さんは、ここは心を鬼にしても、キングにこれを献上して、それを上回るお返しを期待したのでしょうか。ここには私は、イギリス人の現実的な処世の知恵を読みます。

次の復刻版14～15ページへ進みましょう。パイをもらった侍従は、早速宮殿の中へ運んでいます。

14ページの絵を皆さんはどう解釈しますか？ストーリーの流れから、パイはまだキングのところへは届いていないはずですが、にもかかわらずこの絵ではキングとクイーンの前に中から鳥が歌い出すパイが置かれています。私はこの絵を「このようにキングとクイーンに献上してください」という農夫の意思表示を描いた絵と読みます。

しかし、福音館書店でコールデコット絵本を復刻するとき、協同監修者をお願いしたイギリス人のブライアン・オルダーソンさんと、このことで意見を交わしたとき、オルダーソンさんには「マザーグースの唄をそんなに理詰めを考えるものではない」と言われてしまいました。私は「ああ、マザーグースには、イギリス人はそういう接し方をしているのだな」と思いましたが、私としては、そのように理屈に合わないしろものマザーグースの唄に、コールデコットは少なくとも論理的に話を追って見せているのですから、ここはやはり理詰めを考えて、今ご披露した私の解釈にこだわりたいのです。

次の16～17ページの見開きは、キングを探す場面と、会計室 (Counting-house) にいらっしやるのがわかった場面です。しかし、キングが会計室でくゼニ勘定をしているというの、いかにもキングにはふさわしくありませんね。そこを、コールデコットは実に見事に処理して見せてくれます。なんとキングを幼帝、すなわちまだお子さんでいらっしやるキングにしているのです (19ページ)。子どもキングが、おもちゃのお金で遊んでいる景に仕立てたのです。ご覧のように、会計室はすなわちキングの子ども部屋なのです。先ほどの、『ヘイ・ディドル・ディドル』の子ども部屋も、私たちの子ども部屋よりずっと立派でしたが、このキングの子ども部屋はさすがに豪華です。壁には、＜巨人殺しのジャック＞と、＜フライデーを従えているロビンソン・クルーソー＞の大きな絵が飾られています。ここでは卓上の紙片に＜RC＞のサインがしてありますね。

キングは今お遊びに夢中ということで、今度は女官たちがクイーンを探しに行きます (20～21ページ)。クイーンはパーラーにいらっしやいましたが、クイーンも幼いお子さまで、こちらもお

人形たちとお食事ごっこに夢中になっていらっしやる。やはりお遊びをお邪魔してはならじということで、目を宮殿のお庭に転じてみると、ちょうどお女中さんが洗濯物を干しているところでした (24～27ページ)。27ページの絵は日本版画の構図を彷彿とさせ、ジャポニズムと言ってもいいかもしれません。色調も落ち着いていますね。木版画の印刷ならではの色合いが出ています。これはエドマンド・エヴァンズの工房で、木口木版の重ね刷りによって印刷されたものです。銅板画や石版画によるものとは違う、しっとりとした色調がいいですね。25ページの絵は宮殿の庭ですから、護衛兵が巡回しているところです。宮殿のお庭という感じを出していると同時に、後の出来事の重要な伏線でもあります。この絵は。

次の28～29ページの見開きは、テキスト通りに、クロウタドリが一羽やってきて、お女中さんの鼻をさらっていくところです。鳥は仲間を24羽も捕まえてパイの具にしたというので、「江戸の仇を長崎で」と、お女中さんの鼻をさらったのでしょうか。

テキストはこれで終わりです。しかし、ちょっと尻切れトンボではないでしょうか。次の30ページを見ると、鼻はお女中さんにもどっています。その“*But there came a Jenny Wren and popped it on again.*” (ミソサザイがやってきて、それをポンと戻した) とある＜文字＞をご覧ください、それまでの活字体文字が、手書き文字に変わっているでしょう。これは表紙のforの字体が変えられていたのと同様で、「ここは伝承のテキストを、ちがえてありますよ」というサインなのです。すなわち、一般に知られているこの唄のテキストは「お女中さんの鼻がさらわれた」で終わりです。しかし、コールデコットはそれに「もどった」という結末をつけ足したのです。『ヘイ・ディドル・ディドル』では最後でハッピーエンドをひっくり返していましたが、今度は「もって行ってしまわれた」で終わらずに、「無事にもどりました」とハッピーエンドにしています。

実はこの点について、すでに私は『絵本の魅力』の中に書いたのですが、私自身の経験がこの説明にまた役立つのです。私は小さい時、姉が学校

へ行っている間、母親の後をよくくっついて遊んでいました。すると、ときどき母は私をかまって「坊やはかわいいからお鼻をもらっちゃおう」といって、私の鼻をさらっていく真似をしました。お鼻ばかりか、「お目々も、ほっぺも、お耳も、お口も」つぎつぎもっていく真似をしました。すると私は「返して、返して」と母親に言います。母は「では、お耳だけ返しませよ」とかまうのです。しかし、私はもっていかれたものを全部ちゃんと返してもらうまで、「返してー！」をやめませんでした。子どもの感覚では、もっていかれたままではおさまらないのです。ちゃんと全部戻してもらわないと、気がすまなかったのです。

ですから、「お女中さんの鼻がさらわれた」で話が終ったのでは、子どもの気持ちは納得できません。無事にそれが元にもどって、初めて「おしまい」となるのです。コールデコットが最後につけ足したことは、その意味で子ども読者にとって、お話の大切な結びです。こういうところもまた、絵本作家としてのコールデコットの見事さといえるでしょう。

(ピーターとアイオーナ)・オピー夫妻(ご主人は亡くなりましたが)というマザーグースの唄の権威も、コールデコットによるこの最後の追加で、この唄は完結した！と書いています。繰り返すまでもなく、これはコールデコットのオリジナルな追加でした。

ところで、もう一度29ページの絵にもどってみましょう。お女中さんの鼻がさらわれた瞬間が描かれています。後方には鼻をさらったクロウタドリに向かって、素早く銃を発射している衛兵がいます。先ほど25ページで伏線と言ったあの衛兵です。クロウタドリは驚いて、鼻をくちばしから落としました。ちょうどその下にいたミソサザイが、落ちてきた鼻をキャッチして、次のページでお女中さんに戻してあげています(30ページ)。そして、お手柄の衛兵が、お女中さんの後ろにいますね。きつと「良かったですね、私のお手柄も忘れないでくださいよ」と言っているのではないのでしょうか。これがご縁で、衛兵とお女中さんがハッピーエンドを迎える・・・などという余計な後日談は置くとしまして、画面の奥から幼いキングとク

イーンがこちらへ歩いてきていますね。それが次の最後のカラー絵につながります。お女中さんは早速、彼女の災難を救ってくれた感心なミソサザイ君を両陛下に紹介しています。

いかがでしょう。コールデコットの絵本作りをこうしてゆっくりと丁寧に味わってみると、絵本はイラストレーションでなんと豊かな語りをすることができるか、実感できるでしょう。

トイブック

ところで、コールデコットの絵本は当時<絵本>とは言わずに、<トイブック (Toy Book おもちゃ本)>と呼ばれていました。ウォルター・クレインの絵本も、ランドルフ・コールデコットの絵本も、ウォルター・クレインのトイブックス、ランドルフ・コールデコットのトイブックスというふうに呼ばれていました。日本には、江戸時代に「おもちゃ絵」というのがありましたけれども、「おもちゃと一緒に売られているような本」くらいの意味で、子ども向きの消耗品として<トイブック>と言っていました。ここにお見せしている *The Nursery Alphabet (Aunt Louisa's London Toy Books)* は、国際子ども図書館が所蔵している本ですが、こういういわゆる Toy Book は、コールデコットの本もそうですが、本に出版年が記されていません。本の裏表紙に広告が出ているので、それをもって出版年を推定しています。

今お見せしているこの本は、アルファベットの絵本です。色がかなり派手ですね。開くと、見開きの左側に文字、右側に絵が出てきます。めくると次の見開きは白紙のままです。その次は、左側に文字、右側に絵。その次の見開きは白紙。次は、片面が文字、もう片面は白紙。今度は、見開き両面が絵で、次は、片面が白紙、もう片面が文字。次の見開きは白紙で、その次は、初めの逆で、左側に絵、右側に文字、次の見開きが白紙、その次は、左が絵で、右が文字、めくると裏表紙。本が閉じられました。おわかりになったと思いますが、当時のトイブックはページをめくっていくとこのように何も無い白紙のページ、半ページは印刷があるが、もう半ページは白紙といった、皆さんの

常識では考えられないような作りの体裁をしていました。

このような作りではない絵本、私たちが知っている毎ページに印刷が連続する絵本、そういう絵本（トイブック）を、出版企画家で自身が木版の彫版師であったエドマンド・エヴァンズという人が初めてコールデコットの作品で実現したのです。その意味で、本の造本といえますか顔といえますか、毎ページに印刷がある絵本が、コールデコットではじめて誕生したのです。

さて、すでに申しましたように、コールデコットの絵本は全部で16冊ありますが、16冊以外のコールデコットの活動、作品、それらの背景などについて、しばらくお話ししておきましょう。後で時間がありましたら、もう1作、彼のトイブックを愉しめると思っていますので。

コールデコットのイソップ

レジュメをご覧ください。コールデコットの絵本16冊をリストアップしましたが、その次にそれらの合本を挙げておきました。出版当時から人気絶大でよく売れたものですから、4冊出ると合本し、8冊になるとまたそれらの合本を、というように出版社は出しました。コールデコットは絵が上手なことは、これまでの絵本の絵で、皆さん、十分納得されたでしょうが、スケッチ集が2冊出ています。そのほかに、彼がイラストレーションをつけたものがあります。その中で1883年に出た『イソップ』(Some of Aesop's Fables with Modern Instances 邦訳なし) というのがあります。イソップの絵本です。これを覗いて見ることにしましょう。

イソップですから、短い話がたくさん載っています。これが本の表紙で、こちらが内表紙です。「現代の事例付き、イソップの物語」というタイトルになっているのがミソです。

これは「カラスとキツネ」で、この話はよくご存知でしょう。カラスが木の上にて、肉をくわえています。するとキツネがやってきて、カラスのくわえている肉を取ってやろうと考えて、「あんたは立派だね」とカラスの濡れ羽色を褒めます。そして「これで、いい声をしていれば、あんたは

動物の王さまだ」と言います。カラスはおだてにのって「いい声が出せる」と言おうとして、口を開けると肉が下へ落ちて、まんまとキツネにもっていかれてしまうんですね。この話にまずコールデコットは木の下でおべんちゃらを言っているキツネと木の上で肉をくわえているカラスの絵を書いています。それとは別に、現代版の絵解きイラストレーションを描いています。

この2枚の絵がそれぞれですが、皆さんはこれをどうお読みになりますか。上流家庭の居間とおぼしき部屋で、立派なソファに二人の女性がかけています。お嬢さまと年配の女性です。年配婦人はお嬢さまのお世話兼お目付け役の「シャペロン」(chaperon)です。かたわらの椅子に男性が坐ってシャペロンに何か勧めています。次の絵を見ますと、男性は一計を案じ、シャペロンに、上手と聞いているピアノを一曲、所望して、そのおだてにのったシャペロンが席をはずしてピアノに向かった隙に、男性はお嬢様にアタックしています！シャペロンはピアノばかりか歌も上手とおだてられたらしく、絵では弾き語りもして、大きな口を開けて歌っているようですね。風刺がよく効いています。昔も今も、おべんちゃらと知りつつ、お世辞に弱いのが人間。また、それを小ざかしく使う人士も、世には少なくないということですね。

次は「鍛冶屋と子イヌ」です。鍛冶屋が小犬を飼っていました。小犬は鍛冶屋が仕事をしている間じゅう寝ていましたが、鍛冶屋が食事をしようとすると、目を覚ましてそばにやってきました。鍛冶屋は言います。「困った奴だ、私が金床を叩いているときは眠っているくせに、あごを動かし始めるとお前はすぐに目を覚ます」。これにコールデコットはどんなく現代の事例を描いているかという、<選挙>を使っています。選挙になると、立候補者はにわかには有権者に愛想をふりまき始めます。これは握手を求めにやってきた候補者を描いています。<ありつきたくなる>と起きってくる犬で、痛烈な揶揄をしています。

今度は「ライオンと獣たち」。ライオンは他の動物たちと狩りに行きます。取れた獲物を前に、獲物を四等分して、ライオンは言います。「一つは狩猟隊の一員として私がもらう。もう一つは百

獣の王だから私が取る。またもう一つは私の勇気と気高い性格に対する敬意として私にくれるはずだ。最後の一つだが、これを誰が取るか議論したいものは、するがいい。結果はどうなるかわかっているな」。すなわち「何事につけ自分より力のある者とつき合ったり交わったりしないことだ。あまり強い人と行動をともにしないことだ」というのがモラルです。これの〈現代事例〉を見ましょう。これは株主総会の図でしょう。株主らしき人たちの集まりで、業績の報告会かなにかしています。「ディレクターズ・レポート」すなわち「重役の報告」を読み上げている図です。この絵から聞こえてくる声は「今期の儲けはこれこれ・・・、皆様のご協力のたまもの。しかし、この内、一部は前期の赤字補填に、一部は予備費に回さねばならない、さらに一部は・・・」と結局今期の配当はゼロという報告、そのように私は読みますが、皆さんの読みはいかがですか。

これは「オンドリと宝石」です。雄鶏は掃き溜めを蹴散らしていると、宝石がコロンと出てきました。でも雄鶏は「俺にはこんなもの用はない、麦一粒の方がありがたいのに」と言うだけです。コールデコットは、貧しい旅人が激しい雨風の中を歩いていると、彼には全く縁のなさそうな洒落た宿のところにさしかかっているところを描いています。雄鶏のつぶやきがそのまま旅人のつぶやきになっています。

最後にもう一例「尻尾を切られたキツネ」。わなにかかって尻尾をなくしたキツネが、自分だけ尻尾がないのはみっともないと、仲間たちに「みんな、尻尾なんか邪魔だ、切っちゃいなよ」と言います。が、逆にみんなからあざ笑われる話です。これに対してコールデコットは、独身のオールドミスが、若い未婚女性たちの前で「なによ、ばかばかしい、亭主なんて愚の骨頂、全く不必要なものですよ」と説教している図です。

コールデコットが個々の話に、教訓を〈現代事例〉で絵解きして見せたことは、122年後の今日もちっとも古びていません。21世紀に生きているわれわれにとっても、まさにその通りと賛成できる風刺です。19世紀イギリスには『パンチ』というすぐれた風刺雑誌がありました。コールデコッ

トはその風刺精神・伝統を直接受け継いでいます。滑稽をもって批判する、ユーモアで笑いのめす、諧謔の中に真実を込める、こういう精神がEnglish Humourで、コールデコットの絵本の基本にはその精神がいきいきと息づいています。これがコールデコットの〈Englishness〉であると思います。イギリス児童文学の質の高さは、子ども向けの本にもこういう〈知恵〉が内包されています。お子さまランチではない、真の文学精神がちゃんと息づいていて、そこがイギリス児童文学、イギリス絵本の真の魅力だと思います。

コールデコットのイラストレーション

レジュメでおわかりのように、コールデコットには、イラストレーションをつけた作品が多数あります。先の『イソップ』は1883年でした。イラストレーション作品は1873年に始まりますが、これからお見せするのは、ワシントン・アーヴィングというアメリカの作家のクリスマス物語に挿絵を描いた1875年出版の『昔のクリスマス』(Old Christmas, from the Sketch Book of Washington Irving 邦訳なし)からです。これが出ると、コールデコットはにわかにな注目をされ始めました。例としてここでお見せするのは、いずれも古書からですから、普段はなかなか目にすることができないので、この機会によくご覧おきください。

『昔のクリスマス』から1枚。これは、クリスマスのお祝いで、貧しい人たちが招かれてやってきたところです。家の主人が玄関先でみんなを迎え入れています。子どもや犬も招かれているようです。犬と言えば、先ほどの『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品:現代絵本の父』の中で、コールデコットは犬小屋いっぱいの犬を描いている、と記されていますが、馬の絵も犬の絵も実に上手です。この8匹の犬が走っている絵など、1匹1匹のデッサンが見事です。これはホールの中で椅子に掛けている乙女の絵、彼女は手に花の枝をもち、花びらで占いをしているところです。花びらが床に散っていきます。傍らで犬が、花びらをちぎる乙女の指先をじっと見上げていて、そのようす、まさに忠実な犬の姿をよく写しています。こちらの若い二人と年配の男性の絵、いずれもス

タイルのいい紳士ですが、ここにも6匹の犬がいろんなポーズで描かれています。こちらは「これ以上優雅ですばらしいクリスマスの祝宴はあったためしが無い」とキャプションのある絵で、豪華な大広間で50名ほどの紳士淑女が宴席について、今乾杯が始まる場所ですね。手前のグラスを掲げているホストの傍らに、やはり犬が1匹控えています。これらの絵はD. J. クーパーという彫版師が精魂を込めて木口木版に彫ったものです。

この『昔のクリスマス』の続きが翌年に出た『ブレイスブリッジ・ホール』(Bracebridge Hall, 1876 邦訳なし)です。これは内表紙の前に口絵として描かれている絵です。「騎士たちは出陣の準備をしている」というキャプションがついていますが、お屋敷の庭先で一人の若い淑女が白馬に乗ったところを中心に、おともの男性が傍らで今馬に乗ろうとしているところです。後ろの方では馬車が出を待っています。人馬のそばに犬が3匹います。これからどこぞのパーティへ出かけるころでしょうか、現代ならば自家用車で出かける場面でしょう。女性の馬の乗り方、またがるのではなく、このように両足そろえて横ずわりに乗るのですね。

以上、何枚かお見せしたコールデコットのイラストレーション、いずれも写実画ですが、繰り返すようにデッサンが本当にすばらしいです。今度は以上の単色画に対して、カラー画をお見せしましょう。先ほどご覧になったように、絵本では単色画とカラー画が組み合わさっていました。その場合のカラー画は、エドモンド・エヴァンズが色別に版木を彫って、それらを重ね刷りして、1枚のカラー画を完成させたものです。今流に言えばカラーセパレーションです。が、これからお見せするのは、それとは違う<手彩色の>イラストレーションです。

今までご覧になってきたのは単色の絵、すなわち線描画でした。それに対して、これは線描画に水彩絵の具で塗り絵したイラストレーションです。Hand-coloured、人がすべて手で色をつけたものです。いかがでしょう、印刷のものとは違って、温かみがあって実に綺麗でしょう。手彩色には、量産するため、色別に塗る人を並べて、流

れ作業で目の前に来る絵に、赤ならば、赤を塗るべきところに赤を塗って、次へ送るというふうにして、最後にカラフルな絵が出来上がるわけです。分業で色を塗る作業を子どもにやらせていた時もありました。経費の節約のためです。しかし、ここでお見せするコールデコットの手彩色イラストレーションは、ひじょうに綺麗な出来ばえのもので、専門の手彩色家、色付け師がおこなったものです。

これは1878年に出た『北イタリアの人々、町と田舎の生活スケッチ集』(North Italian Folk, Sketches of Town and Country Life 邦訳なし)からです。タイトル通り、旅行の印象記です。コールデコットが描いた線描画のスケッチを、彫版し、プリントしたものに、色付け師が水彩で彩色して出来たものです。(同書から10数枚をカラースライドで投影しました。)

次にご覧いただくのは、1880年の作品、『ブレトンの人々』(Breton Folk, An Artistic Tour in Brittany 邦訳なし)からです。ヘンリー・ブラックバーンという作家が書いた旅行記ですが、ブラックバーンは、コールデコットのスポンサーでした。後にコールデコットの伝記を書きました。コールデコットが生前、画家として、絵本作家として、語ったことばを書き残してくれています。その人がコールデコットを連れて一緒に旅をして、行った先々で、コールデコットがスケッチしたものを、自分の旅行記にイラストレーションとして使ったわけです。これらは単色画です。(付記：レジユメの<◎イラストレーションをつけた作品>で最後に挙げてあるブラックバーンの著書で、その邦訳『百年前の絵本—R. コールデコットの前半生』が、ただいま言及したブラックバーンによる「コールデコットの伝記」です。そこにはコールデコットのスケッチが(すべて単色の線描画ですが)豊富に収められているので、この講義録の読者は、この邦訳書でコールデコットのスケッチ画を味わってください。)

ブラックバーンの『ブレトンの人々』で、<序文>のところで描かれているこの絵は、コールデコットの自画像です。三段積みの石の上に鉄柵があり、画家が土台石に脚を組んで掛け、鉄柵に寄

りかかり、タバコをふかし、スケッチをしている図ですね。男女の大人3人と幼い子4人が、画家を囲んで絵をのぞきこんでいます。このひげを生やして、ソフト帽をかぶったコールデコット像は、残されている彼の写真とそっくりです。この絵のように、こうして子どもや大人に愛されていた画家の姿、コールデコットという人をよく物語っています。一人の少女は、スケッチブックを持っているコールデコットの腕にかかえられています。この絵は、モーリス・センダックも使っていますが、アメリカの児童文学の書評と批評の雑誌『ホーン・ブック』(*Horn Book*)の表紙図案にも使われたことがありました。

コールデコットの最後の作品は、死後出版となった絵本、1886年の『ジャックと豆のつる』(*Jack and the Bean-Stalk, English Hexameters* 邦訳なし)です。この昔話にイラストレーションを頼まれましたが、制作の途中で亡くなってしまい、構想を物語るラフスケッチが残されました。これはそのラフスケッチによる本です。本描きでも下絵でもなく、文字通りラフスケッチということで、比較したいのが、ビアトリクス・ポターの『ずるいねこのおはなし』(*The Sly Old Cat*, 1906)のイラストレーションです。『ずるいねこのおはなし』も残っているのはラフスケッチだけで、ポターの死後にそれが出版されました。ともに完成画ではありませんが、二つとも、ラフスケッチに勢いがある、画家の力量がある意味で非常によく表れています。

批評家のブライアン・オルダーソン氏は、「コールデコットは、39歳で死んでしまったけれども、もし、長生きしたら、もっと大きな仕事をした人だろう。それをうかがわせるのは、この最後の遺作になった下書きだ」と言っています。『ジャックと豆のつる』から2枚ほど、お目にかけてみましょう。これは、豆の木を登っていったところにいた巨人です。巨人の堅琴を奪って逃げるのを、巨人が追いかけてきます。こちらは、巨人が下りて来る豆のつるを、ジャックのお母さんが鉈でぶった切り、巨人が地上に落ちて倒れている図です。巨人を、巨大な足の下の方から見た図で、巨人の迫力ある大きさがよく描き出されていますね。

『ハートのクイーン』

コールデコットが16冊の絵本以外にどんな活動をしていたか、ざっとご紹介しましたが、時間がまだありますので、もう一度16冊にもどって、今度は『ハートのクイーン』(*The Queen of Hearts*, 1881 『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』所収)を愉しんでみましょう。これはよく知られたわらべ唄による絵本です。まずそのわらべ唄を読んでみましょう。

ハートのクイーンが

タルトを焼いた

ある夏の日に。

ハートのジャックは

タルトを盗んで

すぐさまかくしにいった。

ハートのキングは

タルトをもどせと命じ

きびしくジャックをしかった。

ハートのジャックは

タルトを返し

もうぜったい盗まぬとちかった。

ハートのクイーンは言うまでもなくトランプです。トランプの唄ですから、唄の続きとして、クラブ、スペード、ダイヤが出てくるのですが、その続きが、実は急に下卑た内容になって、子ども向きではありません。品がなくなるのです。そういうことのためかどうか知りませんが、ハートの部分だけがずっと広まって、他の部分はきれいに忘れられて、ハートのクイーンだけが独立して単独に伝えられてきています。

ただいま読みましたように、トランプのハートのクイーンはタルトを焼きます。が、それをハートのジャックが盗みますが、盗みは見つかって、おしおきを食うという話ですね。

ジャックが窃盗で、裁判にかけられるということが、連想されるので、それを使って『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures under Ground*, 1865)の最後の裁判の場面が生まれています。アリスはお姉さんの膝の上で眠って夢をみて、ワン

ダーランドへ行くわけで、その夢の最後が裁判場面になります。目覚めかけたアリスが、「なによ、あなたたち、ただのトランプのカードじゃないの」と言って立ち上がると、カードたちがパーツと舞い上がっていく、アリスは目を覚ますと、姉の膝の上で、舞い落ちてくる木の葉を姉が払ってくれている、これが『アリス』の最後の場面でした。ルイス・キャロルの作品には、他にもマザーグースの唄がよく出てきます。とにかく、『ハートのクイーン』はこの『アリス』のおかげでもよく知られているわらべ唄ですね。

『ハートのクイーン』は、先の『ヘイ・デイドル・デイドル』とは違い、ストーリーが一応成り立っています。しかし、ある夏の日に、クイーンがタルトを焼いたのは、なぜでしょう？そう考えてみると、元のそっけない話が、にわかにな動き出してこないでしょうか。ストーリーが広がりはじめます。また、ジャックは何でタルトを盗んだのだろう。それがどうして見つかったのだろう、とつぎつぎくなぜ？>と考えはじめると、ストーリーには謎がいっぱい潜んでいることがわかります。最後にジャックがおしおきを食うところまで、くなぜ？>を手がかりにしてコールデコットが、ではどんな解答を出したか、と跡づけることにしましょう。絵本の表紙からして、内容に呼応して、なかなか考えられたデザインになっていますからこれは、後でゆっくり味わってみてください。

では、表紙をめくりましょう。見返しのページの左側は、いわばこの絵物語の口絵です。クイーンはタルトを作る前に、料理法を吟味なさっています。クイーンが見ている本は、“The Art of making Tarts”（タルトの作り方）の本。脇には、“The Complete History of Jams”（ジャムの完全な歴史）というタイトルの本があります。タルト作りに必要な情報をまず得ています。

そして、ある晴れた夏の日に、クイーンのタルト作りがはじまります。クイーンがお作りになるのですから、当然お手伝いがあります（復刻版の4ページ。以下同じ）。アプリコット、クロスグリ・・・とジャムもいろいろ。さぞや美味しいタルトができることでしょう。あたりには美味しそうな香りがただよい、キングと幼い王子が、その

香りに引き寄せられて窓から中をのぞきこみます（5ページ）。クイーンは「今すぐにはいただけないのよ、このままねかせておくと、明日美味しくなって、それからいただきますよね」と言っているようです。

クイーンはなぜ今日、ご自分でタルトを作ったのでしょうか？その理由をご存知のキングは、「いやご苦労さま、これで明日が楽しみだ。さあ、庭へ出て、少し休んでくれたまえ」ということで、クイーンを庭園へ誘います（6～7ページ）。そして、キングはクイーンをねぎらいます。（ここではキングたちの坐っているベンチの裾の地にさりげなくサインが入っていますね。）

8ページと9ページの見開きへ進みましょう。セピア一色の絵ですが、見開きの左が夕焼け空で、右ページが翌朝の夜明けであることは一目でわかります。雄鶏が夜明けを告げています。侍従長が早々と昨日のクイーンのタルトを出してきました。今日の行事の準備をはじめているのです。今日はトランプのお仲間たち、クラブ、ダイヤ、スペードのキングご夫妻たちをお招きして、終日を愉しもうとしているのです。

というわけで、侍従長が真っ先に出したタルトを、ジャックがたまたま見てしまいました。ジャックは誰も見ていないから今がチャンスと、タルトを失敬します（10ページ）。しかし、壁に耳ありではなく、ネコにしっかり見られていたのには気づきませんでした。ネコは早速侍従長に告げ口します（11ページ）。実はジャックは昨日の午後から美味しそうな香りに気づいて、心がそっちへ向いていたのでしょうか。そして、今朝チャンスにぶつかったのです。ジャックの盗みの動機をそんな風に想像できませんか？

ジャックは早速タルトを自分の部屋へ隠しに行きます。部屋へは、女官たちの宿舎の前を通っていかなくはなりません。いつもはそこを通るとき、女官たちに声をかけていくジャックですが、今日はこっそり素通り。が、女官たちは愛想のない今日のジャックを見咎めます（12～13ページ）。14～15ページでは、ジャックは集合時刻に少しおくれます。頭を掻き掻きクラブ、ダイヤ、スペードのジャックたちと合流します。そして16～17

ページの見開きでは、左右のページを一面に使って、キングとクイーンたちのアーチェリー競技を描いています（口絵参照）。なぜか今日は放たれる矢がみなハートの盾にばかり当たるのです。ハートのジャックはビクビクしています。この見開きのページは、カラーページのときの枠を絵から取り去り、余白をたっぷり生かして、屋外の広がりをも効果的に表し、また左右の絵の間の空白も、射手と盾との距離をうまく演出しています。これも絵本の見開きページの効果的活用を、現代絵本でいち早く獲得した例と言えるでしょう。

舞台は宮殿の中に移ります（18～19ページ）。これから舞踏会が始まるわけです。侍従長は最敬礼して客たちを迎え入れています。それぞれのキングご夫妻にはお一人ずつお子さまがおられて、4人の幼い王子、王女たちは、舞踏会場の隣の別室へ招じいれられて、例のタルトをお子たちに差し上げるように、ハートのキングが命じます（18～19ページ）。すると、侍従長が進み出て、「このネコめが申すところ、ジャックめが盗みおったとのこと」。キングは怒って、ただちにジャックを呼べと仰せられる。キングはふとどきものは徹底的に懲らしめてやると、激しいお怒り。お子たちは、やめてやめてかわいそうだからとキングに嘆願（22ページ。口絵参照）。しかし、キングの怒りはおさまらず、舞踏会場の隣の部屋でジャックを厳しく叱っているのが、カーテンの向うに見えています（23ページ。口絵参照）。

ケイト・グリーンナウェイは、23ページのこの絵を激賞したそうです。ケイト・グリーンナウェイの『窓の下』（*Under the Window*, 1878）は、コールデコットの作品よりも先に出版予定だったのが、コールデコットの出現で、予定変更となり『窓の下』の出版は後回しになったといういきさつがあったそうですが、ケイト・グリーンナウェイはコールデコットのこの23ページの、手前で楽しい舞踏会が繰り広げられている、その奥でキングの怒りが爆発している、同時に起っている出来事を描いたこの構図に感嘆して、コールデコットを激賞したといいます。当時ケイト・グリーンナウェイも、もちろん人気が高く、コールデコットとグリーンナウェイは夫婦であるという噂まであったそうで

す。ケイト・グリーンナウェイは女性画家らしく服飾に関心が強く、彼女の描く人物の服装は極めて個性的でしたが、コールデコットが描く、この舞踏会場の人物たちの服装のデザイン、プリント柄も、グリーンナウェイに負けず劣らず優雅で美しいですね。

ジャックは盗んだタルトを戻さなければなりません（24～26ページ）。ジャックは泣きの涙ですが、侍従長の方はしてやったりの顔。28ページではハートのクイーンお手製のタルトを、みんながいただいている傍らで、ハートのジャックは残念至極、壁に頭をすりつけて泣きじゃくっています。これからまた改めてお叱りの刑を受けなければならないので、そのしょげかえったジャックの姿は29ページの絵にコミカルに描きだされています。そして、最後の見開きで神妙なジャックの姿が描かれます。

テキストとして使われているわらべ唄がごくシンプルなものであることを、初めに申しましたが、そのテキストをそのまま使って、しかし、イラストレーションでこれだけ豊かなストーリーを語ってくれたのです。これだけのディテール、ユーモアが、風刺も含めて展開されているコールデコットのお手並み、お楽しみいただけたでしょうか。

イラストレーターであり絵本作家であったランドルフ・コールデコットの全体をこうして見てまいりますと、絵の力量がいかにあった人か、ストーリーテラーとしてもいかに非凡であったかが、実感できたのではないのでしょうか。残念ながら比較的短命で終わった人でしたが、伝記をみるとたいへんな勉強家で努力の人でもありました。イギリスでは19世紀にカリカチュア文化がジャーナリズムを通して花開きました。その風土の中でコールデコットのような芸術家が誕生してきたといえます。今回はコールデコットその人の残していったものを中心にみてきましたが、コールデコットを生んだ文化的背景についてはあまり言及できませんでした。しかし、彼のような逸材は一人孤立して誕生するのではなくて、文化の流れの中で生まれるべくして誕生したという見方ができます。そういうコンテキストで改めてコールデコットの芸術を考えて見ることをお勧めしたいと思います。

コールデコットはオリジナルなストーリーの絵本は作りませんでした。子どもを含め一般大衆がよく知っているわらべ唄や戯れ唄、民謡的な唄などを使って、そこからオリジナルなストーリーをクリエイトする、そういうタイプのストーリーテラーで、そのストーリーをもっぱら絵でもって語った人でありました。

彼が生きた時代は、先ほどからお話しているように、木版画の時代でした。絵のプリントは線彫りの版木でおこなわれました。従って、コールデコットの絵は、線がひじょうに重要でした。線が基本で、ページのすべてがカラフルではありませんでした。彼の絵本ではカラーと単色の絵が交互に出てきますが、これは印刷の都合もありますが、その点を上手に使いこなして、そこに一つのリズムと呼吸をクリエイトすることに成功しています。彼の絵本には、現代の絵本に時折見られる息苦しさというものが全くありません。すでに申しましたように、余白を活かし、カラーの絵においても、線があくまでも基本になっている、それがコールデコットの絵本の絵の特徴でした。

絵本の伝統を受けついで

コールデコットは、このように絵本というものは、絵がメインになって、ことばと同調しながら、ストーリーを展開していくのが絵本だということを、理屈や理論ではなく、作品によって示しました。彼から現代絵本は始まったと言えます。

先ほどウォルター・クレインの絵を一つお見せしましたが、ウォルター・クレインは、ひじょうにデコラティブな（装飾的な）絵を描いて、コールデコットとは、対照的な出発をしています。これもまた、イギリス絵本の伝統の一翼を担う流れ

となりました。しかし、その後の流れを見ていきますと、やっぱりコールデコットの系譜の方が優勢で、それにウォルター・クレインの流れとか、ケイト・グリーンハウエイの流れというものが混じっています。

この講座の最初の案内にも書きましたが、現代の子どもの本というのは、楽しみの読み物という意味で、1865年に出版されたルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』からはじまりました。その同じ年に、実はウォルター・クレインによってトイブックが作られ、ついでコールデコットが出てきて、ケイト・グリーンハウエイが出てきてと、立て続けに新しいジャンルの峰が誕生して新分野が開かれました。新しい芸術ジャンルが始まる時、いわばその最高峰となるものが、パッと一時に出てくるという現象を、私は不思議だなあ、と思っています。というのは、やはりイギリスで、大人向けの＜小説＞というジャンルが始まるのが、18世紀、1740年代あたりなのですが、その時期にヘンリー・フィールディング、サミュエル・リチャードスン、トバイアス・スモレット、ローレンス・スターン、ゴールドスミスといった作家たちが、30年くらいの間にパッと出てきて、近代小説という近代市民社会の新芸術分野がたちまち確立して、小説の源流となりました。絵本について考えると、1865年からひじょうによく似た現象が起こったように思えます。そういうところに、イギリス文化の興味深いリズムというものを、私は感じているのですが、いかがでしょう。それでは2時間、ご清聴をありがとうございます。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

「ランドルフ・コールデコット」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	ランドルフ・コールデコットの生涯 と作品：現代絵本の父	ジョン・バンクストン著 吉田新一訳・解説	絵本の家 2006.5	YZ726.62- ラン
2	コールデコットの絵本：現代絵本の 扉をひらく (オリジナル復刻版)	Randolph Caldecott 作・絵	福音館書店 2001	Y17-A7360 YZ726.62- コル
3	絵本の魅力：ビュイックからセンダ ックまで	吉田新一著	日本エディタースクール出版 部 1984	YZ726.5- ヨシ
4	Hey diddle diddle / Baby bunting (「コールデコットの絵本：現代絵本 の扉をひらく」所収)	Randolph Caldecott 作・絵	福音館書店 2001	Y17-A7360 YZ726.62- コル
5	Lullabies and night songs	Alec Wilder 作 Maurice Sendak 絵	Bodley Head 1965	所蔵なし
6	Sing a song for sixpence (「コールデコットの絵本：現代絵本 の扉をひらく」所収)	Randolph Caldecott 作・絵	福音館書店 2001	Y17-A7360 YZ726.62- コル
7	Make way for ducklings	Robert McCloskey 作・絵	Viking Press 1941, c1969	Y19-A840
	かもさんおとおり	ロバート・マックロスキー文・絵 わたなべしげお訳	福音館書店 1965	Y7-240
8	The nursery alphabet (Aunt Louisa's London toy books)		F. Warne & Co. [1868]	VZ1-93
9	Some of Aesop's fables with modern instances	Alfred Caldecott 訳 Randolph Caldecott 絵	Macmillan 1883	所蔵なし
10	Old Christmas : from the Sketch book of Washington Irving	Washington Irving 作 Randolph Caldecott 絵	The Doldrums [1927]	KS159-12 (本館)
11	Bracebridge Hall	Washington Irving 作 Randolph Caldecott 絵	Macmillan 1876	所蔵なし
12	North Italian folk, sketches of town and country life	Mrs Comyns Carr 作 Randolph Caldecott 絵	Chatto and Windus 1878	所蔵なし
13	Breton folk, an artistic tour in Brittany	Henry Blackburn 作 Randolph Caldecott 絵	S. Low, Marston, Searle, & Rivington 1880	所蔵なし
14	Randolph Caldecott : a personal memoir of his early art career	Henry Blackburn 作 Randolph Caldecott 絵	S. Low, Marston, Searle, & Rivington 1886	YZ726.6C-B4
	百年前の絵本：R・コールデコットの 前半生	ヘンリー・ブラックバーン著 高橋誠、桑市利男共訳	ブック・グローブ社 1997.5	YZ726.62- コル
15	Jack and the Bean-Stalk, English hexameters	Hallam Tennyson 作 Randolph Caldecott 絵	MacMillan & Co 1886	所蔵なし
16	Under the window	Kate Greenaway 作・絵	G. Routledge and sons [18--]	Y17-A3220
	窓の下で	ケイト・グリーンウェイ絵と詩 岸田理生訳	新書館 1976	YZ726.62- グリ
17	The Queen of Hearts (R. Caldecott's picture books)	Randolph Caldecott 作・絵	G. Routledge & Sons 18--?	Y17-B3660

レジュメ

ビアトリクス・ポター

吉田 新一

私家版だった『ピーターラビットのおはなし』を、商業版として出版するようにウォーン社に強く勧めたのは、レズリー・ブルックでした。彼はコールドコットの絵本作りの忠実な継承者でしたが、ビアトリクス・ポターはコールドコットの妙技を自家薬籠中の物とし、さらに絵本の可能性を大きく広げました。

ビアトリクス・ポター (Beatrix Potter 1866-1943) の作品

- The Tale of Peter Rabbit 『ピーターラビットのおはなし』 1902 (VZ1-873 ; Y17-A4627 ; Y19-A68)
 The Tale of Squirrel Nutkin 『りすのナトキンのおはなし』 1903 (Y17-A4628)
 The Tailor of Gloucester 『グロースターの仕立て屋』 1903 (VZ1-870 ; Y17-A4629)
 The Tale of Benjamin Bunny 『ベンジャミンバニーのおはなし』 1904 (Y17-A4630)
 The Tale of Two Bad Mice 『2ひきのわるいねずみのおはなし』 1904 (Y17-A4631)
 The Tale of Mrs. Tiggly-Winkle 『ティギーおばさんのおはなし』 1905 (Y17-A4632)
 The Tale of The Pie and The Patty-Pan 『パイがふたつあったおはなし』 1905 (Y17-A1737)
 The Tale of Mr. Jeremy Fisher 『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』 1906 (Y17-A4633)
 The Story of A Fierce Bad Rabbit 『こわいわるいうさぎのおはなし』 1906
 The Story of Miss Moppet 『モペットちゃんのおはなし』 1906 (Y17-B6018)
 The Sly Old Cat 『ずるいねこのおはなし』 1906; 1971 (VZ1-869)
 The Tale of Tom Kitten 『こねこのトムのおはなし』 1907 (Y17-A4634)
 The Tale of Jemima Puddle-Duck 『あひるのジマイマのおはなし』 1908 (VZ1-871 ; Y17-A4635)
 The Tale of Samuel Whiskers 『ひげのサムエルのおはなし』 1908 (Y17-A1738)
 The Tale of The Flopsy Bunnies 『フロプシーのこどもたち』 1909 (Y17-A4636)
 The Tale of Ginger and Pickles 『「ジンジャーとピクルズや」のおはなし』 1909 (Y17-B4824)
 The Tale of Mrs. Tittlemouse 『のねずみチュウチュウおくさんのおはなし』 1910 (Y17-A4637)
 The Tale of Timmy Tiptoes 『カルアシ・チミーのおはなし』 1911 (Y17-A4638)
 The Tale of Mr. Tod 『キツネどんのおはなし』 1912 (VZ1-872)
 The Tale of Pigling Bland 『こぶたのピグリン・ブランドのおはなし』 1913 (VZ1-874 ; Y17-A7852)
 Appley Daply's Nursery Rhymes 『アプリイ・ダプリーのわらべうた』 1917 (Y17-A4639)
 The Tale of Johnny Town-Mouse 『まちねずみジョニーのおはなし』 1918
 Cecily Parsley's Nursery Rhymes 『セシリ・パセリのわらべうた』 1922 (Y17-A4640)
 The Fairy Caravan 『妖精のキャラバン』 1929 (Y8-A3101)
 The Tale of Little Pig Robinson 『こぶたのロビンソンのおはなし』 1930 (Y8-A952)
 Sister Anne (with illustrations by Katharine Sturges) 1932

- Wag-By-Wall (with woodcut decorations by J. J. Lankes) 1944 (VZ1-876)
The Tale of the Faithful Dove (with illustrations by Marie Angel) 1955 (VZ1-868)
The Tale of Tuppenny (with illustrations by Marie Angel) 1973
『タペニーのおはなし』(『月刊MOE』1990年10月号(Z11-1259)に掲載)
Yours Affectionately, Peter Rabbit (miniature letters to children) 1983
『ピーターラビットのてがみの本』(1,2)(Y18-6641)
Country Tales (with illustrations by Pauline Baynes) 1987
Wag-By-Wall (with illustrations by Pauline Baynes) 1987

作品(原作)に記されている献辞(Dedication)

- 『ピーターラビットのおはなし』には献辞はないが、お話の元になったノエル・ムーア(1887年12月生まれ)宛絵手紙(1893年9月4日)の冒頭に、「ノエル君、あなたになにを書いたらいいかわからないので、四匹の小さいウサギのお話をしましょう。四匹の名前はフロプシーに、モプシーに、カントンテールに、ピーターでした・・・」とある。
- ‘A story for Norah’・・・『りすのナトキンのおはなし』
(ノーラ・ムーアは、ビアトリクス・ポターの元家庭教師アニー・カーターが結婚してもうけた5番目(1893年7月生まれ)の子ども。作品はビアトリクスが1901年9月25日ダーウエント湖畔リングホーム邸からノーラへ宛てた絵手紙から誕生した。)
- ‘My dear Freda, Because you are fond of fairy-tales, and have been ill, I have made you a story all for yourself—a new one that nobody has read before. And the queerest thing about it is—that I heard it in Gloucestershire, and that it is true—at least about the tailor, the waistcoat, and the “No more twist!” Christmas, 1901’・・・『グロースターの仕立て屋』
(ウィニフレッド・ムーア(フリーダは愛称、1891年1月生まれ)は、アニーの4番目の子ども。この献辞は、1901年クリスマスにフリーダへ送った「12枚の水彩画の入った厚表紙ノートブック」に添えられた手紙にある文。)
- ‘For the children of Sawrey from Old Mr. Bunny’・・・『ベンジャミンバニーのおはなし』
- ‘For W.M.L.W. The little girl who had the doll’s house’・・・『2ひきのわるいねずみのおはなし』
(W.M.L.W.はポターのフィアンセNorman Warneの兄Fruingの娘(すなわちノーマンの姪)Winifred Mary Langrish Warneのイニシャル。)
- ‘For the real little Lucie of Newlands’・・・『ティギーおばさんのおはなし』
- ‘For Joan, to read to Baby’・・・『パイがふたつあったおはなし』
(Joanはアニーの6番目の子で、Babyは8番目の子Beatrixのこと。Beatrixはビアトリクス・ポターが名親となったので、誕生祝いに、‘BM 3rd Nov 1903’と彫った銀のシュガーボウルを贈った。Beatrixはそれを宝物として生涯大切に保持していた。)
- ‘For Stephanie from Cousin B.’・・・『ジュレミー・フィッシャーどんのおはなし』
(Stephanieは、ビアトリクス・ポターの祖母方の親戚である第10代男爵Sir William Hyde Parkerの娘ステファニー。ビアトリクスは、SuffolkにあるHyde Parker家の屋敷Melford Hallへよく行って滞在した。彼女の泊まった部屋は今も＜ビアトリクスの部屋＞として保存されている。)
- ‘Dedicated to All Pickles, — especially to those that get upon my garden wall’・・・
『こねこのトムのおはなし』

(picklesは普通は<酢漬物>の意だが、口語でmischievous child (いたずらっ子) の意でも使われる。)

- ‘A Farmyard Tale for Ralph and Betsy’・・・『あひるのジマイマのおはなし』
(ビアトリクスは1905年ニアソーリ村にヒルトップ農場を取得するが、それまで農場管理をしていた John Cannon 家族にひきつづき管理をまかせていた。Ralph と Betsy はジョンの息子と娘で、日本語版の 8 ページに登場、Mrs.Cannon も 4 ページに登場している。)
- ‘In remembrance of “Sammy,” The intelligent pink-eyed Representative of a Persecuted (but Irrepressible) Race An affectionate little Friend, and most accomplished thief’ (いとかしこぎ、ピンクのまなこせる、虐げられるも鎮圧されざる<種>の代表<サミー>を追悼して。親愛なる小さき友、名うての盗人よ。)・・・『ひげのサムエルのおはなし』
(ジュディ・テイラー著『ビアトリクス・ポター：描き、語り、田園をいつくしんだ人』(福音館書店 YZ726.62-ポタ) 149～151ページを参照。)
- ‘For all little friends of Mr. McGregor & Peter & Benjamin’・・・『フロプシーのこどもたち』
- ‘Dedicated with very kind regards to old Mr. John Taylor, who “thinks he might pass as a DORMOUSE;” (three years in bed and never a grumble!)’・・・『「ジンジャーとピクルズや」のおはなし』
(John Taylor は、ニアソーリ村の建具屋兼車大工で、同名の息子が『ひげのサムエルのおはなし』で John Joiner (だいくのジョン) として登場したのに嫉妬して、自分もビアトリクスの作中に登場したいと言った。ビアトリクスが「寝たきり老人をどう登場させるのか？」と訊くと、「ヤマネ (dormouse) で」と答え、希望は Mr. John Dormouse として実現した。)
- ‘Nellie’s Little Book’・・・『のねずみチュウチュウおくさんのおはなし』
(Nellie は、ノーマン・ウォーンの兄ハロルドの娘 Eleanor の愛称。)
- ‘For many unknown little friends, including Monica’・・・『カルアシ・チミーのおはなし』
(「モニカには会ったことはありませんが、親戚の小さい子どもの学校友だちです。本に自分の名がほしいといい、私がおその名を気にいったのです。」とビアトリクスは書いている。)
- ‘For Francis William of Ulva—SOMEDAY!’・・・『キツネどんのおはなし』
(ビアトリクスは祖母方の親戚 Crompton Hutton 家の娘 Caroline と親しかったが、キャロラインが the Laird of Ulva と結婚して Caroline Clark となり、生まれた息子が<アルヴァのフランシス・ウィリアム>。)
- ‘For Cecily and Charlie, A Tale of The Christmas Pig’・・・『こぶたのピグリン・ブランドのおはなし』
(ビアトリクスは、<こぶたのピグウィグがお百姓のパイパーソンちから救出される話>をミセス・ラドブルックから聞いたが、ラドブルックは農夫タウンリーの娘から聞いた話であったから、農夫タウンリーの二人の子セシリとチャーリーに献じられている。)
- ‘To Aesop in the Shadows’・・・『まちねずみジョニーのおはなし』
- ‘For Little Peter in New Zealand’・・・『セシリ・パセリのわらべうた』
(ピーターは、ニュージーランドに住むビアトリクス・ファンの一入である Bessie Hadfield の甥。ピーターは後にウェリントンで開業医となった。)

ビアトリクス・ポター

吉田 新一



レズリー・ブルック

コールデコットの絵本作りの妙技を自家薬籠中のものとして、さらに絵本の可能性を大きく広げてみせた絵本作家のビアトリクス・ポター。ここではそのポターの絵本作りについて、愉しみながら学んでまいりたいと思います。

この児童文学連続講座の内容を伝える国際子ども図書館のホームページで、ビアトリクス・ポターについて「私家版だった『ピーターラビットのおはなし』を、商業版として出版するようにウォーン社に強く勧めたのは、レズリー・ブルックでした」と書きました。ご存じのように、処女作の『ピーターラビットのおはなし』は出版社がなかなか見つからず、最初は自費出版で出されました。それを見て、ウォーン社 (Frederic Warne & Co.) が出版を引き受けるか決めるため、同社と関係の深かったレズリー・ブルックに意見を求めると、商業版として出すことに彼が太鼓判を捺したという裏話があったのです。

レズリー・ブルックの生まれ年は1862年で、1866年に生まれたポターとは僅か4歳しか違いませんでしたが、ブルックはポターよりずっと早く、1880年代末からコールデコットの絵本作りを忠実に受け継いだイラストレーターとして活躍しはじめていました。彼の作品は、わが国では瀬田貞二さんによる『金のがちょうのほん』(福音館書店1980)の翻訳が一冊あるだけですが、『金のがちょうのほん』やその他の、ブルックのイラストレーションについては、『絵本の魅力』(日本エディターズスクール出版部 1984)の中で私はやや詳しく紹介したことがあります。

アンドルー・ラングは1889年から *The Rainbow Fairy Book (Books of Wonder)* という昔話集を

編纂していました、わが国でも<虹の昔話集>としてよく知られています。そのラングが、1897年にわらべ唄集『ナーサリー・ライム・ブック』(*The Nursery Rhyme Book*)を出しました。それにイラストレーションを描いたのがレズリー・ブルックでした。その中にある「ハンプティ・ダンプティが塀に座った／ハンプティ・ダンプティが落ちこちた／60人の男と、もう60人の男が来ても／ハンプティ、ダンプティを元にはもどせなかった」<さて、ハンプティ・ダンプティはなんでしょう？>(答えは<卵>)という有名ななぞなぞ唄を、見てみましょう。ブルックの絵は1枚ですが、コールデコットの『ハートのクイーン』(*The Queen of Hearts*, 1881 『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』所収)のときに考えたように、「塀に座ったハンプティ・ダンプティが、なぜ落ちこちたのだろう」と問いを出して絵を見ると、卵形のハンプティ・ダンプティが転落するそばに、大きな蜂が一匹描かれています。これで、ハンプティ・ダンプティは蜂に刺されたか、蜂をよけたかしてバランスを失って転落した、と<落ちた理由>が絵に語られているのが解ります。

レズリー・ブルックはこの後にもわらべ唄の絵本をいくつか出して、それらを合本して、『ばらの輪』(*Ring O'Roses : a nursery rhyme picture book with numerous drawings in colour and black and white*, 1922)を出しました。国際子ども図書館にも所蔵されていますが、その中に「ハンプティ・ダンプティ」がまた新しい挿絵で出てきます。

今度は複数枚の絵で語られています。まずハンプティ・ダンプティが塀に上がります。ハンカチを棒に結んだ旗のようなものを、手に持っていま

す。それを彼は振ります。が、あんまり勢いよく振ったので、バランスを崩して塀から転落です、向こうからは大勢の家来を連れて、王さまが馬に乗ってこちらへ来るところです。ハンプティ・ダンプティは王さまを歓迎するために旗を振りすぎて、塀から落ちたのでした。テキストの最後はここでは“All the King’s horses and all the King’s men/Couldn’t put Humpty Dumpty together again.”(王さまの馬、王さまの兵隊、全部が力を合わせても、ハンプティ・ダンプティを元通りにまとめられなかった)となっていて、兵隊と馬が卵のつぶれたようなハンプティ・ダンプティを囲んで思案にくれている様子が描かれています。が、絵はこれで終わらないで、予期しないもう一枚が続きます。ハンプティ・ダンプティが落ちた塀の壁の石に‘Here fell Humpty Dumpty’(「ハンプティ・ダンプティ転落の現場」)と掘られています。それを子どもが二人「やたらと塀に登るとあぶないね」と言っているかのように見ている図です。これは文字が語らない一種の〈後日談〉で、あのコールデコット流の〈最後の一枚〉です。コールデコットのように余韻を残す内容ではありませんが、ユーモラスなプラス・ワンで、これもコールデコット式の絵本作りの一つと言えるでしょう。

「トンマなサイモン」(Simple Simon)という唄では、トンマなサイモンが市に行く途中、パイ売りに会います。サイモンが「パイを一つくれ」と言うと、パイ売りは「お前、またただ食いする気か?金は払うのか?」と聞きます。しかし、サイモンは「払うさ」と言いながら、食い逃げします。絵を見ると、パイ売りは怒ってサイモンを追いかけますが、パイを入れていた箱を置いて追いかけていったので、そばにいたガチョウが3羽、箱からよろしくパイを失敬しているところが描かれています。今では目にできなくなった光景ですが、駅の改札をずるして通り抜けた人を、切符切りが血相を変えて追いかけていく、その間に他の人たちはスイスイと改札を出て行く、そんな昔の情景を私は連想して、ブルックのこの絵に微笑を禁じえません。

「ガアガア、ガチョウさん」(Goosey, Goosey

Gander)の唄を見ましょう。ガチョウが、階段を上がって、階段を下って、奥方の部屋でお祈りしない男を見つけて、階段下へ突き落とす!という唄ですが、絵は唄の通り、ガチョウが階段を上がって下りて、お祈りしない男を突き落とすのですが、お祈りしない男をみつけたとき、それまで読んでいたらしき本を椅子の上に伏せて男は逃げ出す、その伏せられた本の表紙には“The Goose and How to Treat it”(ガチョウとその扱い方)というタイトルが見えます。これを見てガチョウは、この生意気な無礼者め!と階段下に突き落とすと、ガチョウの激怒の本当の理由が語られています。絵の中の文字でユーモアを添える、こうした手法もコールデコットが、パイ作りを始める前に、ハートのクイーンに『パイの作り方』と『ジャム物語』という本を読ませていた、あの〈遊び心〉に通じますね。

『ぼらの輪』には見返しにも工夫があります。表紙をめくった見返しと、裏表紙を閉じる前の見返しとに、妖精がブタと綱引きをしている場面が描かれていて、前者では引っ張り合っている図、後者では綱がちぎれて妖精たちがこけた図になっています。これもイラストレーターによる読者へのサービス精神の現れと言えるでしょう。

最後にもう一つ。アンドルー・ラングの『ナーサリー・ライム・ブック』にもどって、「ジャックがたてた家」という唄のイラストレーションを見ると、親子でコールデコットの絵本『ジャックがたてた家』(The House that Jack Built, 1878『コールデコットの絵本:現代絵本の扉をひらく』所収)を開いて読んでいるところが描かれています。これはブルックが明らかにコールデコットの『ジャックがたてた家』にすっかりしゃっぽを脱いでしまって、この唄のイラストレーションはコールデコットにお任せします、私はないませんわ、と言っているように思えます。これまたコールデコットとレズリー・ブルックの強い結びつきを証す一つの例と言えるでしょう。

『センダックの絵本論』(島多代, 脇明子訳 岩波書店 1990)の中に、レズリー・ブルックについて書かれた所があります。モーリス・センダックは、レズリー・ブルックはけっしてコールデコッ

トをそのまま真似たのではない、レズリー・ブルック流のもう一つの世界を作っている、と言っています。センダックはレズリー・ブルックを、ポターや、コールデコットと同等に大変高く評価しているのです。今回の講座ではレズリー・ブルックを外しましたが、このイラストレーターにもぜひとも注目していただきたいと思って、ポターに入る前にレズリー・ブルックのことを少しお話させていただきました。

ポターとコールデコット

では、ポターに入りましょう。ポターもコールデコットとは深いつながりを持っていました。コールデコットのことをたいそう誉めていて、亡くなる1年前（1942年）に、アメリカのライブラリアンへ宛てた手紙で、次のように書いています。

私たちは、コールデコットの絵本を、出るそばから夢中になって買いました。彼の絵本に私は最大の賞賛を捧げています。嫉妬の念すら抱えています。だって、一般に彼の名前で一緒にたにされている他の作家たちは、芸術家としてのイラストレーターという点では、絶対にコールデコットと同一レベルにはいないでしょう。

コールデコットはウォルター・クレインやケイト・グリーナウェイと並べてイギリス絵本作家の三羽鳥のように言われていますが、ポターは、コールデコット以外の二人を批判して、断トツにコールデコットがすぐれている、嫉妬を覚える程だと言っているのです。

コールデコットの頃は印刷で原画が消えてしまうことはなくなっていましたから、絵本が出版されるとすぐに原画は市場へ出ました。ポターのお父さんは、当時の人気絵本作家だったコールデコットのサインや手紙を集めるばかりか、絵本の原画も積極的に買っていました。ビアトリクスは1884年2月8日の日記に、次のように書いています。

パパは、ファイン・アート・ギャラリーへ行き、コールデコットの『かえるくん 恋をさが

しに』から、ペンとインキの小さいスケッチ画を2枚買った。パパは、『キツネが牧師さんちの門をとびこえる』という作品の中から、最後のカラースケッチ4枚を買おうとしたが、店主は分売したがらず、また、パパが以前『3人のゆかいな狩人』から1枚買ったときの80ポンドよりも、もう10ポンド余計に要求した。若い店主は、『キツネが牧師さんちの門をとびこえる』は、コールデコット氏が、どこぞの田舎で聞いた狩りの唄で制作したものだと言っていた。

父がこのようにコールデコットの作品を買っていたので、ビアトリクスはそれらをわが家で独占的に見ていました。ビアトリクスはコールデコットが亡くなってから絵本作家になりましたから、絵本作りのコツをコールデコットから直接に教わることはありませんでしたが、その肉筆画を見ながら絵本作りを学んでいたのです。ほとんどコールデコットとそっくりと言える絵がみられません。2、3お見せしましょう。

コールデコットの『ハートのクイーン』(*The Queen of Hearts*, 1881 『コールデコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』福音館書店 2001所収)で、ハートのジャックがパイを盗むところに、目撃するネコが現れます。このネコと、ポターの『ひげのサムエルのおはなし』(*The Tale of Samuel Whiskers*, 1908)で、暖炉から入って道に迷いネズミの住処に出してしまうネコの描き方は、ひじょうによく似ているでしょう。また『こねこのトムのおはなし』(*The Tale of Tom Kitten*, 1907)の子ネコのトムも同様です。

カエルの描き方など、完全にコールデコット風です。『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』(*The Tale of Mr. Jeremy Fisher*, 1906)のフィッシャーどんは、ポターの描くカエルの擬人化の最たるものです。ポターは、絵本作家になる前、自分の描いた絵をロンドンのカード会社へ弟に持って行かせています。そして、カード会社がそれを買って、「(絵が) もっとあったら、持って来い」と言われて、自分の絵が「評価されている」と思ったそうです。その後ですが、その会社はまた、「今はカエルの絵は流行らない」と言いながら、ポター

のカエルの絵を買って、勝手に挿絵として使っていました。実は、そのカエルの絵が巡り巡って、比較的最近、私たちの目の前に出てきたのです。その間の事情は、ジュディ・テイラーによるポターの伝記（『ビアトリクス・ポター：描き、語り、田園をいつくしんだ人』吉田新一訳 福音館書店 2001）の〈訳者あとがき〉に詳しく書きましたので、興味のある方はご覧ください。その絵物語は『ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし』の前身にあたるものでした。

コールドコットの『かえるくん 恋をさがしに』（*A Frog He would a-Wooing Go*, 1883 『コールドコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』所収）の表紙や本文の絵で見るカエルとネズミ、ポターはそれらを通してカエルとネズミの擬人化の仕方を学んでいました。例えば、『ひげのサムエルのおはなし』の中のネズミと比べると、その相似がよくわかります。

『ひげのサムエルのおはなし』が出たので、別のコールドコットとの類似をお話ししましょう。『ひげのサムエルのおはなし』はやんちゃな子ネコのトムが、勝手に家の暖炉から天井裏へ入って道に迷い、ひげのサムエル夫婦のねぐらに落ちて、すんでのところネコまき団子にされて食われそうになりますが、イヌの大工ジョンによって救出されます。トムのお母さんでこの家のあるジタバ・トウィットさんは、ネズミを徹底的に追い払ったので、ネズミたちはよそへ引っ越さざるをえなくなります。そのくだり、文では「それからあと、タバタおくさんのいえには、ながいあいだ ねずみが出ませんでした」と書かれていますが、挿絵ではタバタおくさんが昼寝をしている図が描かれていて、タバタさんの手から足もとの床へ、編みさしの編み物が落ちているところが描かれています。

この絵を見て私が連想するのは、コールドコットの『キツネが牧師さんちの門をとびこえる』（*The Fox Jumps over the Parson's Gate*, 1883

『コールドコットの絵本：現代絵本の扉をひらく』所収）の中の絵です。突如キツネが牧師さんちの庭へ飛び込んでくるくだりで、庭仕事をしていたお婆さんがびっくり仰天して、持っていた

鉢を取り落とす図が描かれています。ポターの描いたネコは、もうネズミ捕りをしなくてもよくなって、暇で居眠りして編み物を取り落としたのですが、コールドコットの描いたお婆さんは〈驚いて〉鉢を落としたので、両者のムードは逆対照ですが、とにかく〈物を手から取り落とす〉という着想は共通です。ポターはコールドコットからヒントを得たにちがいないと私は推測しています。

ポターとコールドコットの関係を、このような形で見るのが可能ですが、断わっておきたいのは、ポターはけっしてコールドコットをそのまま真似ていたわけではありません。コールドコットの絵本作りをきちんと学び、自ら実行し、心の師匠の手法をわが物としながら、しかし、けっして師匠に埋没することなく、師匠を上回る形で絵本作りの技法を発展・展開させていったところが、ポターの天才ぶり、すごいところと、私は思うのです。

絵が物語るもの

ポターの絵本では、イラストレーションの問題と同時に、ことばの問題も大切ですが、ここでは、コールドコットとのつながりで、絵本におけるイラストレーションに焦点をあててきましたので、時間の関係もあって、以下には〈絵が物語る〉という点を中心に考えてみたいと思っています。もうよくご存じの方もいらっしゃると思いますが、復習の意味で、ポターの絵本のもっともポピュラーなところを見てまいりましょう。

これは『ベンジャミンバニーのおはなし』（*The Tale of Benjamin Bunny*, 1904）の最後のくだりです（日本語版：石井桃子訳 福音館書店 1971 48～49ページ）。ピーターラビットは、九死に一生を得て帰宅したその翌日、ハンケチで身をくんで震えていると、いとこのベンジャミンがやってきて、マグレガーさん夫婦は出かけて留守だから畑へ行って上着や靴を取り返してこようと、ピーターをマグレガーさんの畑へ誘います。ピーターは昨日の今日でびくびく、終始おびえています。その心理状態をポターは実に上手に描いています。2匹は、最後にネコと出会い、籠の中

へ隠れますが、出られなくなります。で、ベンジャミンのお父さんベンジャミン・バニー氏が救出にやってきます。そのこのところ・・・

バニー氏は、ねこを おんしつにおしこめてしまうと、戸にかぎをかけました。

それから、かごのところにもどって、むすこのベンジャミンのみみをつかんでかごからひきだし、みじかいむちでぶちました。

そのあとで、おいのピーターを だしました。

イラストレーションを見ると、ブルーの上着でわかるように、バニー氏がむちでぶっているのはピーターです。絵はことばの語りをそっくり描いたものではなく、ことばの次を語っているのです。あるお母さんが、うちの子はことばと絵が合っていないと言って、「そのあとで、おいのピーターをだしました」の後に、「そしてぶちました」と書き足した、と話してくれました。その通りなのですが、それを<文字>ではなく<絵>で語るところが、ポターのイラストレーションたる所以なのです。次のページへいきましょう・・・

それから、ベンジャミン・バニー氏は、たまねぎのはいっている はんけちをもち、ゆうゆうと はたけからひきあげました。

ピーターが服を取りもどしハンケチがあくと、ベンジャミンはそれにタマネギを入れ土産に持って帰れと言います。ピーターはびくびくしているので何度もタマネギの包みを落とします。そのタマネギの包みを、今はバニー氏が持って畑を引き上げていくのです。絵をよく見ると、バニー氏はもう一方の手にレタスも一株持っているではありませんか。

たったいままで、バニー氏は息子と甥に<人間の>お父さんのように振舞っていました。ところが一瞬のうちに、ウサギに変わって、人間の畑のものをかっぱらっていくのです。もし<人間のお父さん>を続けていたら、息子たちに無断でよその畑に入って、野菜を盗んできたことをとがめて叱るはずです。しかし、バニー氏はすでに<ウサ

ギに>変身してしまっています。このように、ポターの動物の擬人化では、動物と人間を見事にスイッチして行き来するのです。そこがポターの実にユニークで巧みな擬人化の仕方です。ポターの人間観察と動物観察はじつに鋭く、丹念で、見事です。その両者の観察が、互いにオーバーラップしながら、同時に動物から人間へ、人間から動物へ、一瞬にスイッチするのです。その妙技の鮮やかさは全く天才的です。注意深くストーリーとことばと絵を追っていくと、ポターの神技に近い擬人化ぶりが、あちこちに見えてきます。

次に『ピーターラビットのおはなし』(*The Tale of Peter Rabbit*, 1902) と『ベンジャミンバニーのおはなし』のつづきである『フロプシーのこどもたち』(*The Tale of the Flopsy Bunnies*, 1909)の一場面をみることにしましょう。ピーターの姉妹フロプシーは、いとこのベンジャミンの奥さんになっています。ある日のことです・・・
(日本語版：石井桃子訳 福音館書店 1971 8～9ページ)

ベンジャミンのいえには、たべものが いつも じゅうぶん あるというわけにいきませんでした――

というのも、ベンジャミンの家は子沢山で、家族を養うのがたいへんなのです。

そこで ベンジャミンは、ちょいちょい フロプシーのきょうだいの ピーターのところへ きゃべつをかりにいきました。ピーターは、きゃべつばたけをもっていたのです。

次のページを開けると、

けれども、ときには ピーターのところにも、わけてやる きゃべつのないときがありました。

ここでは、畑の柵越しにピーターが、キャベツをわけて欲しいというベンジャミンに、わけてやるきゃべつはないと断っているところです。しか

し絵では、柵に近い手前の畑には、キャベツの茎だけが描かれていて確かにきゃべつはありませんが、ピーターのうしろにいる奥さんはなにやら不自然にスカートを両方に引っ張っています。また、奥にはやはり不自然に大きな丸い籠が何かを隠すように立ててあります。いいえ何かをではなくて、そこにはきゃべつがちゃんとあるのがわかります。きゃべつが全くないわけではないのです。絵を見るとベンジャミンはフロプシーと子どもたちも連れて家族全員でもらいに来ています。ピーターの辛いところです。私は絵と文とによって語られていることを、このように解釈してみました。絵がそれらをよく語っている点にご注意いただきたいのです。

ちょっと余談になりますが、ここではピーターは奥さんもいるし、自分の畑を板塀と網でしっかりガードもしています。外からの闖入を許しません。思えば昔、木戸の下をくぐったり、なしの木を伝わったりして、マグレガーさんの畑に忍び込んだ、あのピーターが、いまやすっかり立場が代わって、彼自身がマグレガーさんの立場に立っていますね。ポターも時の経過を考えて、シリーズのつづきを書いているようです。

今度は、『「ジンジャーとピクルズや」のおはなし』(The Tale of Ginger and Pickles, 1909)です。ジンジャーというネコと、ピクルズというイヌが、村で雑貨屋を営んでいます。ところが同じ村内にもう一軒雑貨屋が誕生しました。ライバル店に対抗するため「ジンジャーとピクルズや」は、月末に一括後払いオーケーという「かけうり」を導入します。村の衆はこれを大いに重宝するのですが、肝心の〈後払い〉をしなかったので、とうとう店はつぶれてしまいます。ジンジャーとピクルズは店を閉じて、出ていきます。そのくんだり、日本語版(石井桃子訳 福音館書店 1973)で44~47ページですが・・・

ふたりは よろい戸をおろして、そのいえから ひっこしていきました。けれども、むらからは 出ていきませんでした。どこか、もっと おくへいってしまってくれば いいのにと、おもったひとたちも いたのですが。

ポターはときどき、こういう文章の書き方をします。含みのある、というか、奥歯にものが挟まったような言い方をします。動物村ではこの雑貨屋がなくなってから、迷惑しているものたちがいるらしいのです。もっと遠くへ行ってくればいいのと思っている、ということは、遠くへ行かず相変わらず村の中において迷惑している、ということです。

いま、ジンジャーは、うさぎの^{もり}森にすんでいます。そこで どんなしごとをやっているのか、わたしはしりません。でも、でっぶりふとって、たいへんげんきそうです。

ポターの文章にはときおり「わたしは〜」と、語り手のことばが出てきます。これは〈ポターの文〉が、聞き手を前にした〈語り〉であることの証拠です。これで読者は〈おはなしを聞いている〉という臨場感を味わいながら愉しめるのです。

「わたしはしりません。でも、でっぶりふとって、たいへんげんきそうです」ということばを聞きながら、絵を見ると、ジンジャーはウサギ穴の出入口にワナを仕掛けてはおりませんか。これではウサギもおちおちしてはおれません、〈もっととおくへいってしまってくれば いいのに〉と思うのも当然です。含みのある文に対して、絵はズバリとその理由を描いているのです。これまた〈文〉と〈絵〉の連動の一つの姿です。

では『グロースターの仕たて屋』(The Tailor of Gloucester, 1903)へ移りましょう。この作品は『キツネどんのおはなし』(The Tale of Mr. Tod, 1912)に似て、文字数が多く話の内容もやや複雑で、ポターの作品の中では高学年向きです。主人公の貧しい一人暮らしの仕たて屋は、寂しいのでしょうか、工作中よく独りごとをいう癖があります。今、グロースター市の市長さんから礼服の注文を受けて仕事の準備を始めましたが、こんな独り言をいっています—(日本語版:石井桃子訳 福音館書店 1974 6~7ページ)

仕たて屋は、ししゅうのついた じょうとう

なきれを、もようをだいに むだなく裁った。あたりに ちらばる裁ちくずは たいへん小さくて、「これでは、なにをつくるにも たりぬ。つくるとすれば、ねずみのチョッキか」と、仕たて屋はいうのだった。

そのイラストレーションを見ると、ネズミはチョッキを着て鏡に姿を写して、仲間たちから似合う似合うと言われているようです。文では「つくるとすれば・・・」と書かれているだけですが、仕たて屋はちゃんと作ってプレゼントしたと、絵が語っています。ネズミは感謝、感謝ですね。次の見開きページでも、同じように文と絵で語られています。

仕たて屋は、ただただ はたらきつづけ、しごとをしながら ひとりごとした。きぬのながさははかり、ぬのを くるくるまわして、かたちを裁った。

しごとだいの 上じゅうに、べにいろの 裁ちくずが ちらばった。

「大きな あまりぎれは ひとつもなし。ななめにも裁った。あまりぎれはなし。のこるは、ねずみのケープに ぼうしのリボン。どれもこれも、ねずみ用」と、仕たて屋はいった。

これに対してイラストレーションでは、ネズミがケープを着て、リボンのついた帽子をかぶっていますから、今度も仕たて屋は言った通りに、ネズミにプレゼントしていたのです。このように絵と文が分担して物語が進められています。ネズミたちは貧しい仕たて屋に愛着し、ご恩返しの機会を待っていることでしょう。仕たて屋の住まいは、仕事部屋とは別で、主人の留守の間は、飼っているシンプキンが住まいをきりもりをしています。そのようすを書いたくだけで・・・

シンプキンは、ねずみが だいすきだった。べつに上着にする きぬのきれを、ねずみにやるような しんせつをするわけでは なかったけれど。(14～15ページ)

またちょっと含みのある言い方ですね。仕たて屋と比べながら、シンプキンのことが書かれているのですが、絵を見ると、シンプキンはネズミ捕りでとらえたネズミを、ティーカップへ移しているところです。シンプキンが好きというのはくネズミを捕って食うこと>と、絵はズバリ語っています。ここも文と絵が掛け合いで語っています。

話をもどして、仕たて屋は明日から市長さんの服の縫製にかかる下準備をすませて、住まいへもどります。が、疲れていたので、食料や仕事に不足のくあな糸>など、買い物をシンプキンに頼みます。そして、暖炉の前で休んでいると、食器戸棚の方から音が聞こえてきます。行ってみると、音はティーカップからです。あけるとネズミが出てきたので、仕たて屋はネズミをみんな逃がしてやりました。

シンプキンは帰ると大そう怒って、くあな糸>をどびんに隠してしまいます。そして、仕たて屋はその夜から熱をだして寝こんでしまいます。ネズミたちは、さあこのときと、ひそかに仕事部屋へ行って、仕たて屋に代わって市長さんの服作りを始めます。この物語はクリスマス・ストーリーになっていて、今はクリスマスを祝う教会の鐘の音が街に響き渡っています。シンプキンがネズミたちのようすを見にでかけると・・・

ねずみたちが いっせいに立ちあがって、「あな糸が たりぬ！あな糸が たりぬ！」といい、それから ねずみたちは、よろい戸をしめて、シンプキンに、なかが見えないようにしてしまった。

けれど、まだ なかからは、ゆびぬきの かちかちいうおとと、「あな糸が たりぬ！」といううたごえが きこえてきた。

(45～46ページ)

この「あな糸が たりぬ」と訳されている原文の英語は“No more twist”ですが、‘twist’にはくより糸>という意味の他に、くねじれ>くひねくれ>という意味もあるので、いわば掛けことばで「ひねくれをやめよ」ともとれます。これでシンプキンは仕たて屋に対して、親切なネズミと比

べて、自分のあさましさを反省し始めます。街ではクリスマスの鐘が鳴り響いていますし・・・

シンプキンは、店をはなれて 家にもどった。シンプキンは、みちみち かんがえていた。家につくと、仕たて屋は ねつがさがって、やすらかに ねむっていた。

シンプキンは隠していた〈あな糸〉をどびんから出します。

朝になると、仕たて屋は 目をさまして、まずかけぶとんの上の のっている、べにいろのあな糸を見た。

そして、ベッドのわきには、くいあらためたシンプキンが立っていた。(46ページ)

絵を見ると、シンプキンが仕たて屋のベッドのそばでモーニングティーを捧げ持っています。西洋では、しもべは目覚めのティーを主人のベッドへ持っていきます。これで「くいあらためた シンプキン」という文の〈絵解き〉がなされています。「悔い改めた」「repentant」ということばは、小さい子どもには理解が難しいでしょう。しかし、ここではその語が最適のことばです。作家はもっとも適切なことばを選ばねばなりません。ポターはこの語を敢えて使いながら、〈改心〉の意味を実に上手に〈絵で〉説明しています。お見事というべきでしょう。子どもは大人の使うやや難しいことばに興味をもつものです。ですから、ここに見るように「くいあらためる」ということばに出会うと、その使い方を覚えます。ことばの問題として、これはとても大切なことだと思えます。ポターは少し難しくても最適のことばを避けずに使い、それに上手に〈絵解き〉を加えて、問題を見事に解決したと言ってよいでしょう。

このようにポターの絵本を見てくると、コールドコットンの絵本よりも、微妙な形でことばと絵の連動がおこなわれていることが、実感できるのではないのでしょうか。

ポターが描く「親と子」

ではここからは、ポターの絵本をもう少し踏み込んだ形で味わってみたいと思います。

まず『ピーターラビットのおはなし』(*The Tale of Peter Rabbit*, 1902)です。お話の最後、ピーターがマグレガーさんの畑から命からがら帰ってきたからです。(日本語版：石井桃子訳 福音館書店 1971 50ページ)

そして、くたくたに くたびれていたの、うさぎあなのなかの やわらかいすなのうえに、どさりとよこになると、目をつぶりました。おかあさんは、いそがしくごはんのよういをしてるところでした。ピーターは、ふくをどこへおいてきたのだろう と、おかあさんはおもいました。ピーターったら、この2しゅうかんのうちに、うわぎを2まいと、くつを2そくもなくしてきたのです！

お母さんって、普通こんなふうに言いますか。まず「けがはない、大丈夫？どこへ行っていたの」と、(息子の)身の安全に注意するはずですね。でも、ピーターのお母さんの口からは、こういうことばが飛び出しているのです。その理由は、『ペンジャミンバニーのおはなし』の最初に出ています。

その森には、うさぎあなが とてもたくさんありました。なかでも、いちぼんすなっぼい、いちぼんきちんとかたづいたうさぎあなに、ペンジャミンのおばさんと、いとこのフロプシーやモプシーや、カトンテールやピーターがすんでいました。

ピーターたちのおとうさんは、もう いませんでした。(日本語版8～9ページ)

そうです、ピーターの家庭は母子家庭でした。

そこで、おかあさんは、うさぎの毛の手ぶくろや、そで口かざりをあんで、くらしをたてていました。(わたしも、まえに ばざーで、ひとくみかったことがあります。)

ここでも、また<わたし>が出てきています。

それから、このおくさんは、せんじぐすりや『うさぎたばこ』も うっていました。(『うさぎたばこ』というのは、わたしたちが、らべんだーといっているくさです。)

これは、当初は『ピーターラビットのおはなし』の最後にあった部分です。しかし、出版社が余計で不要と言って、削ってしまったのです。でも、ポターは捨てずに、それを『ベンジャミンバニーのおはなし』の冒頭にこのように載せました。ポターはよほどこだわっていたのです。

ピーターたちのお母さんはこういうきびしい経済生活をしていたので、服と靴をピーターがなくなしてきたことが、まず頭にきたのでした。『ベンジャミンバニーのおはなし』の最初の口絵でも、Tea & Tobaccoという看板で商売をしていることが、語られています。

では、お母さんはピーターの身体のこととは、まったく案じていなかったかという、そんなことはありません。作品の最後で・・・

きのどくに、ピーターは そのぼん、おなかのぐあいがよくありませんでした。

おかあさんは ピーターをねかして、かみつれをせんじて、ピーターに 1かいぶんのおくすりをのませました。

「ねるまえに ^{おお}大きじに 1ぱいですよ」
(52ページ)

とても優しいお母さんが、出ているではありませんか。「あんたみたいな子には、薬なんかあげません、とっとと寝ちまいなさい」なんて邪険なことは言っていない。あるいは「悪い子だから、この苦いお薬を、3杯飲みなさい」などとも言っていない。「ねるまえに 大きじに 1ぱいですよ」。お母さんの子どもをいたわる優しい感じがよく出ています。『ピーターラビットのおはなし』の内表紙向かいの<口絵>を見ると、お母さんの優しさがよく描かれていますね。

さらに気づくべきは、お母さんがピーターに、行ってはいけないといったところへ行ったことについては、特にとがめ立てをしていないことです。一般にお母さんは、子どもがピーターのように言いつけをまもらなかったら、小言をぶつぶつ言って「お母さんの注意を聞かないからそういうことになるの、懲りたでしょう。これからはお母さんの言うことをよくきくんですよ」とお説教するでしょう。ピーターのお母さんはそれを一切していません。

そこで、『ベンジャミンバニーのおはなし』を見ましょう。ピーターはベンジャミンに誘われたとはいえ、翌日またマグレガーさんの畑へ行っています。(ネコにつかまって、バニー氏に救出されましたが) 今度は、たまねぎのお土産を持って、無事に帰ってきました。

ピーターが いえにかえると、おかあさんは ピーターをしからないで、ゆるしてくれました。ピーターが うわぎをとりもどしてきたので、たいへんうれしかったのです。カトンテールとピーターは、ふたりして ほんけちをたたみました。そして、おかあさんは たまねぎをたばね、ほかのやくそうや うさぎたばこ いっしょに、おかつての てんじょうにつりました。(54～55ページ)

お母さんはやっぱりウサギのお母さんです。「このたまねぎ、盗んできたんでしょう？」ととがめていません。よろこんでお勝手の天井に吊るしています。それよりも、肝心なことは「しからないで、ゆるして」いることです。先ほどの説明のつづきになりますが、うわぎと靴をとりもどしてきたから、許してくれたのですが、ここでも「行ってはいけないところへこりずに、今日もまた行ったこと」を、お母さんはとがめていません。不問にふしているのです。

さて、いかがでしょうか、多くのお母さんは多分この話を一種の教訓話ととって、子どもに「お母さんの言うことをきかないと、ピーターのような目にあうのよ。夕食抜きで、苦いお薬を飲まなければいけないのよ」などとコメントするのでは

ないでしょうか。ポターは、しかし、この作品をそのようには、書いていないのです。

イギリスの児童文学研究家で、ポターについて数々傾聴に値することばを発言しているピーター・ホリンデイルさんは、ポターは「手の内を見せない作家だ」と言っています。今言いましたように、多くの人はいくつかを一種の悪童物語と読んでいるかもしれませんが、実は作者の意図はそうではなく、ホリンデイルさんによれば、これは「毒」を含んだ話として書かれている、ということです。

ピーターのお母さんは、子どもに危険を知らせています。しかし、それを判断するのは、子どもの責任で、子どもは経験を通して学習していく、という考えを持っているにちがいません。また、親の言いつけに、ただ従うだけの子どもよりも、冒険を望んで、それをおこなう勇氣と覚悟を持つ子をよしと考えていたにちがいません。従って、ピーターが自分の判断でおこなった行動に、いちいち口を出し、「小言」は言わないのです。子どもが自立して大人になっていく、それがポター自身の子ども観でしょう。

子どもは、口やかましく小言を言ったり、叱つたりしないピーターのお母さんを、ああ、いいお母さん、と直感し、ピーターも勇敢ですごい、と思って、この作品をたのしみ、共感するはずです。実はそこがポターの本当のねらいでしょう。ポター自身が、潜在的につねに束縛から脱出したい願望がありました。だからピーターラビットのようなキャラクターを描いたのでした。ある意味でピーターは作者の夢を実現する、新時代の旗手であったかもしれません。既成道徳にとっては危険な存在かもしれないのです。「毒」というのはそういう意味でしょう。

ポターは日記で、ある貧しそうな家族が、田舎道を歩いているのを見て、ハンケチを着せられている子を、文明世界から離れたような服を着て、と書いています。それを先ほどのホリンデイルさんは、ポターだからえげつない言い方はしていないが、そこには、そういう生き方に羨望をうかがわせる口吻がある、と言っています。これからお話ししますが、ポターは、「着る」ということに

強い関心を抱いていました。彼女自身はヴィクトリア時代の良家のお嬢さまとして、つねに窮屈な服装を強いられていました。それは彼女の生活の、束縛の象徴でした。従って、たまたま見かけたハンカチ1枚の服装に、多分「自由」を見たのでしょう。それは、彼女が後半生、カントリー・ウーマンとして自身が納得できる生活を実現したことに通じています。ホリンデイルはポターに「伝統の破壊者」ということばすら使っています。このような見方を参考に、改めて『ピーターラビットのおはなし』を読み直してみてもいいでしょうか。

ポターの衣装哲学

『こねこのトムのおはなし』(*The Tale of Tom Kitten*, 1907)を見ましょう。これは、やんちゃな3匹のネコが、親ネコの理不尽な要求に会い、逆に親ネコに赤恥をかかせた話です。(日本語版: 石井桃子訳 福音館書店 1971)

あるところに、3びきのこねこが、いました。
なまえを、ミトンに、トムに、モペットといいました。

3びきは、それぞれにちがった かわいい毛がわをきていました。そして、げんかんのだんだんのところで ころげまわったり、どろだらけになって あそんだりしました。

最初にこう描かれています。子どもというのはこうなのですよ、これが子どもの現実なのですよ、とはっきり言っているのです。ところがお母さんネコのタビタ・トウィチットさんは、家でお茶会を開いて、お客を呼ぶことにします。そこで、子どもを無理やり家の中に引き入れて、洗ってやり、毛をくしけずり、一張羅の服を着せて、ぶりっ子にしたてます。そして・・・

こねこたちの したくがすむと、タビタおくさんは、おちゃのかいの ごちそうに、あついでトーストをつくるあいだ、こどもたちが じゃまをしないようにと、そとへおいだしました。

「さあ、おまえたち、ふくをよごさないようにね！ うしろあしで あるかなくちゃいけませんよ。それから、きたないごみのあるところへは はいらないようにして、めんどりのサリーさんや、ぶたごやや、あひるのパドルダックさんたちのそばには、いくんじやないの！」(18ページ)

世の親はみな、こんなふうにも子どもに要求過多です。親たちは、これがみんな守れる子をくいい子>と思っています。でも、ポターにこのように書かれると、痛烈な風刺があることがよくわかるでしょう。このお話は、風刺的な喜劇なのです。

けれども おくさんが、こどもたちをだしてやったのは、しっばいでした。

子ネコたちの服はじきにボタンははじけ飛び、服の裾はからまり、3匹とも四つんばいで歩き、そのうちにすっかり服は脱げてしまいます。そこへアヒルのパドルダックさんたちがやって来ます。子ネコたちはアヒルに、服を拾って着せてください、と頼みますが、アヒルは服を拾うと、自分たちで着て立ち去ってしまいます。ポターはいろんなキャラクターを描いていますが、パドルダックさんみたいに油断も隙もない人を時折描きます。

タビタ・トウィチットさんは来客の時間がきたので、子ネコたちを呼び込もうとして、子どもたちが自前の毛皮で遊んでいるのを発見、激怒して「石がきからひきずりおろし、ぱん と はたいて、うちにつれてかえりました。」そして・・・

わるいことをしたこどもは、ベッドでねてなさい といって、おくさんは、トムたちを2かいへおいあげました。そして、おきやくさまには、こどもは はしかでねております、と いいました。

おくさんが そんなことをいったのは、ざんねんですね。だって、それはほんとではありませんもの。

ほんとどころか！こどもたちは、ベッドでね

てなんか いませんでしたとも。

どうしたものか、おきやくさまたちのあたまのうえからは、ものすごいおとがきこえてきました。そして、おもおもしろくしずかなはずのおちやのかいのくうきは、たいへん かきみだされました。(48～49ページ)

私はここであらぬ想像をしてみます。お客たちは頭の上のドシンボタンを聞こえないふりをして、やがて後で村の衆たちに、トウィチットさんたら嘘つきなんだから、あそこの子どもはしつけが悪いのよ、と噂をふりまいたのではないだろうかと。それはとにかく、トウィチットさんはとんだ赤恥をかく羽目になりました。ぶりっ子にさせるはずが、逆に赤っ恥をかかせられてしまったのです。そして、お客が帰った後、子ども部屋に上がったときのようすが、50～51ページです。

トムが代表して、赤ちゃん帽を被り、「ほら、こういう帽子の方が似合うんじゃない！」とでも言っているようです。お母さんは絶句して、ことばも出ないらしく、50ページの文は、作者が・・・

いつかきつと わたしは、またべつのもっとながいほんをかいて、こねこのトムのおはなしを あなたがたに することになるだろうと、おもいますよ。

と書いています。(『ひげのサムエルのおはなし』でそれは実現するのですが)

ここでトウィチットさんに絶句させているのは見事です。もしトウィチットさんがここで小言を言い出したら、ピーターのお母さんが小言を言わなかったことと、矛盾してしまいます。このお話はまだ終らずに、つづきがあります。

さて、あのパドルダックさんたちは、どうしたか といいますと——あのあひるたちは、いけにいて およぎました。すると、きていたものは、みんなすぐ ぬげてしまいました。ボタンが、ひとつもなかったからですね。

そして、ドレークさんと、おくさんのジマイ

マヤ レベッカは、いまでもまだあのふくをさがしています。

これは「海の水はなぜからい」「ゾウの鼻はなぜ長い」のように、昔話の＜起源譚＞になっています。ここでは、アヒルが＜衣服＞にこだわったことの罰として、このことが書かれているので、飛躍するかもしれませんが、キリスト教という原罪に似ていると、私は思います。アダムとイヴはエデンの園で天衣無縫の生活をしていましたが、禁断の木の実を食べた罰で、イチジクの葉で身を隠し、エデンを追われ、以来子々孫々、人間はその罪（原罪）を背負って、＜身を包む・着る＞ことにこだわり、腐心しなければならなくなりました。パドルダックさんの子孫が、永遠にアヒルもぐりをする宿命を背負うことになったのと同じようにです。

こうして読んでくると、『こねこのトムのおはなし』のテーマが＜着る＞であると思えるでしょう。子ネコたちのお母さんは、ネコたちが「かわいい毛がわをきて」その天衣無縫のままに「げんかんのだんだんのところで ころげまわったり、どろだらけになって あそんだり」しているのに、にわかに「ひらひらえりをつけたよそゆきのエプロンふく」を着せたり、「うつくしいきゅうくつなふく」を着せたりして、結局とんだ失敗を演じることになり、パドルダックさんまで＜服＞にこだわって、とぼちちりをくうのですから。先ほども言いましたように、ヴィクトリア時代の因習に凝り固まったアッパーミドルの生活で、＜窮屈な服を着ること＞が、息苦しさの象徴とされて、人はなぜ＜着る＞ことにかくもこだわるのかというラディカルな問いを奥に秘めたテーマが、この作品を書かせたと言えそうです。

同じテーマで、今度は『2ひきのわるいねずみのおはなし』(The Tale of Two Bad Mice, 1904) を読んでみたいと思います。人形の家にまつわるネズミの物語です。(日本語版：石井桃子訳 福音館書店 1971)

むかし あるところに たいへんきれいな にんぎょうのいえが ありました。そのいえは

あかかれんがでできていて、まどは しろくぬってありました。そして、まどには ほんものの モスリンのカーテンが かかっている、げんかんも えんとつも ちゃんといっていました。

イギリスの上流家庭の女の子が好むミニチュアハウスは、ハウスの正面が蝶番で開き、各部屋で、ミニチュアの家具・道具・料理などを使い、人形遊びができる、精巧でりっぱな作りのものです。

あるあさ、ルシндаとジェインは、にんぎょうの うばぐるまにのって、そとにでかけました。そのあと、こどもべやには、だれもいなくなり、あたりは たいへんしずかでした。そのうち、こそこそ かりかりいうおとが、だんろのそばの すそいたの あなのへんから きこえてきました。

トム・サムが、ちょろっと あなから かおをだし、またすぐ、ひっこめました。

トム・サムは ねずみでした。
(10～11ページ)

トム・サムにはハンカ・マンカという奥さんがいて、2匹は、持ち主も人形の住人もいない、人形の家へ探検にくり出します。テーブルにはご馳走が並び、ナイフとフォークもあるので、食べようとしますが、料理が土でできたものとわかったら、腹をたてて寝室のものを壊しにかかります。

けれども、ハンカ・マンカは、ものをたいせつにするたちのねずみでした。そこで、ルシндаのまくらから はねをはんぶんほど ひっぱりだしたあとで、じぶんも はねぶとんがいたりようだったのだと、きがつきました。
(33ページ)

トム・サムのようにむかつ腹を立て、感情に走っている男性の傍らで、女性はハンカ・マンカのように現実的判断をすることが出来るのでしょうか。こういうところにポターの人間観察の鋭さ、的確さを私は感じるのですが。それはとも

かく、ハンカ・マンカのおかげでネズミ夫婦は、人形の家のネズミ・サイズの家具や衣装をせつせと巣に運びこみます。日本語版の44ページの絵で明らかなように、ネズミ一家はにわかにリッチな生活になります。特にハンカ・マンカはすっかりドレッシーになって、44ページ以後の絵を見ると、まるで着せ替え人形のように服を着替えて登場しています。赤ちゃんにはベビー服、少し大きい子にはリボンが首に結んであります。

しかし、こうして留守中に泥棒に入られた被害者である人形の持ち主の少女は・・・

「あたし、じゅんさのふくをきた にんぎょうをかうことにするわ！」といました。
(49ページ)

この文に対して絵(48ページ)では、巡査の人形が人形の家の前に置かれています。すなわち、先ほどの『グロスターの仕立て屋』のときと同じで、文では少女が「・・・買うことにするわ」としか言っていませんが、絵ではそれが実行されたことが語られています。いえ、それだけではありません。留守中またもやってきたハンカ・マンカは、巡査の前で子どもに、これは人形だからこわくはないのよ、と言っているようですし、また、トム・サムも家の窓越しに中のお人形に今日も留守かね、と言っているようです。ということは、巡査の服を着た人形はなんの役にもたちませんでした、とそこまで絵は語っているのです。ページをめくって、次の見開きへ移りましょう。

けれども、こどもベヤのせわをしているおてつだいは、「わたしはねずみとりをかけますよ！」といました。

今度はナース、大人の判断です、ずばり<ネズミ捕り>が出てきました。しかし、ここでも文では「・・・かけますよ」としか言っていませんが、絵では、ネズミ捕りがちゃんとかけてあり、そこへネズミの家族がやってきて、トム・サムが「これはこわいから絶対にさわるではないよ」と子どもたちに教えています。それで<ネズミ捕り>も

役に立ちませんでした、と絵は語っています。またページをめくって、52ページを読みましょう。

さて、これが、2ひきのわるいねずみのおはなしです——でも、トム・サムとハンカ・マンカは、ほんとうはそれほどわるいことをしたとはいえないのですよ。なぜかという、トム・サムはあのあとで、じぶんたちがこわしたものをおかねでぜんぶかえたのです。トムは、だんろのまえのしきものしたで、へこんだ6ペンスぎんかを見つめました。そして、クリスマスのまえのぼん、ルシングのか、ジェインのかわかりませんが、とにかく、ふたつのくつしたのうちの、どれかひとつに、そのぎんかをいれておいたのです。

(52～53ページ)

向かいの53ページの絵を見ましょう。トム・サムとハンカ・マンカが人形の靴下にへこんだ6ペンス銀貨を入れているところです。ここで特に注目して欲しいのが、2匹のネズミのどちらがトム・サムか、多分銀貨を持っている方でしょうが、ここでは2匹とも服を着ていません。先ほども申しましたが、人形の家から衣装などを持ってきてから、ハンカ・マンカはドレッシーになりました。ところが、この53ページでは、いや、53ページだけでは、ハンカ・マンカも服を着ていません。ハンカ・マンカも、といったのは、トム・サムもということですが、トム・サムは実はハンカ・マンカがドレッシーになってからも、一度たりと着衣していません。先ほどの巡査の服を着た人形がおかれた場面でも、ハンカ・マンカは服を着ていましたが、トム・サムは着ていませんでした。

2匹がお金で弁償をした後、すなわち最後のページですが・・・

それに、ハンカ・マンカもまいあさとてもはやく——まだだれひとりおきださないうちに——ちりとりとほうきをもって、にんぎょうのいえにでかけて、おそうじをしました。

そのイラストレーションを見ると、ハンカ・マ

ンカは服を着て掃除に来ています。そこで、私はこう想像します。お金で弁償の時は、トム・サムに「今日は弁償に行くんだよ、謝りに行くんだから、今日はお前も、もらった服を着ていくんじゃない」とたしなめられて、ハンカ・マンカもその日だけは服を着ませんでした。が、もう弁償はすんだのですから、私は服を着ますよ、とまたドレッシーなハンカ・マンカにもどった、と想像します。

以上のことを、今度はトム・サムの方から考えてみましょう。トム・サムは初めから終いまで、服を着ていません。頑固にと言っていいほど着衣を拒んでいます。ということは、ポターが意図的にトム・サムには服を着せていない、と私は読むのです。『こねこのトムのおはなし』で<着る>ことへのこだわりを、ポターがはっきり表明していたからです。その意味でポターには、ある種の衣装哲学があった、と思わざるをえないのです。

実は、<着衣しない>キャラクターを、ポターは他にも描いています。それは『カルアシ・チミーのおはなし』(The Tale of Timmy Tiptoes, 1911)の中のシマリスのチピー・ハッキーです。

2組のリス夫婦の話で、ここ(日本語版:石井桃子訳 福音館書店 1983 8~9ページ)はハイロリスのカルアシ・チミーとカルアシ・カアチャンが、冬支度でクルミを集めているところです。チミーが木の高いところにあるうろにクルミを入れるので・・・

「あのクルミ、いったい どんなことしてとりだすんです? まるで ちょきんぼこみたい」と、カアチャンは いました。「でも おまえ、はるまでには ぼくは、いまより ずっとやせるから、だいじょうぶだよ」と、チミーは あなを のぞきこみながら いました。(13ページ)

このように意見が分かれるときもありますが、ふたりはたいそう仲が良く、他のリス仲間とは別行動でクルミ集めをしていました。仲間たちはそれをやっかんだのか、「おれのクルミ ほったやつ あだれだ?」という鳥の声が聞こえると、チミーは仲間たちのいじめにあい捕まって、ことも

あろうにカアチャンが「ちょきんぼこみたい」と言っていたうろに無理やり押し込まれてしまいます。

ところが、そのうろには先客がいました。シマリスのチピー・ハッキーで、奥さんと別居してそこにいたのです。チピーが言うのに、今日は木の上の方からクルミがあめあられとふってきて、あげくにあんたがふってきた、と。事情がわかると、チピーは、さああんたのクルミだから、どんどん食べて元気になってください、と言いますが・・・

「だけど、ぼく やせなかったら、このあなから 出られませんか。かないが しんぱいして、まってるんです」

「でも、もうすこうし。ほんの ひとつかふたつ」と シマリスはいつて、クルミを わりました。

チミーは、ぐんぐん ふとっていきました。(30ページ)

チピーの本音を察すると、チミーをふとらせて、ずっとここにいてもらいたいのかもかもしれません。一方、カルアシ・カアチャンは、亭主が行方不明になりましたが、気を取り直して、クルミ集めを独りで再開します。そしてある日、木の根の下の穴に、集めたクルミをどさっと投げ込むと・・・

ちいさいシマリスが、あわてて とび出してきました。

「もう ちかしつは、かんぜんに いっぱいになるところですよ。居間は いっぱい。ろうかにまで ごろごろ ころがってます。そして、うちのひと——チピー・ハッキーって なまえなんですけどね——あのひとは、わたしをすてて いえでをしまいましたよ。なぜこんなに クルミがふってくるのか、せつめいしてもらいたいですわ」(33~34ページ)

ということになります。男性の私には、この女性同士の会話が、ひじょうに興味深いのです。こういう場合に男だったら「もう やめてくれ!」のひとことで終わりです。ところが、シマリスは迷惑、

と言いながら、クルミを投げ込まれたこととはまったく無関係の、亭主の不在ということを口ばしして、しかもご亭主の名前まで紹介していますね。相手の女性カルアシ・カアチャンもよくしたもので、「でも ハッキーさんは どこへ 行ってしまったんでしょう。うちの カルアシ・チミーもいなくなっただですよ」と、がぜん会話が新展開へ走っていきます。このように女性同士の会話は弾んでいくではないですか。もう終るかと思っていると、また火が付いて長くなる。ポターは作家として、そこいらをよく観察してるなあと、こういうくだりを読むと、私は思うのです。ポターはこういう何気ない、ある意味で、平凡な日常生活の細部に、一瞬鮮やかな光をあてて、聞き手にリアリティを感じさせ、しかもそれが、物語の進行にぴったりマッチしていくんですから、なかなかのストーリーテラーです。

さて、カアチャンが亭主の居場所が不明と言うと、ハッキーおくさんは、

「チピーが どこへいったかは、だいたいけんとうが ついてます」

と答えて、ふたりはそろって、例のうろの木のところへやってきます。すると、うろの中から「ふといリスのこえとほそいリスのこえが、いっしょに」夫婦喧嘩のわらべ唄をうたっているのが聞こえてきます。

「うちのひとと わたしが なかたがい。
これを いったい どうしまつしよ？
いちばん いいとこで 手をうって、
さあ、おまえさんは とつとと 出てけ！」

これで、カアチャンは亭主をみつけることができました。

チミーは 木のなかを のぼってきて、あなから カアチャンに キスしました。

けれど、すっかり ふとってしまったので、そとに 出てくるのが できません。

チピーのほうは それほど ふとってはいま

せんでした。でも、チピーは そとに出たくありませんでした。チピーは、あなのしたのほうにいて、くすくす わらっていました。

(41ページ)

この後の42～51ページは、特に絵が雄弁に、ユーモラスに、語っているくだりです。

こんなちょうしで 2しゅうかん すぎました。ところが、ある日 おおあらしがおこって、木のでっぺんが おれてしまいました。そして、あめが どんどん あなのなかへ ふきこんできました。

そこで、チミーは 木から出て、かさをさして いえにかえりました。

この木は、中が空洞でしたから、強風に弱く、折れてしまいます。上の天井が飛んでしまったので、雨がじゃあじゃあ吹き込んでくる。チミーは やつとうろから出られました。

文では「かさをさして いえにかえりました」と書いてありますが、絵を見れば、なんと奥さんと一緒に相合い傘です。奥さんが傘を持って、チミーを迎えに来た、ということです。嵐で強風になるや、カルアシ・カアチャンは「父ちゃんの木が危ない」と、傘を持って森へ走ったのです。するとチミーがうろからちょうど出てきたところで、さっと傘を差し掛け・・・こういう場面になったと、私は読み解きます。

チピー・ハッキーが後ろで、去っていくチミーを見送っていますが、多分ついさっきまで一緒に夫婦喧嘩の唄を歌って、「母ちゃんがいないとさっぱりするなー」、「うん」などと意気投合しているはずだったのに、今はカアチャンと相合傘で去っていく。「なんだい、あいつは」とチピーはがっかりしているのではないかと私は想像しますが。

けれども、チピー・ハッキーは、つらいおもいをしながら もう 1しゅうかん、のじゅくして がんばりました。

チピーは、雨にぐしょ濡れになっても、うろか

ら出ません。そこへ奥さんが迎えに来ました。奥さんは草の穂先で、亭主に帰宅をうながしています。直に触れると、「けがらわしい」と言われそうだからでしょう。ハッキーおくさんも傘を持ってきていますが、長年の別居らしく、こちらの傘は、こんな状態になっています。でも、亭主を迎えに行く傘は、相合傘のつもり、すなわち愛の象徴傘です。

かくする内に、クマの出現です。この作品は、読者の多いアメリカを舞台に、アメリカの子どもたちのためにポターは書いたとされています。イギリスには、クマはいませんから。シマリスも、イギリスにはいない種類のリスだそうです。

チピーもクマには弱いらしく、ついにおうろを出ることになります。すると、下で奥さんが破れ傘を持って待っていたのです。嫌われても嫌われても、奥さんは最愛の亭主を迎えに来ています。涙ぐましいかぎりです。

そして、いえにつくと、チピーは はなかぜを ひいてしまっていることに、気がつきました。そこで、のじゅく しているときより もっと つらいおもいを することになりました。

絵を見るとマスタードの缶があって、チピーはからし湯をつかわされています。彼にはそれが拷問なのかもしれません。「だから、俺と一緒にいたくないんだよ」と言っているようです。亭主が、奥さんを避けている理由が、ここに語られていると思います。世の奥さま方、どうかご亭主はあまりかわいがりすぎずに、適当に泳がせておいた方が、いいようですね。

こういうふうにして、2組のリスの夫婦が、登場していますが、肝心の点は、奥さんから逃れたがっているチピー・ハッキーです、彼はずっと服を着ていないでしょう。

話の最後のくだりへ来ました。カルアシ夫妻は冬ごもりで、夏の家をたたんで、子どもたちをつれて引っ越しです。

さて、あのとりは、いまでも シマリスたちをみるたびに、「おれのクルミ ほったやつあ

だれだ？ おれのクルミ ほったやつあ だれだ？」と うたいます。でも、だれも へんじなんか してやりません。

話はこれで終りですが、絵を見ると、シマリスのチピー・ハッキーは、不承不承かハッキー奥さんのもとへもどって一緒に暮らしているようです。今はちょうど、破れ傘をさしている奥さんといっしょに、鳥を追い払っています。けれども、服を着ている奥さんに対して、亭主チピーはかたくなに服を着ていませんね。彼もまた、『2ひきのわるいねずみのおはなし』のトム・サムと同じく、＜着ない主義者＞のようです。

こういう見方をすると、ポターの＜着る＞ということに対するこだわりがますますはっきりしてくるようには思いませんか。確かに、無理にそこまで読みこまなくても、ポターのお話は十分楽しめます。でも、大人としてイギリスの児童文学を読むと、しばしば大人なりの読み方が出てきて、子どもとは別の読みも可能であることがわかります。イギリス児童文学を＜文学＞として読んで愉しむ成人が多いのは、作者が児童文学を＜文学＞として創造しているからにほかならないでしょう。

先ほどから紹介しているホリンデイルさんは、ポターの＜着る＞ことへのこだわりについて、参考としてシェイクスピアの『リア王』を挙げています。リア王が、娘たちに謀反されて嵐の中をさまよっているとき、狂人の裸のトムに扮したエドガーを見て、「この男のことをよく考えてみるがよい。蚕に絹を借りず、獣に皮を、羊に毛を、猫に麝香を借りていない。・・・貴様だけが正味そのものだ。人間、外から付けた物を剥してしまえば、皆、貴様と同じ哀れな裸の二足獣に過ぎぬ。・・・おい、このボタンをはずしてくれ！」（『シェイクスピア全集 第12』 福田恒存訳 新潮社 1962）と言って、自分も服を脱ごうとする場面があり、そこでシェイクスピアは＜着る＞ということが、一人人間にとって何なのか、ということを問いかけている、と論じています。人間が＜着る＞ことは、人間のバニティー (vanity 虚栄) につながっていく。もちろん着ることはバニティーだけでは

ありませんが、19世紀のサッカレー (William Makepeace Thackeray) に『虚栄の市』(Vanity Fair, 1847-48) という作品があります。ヴィクトリア時代という因習と体裁の虚栄社会にあって、ポターにとって<着る>ことは、その時代の一つの象徴となりえたのだと思います。

「脱寓話作者」ポター

お手元にお配りしたレジュメに、「作品 (原作) に記されている献辞 (Dedication)」があります。日本語版ではすべて省かれています。英語の原作では最初に<献辞>がありまして、作者の作品とのかかわりがそこに現れていて、作品理解に役立つことが多いので、それぞれ短い解説を書いて、ご参考に供してみました。

例えば『こねこのトムのおはなし』の献辞は、「すべての悪童たち——特にわが家の庭の塀に登る悪童たちへ」です。ポターの住まいの隣、タワーバンク・アームズの娘だったウイロー・テイラーさんの話で、「ポターは子どもがポター家の庭の塀に攀じ登ると激怒して、家まで追いかけてくる。それで面白いからわざと登ってやった」とのこと。手をやいた村の子どもたちに、他にもない『こねこのトムのおはなし』を贈っているところが興味深い点です。この作品からは、子どもは本来いたずら好き、という認識をポターが持っていたことがはっきり出ています。よその家の塀に登ってはいけない、と言いながら、心では子どもはそういうものよ、と許していたのです。むしろそういう村の悪童が可愛くてしょうがなかったのでしょう。だから、やんちゃな子たちを描いたこの作品を、彼らに贈ったのだと、私は思います。

さて、ここでは『まちねずみジョニーのおはなし』(The Tale of Johnny Town-Mouse, 1918) の献辞について、特にお話しておきたいのです。献辞は 'To Aesop in the Shadows' となっています。この作品は、題名で明らかのように、イソップの「田舎のねずみと町のねずみ」のお話を使った作です。ですから献辞がイソップに捧げられているのは当然なのですが、「in the Shadows」というのが付いているのが、気になるでしょう。

この話はよくご存じのように、町ねずみの家で

は、ご馳走はリッチだけれども、ネコや人間にびくびくしながら食べなければならない、そんなところよりも食べ物に質素でも田舎でのんびりと暮らす方がいい、と田舎ねずみが思う話です。イソップにはモラルがついていますが、これには「質素に暮らして 不安なく 生きていく方が／恐怖の中に 苦しんで 贅沢するより 優っているということだ」(『イソップ寓話集』山本光雄訳 岩波書店 1974 岩波文庫版) というモラルがついています。

ポターの『まちねずみジョニーのおはなし』も、話の内容はその通りなのですが、最後のところが違います。田舎ねずみのチミーを訪ねてきた町ねずみが、そこの生活に嫌気がさして町へ帰ってしまうと、ポターはこんなふうに結んでいます。(日本語版：石井桃子訳 福音館書店 1971 55ページ)

あるひとは あるばしよがすぎで、またべつなひとは べつなばしよがすぎです。わたしは どうかといいますと、チミーとおなじように いなかにすむほうがすぎです。

これはイソップのいわゆるモラルとは違います。「あるひとは あるばしよがすぎで、またべつなひとは べつなばしよがすぎです」というのは、いわばナチュラルリストのフィールドワークにもとづくことばで、「全ての生き物にはそれぞれの生活環境 (habitat) がある」という生態学的事実を述べたことばでして、モラルではありません。そして、「わたしは どうかといいますと、チミーと おなじように いなかにすむほうがすぎです」。これはポターの本音、自分の生き方を吐露したことばです。

これは要するに、イソップは寓話であるけれども、ポターの『まちねずみジョニーのおはなし』は寓話にとどまらず、寓話を抜け出した話、ということになります。英語で寓話を fable といいます。そして寓話作者を fabulist といいます。そこで、ポターのような作家を、post-fabulist (脱寓話作者) と言います。post-modern という言い方と同じです。

先ほど『ピーターラビットのおはなし』で話しましたように、ポターは単なる<教訓話>を書く人ではありません。容易に手の内を見せないけれども、実はありきたりの子ども向け話を書く児童文学作家ではないのです。通俗な既成概念をこわす<脱寓話作者>なのです。そこで『まちねずみジョニーのおはなし』の献辞を、‘To Aesop in the Shadows’としたのは、とても意味深長です。‘in the Shadows’は<蔭の中にいる><蔭に引っ込んでいる>という意味ですから、全体は、<イソップさん、ここでは出てこないでね>という、ちょっと失礼な献辞です。「イソップさんの話は拝借しましたが、これは私のイソップ話で、教訓話ではありません」という作者の宣言文なのです。

ポターの作品は、子どもにわかりやすい動物ファンタジーで描かれていますが、背後にポターなりの人生哲学というものがしっかりと入っています。それを、ことばでよりも、絵や話の筋立てに巧みに組み込んでいるので、その点はコールドコットをはるかに凌いでいます。コールドコットから手法を学びながら、絵本の世界をさらに広げた人でした。

ポターの伝記を書かれて、ポター研究の第一人者であるジュディ・テイラーさんは、イギリスのボドリー・ヘッド社 (The Bodley Head) の有名な編集者でした。クイーンから勲章を頂いている方ですが、彼女は編集者時代、新しい作品に出会うと、必ずポターを試金石にしたと言っています。新しい作品がポターに対抗できる作品か、というのが評価の物差しだったというのです。ポターの作品は、イギリス児童文学のお宝であると同時に、コールドコットを引き継いで、今も生き続けている伝統の雄なのです。

ポターは印刷、特にカラー印刷における過渡期の人でした。コールドコットの木版の重ね刷り時代が終って、印刷に写真が積極的に導入された<網版の時代>になったときの人でした。出版社は新しい技術を導入しながら、前の時代からストックしていた用紙に印刷することが多く、仕上がりにむらがあったようで、ポターはコールドコットをうらやましがって、「よき時代の人だ」

と言っていました。彼女は用紙のことでよく出版社を嘆いていました。

また、『グロースターの仕たて屋』で、せっかく絵に黒い枠を付けたのに、出版社に勝手にそれを消されて、「あれは中の雪の風景を際立たせるためにそうしたのです、なぜ黒を消したのですか」と怒りの手紙を書いています。ポターは自分の絵はもちろん、その印刷にもひじょうに神経を使っていました。彼女の絵本の原画は、市場には一枚も出ていません。すべて自ら大切に保管していました。戦争中は疎開するために、出版社から引きとって、田舎の自宅に保管していました。そして、それら原画は、『ピーターラビットのおはなし』はフレデリック・ウォーン社に、『フロプシーのこどもたち』は大英博物館に、『グロースターの仕たて屋』はテイト・ギャラリーに、その他の絵本原画はすべてナショナル・トラストへ、また、途中で筆を絶ったキノコの絵約300枚もアーミット・ライブラリーへと、すべて生前に自ら保管先を決めていっています。

ポターの親戚に貴族がいて、そこへデンマークから嫁いできた人がいました。後にポターとひじょうに親しくなりますが、その女性は初対面の時に「あなたは、デンマークからいらしたのですね。デンマークにはアンデルセンがいますが、私はイギリスのアンデルセンです」と言われて、「この人は正気か」と驚いた、と『思い出の記』に書いています。

ポターの原資料を整理されたレズリー・リンダーさんにお会いしたとき、私が「これだけ整理なさるのは、大変でしょう」と聞くと、とても慎重な人でしたが、けろりとした顔で、「いいえ、私がやっているわけではありません。ポターは生前から自分が伝記を書かれる人物と知っていて、資料はすべてきちんと整理されていました。私はそれらを順次出しているだけです」とおっしゃるので、リンダーさんにも、ポターその人にも、驚きました。

ポターは生前、自らのプライバシーを厳重にガードしていた人でもありました。今お話したように大変な自信を一方で持っていたのですが、好奇心で自分に近づいてくる人をたいそう恐れ警戒

していました。結婚後30年間暮らしていたニアソーリ村のカーズル・コテージに、ナショナル・トラストの代表として住んでおられたとクリストファー・ハンソン＝スミスさんから直接うかがいましたが、家には隠し階段があって、玄関から嫌な人が来ると、それを使って逃げていたそうなのです。

このようにポターはすごい自信家である一方で、自らを隠すかのようにプライバシーを厳重に守っていました。相反する性格の持ち主のようにみえます。動物に対しても、手紙や日記ではネズ

ミの徹底的駆除を語っている一方で、かわいいネズミの話を描いています。ポターは、ナチュラルリストであり、サイエンティストであり、同時にファンタジストでもありました。人間、この未知なる存在、と言われますが、ある意味でそういう矛盾を混在させた独りの人間として、その作品とともに、その人柄、その生涯に、私たちは限りない魅力を感じずにはおられないのです。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

「ビアトリクス・ポター」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	The golden goose book : a fairy tale picture book	L. Leslie Brooke 作・絵	Clarion Books c1992	Y17-A6984
	金のがちょうのほん：四つのむかしばなし	レズリー・ブルック文・画 瀬田貞二, 松瀬七織訳	福音館書店 1980.11	Y7-8497
2	The nursery rhyme book	Andrew Lang 作 L. Leslie Brooke 絵	Frederick Warne and Co. 1897	Y8-A5797
3	Ring o'roses : a nursery rhyme picture book with numerous drawings in colour and black and white	L. Leslie Brooke 作・絵	Warne [19--?]	Y17-A7790
4	Caldecott & Co. : notes on books and pictures	Maurice Sendak 作	Farrar, Straus, and Giroux 1988	YZ726.6C-B5
	センダックの絵本論	モーリス・センダック著 脇明子, 島多代訳	岩波書店 1990.5	YZ726.62- セン
5	The tale of Samuel Whiskers, or, The roly-poly pudding (The original Peter Rabbit books ; 16)	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1987	Y17-A1738
	ひげのサムエルのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1974	Y17-4176
6	The tale of Tom Kitten (The original Peter Rabbit books ; 8)	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1995	Y17-A4634
	こねこのトムのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1971	Y17-3626
7	The tale of Mr. Jeremy Fisher (The original Peter Rabbit books ; 7)	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1995	Y17-A4633
	ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1983.6	Y17-9499
8	Beatrix Potter : artist, storyteller, and countrywoman	Judy Taylor 作	F. Warne 1996	YZ726.6P-B3
	ビアトリクス・ポター：描き、語り、田園をいつくしんだ人	ジュディ・テイラー著 吉田新一訳	福音館書店 2001.1	YZ726.62- ポタ
9	The tale of Benjamin Bunny (The original Peter Rabbit books ; 4)	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1995	Y17-A4630
	ベンジャミンバニーのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1971	Y17-3626-(2)
10	The tale of the Flopsy Bunnies (The original Peter Rabbit books ; 10)	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1995	Y17-A4636
	フロプシーのこどもたち	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1971	Y17-362 6-(3)

ビアトリクス・ポター

11	Ginger & Pickles	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1909	Y17-B4824
	「ジンジャーとピクルズや」のおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1973	Y17-3966
12	The tailor of Gloucester	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne c1903	VZ1-870
	グロスターの仕立て屋	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1974	Y17-4177
13	The tale of Peter Rabbit	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne [1918]	VZ1-873
	ピーターラビットのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1971	Y17-3626-(1)
14	The tale of two bad mice (The original Peter Rabbit Books : 5)	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1995	Y17-A4631
	2ひきのわるいねずみのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1971	Y17-3773
15	The tale of Timmy Tiptoes	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1995	Y17-A4638
	カルアシ・チミーのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1983.6	Y17-9500
16	The tale of Johnny Town-Mouse	Beatrix Potter 作・絵	F. Warne 1918	所蔵なし
	まちねずみジョニーのおはなし	ビアトリクス・ポターさく・え いしいももこやく	福音館書店 1971	Y17-3774

レジュメ

エドワード・アーディゾーニ

吉田 新一

1900年生まれのエドワード・アーディゾーニは、1865年から1920年代までと、第二次世界大戦後と、二つの<絵本・挿絵の黄金期>をつなぎ、ユーモアに富む風刺精神と、ドローイングを基本とする挿絵を、19世紀前半のジョージ・クルックシャンクから受け継ぎ、イギリス絵本の発展に大きな貢献をしました。

エドワード・アーディゾーニ (Edward Ardizzone 1900-1979) の主要作品と関連資料

◆<絵本作品・挿絵作品>

- Little Tim and the Brave Sea Captain, 1936 (Y17-A6254)
『チムとゆうかんなせんちょうさん』(児933-cA67t; Y18-N01-235)
- Lucy Brown and Mr. Grimes, 1937; second ed. 1970
『ルーシーのしあわせ』(Y17-4694)
- Tim and Lucy Go to Sea, 1938
『チムとルーシーとかいぞく』(Y18-N01-273)
- Tim to the Rescue, 1949 (Y17-A6253)
『チム、ジンジャーをたすける』(Y18-N01-236); 『チムともだちをたすける』(Y17-6480)
- Tim and Charlotte, 1951 (Y17-A7397)
『チムとシャーロット』(Y18-N01-283)
- Tim in Danger, 1953 (Y17-A1280)
『チムききいっぱつ』(Y18-N01-284)
- Tim All Alone, 1956 (Y17-B2261)
『チムひとりぼっち』(Y18-N01-285; Y7-1304) 改訂版 (Y18-540)
- Tim's Friend Towser, 1962
『チムのいぬタウザー』(Y18-N01-365); 『チムのいぬトーザー』(Y7-1336)
- Tim and Ginger, 1965 (Y17-A1281)
『チムひょうりゅうする』(Y18-N01-366)
- Tim to the Lighthouse, 1968
『チムとうだいをまもる』(Y18-N01-367)
- Tim's Last Voyage, 1972
『チムさいごのこうかい』(Y18-N01-417); 『チムのさいごのこうかい』(Y17-7767)
- Ship's Cook Ginger, 1977 (Y17-B2262)
『コックのジンジャー：チムもうひとつのものがたり』(Y18-N01-418)
『チムふねをすくう』(Y17-8883)

- Nicholas and the Fast Moving Diesel, 1948; second ed. 1959
- Paul the Hero of the Fire, 1948
- Johnny the Clockmaker, 1960
『時計づくりのジョニー』(Y18-M99-235)
- Peter the Wanderer, 1963
- Diana and her Rhinoceros, 1964
『ダイアナと大きなサイ』(Y18-N02-293)
- Sarah and Simon and No Red Paint, 1965
- The Little Girl and the Tiny Doll (by Edward & Aingelda Ardizzone), 1966
『まいごになったおにんぎょう』(Y17-9819) [AingeldaはEdwardの義娘]
- Johnny's Bad Day, 1970; American ed. The Wrong Side of the Bed, 1970
- The Second - Best Children in the World, (by Mary Lavin), 1972
- The old ballad of The Babes in the Wood, 1972
- The Night Ride (by Aingelda Ardizzone), 1973
『つきよのぼうけん』(Y18-N04-H422)
- Ding Dong Bell, A First Book of Nursery Rhymes, (Devised by Percy Young and Edward Ardizzone), 1957 (Y6-B173)
- Ardizzone's Hans Andersen, Fourteen Classic Tales, 1978
- Ardizzone's English Fairy Tales, Twelve Classic Tales, 1980

With James Reeves (20世紀 英詩人)

- The Wandering Moon, 1950
- The Blackbird in the Lilac, 1952
- Pigeons and Princesses, 1956
- James Reeves Complete Poems for Children, 1957
- Prefabulous Animiles, 1957
- A Golden Land. Stories, Poems, Songs New and Old, ed.by, 1958
- Exploits of Don Quixote, 1959
- Titus in Trouble, 1959
- Hurdy - Gurdy, 1961
- Sailor Rumbelow and Britannia, 1962
- The Story of Jackie Thimble, 1964
- Three Tall Tales, chosen from Traditional Sources, 1964
- The Secret Shoemakers and Other Stories, freely adapted by, 1966
- Rhyming Will, 1967
- The Angel and the Donkey, 1969
- How the Moon Began, a Folktale from Grimm, 1971
『月はどうしてできたか グリム童話より』(Y17-6420)
- Complete Poems For Children, 1973 (Y8-B2384)
- The Lion that Flew, 1974 (VZ1-899)
- More Prefabulous Animiles, 1975

- Arcadian Ballads, 1977 (Y8-A5794)
- The James Reeves Story Book, 1978

With Christianna Brand (20世紀 英作家、Edwardの従姉)

- Naughty Children, an Anthology Compiled by, 1962
- Nurse Matilda, 1964
『ふしぎなマチルダばあや』(Y7-2346)
- Nurse Matilda Goes to Town, 1967
- Nurse Matilda Goes to Hospital, 1974

With Eleanor Farjeon (20世紀 英作家)

- The Little Bookroom, 1955 (Y8-B3066)
『ムギと王さま』(Y7-2195-[3], 見933-cF22m, 見908-I922-[9])
- Jim at the Corner, 1958 (Y8-B1602)
『町かどのジム』(Y9-N02-52)
- Italian Peepshow, 1960
『イタリアののぞきめがね』(Y7-2195-[2])
- Eleanor Farjeon's Book, 1960 (Y8-B2756)
- Mrs. Malone (by Eleanor Farjeon), 1962
『マローンおばさん』(931-ファ)
- Kaleidoscope, 1963 (Y8-B4170)
- The Old Nurse's Stocking Basket, 1965 (Y8-B2722)
『年とったばあやのお話かご』(Y7-2195-[1])
- The Eleanor Farjeon Book, A Tribute to Her Life and Work, 1966

With Graham Greene (20世紀 英作家)

- The Little Train, 1973
『小さなきかんしゃ』(Y7-4965)
- The Little Fire Engine, 1973 (Y17-B5663)
『小さなしょうぼうしゃ』(Y7-4964)
- The Little Horse Bus, 1974 (Y17-A7032)
『小さな乗合い馬車』(Y7-5200)
- The Little Steamroller, 1974
『小さなローラー』(Y7-5199)

With Anthony Trollop (19世紀 英作家)

- The Warden, 1952

With John Bunyan (17世紀 英伝道者、作家)

- The Pilgrim's Progress, 1947
- The Land of Beulah, Being an Extract from The Pilgrim's Progress, 1974

With William Makepeace Thackeray (19世紀 英作家)

- The Newcomes. Memoirs of a Most Respectable Family, ed. by A. Pendennis, 1954
- The History of Henry Esmond, Esq, 1956

With Charles Dickens (19世紀 英作家)

- Great Expectations, 1939
- Charles Dickens Birthday Book, 1948
- Bleak House, 1955
- David Copperfield, abridged by Stanley Wood, 1955
- The Short Stories of Charles Dickens, selected by Walter Allen, 1971

With Robert Graves (20世紀 英詩人)

- The Penny Fiddle. Poems for Children, 1960
- Ann at Highwood Hall. Poems for Children, 1964

With G. K. Chesterton (20世紀 英作家)

- Father Brown Stories, 1959

With Mark Twain (19世紀 米作家)

- The Adventures of Tom Sawyer, 1961
- The Adventures of Huckleberry Finn, 1961

With Eleanor Estes (20世紀 米作家)

- Pinky Pye, 1958 (Y8-B367)
- The Witch Family, (by Eleanor Estes), 1960 (Y8-A5594)
『ガラス山の魔女たち』(Y7-4434) ; 『魔女ファミリー』(Y9-N02-159)
- The Alley, 1964
- Miranda the Great, 1967
- The Tunnel of Hugsy Goode, 1972

With Jean Webster (20世紀 米作家)

- Daddy - Long - Legs, 1966

With Walter de la Mare (20世紀 英詩人)

- Stories from The Bible, 1961
- Peacock Pie, 1946
『詩集 孔雀のパイ』(931-デラ)

With Eva-Lis Wuorio (20世紀 フィンランド作家)

- The Island of Fish in the Trees, 1961
- The Land of Right Up and Down, 1964 (VZ1-1144)
- Kali and the Golden Mirror, 1967

With other writers (その他の作家たち)

- The Otterbury Incident, (by C. Day Lewis) 1948 (Y8-B3232)
『オタバリの少年探偵たち』(Y9-N03-H360)
- Minnow on the Say, (by A. Philippa Pearce), 1955 (Y8-A1248)
『ハヤ号セイ川をいく』(Y7-4157)
- The Nine Lives of Island Mackenzie, (Ursula Moray Williams), 1959
- A Ring of Bells, (poems of John Betjeman), 1962
- J. M. Barrie's Peter Pan, (by Eleanor Graham), 1962
- Stig of the Dump, (by Clive King), 1963
- The Thirty - Nine Steps, (by John Buchan), 1964 (Y8-B1527)
- Old Perisher, (by Diana Ross), 1965
『公園ののら』(Y9-N00-145)
- Open the Door, (Stories collected & arranged by Margery Fisher), 1965
- Long Ago When I Was Young, (by E. Nesbit), 1966
- The Growing Summer, (by Noel Steatfield), 1966
- A Likely Place, (by Paula Fox), 1967 (Y8-A137)
- Travels with a Donkey in the Cevennes, (by Robert Stevenson), 1967 (VZ1-987)
- Boyhoods of Great Composers, (by Catherine Gough), Book 1, 1960 ; 2, 1963, combined ed. 1968
- Robinson Crusoe, his Life and Strange Surprising Adventures, by Daniel Defoe, (ed. by Kathleen Lines), 1968 (VZ1-329)
- Dick Whittington, (Retold by Kathleen Lines), 1970
- Rain, Rain Don't Go Away, (by Shirley Morgan), 1972
『あめあめふれふれもっとふれ』(Y9-N05-H239)
- Ardizzone's Kilvert, Selections from the Diary of the Rev. Francis Kilvert 1870~79,
Edited by William Plomer and abridged for children by Elizabeth Divine, 1976
- A Child's Christmas in Wales, (by Dylan Thomas), 1978
『ウェールズのクリスマスの想いで』(Y18-M98-133)
- Letters from my Windmill, (by Alphonse Daudet, translated by F. Davies), 1978

◆<その他の作品>

- The Young Ardizzone, an Autobiographical Fragment, 1970 (自伝) (YZ726.6A-B1)
- Visiting Dieppe, 1981 (旅絵日記)
- Indian Diary 1952-53, 1984 (旅絵日記)
- Edward Ardizzone Sketches for Friends, ed. by Judy Taylor, 2000
『エドワード・アーディゾーニ 友へのスケッチ』(YZ726.62-アデ)

◆<関連資料>

- Edward Ardizzone, (by Gabriel White), 1979
- My Father and Edward Ardizzone, A Lasting Friendship,
(by Edward Booth - Clibborn), 1983
- Edward Ardizzone's World, The Etchings and Lithographs, an Introduction and Catalogue
Raisonne, (by Nicholas Ardizzone), 2000 (YZ726.6A-B2)
- Edward Ardizzone, A Preliminary Hand-list of His Illustrated Books 1929-1970,
(by Brian Alderson), 1972
- Edward Ardizzone, A Bibliographic Commentary, (by Brian Alderson), 2003 (YZ726.6A-B3)

エドワード・アーディゾーニ

吉田 新一



今日もまた、ご一緒に愉しく絵本を味わいましょう。今日はアーディゾーニです。日本でもファンが多いイラストレーターですね。岩波書店から出ている石井桃子さん訳のエリナー・ファージョン作品集の中で、アーディゾーニの挿絵を愉しまれた方は多いと思います。『ムギと王さま』(*The Little Bookroom*, 1955) は一番印象が強かったのではないのでしょうか。他にも翻訳で、アーディゾーニの挿絵がついているものというところ、古いところで、C. D. ルイスの『オタバリの少年探偵たち』(*The Otterbury Incident*, 1948) など、ご記憶にありませんか？

アーディゾーニについて

お手元に、アーディゾーニの「主要作品と関連資料」というものをお配りしてあります(以後、これをリストと呼ばせていただきますが)、それをまずご覧いただきましょう。今日のために、私なりにアーディゾーニの著作を分類し、一覧にしたものです。ひじょうに作品数が多い作家なので、セレクトして、おおよそつかめる形にしました。リストの一番終りに、著名な書誌学者であるブライアン・オルダーソン編の『解説つきの著作目録』(*Edward Ardizzone, A Bibliographic Commentary*, 2003 邦訳なし) を載せましたが、アーディゾーニを詳しく調べたい方にとって、これは必携の本です。そのすぐ上に、同じくオルダーソンさんが1972年に出された *Edward Ardizzone, A Preliminary Hand-list of His Illustrated Books* を挙げましたが、それを増補改訂したものです。

オルダーソンさんとは私は1971年に知り合いました。 *Edward Ardizzone, A Preliminary Hand-list of His Illustrated Books* は出てすぐに、サイ

ン入りで頂戴した、私にはとても懐かしい本です。縦横21.5センチ×13.8センチ、64ページという小冊子ですが、作家の著作目録は、このように作るものだけということをお教えされた本でした。それから31年後、アーディゾーニ没後24年目に、これが増補されて、今度は25.4センチ×16.6センチ、310ページという大冊となりました。今、必携と申し上げた本でして、これを元に、私なりにアレンジした<リスト>が、お手元にあるもので、今日はこれに従って、お話しして参ろうと思っております。

さて、リストをご覧になると、最初にく絵本作品・挿絵作品>が出てまいります。まず○印で12冊、よくご存じの<チム・シリーズ>の絵本です。<アーディゾーニ作・絵>の作品ですね。それにつづいて●印のついたものが1973年の *The Night Ride* まで11冊、翻訳があるもの、ないもの混ざっていますが、みな絵本です。その下の●印3冊は、わらべ唄集、アンデルセン童話集、イギリス昔話集で、それぞれアーディゾーニによる挿絵本です。

その後は、‘With・・・’とありますように、特定の詩人や作家の本に挿絵をしたもので、ジェームズ・リーヴズから、エリナー・ファージョンなどを経て、フィンランドの作家 Eva-Lis Wuorio まで、○印と●印を交互につけて並べてあります。順不同です。そして、その後に、それぞれ挿絵をつけていますが、その作家のものはそれ一冊というのを、作品の発表年順に並べてみました。その後の<その他の作品>はご覧の通り、自伝、旅日記、スケッチ集です。最後の<関連資料>は伝記、アーディゾーニのリトグラフやエッチング作品集、そして、先ほどご紹介した書誌です。

アーディゾーニと言えば、なんといっても絵本

の<チム・シリーズ>でしょう。出版順にまず『チムとゆうかんなせんちょうさん』からはじまって、『チムのさいごのこうかい』まで、それに、もう一つ付録のように『コックのジンジャー：チムもうひとつのものがたり』ができて、全部で12冊です。2番目の『ルーシーのしあわせ』は翻訳が出ていましたけれど、今はたぶん絶版ではないかと思えます。<チム・シリーズ>では省かれることが多いので、11冊ということになるかもしれません。福音館書店のシリーズでは11冊ですね。

第1作『チムとゆうかんなせんちょうさん』は、息子さんのフィリップのために書いたもので、ポターと同じようにタイトル・ページの裏に献辞が載っていて、“To my son, Philip”と書いてあります。次の『ルーシーのしあわせ』は、フィリップのお姉さん、すなわち作者の長女クリスティアーナのために書かれています。このように、作者が自分の子のために書いた作品は、例が多いですが、すぐれた作品が多いですね。アーディゾーニ自身も「そういう形で書いた作品が一番いい」と語っています。父親である作者は二人の子どもそれぞれに公平に一冊ずつ作品を書いて、そうして、3作目となる『チムとルーシーとかいぞく』、これはタイトルからもうかがえるように、チムとルーシーが一緒に出てくるお話で、これで<チム三部作>ができあがりました。出版年を見てわかるように、(ドイツが1939年、日本が1940年に参戦して、第二次世界大戦がはじまり、45年に終わったので)、戦前にまずは3作品が出来上がり、戦中はお休みで、戦後の1949年からつづきはじまったということになります。

『チムとゆうかんなせんちょうさん』

第1作の『チムとゆうかんなせんちょうさん』(*Little Tim and the Brave Sea Captain*, 1936)。これはもう絵本史で20世紀の最もすぐれた絵本、絵本発達史における記念碑的な作品、と言われていきますから、よくご存知だと思いますが、ここにアーディゾーニの絵本作りのようすがひじょうによく出ているので、改めてゆっくりと読むことから、はじめたいと思います。

筋をまずまとめておきましょう。海岸の家に、

チム少年が両親と住んでいました。彼は船乗りになりたくて仕方がありません。昔船乗りだったボートのおじさんや、知り合いのマクフィー船長さんなどから、航海の話聞いては、船乗りへの憧れをつのらせています。両親に船乗りになりたいと嘆願しても、「まだ ちいさすぎる」と駄目を言われてしまい、がっかりしています。そんなある日、ボートのおじさんが、沖に停泊している船へ友人に会いに行くので、よかったら連れていってあげようと言われ、大喜びでついて行きます。そして、チムは船につくと隠れてしまいます。おじさんは友だちとの話に夢中になって、チムを連れてきたことを忘れて帰ってしまいます。船はそのまま出港して、チムは密航者ということになり、さんざん働かされます。しかし、よく働くのでじきに船の人気者になります。が、とこうするうちに大嵐がきて、チムは船酔いでダウン。そして、船が座礁し、沈没しはじめます。チムは恐ろしさにちぢこまっていたので、救命ボートで逃げるとき船員たちに忘れられてしまったのです。船と運命を共にする船長と二人きりで、絶対絶命となりますが、沈没寸前の土壇場で救助されて、最後は、船長さんと共に、両親の待つわが家へもどり、めでたく話は終わります。

私は『絵本の魅力』(日本エディタースクール出版部 1984)の中で、この作品に一章をあてて解説していますので、ダブる形になりますが、ここで改めて丁寧に『チムとゆうかんなせんちょうさん』を、絵の語りに注意しながら、解説して参りましょう。

福音館書店版の最初のページ、文は二行です。

チムぼうやは、かいがんの いえに すんで
いました。

チムは、ふなのりに なりたくてたまりませ
んでした。 (瀬田貞二訳)

絵では、向こうの海に面して、バルコニーのある二階屋が、低い板塀に囲まれて建っています。塀の中には低い樹木があり、海側の角にある少し高い一本の木が、海からの風で枝葉を手前へなびかせています。沖に行く船の吐く煙も同じくち

らへなびいています。人影はまったくありませんが、心地よい海風が屋敷の周囲に感じられます。家の塀の手前角に、自転車が一台寄せかけられていて、自転車の「WALLIS BUTCHER」（ウォーリス肉店）の文字が見えるので、たぶん今、肉屋さんがご用聞きに来ているところかもしれません。それから塀の入り口に「SEA VIEW」と家の愛称が書いてあります（イギリスではこういうふうの家々にニックネームがついています）。〈海が見晴らせる家〉という意味ですから、日本語で洒落てく観海楼〈望洋邸〉なんていうのはどうでしょう。自転車が寄せかけてある塀の角に「DRAKE AVENUE」（ドレイク通り）の文字が見えます。言うまでもなくこれは、16世紀にスペインの無敵艦隊を破り、初めて地球周航を果たしたイギリスの海軍提督サー・フランシス・ドレイクにちなんだ通りの名前ですね。

今も申しましたが、第1ページには人は全く登場していません。ことばの方は、まだ姿は見せていませんが、お話の主人公となる〈チム〉が、「海岸の家に住んでいる」ということを告げて、その〈家〉のたたずまいを、絵で見せています。そこに描かれている景を、もし〈ことば〉で語ると、今私が読みとったような内容になるでしょう。が、〈ことば〉によるよりも、〈絵〉で語る方が、当然のこと、はるかによくわかります。しかし、〈チム〉は「船乗りになりたくてたまらない少年だ」という点は、〈絵〉では伝えにくいので、それは〈ことば〉が伝えています。くどいようですが、第1ページの二行の文章は、一つはここに描かれている絵が「チムの住んでいる家である」ということ、そして、もう一つはチムが「船乗りになることを熱望している」ということを伝えています。読者は、海岸に建っているその家、周囲のたたずまいを見て、こういうところに住んでいて、遠く近くの沖をいろいろな船が行交うのを日常的に見ていれば、船乗りになりたいと思うのも当然だろう、と納得できます。先ほどから言っているように、人間は描かれていませんが、ウォーリス肉店の自転車から、この家に小僧さんが注文取りか、注文品を届けに来ている気配を感じ取れるので、目には見えなくても、人の気配はあります。この

ように〈絵〉と〈ことば〉が、それぞれ有効に役割を分担し、補完し合って、〈語りを語る〉のが〈絵本〉の〈絵本〉たる所以なのです。

つづく、福音館書店版で4ページ（以下、福音館書店2001年版のページを表記）から8ページまでには、チムが船乗りになりたくてたまらなくなった次第が縷々述べられています。4ページでは、遊び場といえば海岸です。海岸でチムは今、帽子をかぶった少女（間違いなくお姉さんのルーシーにちがいません）と、砂浜に引き揚げられているボートで、帆綱を引いたりして遊んでいます。ボートごっこです。5、7～8ページでは、ボートのおじさんやマクフィー船長から、航海の話をつぶり聞かされ、船乗りへの憧れをつのらせているところです。船長からはラム酒をちよっぴりもらったりもしています。それで、家のバルコニーで、沖を通る船を指して、「左舷前方」など船員用語を使って、船の種類を正確に区別するので、お父さんを「おどろかせ」ます（6ページ）。（今様で言えば、幼い子が自動車のメーカーや車種を正しく言い当てるのに似ています。）どのページの絵も、海辺の風景がたっぷり描き出されています。以上が、物語の導入部です。そして、チムの憧れが、意外な形で実現していくところが、この物語のメインとなるわけです。

こうした物語絵本における〈導入の仕方〉を、他の作品とちよっと比べてみましょう。ジョン・バーニンガムに、ケイト・グリーンナウェイ賞を得た『ガンピーさんのふなあそび』（*Mr Gumpy's Outing*, 1970）という作品があります。その作品では、第1ページの〈絵〉に、まず人物が登場します。そして、〈ことば〉は「This is Mr Gumpy」と、その人の名前を告げる一文だけですが、〈絵〉では、ガンピーさんと、彼の家のようすが描かれています。すなわち、ガンピーさんは、家の前庭で、ブーツを履き、手にバケツをさげ、庭仕事のスタイルです。家と前庭のたたずまいが、よくわかります。そして、次のページでは、「ガンピーさんはボートを持っていること」、「家が川のそばにあること」が〈ことば〉で語られていて、〈絵〉では、ガンピーさんが、家のそばの川に向かって立って、じょうろを提げています。ここは前のペー

ジのつづきですから、ガンピーさんは家の反対側、すなわち裏庭へまわって、庭仕事をつづけている、と読めます。文字では‘boat’とありますが、〈絵〉で舟が平底舟 (punt) である、とわかります。次の第3ページには文字はありませんが、ガンピーさんが平底船に乗って、竿で漕ぎ出すところが〈絵〉で語られています。ここまでが、〈物語の導入部〉です。このように、絵本の発端部を比べてみると、どちらの作品も、絵とことばが理想的なチームワークによって、読者を物語の中へ導いていくのがはっきりわかるでしょう。

『チムとゆうかなせんちょうさん』へ話を戻しましょう。チムが、ボートのおじさんやマクフィー船長から話を聞いている時の、熱心な、また、嬉しそうな姿に、画家の確かなデッサン力を味わうことができます。また、チムの船乗りになりたい願望がピークに達して、その実現を両親にせまっている姿 (9ページ)、しかし、それを一笑にふされて落胆している姿 (10ページ)、それから一転、ボートのおじさんからモーターボートに乗せてやろう、と言われた時の喜ぶ姿 (11ページ)、これらは、さながら3幅対の絵を見るようです。嘆願、落胆、歓喜の感情を、アーディゾーニはチムの全身像でもって描き分けていますが、これはいかにもアーディゾーニらしい人物像の描き方です。10、11ページはカラーなので、背景の空の色によっても、チムの感情の変化が描き分けられています。

12、13ページは、おじさんにボートに乗せてもらえるというので、チムが一生懸命手伝っている場面ですが、ボートのおじさんの舟の舟尾に‘Saucy Sue Walmer’ と舟名が書かれています。‘Saucy’には〈スマートな〉という意味と、〈(舟が)よく整備された〉という意味があるようで、‘Sue Walmer’は女性名ですから「小粋なスー・ウォーマー丸」といった舟名になるでしょうが、〈ソーシー・スー・ウォーマー〉と良い口調の、いい舟名ですね。そして、私がここで気づくのは、4ページでチムが遊んでいた舟、あれは〈ボートのおじさん〉の持ち舟だったんですね。海岸にあるよその舟で勝手に遊んだりしては、本当はいけ

ないでしょう、でもこれで、仲良しのボートのおじさんから、陸に挙げてある時はいつでも乗って遊んでいいよ、とお許しが出ていたので、チムは自由にそれで遊んでいたのだ、と私は読みますが、いかがでしょう。

14、15ページは、いよいよおじさんの舟に乗せてもらって、沖に停泊中の大きな貨物船へ向かう場面です。港の構内の景色ですが、いろんな漂流物がありますね。FLOTSAMだとかJETSAMという文字が見えます。子どもは(大人もですが)ふだんは聞きなれないこういうことばに興味をもちます。いずれも海洋語というか船舶関係の専門用語です。船が難破した時、沈没を避けるために、海中に捨てる荷物を、FLOTSAM (浮き荷)、JETSAM (投げ荷) といい、共に遭難船の漂流貨物のことです。これらは、ひとたび海に出れば、遭難という危険が常にある、という警告を意味しているのでしょうか。それもあるかもしれませんが、子どもは、先ほどの「左舷前方」ではありませんが、難しいことば、特種用語に、たいそう興味をもつものです。こういうことばを絵本に発見するのも、時に絵本の愉しみの一つになるでしょう。作者もそれをよく承知していて、そういう遊びを画中に挿入していると思います。

16、17ページはチムが汽船に乗り込むときと、汽船に残ってしまうときが描かれています。文では「このとき チムは、すてきなことを おもいつきました。ぼくが かくれていれば、ボートのおじさんは ぼくのことを わすれて、かえってしまうぞ。——チムが おもったとおりに なりました」と書かれています。絵によって、チムは船の救命ボートの陰にひそんでいた、と語られています。(後で読む予定の『チムひとりぼっち』でも、チムは大人の目をのがれる場所として、船の救命ボートの下を選んでいきます。)

18、19ページは、チムが「ただのり」と叱られて、罰として働かされるくだりです。ここには漫画で見る〈ふきだし〉が使われています。この本では20、23、41ページにも〈ふきだし〉が使われていますが、ひじょうに効果的な使い方、物語の進行にすぐれたアクセントになっています。アーディゾーニは絵本における〈ふきだし〉の、

最も上手な使い方をする画家です。

20～26ページは、チムが積極的に、けなげに働くようすが描かれています。その中で特に注目したいのは22ページです。働いて働いて、疲れ果てたチムは、コックからココアを一ぱいもらって、ひとごちするくだりです。文は「そして せんいんに、ねどこを おそわると、そこへ あがって たちまちぐっすり ねこんでしまいました。あまり くたびれていたもので、ふくを ぬぐことも できませんでした」と書かれています。(ここでくねどこ>と訳されている英語原文は‘bunk’で、‘bed’ではありません。船で壁に作りつけの寝台をいうので、これも船舶の用語の一つと言えるでしょう。)私はある本で、ここで「服を脱ぐこともできなかった」という文を聞いて、子どもが「靴も脱がなかったのかなあ」とつぶやいた、というエピソードを読んだことがあります。(西洋の習慣では、室内でも靴を履いていますからね。)確かに、そういう疑問をひきだすような文です。そう思ってページ上下の絵を見比べると、すぐに気づくでしょう。壁の棚に靴が乗せてあります。これで靴は脱ぎました、と語られているわけですが。大人はたぶん上の子どものような疑問も抱かず、このくだりを読みすگذすでしょう。ということは、絵の細部には気づかずに読みすگذすことになるでしょう。それでも物語の進行にはなんらさしつかえないのですが、ご覧のように絵が文の語らない細部を語っているわけで、それに気づかなければ、その分作者の用意してくれた<語り>を味わわずじまいで、素通りすることになります。

「チムは、すぐに、ふねの くらしに なれました」(23ページ)とありますが、甲板掃除やじゃがいもの皮むき、料理場の掃除や片付け、船長さんや二等航海士のところへ食事やお酒のお届け、舵手の代理、船員のズボンのボタン付け、というんな仕事を喜んでしています。これらのことについて、少し解説をしてみたいと思います。

この物語、改めて考えてみると、どんなにラッキーな偶然がめぐってきても、チムのような一人の少年が、ここに描かれたような経験を、現実にする、あるいは、できるとは、考えられないでしょ

う。その意味で、この話は少年が心に描く<白屋夢>です。あくまでも<フィクション>です。要するに、スティーヴンソンの『宝島』のように、この話は<ロマンス>なのです。そういう<現実にはありそうもない話>が、一方で<ひじょうに現実的に語られている>点に注目をしたいのです。甲板拭きや、じゃがいもの皮むきや、嵐の激しいゆれによる船酔いなど、どれも船乗りの生活の厳しい<現実の一面>ですが、それらの要素が<現実離れした話>にひじょうなりアリティーをもたらしています。これはデフォーが『ロビンソン・クルーソー』で試みて以来、近代小説(あるいは、冒険小説)を一貫して支えてきた柱の一本なのです。アーディゾーニはその骨法に従って物語を展開しながら、主人公のチムから、後悔や、忍耐や、勇気をひきだして、それらを通して困難を克服して、真の自己実現をとげる喜びをチムに味わわせていく、そこにアーディゾーニの物語世界の本質があると言えるでしょう。

さて、チムの船上生活は、台風襲来と、そのさなかの座礁、そして船の沈没、土壇場の救出と、大波乱が連続します。最後はわが家へ無事帰宅できて、ハッピーエンドになりますが、最後に近い44ページに注目しておきましょう。遭難から救助されて、元気をとりもどしたチムが、汽車で船長さんといっしょにわが家へ帰るときの場面です。

えきでは、このふたりを みおくろうとして、たくさんの ひとたちが まっていましたから、チムたちは びっくりしました。

おんなのひとたちは、チムに キスして、とちゅうで たべるように チョコレートや くだものを くれました。

チムは すっかり のぼせて、えらいひとになったみたいなきがしました。

と<文>が語り、<絵>は、駅のプラットホームで、客車の開いたドアの中にチムが立ち、そこへ見送りの人が箱や包みを持って、チムに話しかけているところを描いています。この場面について以前、福音館書店の月刊誌『母の友』に(1994年9月号で、もう12年前ですが)、兵庫県加古川市

の主婦、東明美さんがエッセイを書いておられました。一部を読ませていただきます。

四歳の娘にこの絵本を初めて読んでやっていたときのこと。チムが助けられた翌日、家に帰るために汽車に乗り込んで、見送りの人々にキスをしてもらったり、チョコレートや果物をもろう場面を読んで、次の頁を読みかけると、娘が「このおばさんの声が聞こえた」と言ったのです。驚いて「えっ？」と聞きかえすと、「“はい”って聞こえた」と言って、さし絵の女の人を指さしています。そこには汽車に乗ったチムが入口にこちら向きに立っており、女の人がホームに立って少し腰をかがめてチムに何か手渡そうとしているところが描かれています。

娘は自分でも、あれっと思ったらしく「おかあさん、“はい”ってゆうた？」と聞くので、「いいや、ゆうてないよ」と言うと、ちょっと考えていたようです。本の文章に“はい”という言葉があったのかなと思って、その頁を見直してみましたが、ありません。それで、娘が自分で、心のなかでそうつぶやいた声だったんだらうと、その時は納得しました。

しかし、おばさんの声を聞くことができた娘の心は、その時、そのプラットホームにあって、娘はチムとおばさんのすぐそばにいたにちがいないと、あとになって気がつきました。そして、もしかしたら、駅の賑わいを聞き、キスを頬に感じ、チョコレートの味さえ口の中に思い出していたかもしれないと思うのです。娘にとって、それは至福の時だったことでしょう。

なんと素晴らしい<読み>ではありませんか。絵本の世界にすっぽりと入って、愉しんでいる<理想の読書体験>、「至福の時」を味わっている姿が、ここに報告されています。

『チムとゆうかなせんちょうさん』最後の大団円、46～47ページの見開きをご覧ください。チムは船長さんといっしょに、わが家へ無事にもどってきました。バルコニーのある家の門口で、両親が出迎えています。チムはお母さんに抱きつこうと走りより、お父さんは船長さんに感謝の握

手をしています。マクフィー船長と、ボートのおじさんも、車の右手で出迎えています。その傍で、水色の帽子にコート、赤いバケツとスコップを持つ金髪の少女は、4ページでチムといっしょにボートで遊んでいた少女、たぶんアーディゾーニの長女クリスティアーナでしょう。そのとき砂浜で読書していた帽子に眼鏡のご夫人も、ボートのおじさんの背後からこちらへ砂浜をあがってきます。ウォーリス肉店の小僧さんも、例の自転車を持って姿を見せています。ドラマのフィナーレらしく、オール・キャストが勢揃いです。舞台における人物の配置も、観客席に向かって劇的效果を十分考えたもので、画家の演劇的演出ぶりを強く感じさせてくれます。

このように読んでくると、アーディゾーニがいかにすぐれた絵本作家であるか、改めて実感できたのではないのでしょうか。『センダックの絵本論』（モーリス・センダック著 脇明子、島多代訳 岩波書店 1990）の中に「エドワード・アーディゾーニ」という短いエッセイがあるので、センダックのことばにここで耳を傾けてみましょう。

エドワード・アーディゾーニは、才能はあっても不屈の献身に欠ける多くのイラストレーターたちを遭難させてきた新流行の様式の嵐を、泰然自若としてくぐり抜けてきました。

画家はえてして、絵の新しい流派が勃興すると、少しまねてみたくなったり、時流に乗ってみたくなったりする傾向があるようだが、この人は泰然自若として伝統のオーソドックスを守り通した、と言っているんですね。そのことをアーディゾーニの特徴の一つとして賞賛しています。

アーディゾーニはそれを築き上げてきた十九世紀の偉大な水彩画家たちを（そして、同国人であるウィリアム・ニコルソンの精妙に構成された絵本を）思い出させます。しかも彼には、その作品すべてを珍しいほど新鮮で簡明なものにしているユーモアと洞察力があって、それによってイギリスの伝統にはさらにぴりっとした味わいが加わりました。

1936年に刊行された『チムとゆうかなせんちょうさん』を皮切りとして、アーディゾーニは喜劇的であると同時に感動的な冒険物語のシリーズを描き続けてきましたが、これらは絵本作りといういわく言いがたい芸術の、古典的労作です。そもそものはじめから、彼はこのむずかしい形態をこなす本能のようなものを持っていました。単純な要素をうまく使って、今世紀の絵本にはめったに見られないほど複雑で密度の高いものに仕上げていくための処方箋を、彼は直感的に見つけだしたのです。

『チム』は特大の、一見荒っぽい感じの本で、素早く力強い筆致で描かれた水彩画が詰まっていますが、それらは文章のまわりや下や中や外に、ごく気楽に、勝手気ままと言いたいほどのやり方でスケッチされています。大きくてルーズで気負いのないその外見はシリーズ全体を通じて維持されており、風と水の中でのチムの冒険にはこの上なくぴったりしていますが、同時にそこには絵本の基本である構成的な要素——バランス、歩調のとり方、一分の狂いもないタイミング——がちゃんと隠されています。

何くわぬ調子でヴィクトリア朝もどきに語られる物語には、どれを見ても独特の乾いたユーモアがひそみ、まばゆいばかりの水彩画と白黒のスケッチがアーディゾーニならではの速記のようなスタイルで描き流され、ふきだしにはいった登場人物たちの愉快な脇ゼリフが、あちこちでそれに句読点をつけています。筋はもうほとんど儀式のようなものです。もちろんまずはじめに必ずチムが出てきますが、彼はいくらか頑固ではあっても、礼儀正しくて勇敢な7歳の少年で、抑えがたい放浪癖を持っており、びっくりするほど理解があって決して騒ぎ立てない両親とともに、海のそばの家に——放浪には実に便利です——住んでいます。年を経ていくあいだに、アーディゾーニはルーシーやシャーロット（『チムとシャーロット』はドイツ的と言いたいほどの突飛さと上品な辛辣さととの奇妙な混合物であり、私はシリーズのうちでも特にこれが好きです）、チムのいたずら好きな親友ジンジャーといった、独特な人物たちを登場さ

せました。

この文章を読んでいると、センダックは『チムとゆうかなせんちょうさん』を初版本で語っているのではないかと推測されます。というのも、アーディゾーニのこの第1作は、初版が現行版（1955年から）とは異なっているからです。（初版はなかなか入手困難な古書です。）初版はまず、本のサイズが違います。現行版は26センチ×19.6センチですが、1936年の初版は33センチ×22センチと、かなりの大判で、しかも水彩画がオフセット・リトグラフという方法で印刷されています。これは写真平版処理をされたものを輪転印刷機で大量に印刷できる方法で、それによる初期の傑作絵本として、ウィリアム・ニコルソンの『かしこいビル』（*Clever Bill*, 1926）と、『チムとゆうかなせんちょうさん』の初版が、よく例に挙げられます。『チム』の初版は、用紙の片面のみに印刷したものを、裁断し製本したので、コールデコットのところでお話したように、トイブックやウォルター・クレインの絵本のように、見開きカラー・ページと見開き白紙ページとが交互に出てくる作りになっています。内表紙すなわちタイトル・ページに‘Copyrighted, 1936 by Oxford University Press, New York, Inc. Lithographed in the U.S.A.’と書かれているように、アメリカのオックスフォード大学出版部から刊行されたもので、現行版は、その内表紙裏に‘Second edition, completely redrawn and with additional text, 1955’とあるように、初版本を全面的に描き直し、文章も追加されています。

相違をさらに言うと、初版はすべての絵がカラーですが、現行版はカラー見開きと、モノクローム線画の見開きが交互に出てくる作りです。テキストの文字も初版はすべて、黒インキで肉太のペンによる手書き文字です。福音館書店版で11, 12, 20の下, 23, 27, 28, 29, 43, 44の各ページの絵が、初版では見られません。従って、先ほど述べた、チムがわが家へ帰るとき駅のプラットホームで見送りを受ける場面も、現行版ではじめて登場したものです。（講義当日には、初版本のすべてを、スライド画像でお見せしました。）

では、ここでアーディゾーニ自身の声を聞くことにしましょう。1959年に「絵本の創造」という題で書いた文章（岩波書店『オンリー・コネクト：児童文学評論選Ⅲ』に収録）の一節です。

チムの絵本の一冊目『チムとゆうかなせんちょうさん』（*Little Tim and the Brave Sea Captain*, 1936）の物語は、二十四年前に考えたものでした。それは、できあがったものとして心に浮かんだものではありません。というよりもむしろ、自分の子どもたちを喜ばせようと、時はずみでできた、ほんの短いお話としてはじまったものでした。幸いなことに、そのお話は子どもたちを喜ばせました。そこでつぎの日もそのお話をしてやりました。そして、そのつぎの日もつぎの日もという具合に。そして、くりかえし話しているうちに、その物語は、何となく育ち続け、ついには、それに挿絵をつけて出版社に送ってもいいと思うほどの物語になったのでした。

さて、くりかえし話しているうちに一つの話がまとまる過程には、二つの大きな利点があります。第一の利点は、必然的に原稿が、声にだして読みやすい形になるということです。これは重要なことです。何故なら、あわれな両親は、往々にしてくりかえしくりかえし読まされる破目になるからです。第二に、たぶんもっと重要なことかもしれませんが、子どもたちが、しばしば彼らの思いつきを提案してくれるからです。子どもたちは、まったく彼らだけが思いつく、すばらしい、脈絡のない、けれどもそれがお話に織り込まれると、物語全体を豊かにしてくれる細部を加えてくれます。

自分の物語のために絵を描き、また自分の絵に合う物語を書く段階になると、いくつかの特別の問題がおこってきます。それらは、絵本の製作にかかわる独特の問題です。絵本においては、もちろん絵が文章と同じほど、あるいは、文章以上に重要です。文章は短いことが必要です。二千語以上にならないように。実際には、文章は物語の骨組となるだけです。それに反して絵は、物語の挿絵以上の働きをしなければな

りません。物語の細部を描きださなければなりません。登場人物については、物語の中でことばを使って説明するスペースがないので、絵画的表現で創造しなければなりません。背景や登場人物を描くだけでなく、そのときどきの微妙な情感や瞬間を表現しなければなりません。

そこで、よく使う手ですが、登場人物の口に「ふきだし」をつけて、その中に文字を入れる方法が、またとなく役立つのです。・・・とはいえ、ふきだしは、控え目に使わなければなりません。さもないとその絵本は、コマ絵のマンガ本のようになるかもしれません。そうなれば、ほんとうにみじめなものです。（渡辺茂男訳）

アーディゾーニのこのエッセイはひじょうにすぐれた、示唆に富む絵本論ですから、できれば全文をお読みになされることを、お勧めします。先ほど、チムが疲れはてて、船のベッドに服も脱がずに転がり込むというくだりで、靴も脱がなかったのかなあ、という子どもの疑問に、絵がちゃんと答えを用意している点を紹介しましたが、そういう細部など、きっと作者が子どもにくりかえし話しているうちに、子どもの思いつきから挿入できたところかもしれませんね。

『チムひとりぼっち』

ここでは「チム・シリーズ」12冊の全てを読む時間はありませんから、いくつかを通して、以下にシリーズのようすをみることにしましょう。

イギリスでケイト・グリーナウェイ賞が設けられたのが1955年、その最初の受賞作が『チムひとりぼっち』（*Tim All Alone*, 1956）でした。受賞作だけあって、さすがによくできている作品で、筋をざっとみてみましょう。シリーズは多くが海へ出る話ですが、ここではチムが一航海終えて帰ったところからはじまります。帰ってみると、わが家に、‘Gone away, House to Let.’（あきや かします）という札が貼られています。チムは大ショックですが、思い直して「たとえ せかいじゅうを まわることになっても、おとうさんと おかあさんを さがしだそう」（なかがわちひろ訳）と決心し、海の大好きな両親だから、きっ

とどこか海辺の街にいるはず、と思ってまた船に乗り、働きながら、寄港する街々を訪ね歩きます。手がかりはなかなかつかめませんが、ある街で、通りすがりのおばさんに、両親のことを尋ねると、「まあ！ あなた、まいごね」と言われてしまいます。そのおばさんは「まいごのいえ」の人で、チムは手をつかまれて「まいごのいえ」の入り口へ引っぱってこられます。チムは手を振り払い、一目散に港へ逃げます。が、乗って来た船はすでに出港して、いません。「とにかく あのおばさんに みつからないようにするほかは ありません。チムは ベつの ふねに のびこみ、きゅうめいボートのしたに かくれました」。挿絵では、チムが隠れている救命ボートのすぐ下の甲板で、追いかけてきたおばさんが、船員に「ふきだし」で「おとこのこを みかけませんでしたか」と聞き、船員が「ふきだし」で「いいや」と答えています。チムはおばさんからはのがれましたが、無断で乗り込んだ船ではさんざんこき使われて、病気になってしまい、病人には用はないと、港で下船させられてしまいます。それに同情したひとりのおばさんが、チムを自分の家へ引き取り介抱してくれます。が、チムが元気になると、一人暮らしのおばさんは、「このまま うちにて、わたしの こどもになってくれないかしら」と言い出します。チムがあまり悲しそうな顔をしつづけるので、おばさんは両親を探す旅に彼を出してくれます。港には、チムが乗り逃がした船が、偶然停泊中でした。絵では船長が船上から「ふきだし」で「よう チム！ まったぞ！」と声をかけています。チムがほっとしたのも束の間、出港後間もなく船火事が起きて、全員が船を脱出。が、チムは飼っていたネコが船室に閉じ込められていると、制止を振り切って船にもどり、ネコを救出、運良く近くに浮いていたハッチの蓋に乗って逃げて、見知らぬ浜辺に漂着します。近くの街を歩いていると、ケーキ屋の店内で、泣いている女の人のを見つけます。それが、なんとお母さん！ 絵では、傍らのテーブルの客が「ふきだし」で「ぐうぜんって、あるものねえ」とつぶやいています。チムはお母さんに、「ふきだし」で「ものすごいほのお だったんだよ」と船火事の話を得意げに

します。お母さんの話で、両親は遊覧船が沈没した新聞のニュースで、死亡者名簿にチムの名を発見し、悲しみのあまり、チムの思い出が詰った海辺の家を引き払ったことを知りました。チムは両親といっしょに元の家へもどります。絵では、帰ってきたチムを見つけた友人たちが、「ふきだし」で「やった！ チムが かえってきたぞ」と叫んでいます。チムは自分を介抱してくれたあのおばさんに、感謝の手紙を書き、すべてがめでたく落着きます。

なんと偶然に偶然がつづくお話でしょう。いかにもロマンスらしい話運びですが、テンポが早く、スリルに満ちていて、ユーモアに富み、「お話」の醍醐味をたっぷり味わわせてもらえます。

『ルーシーのしあわせ』、『チムとルーシーとかいぞく』

＜チム・シリーズ＞の第2作で、チムのお姉さんクリスティアーナを主人公にした『ルーシーのしあわせ』(Lucy Brown and Mr. Grimes, 1937)については、最初にちょっと触れましたが、実は出版されると、すぐに物議をかもした作品でした。というのも、主人公であるルーシーは孤児で、おばさんの家で世話になっていますが、遊び相手がなくて寂しがっています。近くの公園へ行きますが、そこでも遊び相手がいません。しかしある日、公園で同じように独りでしょんぼりしているおじさんと出会い、「家に遊びにおいで」と言われて、おじさんについていく、という筋運びなのですが、これが非難の対象となりました。前作『チムとゆうかなせんちょうさん』はアメリカで出版されましたが、これもアメリカで(ロンドンと同時に)出版されました。するとアメリカの図書館員たちから、子どもが公園で、見ず知らずのおじさんに声をかけられて、ふらふらついて行くなんで、とんでもない、誘拐ではないか、と非難をはじめたのです。結局これは絶版の憂き目にあって、1970年に書き直されて、ロンドン、シドニー、トロントで、Second Editionとして再出版されました。富山房版の『ルーシーのしあわせ』は、この改訂版の邦訳です。改訂版では、ルーシーに声をかけたおじさんは、実はルーシーの身内のお

じさんだったということで、このおじさんがたいへんなお金持ちで、メイドの世話で独り暮らしをしていましたが、ルーシーを呼んで、新しく田舎に広い庭のある家を建てて、いっしょに暮らすこととなります。

その次の第3作『チムとルーシーとかいぞく』(Tim and Lucy Go to Sea, 1938)では、ルーシーはおじさんと何不自由ない暮らしをしています。友だちがいないのをやはり寂しく思っています。ある日「ともだちがいたら どんなに たのしいかと かんがえて」いるところへ、家の前を「おとこのこが とぼとぼと あるいて」くるので、声をかけ名前を聞くと、「チムだよ。ぼくは ふなのりなんだ。まえにのってた ふねがなんぼしちゃったから、つぎの ふねを さがしてるころさ」(なかがわちひろ訳)。これを聞いてルーシーは、おじさんに話して船を買ってもらうことになり、話ほとんどん拍子に進んで、おじさんもメイドのスマウリーさんと共に、ルーシー、チムといっしょに航海にでます。すると、嵐に会い、漂流している舟をみつけて救助します。が、それが海賊集団で、助けられた船をのっとりとうとします。反乱者を海軍にひきわたすまで、スマウリーさん、チム、ルーシーが大活躍するのが話のメインになります。

最初にお話ししたように、第二次世界大戦前の<チム三部作>はこれでいったん終了します。そして、戦後1949年に、つづきの第4作『チム、ジンジャーをたすける』(Tim to the Rescue, 1949)が出てシリーズが再開されます。新たにジンジャーという、性格がチムとは正反対の、勉強嫌いで、怠け者で、人のいうことを聞かない、ならず者の代表みたいな男の子が登場して、これがまたいろいろと珍事を巻き起こして、続編を活気づけます。また、もう一人新顔が、次の第5作に登場します。シャーロットという名の少女で、難破船から救命胴衣を着けて、失神状態で陸に漂着したのを、チムとジンジャーが助けて<チム・シリーズ>の仲間に加わります。

『チムとシャーロット』

センダックが特に好き、と言った『チムとシャー

ロット』(Tim and Charlotte, 1951)が、題名からも想像がつくように、今お話したシャーロットという新顔が登場する話で、以後の<チム・シリーズ>で、チム、ジンジャーと共に活躍することとなります。

今も言いましたように、シャーロットは失神して救助され、チムの家で介抱されます。失神はじきに覚めますが、記憶喪失で、なにを聞いてもわかりません。とりあえずシャーロットという名前で、家族の一員となり、手がかりを求めるチラシが街のあちこちに貼りだされます。やがてある日、アガサお婆さんというお金持ちが現れて、シャーロットを引き取りに来ます。偶然、本名がシャーロットで、彼女は孤児でしたがアガサの家のお嬢さまとして育てられていたのです。友だちのいないアガサの家よりも、チムの家が大好きになったシャーロットを、アガサは無理やり元の家へ連れ戻します。友だちの味を覚えたシャーロットは寂しさで神経衰弱のようになり、どんどんやせ細っていきます。極端に痩せて、最後は針金のようになってしまいます。このくだりをセンダックが「ドイツ的と言いたいほどの突飛さ」があると指摘しているのは、私の勝手な推測ですが、例のハインリッヒ・ホフマンの『もじゃもじゃペーター』(Struwwelpeter, 1845)の中の「スूपぎらいのカスパール」を連想してのことではないでしょうか。カスパールも針金状にやせ細ります。そういう大げさなユーモア、ナンセンスでしょうか、それをドイツ的と称したのではないかと推測するのですが、いかがでしょう。それはともかくとして、シャーロットは最後にはお医者さんの助言で、チムの家で暮らすことができるようになります。

こうして<チム・シリーズ>を見てくると、いづれも大波乱があり、偶然が幸いして、結びはハッピーエンドとなる、パターンとしては類似していますが、機転がきき、行動的で、さわやかなチム少年の性格が、シリーズを通して生き生き描かれていて、全12冊を読みつぐときに、<お話を読む醍醐味>をたっぷり味わうことができます。

『寝起きの悪かったジョニー』

さて、それでは<チム・シリーズ>以外の絵本

を、いくつか見てまいりましょう。

まず『寝起きの悪かったジョニー』(*Johnny's Bad Day*, 1970 邦訳なし)を紹介しましょう。文字なし絵本ですが、日本版はありません。本のサイズは19.3センチ×15センチでやや小ぶりの絵本です。黒インキによるペンの線と、同じくクロス・ハッチングの陰影による絵で、見開きのページの地塗りに、淡い緑色と橙色の平塗りが交互にほどこされている、落ち着きと渋味を感じさせる絵本です。絵がすべてを語っているので、ページを順にめくっていけば、誰でもストーリーを追うことができます。

英語で 'get up on (get out of) the wrong side of the bed' (「朝から虫の居所が悪い」「一日中機嫌が悪い」という意味の慣用語があって、それが使われています。表紙の絵がまさにジョニーが朝、ベッドをロングサイドから起きた図です。ジョニーは、寝乱れ髪で、洗面もせず、食卓へ下りていくので、母親に叱られ、彼の 'Bad Day' がはじまります。行儀の悪い食事の仕方を叱られ、腹いせに妹の髪を引っ張り、食堂を追われ、かなづちでおもちゃを壊して父親に叱られ、家を飛び出して、菓子屋の前でズボンのポケットを探るが銭はなし、子どもの遊ぶ空き地へ塀の穴から入ると、板の裂け目でズボンがかぎ裂きに、あげく遊び仲間には入れてもらえず、突き飛ばされて転んで、すり疵を負い、泥を払うと、シャツのポケットから銅貨が一枚出てきたので、さっきの菓子屋へもどると、母さんが急に恋しくなり、街角の花売りから花を買い、母さんのお土産に。そして、母さんの胸に抱きついて、ハッピーエンドで一日が終ります。少年のいらいらや、怒りや、腹いせや、ふてくされや、自己憐憫など、感情の起伏が、全身のポーズで描き分けられていて、ここでも画家の確かなデッサン力をたっぷり味わうことができます。ストーリーがシンプルで、真っ直ぐに、そしてそれから、と語られているので、3、4歳児あたりから十分楽しめる内容でしょう。大人はたぶん、ある郷愁をもってこれを愉しむはずですが。

『つきよのぼうけん』

今度は晩年に近い作品『つきよのぼうけん』

(*The Night Ride*, 1973) を愉しんでみましょう。「Ride」は「乗り物に乗ること」ですから、文字通りにタイトルを訳すと「夜のドライブ」ということになります。これは人形物語です。人形物語といえば、他に邦訳のある『まいごになったおにんぎょう』(*The Little Girl and the Tiny Doll*, 1966) もありますが、両作品とも、エインジェルダ・アーディゾーニが文を書き、エドワード・アーディゾーニが絵を描いています。エインジェルダはエドワードの息子さんフィリップの奥さんですから、言ってみればく舅と嫁の合作というわけです。

『まいごになったおにんぎょう』はスーパーの冷凍庫に落とされたお人形、すなわちくまいごになったおにんぎょうが、人形好きの少女に救われる話ですが、『つきよのぼうけん』もゴミ箱に捨てられたお人形たちが、自分たちの意思でゴミ箱から脱出して、活動するうちに、偶然出会ったやはり人形好きの少女に助けられる話です。ウィリアム・ニコルソンの『かしこいビル』(*Clever Bill*, 1926) と同じ系統で、人形が自立的な意志を発揮して、幸せな人形人生を勝ち取る物語です。

ダンディというクマ人形と、ケイトという少女人形と、小さいテディベアの3人形は、持ち主の子どもたちが大きくなって、暗い戸棚の奥に長いこと放置されていましたが、クリスマスが近づいたある日、大人のおぼさんの手でゴミ箱に捨てられてしまいます。しかし、人形たちはそこにじっとしてはいません。その夜、ゴミ箱の中のこわれた傘や柄の長いスプーンなどを使って蓋を払いのけると外へ出て、人気の絶えた夜の街を歩きはじめます。やがて町外れの草むらに、古いおもちゃの機関車をみつけます。色ははげていますが、まだ使えます。早速それを引っ張り出して乗ると、月夜の田舎道を走り始めます。寝静まった町の商店街なども通り抜けますが、夜風は冷たく、疲れも出てきました。どこか落ち着ける家はないかと思ひ始めたころ、近くに大きな音が聞こえてきたので、そちらへ近づくと、踏み切りをジーゼル機関車が通過するところでした。踏み切り番の家に灯りがともり、窓から少女が列車を見えています。少女の背後には、クリスマス・ツリーも光って見

えます。と、少女はわが目を疑うようにして、家から飛び出してきました。少女は夢でないときとると、おんぼろ機関車に乗って疲れたようすの人形たちを一人一人、やさしく抱きあげて、家の中のクリスマス・ツリーの元へ連れていきました。ダンディとケイトと小さなテディベアは、ついに新しい安住の家を見つけたのです。しかし、3人の人形はあのすてきな夜のドライブのことは、何時までも忘れられませんでした。

アーディゾーニによる力強いペンの太い輪郭線と、やわらかな水彩による彩色の挿絵は、人形たちのはつらつとした動きを見事にとらえています。そして、先ほどの『寝起きの悪かったジョニー』と似たスタイルで描かれた『まいごになったおにんぎょう』の挿絵とは異なるスタイルの絵で愉しめるこちらの絵本に、一味違った人形物語を読むことができます。

『ダイアナと大きなサイ』

『ダイアナと大きなサイ』(Diana and her Rhinoceros, 1964) は、読み終わって、何か不思議な感じにさせられます。どこか物悲しいところがあるお話でもあります。

主人公は、題名のダイアナで、初めは少女で登場します。とてもおとなしい動物の犀さいと出会ってから、二人はいつまでもいっしょに生活し、いっしょに年をとり、そして、お話の最後は、こう結ばれています――

さて！ もしあなたが、夜おそく外そとにいて、目をこらして見たら、そして、もし 運うんがよかったら、とてもとても年としとった女おんなの人が、白いふくをきて、とてもとても年としとったサイを つれているのを見かけるかもしれません。

もし見かけたら、それは、ダイアナとサイです。ふたりが、リッチモンドの町まちの、クイーンズ通りの並木道なみきみちで夜のさんぽよるをしているのです。

ええ、まちがいありません。だって、白いサイなんて、めったにいないものじゃありませんからね。(阿部公子訳)

ここには「リッチモンドの町のクイーンズ通りの並木道」と、イギリスはロンドンの実在の地名までちゃんと記されています。実は、お話のはじまりを読むと、

ある冬ふゆの夕方ゆうがたのことでした。リッチモンドの町まちのクイーンズ通り43番地どおのジョーンズさんぼんちの家いえでは、ジョーンズさんと、おくさんと、むすめのダイアナが、居間いままでくつろいでいました。

とはじまっていたのです。最初から実話もどきでしょう。(ちょっとここで、別の話をしますが、邦訳では<ジョーンズさん>と簡略化されていますが、原書は‘Mr Effingham-Jones’でして、このように間にハイフンが入っている苗字には貴族が多く、第1ページの絵を見ると、それらしい高級住宅の居間を感じさせます。ついでに、読者から見て、居間の正面の壁にある額縁の絵、それはアーディゾーニ自身の‘The Drinkers’(呑み助たち)という石版画(リトグラフ)で、自分の作品をこのように絵本に入れるのは、画家の遊びですね。)

さて、第1ページの左側のページ、タイトル・ページの裏になりますが、献辞が印字されていて、曰く「リッチモンドの町のクイーンズ通り43番地に住む 孫まごのスザンナ、クエンティン、ドミニクへ」とあります。お解かりでしょう、<チム・シリーズ>が息子と娘のために制作されたように、この絵本はアーディゾーニの長女クリスティアーナの子どもたち、すなわち<孫>たちのために作られたものでした。

で、ダイアナが自宅の居間で両親とくつろいでいると、突如隣の部屋からサイが現れます。お父さんは真っ先に長いすのうしろへ隠れ、お母さんは、サイが角つのに赤ん坊の上着を巻いていたので、気絶してしまいます。しかし、ダイアナは「ものわかった子ども」でした。「サイが、にんげんのおかんぼうなんか たべるはずないわ。このサイは、かわいそうに、ひどいかぜをひいているのよ」と言って、薬を与え、バターつきトーストをたっぷり食べさせます。

矮小化された大人のお父さんは、警察や消防や

動物園に電話をかけて救助をたのみますが、銃を持った男が3人来たときには、ダイアナが「これは、いいサイよ。いっしょにくらすつもりなの。庭の物置を おうちにすればいいんだから」と言って、男たちを追いかえしてしまいます。サイが角に巻いてきた上着も「もののわかったあかちゃん」が「サイのことをすきになったので、自分から毛糸のうわぎを あげた」のでした。その赤ちゃんも「大きくなって、やがてりっばな青年になりました。そして、けっこうして、じぶんの家庭をもちました。けれども、かれは、おくさんと子どもたちをつれて たびたびダイアナにあいにきては、サイとあそぶのでした」。

こうして長い歲月、ダイアナとサイは幸せに暮らしつつ、最初に読みましたように、今も二人は「リッチモンドの町の、クイーンズ通りの並木道で 夜のさんぽをしているのです」。

いかがでしょう、不思議なお話でしょう。ダイアナとサイがそんなに歳をとって、両親の「ジョーンズさん夫婦は、とてもとても年をとって、海のそばのちいさな家に ひっこしました。・・・ふるい家には、ダイアナとサイだけがのこりました。けれども ふたりは、さびしくはありませんでした。近所の子もたちが、よくあそびにやってきましたからです」と語られているのです。

日本語版の訳者である阿部公子さんは、訳書の折込みで、この絵本をいっしょに読んだ勉強会の仲間たちの意見を紹介しています、曰く「ひとつのものを変わず愛しつつけることの大切さを感じると子どももきっといると思う」と。さて、みなさんは、この絵本のお話をどのようにお読みになりますか？とてもユニークな、スーパーリアル(シュール)なお話と思いませんか。

『小さな乗合い馬車』

では、今度は、他の作家の作品にアーディゾーニが挿絵をつけたものを、いくつか見てまいりましょう。お手元のリストで、ジェームズ・リーヴズの作品には、かなりたくさん描いていますが、そこは後ほどご紹介することにして、まず<絵本>ということで、グレーム・グリーン(1904-91)とのコラボレーションを見ましょう。

『小さなきかんしゃ』(The Little Train, 1973)、『小さなしょうぼうしゃ』(The Little Fire Engine, 1973)、『小さな乗合い馬車』(The Little Horse Bus, 1974)、『小さなローラー』(The Little Steamroller, 1974)と4点ありますがいずれも、童話『きかんしゃ やえもん』や、名作『雲の墓標』の作者である名文家の阿川弘之さんが訳されていて、さすがに見事な日本語訳です。全部、国際子ども図書館で見ることができます。

グレーム・グリーンは、映画「第三の男」や「落ちた偶像」などの原作者で、『権力と栄光』や『事件の核心』といった大人の小説で有名な作家でした。イギリスでは、大人向けの作家が子ども向けの作品を書いて、それがすぐれた児童文学作品という事例がひじょうに多いのですが、このグリーンのもも例外ではありません。グリーンは大人向け小説は、私はかなり読んでいますが、グリーンにこういう子ども向けの作品があるのは意外でした。とてもいいエンターテインメントです。

各作品のタイトルを見てわかるように、人間ではなく、機械を擬人化したマシーン・アニミズムと呼ばれる作品で、バージニア・リー・バートンの『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』(Choo Choo, 1937)や、先ほどの『きかんしゃ やえもん』などと同タイプのもので、4冊の中で、『小さな乗合い馬車』を見ることにしましょう。サイズは18.5センチ×24.5センチと横長で、ペンの黒の線描に、水彩絵の具を薄塗りした、全ページがカラーの絵本です。

話は、“Goose lane”(がちょう通り)で食料品店を商うポッターさんにまつわるものです。近所の人たちに愛されていた店でしたが、店の筋向いに突然、大きなスーパーマーケットができます。経営者で金儲け主義のウィリアム・ポプキンス卿は、客の買い物を「ビューティという名のめす馬が引くきれいな2りん馬車」で配達するサービスをして、ポッターさんの客をとっていきます。ポッターさんも対抗して、それまで倉庫に放置していたペンキのはげた小さな乗合い馬車>を引っぱり出して、子どもたちの遊びあいてに飼っていたブランディという老馬に、それを引かせて、客の買い物を配達しますが、店はさびれる一方で

した。ホプキンス卿は、儲けたお金を毎日、例のビューティの引く2りん馬車で、銀行へ預けに行っています。

町では、名うての強盗団の手配書を警察が出して、犯人逮捕に1,000ポンドの賞金がかけてられています。ある朝、<小さな乗合い馬車>が、裁判所通りのかどを曲がろうとすると、交通警察官に呼び止められました。そのとき突然ドタン、バタン、ガタンと、あの<2りん馬車>がそばを走り抜けました。見ると馬車に乗っているのは「いったいだれなんだ? <ヒヒーン、どろぼう>と小馬のブランディがいなくなりました。<追っかける!>と乗合い馬車がさけびました」。ここから<小さな乗合い馬車>の独走がはじまります。<馬車>は御者をふりおとし、御者なしで追跡がはじまります。警察官は警察署へ電話をかけて、全パトカーの出動を要請します。そのため、ピカデリー広場はパトカーで全部動けなくなり、「ぬすまれた2りん馬車を追いかけているのは、小さな乗合い馬車だけ」になりました。ところが、乗合い馬車は途中、信号でストップをくって、2りん馬車を見失ってしまいます。

老馬ブランディは疲れて追跡をあきらめようと言いますが、「乗合い馬車は、わる者に乗ったあのだの2りん馬車がかわいそうでたまりませんでした。長い間そう庫の中で見すてられていた小さな乗合馬車(ママ)は、人に見すてられるのがどんなにつらいかよく知っていたので」、「ぼく、こわれてもいい。どこまでもさがしにこうよ」と追跡を止めません。そして、なにか手がかりはないかと町から町へ、夜通し探しまわります。警察の方は、犯人の指紋はみつけましたが、犯人はみつけていません。やがて、乗合い馬車は道のわきころがって光っている2りん馬車のランプを見つめます。これを手がかりに2りん馬車のひそんでいる場所を突き止めることができました。犯人たちは、そこで馬車を捨て、金だけもってテムズ川をボートで逃げるところでした。物語の最後は、<小さい乗合い馬車>が表彰され、犯人にかけられた1,000ポンドの賞金がポッターさんに贈られて、食料品店は元の賑わいを取りもどします。

絵本のイラストレーションをご覧になれば、伝統的な描き方で、先ほど読んだ、センダックのことばの通り、悠揚迫らず、時流に流されないアーディゾーニの態度を、ここでもまた確認することができるでしょう。

実は、この絵本はこれより前に他のイラストレーターによって一度出版されていました。1908年生まれのDorothy Craigieというイラストレーターで、ルース・エインズワースやキャサリン・ストーの初期の作品にも挿絵を描いている画家ですが、1946年から53年にかけて、グリーンズの4冊の絵本に挿絵を描いています。『小さな乗合い馬車』は1952年に出ています。19センチ×22.3センチのほぼ四角いサイズで、黒の線描画とカラー絵が、見開き交互になされている絵本です。色彩は明るい赤、青、黄、緑、茶を使って、アーディゾーニよりずっと華やかで、グラフィックなスタイルの絵です。コラージュではありませんが、コラージュ風な印象の画で、アーディゾーニと比べてずっとモダンな絵です。あくまでも好みでしょうが、私自身はアーディゾーニの絵を見た後にこれを見ると、作品内容から見て、アーディゾーニのスタイルの絵の方が、作品にずっとマッチしていると思います。

『マローンおばさん』

次に、エリナー・ファージョンの韻文物語にアーディゾーニが挿絵をつけた『マローンおばさん』(Mrs. Malone, 1962)を見ることにしましょう。

原書は、サイズが11.5センチ×14.6センチで、内表紙を入れて12見開きページの袖珍版です。(邦訳書は、12.4センチ×17.2センチと少し大きく、18見開きページの作りになっています。これは原書では見開きの左右に絵が組まれている箇所が多いのに対して、邦訳版では見開きの片面が絵、もう片面がテキストというレイアウトにしてあるためです。私はこの本がとりわけ好きで、当初から英語版で見ていたので、邦訳版は原書のイメージと少し違い、今も英語版に愛着を持っています。こういう詩の本はブック・デザインが愛書家にとっては、愛着の対象としてかなり大きな比重をしめるものです。) 物語は――

マローンおばさん 森のそばで
ひとり貧しく くらしていた
お皿には ひときれのパン
だんろには なべひとつ
話し相手も じぶんだけ
ひとりぼっちの さびしいらし。

(阿部公子、茨木啓子訳)

とはじまります。雪が深く降り積もったある冬の月曜日に、おばさんの家の窓辺にスズメが一羽やってくると、すぐに窓を開けて、中に入れてやり、胸にだいておばさんはつぶやきます――

「こんなによごれて
つかれきって！
あんたの居場所くらい
ここにはあるよ」

それから、毎日いろんな生きものが、おばさんのところへやって来ます。ネコ、六匹きの子ギツネを連れて母さんギツネ、ロバ、クマ、その度に「あんたがたの居場所くらい ここには あるよ」と言って、おばさんはみな家に入れてやり、食べ物なものにもかも、分けあたえて「神さまは ご存じさ、どんな動物たちだって みんな 生きていかなきゃいけないってことを」とつぶやくのでした。ところが、土曜日の夕食時になっても、おばさんは起きてきません。動物家族は「ねむっているのよ」、「ねかせておこう」と言っていました、やがてロバの背におばさんを乗せて、みんなは木立をくぐり、山を越え、ひと晩中歩きつづけて、日曜日の朝「最後の雲の峰を越え 天国の門へと進んで」いきます。動物たちは門番のペテロに言います。「貧しくて なにも持っていないけれど、広く大きな心で わたしたちに 居場所を与えて」くれたマローンおばさんを連れてきました、と。マローンおばさんは急に目を覚まし、びっくりして言います、「まあ、いったい ここはどこ？ わたしは なにを見ているの？ おまえさんたち、帰りましょう。ここは わたしの来るところじゃないよ」。

けれども 聖ペテロさまは いった。
「母よ、入って王座のそばへ おゆきなさい。
あなたの居場所が
ここにはありますよ、マローンおばさん」

なんと美しく感動的なお話でしょう。ファージョンはこういうお話をたくさん書いています。アーディゾーニはこれに、黒インキによるペンの線画とクロス・ハッチングで明暗を描き分けた、いぶし銀のような vignette (小品画) の挿絵をつけています。背をまるめたふくよかな体つきと顔の表情が、貧しいけれども心の芯までやさしさのかたまりのようなマローンおばさんのイメージを的確に表現しています。私はファージョンの伝記(アナベル・ファージョン著『エリナー・ファージョン伝：夜は明けそめた』筑摩書房 1996)を訳して、作品ともどもファージョンという人とその生涯に深く触れていますが、このマローンおばさんはまさに風貌も性格もファージョンその人を彷彿とさせます。そして、挿絵画家のアーディゾーニもファージョンの人と作品を愛して、1955年にカーネギー賞を受賞した、ファージョンの珠玉自選短編集『ムギと王さま』(The Little Bookroom, 1955)に添えた挿絵に、ファージョンもまた「わたしの思っていた通りの世界がここにある」といって感激したといえます。作家と挿絵画家の理想的なコラボレーション作品の一つと、この『マローンおばさん』を称していいと思います。

『ライラックの茂みで鳴くクロウタドリ』など

作家と挿絵画家のベスト・コラボレーションといえば、ジェームズ・リーヴズとアーディゾーニのそれも理想的な一例に数えられるでしょう。リーヴズはウォルター・デ・ラ・メアに次ぐ20世紀の児童詩人として高い評価を受けていますが、自作の詩集のほかにも、詩のアンソロジーや昔話集やグリム童話集などを編み、また『ドン・キホーテ』の翻訳なども手がけていて、いずれにもアーディゾーニが挿絵をつけているのが、リストからお分かりいただけるでしょう。ここでは『ライラックの茂みで鳴くクロウタドリ』(The

Blackbird in the Lilac, 1952 邦訳なし) をご紹介しましょう。リーヴズとアーディゾーニの代表作といわれているものです。

表題の詩は「明るい夏の日に出かけの私に、クロウタドリがライラックの茂みでうたうよ、<運はひらける、運はひらける>と。／はなやかなりボンや悲しいバラッドの本など携えて、私はそこはかとでかけるが、故郷を慕う心は、背に負った荷よりも重い。／<みなさん いらっしゃい、いらっしゃい>と、橋の上や街角で、また村の原っぱなどで、おもちゃやその他をひろげて叫ぶけど、誰も買ってはくれない。／それでも、私はうたうよ、バラッドを。そして、想うよ、故郷を。運のひらける道を求めて。誰も私の唄を聞いてはくれないが、運がひらけるまでは、故郷へは帰らない。／なぜなら、ライラックの茂みから今も、幸運を願うクロウタドリの甘い歌声が聞こえてくるから。たのもしい夏の日差しの下で鳴くクロウタドリに、うそいつわりがあるはずはないから」。詩の翻訳はわたしには不可能ですから、原文をここに挙げましょうー

The Blackbird in the Lilac

'Good fortune!' and 'Good fortune!'
I heard the blackbird in the lilac say,
As I set out upon the road to somewhere,
That sunny summer's day.

Gay ribbons and sad ballads
And suchlike things I carried in my pack,
But thought of home was heavier than the load
I had upon my back.

'Come buy, come buy, fine people!'
I cried on bridges and in market squares;
On village greens I showed my toys and trifles,
But none would have my wares.

Yet still I sing my ballads,
And think of home, and go where fortune leads,
Homewards I will not turn without good fortune,

Though none my singing heed.

For still I hear the blackbird
Wish me good fortune from the lilac sweet;
Such songs as his, amid the summer's promise,
Could never be deceit.

アーディゾーニは『マローンおばさん』のときと同じスタイルで、モノクローム画の挿絵をつけています。この歌では、行商の男が一人、板塀沿いの道を歩いていて、男は塀の中に広がるライラックの枝蔭のクロウタドリを見上げています。後方の塀の角からは、小さな男の子と女の子が、覗くように男を見送っています。

イギリスでは昔、チャップブックという粗末な冊子が庶民の娯楽として楽しまれていました。チャップマンという行商人たちがそれらを携えて、全国を売り歩いていました。彼らは故郷に家族をおき、出稼ぎで旅回りをしていました。品物を売り尽くすまで、家族の元へは帰れません。この唄には、そういう旅商人のペイソスがしみじみうたわれています。時間の関係でここでは、詩集の一編しかご紹介できないのが残念ですが、この本を手にする機会があったら、是非アーディゾーニの挿絵を詩とともに味わってみてください

詩集の挿絵ではリストに、先ほど名を挙げたウォルター・デ・ラ・メアの詩集『孔雀のパイ』(*Peacock Pie*, 1946)があります。これもアーディゾーニの挿絵による代表作の一つとされています。これは詩集自体が有名で、最初(初版、1913年)は挿絵なしでしたが、1916年にW.ヒース・ロビンソンが挿絵をつけてから、幾人ものイラストレーターが挿絵を試みて、アーディゾーニのそれ(1946年)が決定打となりました。幸いアーディゾーニ版が、まさきるりこさんの訳で瑞雲舎から1997年に出て、国際子ども図書館でも閲覧できますから、これも是非、手にとってみてください。中の一編「銀」は私の特に好きな詩です。

銀の光をふりまきながら、／静かにゆっくり、
月が夜の空を歩む／あちらこちらをじっとみつ
めて／月は銀の木になる銀の実を見る。／銀に

輝く茅葺^{かやぶ}きの、屋根の下には銀の窓がひとつ、
 ／またひとつ、と銀の光を受けてしずもる。／
 犬小屋の中では、銀の前足をそろえ、犬がまど
 るむ。／暗く影になったハト小屋からは、／白
 い胸をのぞかせて、銀色の羽につつまれたハト
 が眠る。／カヤネズミが走っていく、／銀色の
 つめと銀色の目を光らせて。／銀の流れの中、
 銀の葺のそばで、／魚は動かず銀色に光る。

(まさきるりこ訳)

アーディゾーニの挿絵は、地表に視点をおいて、
 夜空の満月を見上げる仰角で描かれています。木
 戸は外に開かれて、右手の家の前の犬小屋からは
 眠っている犬の頭部と前足が見え、小屋の向うは
 道に沿って塀が真っ直ぐに走り、塀の内側には木
 立が茂っています。こうこうたる月光が正面から
 射して、風景は逆光で光っています。すべてがペ
 ンの線とクロス・ハッチングの明暗で描かれてい
 て、銅版画を見るようです。私の手元の原書は黒
 インキです。日本語版では濃いセピアで印刷がさ
 れていますが、夜のいぶし銀の光景は、黒インキ
 の方がふさわしいでしょう。元の英語の詩は、タ
 イトルの‘Silver’から、冒頭‘Slowly, silently, now
 moon / Walks the night in her silver shoon;’と
 歯擦音が反復して響き、犬小屋の場面の‘Couched
 in his kennel, like a log, / With paws of silver
 sleeps the dog;’など、くり返される‘s’音の響き
 が、なんと心地よい透明感を味わわせてくれるこ
 とでしょう。

アーディゾーニの多様な世界

以上、絵本作家として、また、イラストレーター
 として、アーディゾーニが生みだした作品を、ほ
 んの一部でしたが、瞥見してまいりました。しか
 し、彼の世界はひじょうにヴァライエティに富ん
 でおまして、プロフェッショナルな活動の他
 に、私生活で残したさまざまなものもあります。
 それらをコンパクトに見られる本が、こぐま社か
 ら翻訳出版されている『エドワード・アーディゾー
 ニ 友へのスケッチ』（ジュディ・テイラー編、
 阿部公子訳）です。原書ジャケットの折り返しの
 内容紹介が、邦訳書のカバーの折り返しに上手に

訳出されているので、引用しましょう。「アーディ
 ゴーニが、家族や友人に贈った手紙には、すばら
 しいスケッチや水彩画が描かれていました。わけ
 ても、従軍画家としてイタリア、エジプト、北ア
 フリカなどを旅した手紙には、その土地の人々の
 生活が生き生きと描かれています。手紙のほかに、
 旅日記『船上の休日日記』、『ディエップへの船旅』、
 オペラ鑑賞の一日を描いた『グラインドボーン
 の一日』、そして空想上の手紙『スノッドグラス
 への手紙』も収めました。彼の人物や生活、交友
 関係などを物語るこれらのスケッチは、どれも彼
 独特のユーモアと深い愛情にあふれています。絵
 本とはまた違ったアーディゾーニの素顔を発見
 することができるでしょう」。

この本の中から一つをご紹介しますと、さきほど
 『チムとシャーロット』を見ましたが、お話の初
 めに、シャーロットが海岸に漂着する場面があ
 りましたね（日本語版で6～7ページ見開き）。そ
 この絵とほぼ同じラフ・スケッチが、1950年にバー
 ナード・ミークスへ宛てた手紙に描かれていて、
 手紙文には「今、新しいチムの話 [チムとシャ
 ーロット] に取りかかっています。この下書きで、
 雰囲気だけでも味わってください。お話は、このシ
 ーンからはじまります。小さい女の子は、死んで
 いるわけではありません。救命胴衣をつけており、
 ここからドラマが展開してゆきます・・・シャ
 ーロットは、今回はじめて登場しました。お気に
 入るといいのですが・・・」と書かれています。こ
 のような手紙など、アーディゾーニ・ファンにと
 ってはたまらなく興味深い、エピソードと絵が盛
 りだくさんな本なのです、これは。

編者のジュディ・テイラーさんはビアトリクス・
 ポターの研究家でもあります。イギリスの児童
 書出版の名門であるボドリー・ヘッド社 (The
 Bodley Head) の名編集者として、アーディゾー
 ニと親しく交わっておられました。英語名
 EdwardのニックネームはTedなので、ジュディ
 は編著の〈まえがき〉で、アーディゾーニをテ
 ッドと呼び、思い出を綴っています。「おなじみ
 のアーディゾーニの自画像も、スケッチにひんぱ
 んに登場する。それを見ると、在りし日の彼の姿
 が思い出される。物腰は穏やかながら、何かに熱心

になると、他人をも巻き込んで夢中にさせてしまうところがあった。片時も手ばなさなかつたかぎたばこも懐かしい。アーディゾーニのスケッチは、その類まれな画才と、独特のユーモアの片鱗をうかがわせるものである」と、そして、「この素晴らしい芸術家への愛と深い尊敬をこめて」スケッチ集を編んだ、と言っています。私は、今日はアーディゾーニの生涯というか、伝記はあえてお話ししませんでした。このジュディの〈まえがき〉に簡潔に伝記が記されているので、ご参考になさってください。

アーディゾーニの自画像といえば、『トムは真夜中の庭で』の作者フィリパ・ピアスさんに『ハヤ号セイ川をいく』(Minnow on the Say, 1955)という作品があります。その挿絵をアーディゾーニが描いています。その挿絵は、物語の各章の初めに vignette (飾り絵) の形で描かれるスタイルによっています。これは、読者が章の内容をイメージ化するとき、誘い水となるタイプの絵を添える形で、そういう挿絵を Headpiece (章頭飾り) といいます。『ハヤ号』の第12章の〈章頭飾り〉では、川で平底舟を漕ぐ人物が描かれていますが、それがアーディゾーニの自画像であると、私はピアスさんご本人から教えていただきました。アーディゾーニの自画像は、ご本人がその通りですから当然のこと、丸顔で、ふんわりとまあい体型で描かれています。彼が描く〈マローンおばさん〉のようでもあり、また、ファージョンのふくよかな姿とも重なるので、共にいつくしみ合ったというアーディゾーニとファージョンの、二人の温かい、ヒューマニティ豊かな、お人柄がアーディゾーニの絵を通して伝わってきます。

さて、リストの〈関連資料〉に挙げてある『生涯を深い友情で結ばれた わが父とエドワード・アーディゾーニ』(My Father and Edward Ardizzone, A Lasting Friendship, 1983 邦訳なし)は、画家オーガスティン・ブースが、画学生時代から深い交わりをもった友人アーディゾーニから、毎年クリスマス・シーズンに送られてきた手描きのカードを、息子さんのエドワード・ブース・クリボンが整理して編集された本です。機智と諧謔に富んだ手描きのクリスマス・カードは、アーディ

ゾーニの気取らない、明るい人柄があふれたスケッチで、こんなにすてきなクリスマス・カードを毎年もらえたら、どんなに幸せだろうと、羨ましくなります。

リストの〈関連資料〉にはもう一つ、ご子息のニコラス・アーディゾーニが編纂した『エドワード・アーディゾーニの世界 エッチングとリトグラフ 解題付類別目録』(Edward Ardizzone's World, The Etchings and Lithographs, an Introduction and Catalogue Raisonne, 2000 邦訳なし)というのがあります。この本には、これまで見てきたものとは違う activity が集められています。すなわち、本のタイトルにあるように、エッチングとリトグラフという printmaker (版画制作者) としてのアーディゾーニの作品が集められているのです。これらの画業によって、アーディゾーニは、19世紀のローランドソン、ジョージ・クルックシャンク、『パンチ』誌で活躍したチャールズ・キーンらの系譜に連なるイギリス・デッサンの輝かしい伝統の継承者と評価され、また、18世紀のウィリアム・ホガースや、フランスのオノレ・ドーミエ、ギュスターヴ・ドレらの線描版画の伝統継承者でもあるとされています。この画集を見ると、画題としては、海辺や船舶の景、写生画、都市の風景、バブ居酒屋の様子、恋人たちの熱愛の姿、学校・大学のキャンパス風景、余暇を楽しむ人々の姿、娯楽街のストリート・ガールなどに、画家として旺盛な好奇心を発揮して、それらを人情味あふれる視線で観察し、スケッチしています。タブロー画ばかりでなく、ポスターから、地下鉄駅の広告や、食堂のメニューまで、実に幅広い分野でも活躍しています。第二次世界大戦では従軍画家として戦場におもむきましたが、ロンドンの空襲時、地下鉄のチューブをシェルターに避難した人々の姿を描いていて、戦時風俗の記録画としても価値がありそうです。

アーディゾーニは、母方の曾祖父が一等航海士で、アフリカの南、喜望峰をまわって世界を航海して、絵入り航海日誌を残していたそうです。少年時代からそれを見ては、海に憧れ始めたようです。また、お母さんがとても朗読がうまくて、子どもたちにディケンズの小説を上手に読んで聞か

せてくれたようです。そのお母さん自身がまたそのお父さん、つまりアーディゾーニのおじいさんから、よくお話を語り聞かせてもらっていたとい
うので、そうした家族内の伝統というか環境が、お話の名手エドワード・アーディゾーニを誕生させたの
かもしれませんね。

今日は、私のアーディゾーニへの愛着が、少しはお伝えできたでしょうか。

(よしだ しんいち 国立国会図書館客員調査員、立教大学名誉教授)

「エドワード・アーディゾーニ」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	The little bookroom	Eleanor Farjeon 作 Edward Ardizzone 絵	Oxford University Press 2004	Y8-B3066
	ムギと王さま	E. ファージョン作 石井桃子訳 エドワード・アーディゾーン絵	岩波書店 1959	児 933-cF22m
	ムギと王さま	ファージョン作 石井桃子訳 エドワード・アーディゾーン絵	岩波書店 1961	児 908-1922-(9)
	ムギと王さま	エリナー・ファージョン作 石井桃子訳 エドワード・アーディゾーニ絵	岩波書店 1971	Y7-2195-(3)
2	The Otterbury incident	C. Day Lewis 作 Edward Ardizzone 絵	Heinemann 1950	Y8-B3232
	オタバリの少年探偵たち	セシル・デイ・ルイス作 瀬田貞二訳	岩波書店 1957.1	Y9-N03-H360
3	Edward Ardizzone : a bibliographic commentary	Brian Alderson 編	Private Libraries Association 2003	YZ726.6A-B3
4	Little Tim and the brave sea captain	Edward Ardizzone 作・絵	Lothrop, Lee & Shepard Books 2000, c1936	Y17-A6254
	チムとゆうかんなせんちょうさん	エドワード・アーディゾーニ文・絵 瀬田貞二訳	福音館書店 1963	児 933-cA67t
	チムとゆうかんなせんちょうさん	エドワード・アーディゾーニさく せたていじ訳	新版 福音館書店 2001.6	Y18-N01-235
5	絵本の魅力：ビュイックからセンダックまで	吉田新一著	日本エディタースクール出版部 1984.3	YZ726.5- ヨシ
6	Mr Gumpy's outing	John Burningham 作・絵	Cape 1970	Y19-A837
	ガンピーさんのふなあそび	ジョン・バーニンガムさく みつよしなつややく	ほるぶ出版 1976.9	Y17-5237
7	私の出会った子どもの本「おばさんの声がきこえた」 (『母の友』 1994年9月号 所収)	東明美著	福音館書店	Z6-76
8	Caldecott & Co. : notes on books and pictures	Maurice Sendak 作	Farrar, Straus, and Giroux 1988	YZ726.6C-B5
	センダックの絵本論	モーリス・センダック著 脇明子, 島多代訳	岩波書店 1990.5	YZ726.62- セン
9	Clever Bill	William Nicholson 作・絵	Heinemann Young Books 1999, c1926	Y17-A6227
	かしこいビル	ウィリアム・ニコルソンさく まつおかきょうこ, よしだしんいちやく	ペンギン社 1982.6	Y17-9393

10	Only connect	Sheila Egoff, G.T. Stubbs, L.F. Ashley 編	Oxford University Press 1969	YZ909-B164
	オンリー・コネクト：児童文学評論 選. 3	イーゴフ（ほか）編 猪熊葉子（ほか）訳	岩波書店 1980.1	YZ909- イゴ
11	Tim all alone	Edward Ardizzone 作・絵	Scholastic 2000, c1957	Y17-B2261
	チムひとりぼっち	エドワード・アーディゾーニ作・絵 神宮輝夫訳	偕成社 1968	Y7-1304
	チムひとりぼっち	エドワード＝アーディゾーニさく・え じんぐうてるおやく	改訂版 偕成社 1984.9	Y18-540
	チムひとりぼっち	エドワード・アーディゾーニさく なかがわちひろやく	福音館書店 2001.7	Y18-N01-285
12	Lucy Brown and Mr.Grimes	Edward Ardizzone 作・絵	Oxford University Press 1937	所蔵なし
	ルーシーのしあわせ	エドワード・アーディゾーニ作 ただひろみ訳	富山房 1976.2	Y17-4694
13	Tim and Lucy go to sea	Edward Ardizzone 作・絵	Oxford University Press 1958	所蔵なし
	チムとルーシーとかいぞく	エドワード・アーディゾーニさく なかがわちひろやく	福音館書店 2001.6	Y18-N01-273
14	Tim to the rescue	Edward Ardizzone 作・絵	Lothrop, Lee & Shepard Books 2000, c1949	Y17-A6253
	チム、ジンジャーをたすける	エドワード・アーディゾーニ作 なかがわちひろ訳	福音館書店 2001.6	Y18-N01-236
	チムともだちをたすける	エドワード・アーディゾーニさく・え 瀬田貞二やく	福音館書店 1979.6	Y17-6480
15	Tim and Charlotte	Edward Ardizzone 作・絵	Lothrop, Lee & Shepard Books 2000, c1951	Y17-A7397
	チムとシャーロット	エドワード・アーディゾーニさく なかがわちひろやく	福音館書店 2001.7	Y18-N01-283
16	Der Struwwelpeter oder lustige Geschichten und drollige Bilder	von Heinrich Hoffmann 作・絵	Literarische Anstalt [1876?]	Y17-B3766
	もじゃもじゃペーター	ハインリッヒ・ホフマンさく ささきたづこやく	ほるぶ出版 1985.9	Y18-1451
17	Johnny's bad day	Edward Ardizzone 作・絵	Bodley Head 1970	所蔵なし
18	The night ride	Aingelda Ardizzone 作 Edward Ardizzone 絵	Longman Young Books 1973	所蔵なし
	つきよのぼうけん	エドワード・アーディゾーニ絵 エインゲルダ・アーディゾーニ文 なかがわちひろ訳	徳間書店 2004.9	Y18-N04-H422

19	The little girl and the tiny doll	Aingelda Ardizzone 作 Edward Ardizzone 絵	Longman Young Books 1966	所蔵なし
	まいごになったおにんぎょう	A. アーディゾーニ文 E. アーディゾーニ絵 石井桃子訳	岩波書店 1983.11	Y17-9819
20	Diana and her rhinoceros	Edward Ardizzone 作・絵	Bodley Head 1964	所蔵なし
	ダイアナと大きなサイ	エドワード・アーディゾーニ作 あべきみこ訳	こぐま社 2001.10	Y18-N02-293
21	The little train	Graham Greene 作 Edward Ardizzone 絵	Bodley Head c1973	所蔵なし
	小さなきかんしゃ	グレアム・グリーン文 阿川弘之訳 エドワード・アーディゾーニ絵	文化出版局 1975	Y7-4965
22	きかんしゃやえもん	阿川弘之文 岡部冬彦絵	岩波書店 1959	児 726-A234k
23	Choo choo : the story of a little engine who ran away	Virginia Lee Burton 作・絵	Houghton Mifflin c1965	Y19-A788
	いたずらきかんしゃちゅうちゅう	バージニア・リー・バートンぶん・え むらおかはなこやく	福音館書店 1961.8	Y18-N03-H555
24	The little horse bus	Graham Greene 作 Edward Ardizzone 絵	Viking 1994, c1974	Y17-A7032
	小さな乗合い馬車	グレアム・グリーン文 エドワード・アーディゾーニ絵 阿川弘之訳	文化出版局 1976.3	Y7-5200
25	The little horse bus	Graham Greene 作 Dorothy Craigie 絵	Max Parrish 1952	所蔵なし
26	The little fire engine	Graham Greene 作 Edward Ardizzone 絵	Bodley Head 1973	Y17-B5663
	小さなしょうぼうしゃ	グレアム・グリーン文 エドワード・アーディゾーニ絵	文化出版局 昭和 50	Y7-4964
27	The little steamroller	Graham Greene 作 Edward Ardizzone 絵	Bodley Head 1974	所蔵なし
	小さなローラー	グレアム・グリーン文 エドワード・アーディゾーニ絵 阿川弘之訳	文化出版局 1976.3	Y7-5199
28	Mrs. Malone	Eleanor Farjeon 作 Edward Ardizzone 絵	Oxford University Press 1962	所蔵なし
	マローンおばさん	エリナー・ファージョン著 エドワード・アーディゾーニ絵 阿部公子, 茨木啓子訳	こぐま社 1996.10	931- ファ
29	Morning has broken	Annabel Farjeon 作	J. MacRae 1986	所蔵なし
	エリナー・ファージョン伝: 夜は明けそめた	アナベル・ファージョン著 吉田新一, 阿部珠理訳	筑摩書房 1996.1	YZ933- ファ

30	The blackbird in the lilac	James Reeves 作 Edward Ardizzone 絵	Oxford University Press 1952	所蔵なし
31	Peacock pie	Walter de la Mare 作 Edward Ardizzone 絵	Faber 1946	所蔵なし
	孔雀のパイ：詩集	ウォルター・デ・ラ・メア詩 エドワード・アーディゾーニ絵 間崎ルリ子訳	瑞雲舎 1997.9	931- デラ
32	Edward Ardizzone : sketches for friends	Edward Ardizzone 作・絵 Judy Taylor 編	John Murray 2000	所蔵なし
	エドワード・アーディゾーニ友へのスケッチ	エドワード・アーディゾーニ著 ジュディ・テイラー編 阿部公子訳	こぐま社 2001.6	YZ726.62- アデ
33	Minnow on the Say	Philippa Pearce 作 Edward Ardizzone 絵	Puffin Books 1978, c1955	Y8-A1248
	ハヤ号セイ川をいく	フィリッパ・ピラス作 足沢良子訳 E. アーディゾーニ絵	講談社 1974	Y7-4157
34	My father and Edward Ardizzone	Edward Booth-Clibborn 作	P. Hardy 1983	所蔵なし
35	Edward Ardizzone's world : the etchings and lithographs : an introduction and catalogue raisonne	Nicholas Ardizzone 作	Unicorn Press and Wolsley Fine Arts 2000	YZ726.6A-B2

レジュメ

チャールズ・キーピングー自己表現としての絵本ー

三宅 興子

チャールズ・キーピングの絵本は、イギリスにおいて厳しい批判にさらされ、きちんとした評価をうけてきませんでした。それは、絵本とは「絵が物語る」ものであるとする狭い絵本観からきています。あらためてキーピングが挑発し続けた作品群を見直してみましよう。

1. 「絵本」と「物語絵本」

1960年代の新しい「絵本」

ブライアン・ワイルドスミスの絵本

Cf. 「物語る絵」をイギリスの絵本の伝統と考える

(ブライアン・オルダーソン著 吉田新一訳

『6ペンスの唄をうたおう：イギリス絵本の伝統とコールデコット』)

2. キーピング (1924-1988) の絵本の評価

批判としての「子どもばなれ」「物語が弱い」

その反論としての「絵本は幼児だけのものではない」「自己表現としての絵本」

3. キーピングの経歴とさし絵

ロンドン・ランバス地区の生まれ

美術教育 デッサンの確かさ

リトグラフの技術にすぐれる

さし絵についての考え方

物語を説明したり語ったりするものではない

さし絵の仕事 メイベル・ジョージ、オックスフォード大学出版局の編集者の存在

サトクリフの歴史物語のさし絵など

4. 特に *Cockney Ding Dong* (1975) についてと詩集のさし絵

Cockney Ding Dong ロンドンのイースト・エンドはえぬぎの家庭で伝承されてきた
パーティ・ソング集

物語詩 *The Highwayman* (1981) 2度目のケイト・グリーンハウエイ賞

古典豪華本のさし絵

5. 絵本の仕事

第Ⅰ期

1966 *Black Dolly*

1966 *Shaun and the Cart-Horse* 『となりのうまとおとこのこ』

1967 *Charley, Charlotte and the Golden Canary* 『しあわせどおりのカナリヤ』

1968 *Alfie and the Ferry Boat* 『アルフィーとフェリーボート』

第Ⅱ期

1969 *Joseph's Yard* 『ジョゼフのにわ』

1970 *Through the Window* 『まどのむこう』

1971 *The Garden Shed*

1972 *The Spider's Web*

第Ⅲ期

1973 *The Nanny Goat and the Fierce Dog* 『めすのこやぎとおそろしいいぬ』
Richard

1974 *Railway Passage* 『たそがれえきのひとびと』

1975 *Wasteground Circus*

第Ⅳ期

1977 *Inter-City*

1978 *River*

第Ⅴ期

1978 *Miss Emily and the Bird of Make-Believe* 『エミリーさんとまぼろしの鳥』

1980 *Willie's Fire Engine*

1984 *Sammy Streetsinger*

1989 *Adam and Paradise Island*

* 邦訳がある場合は、タイトルに続く『 』内に邦訳タイトルを記した。

6. 自己表現とイギリスの伝統

表現の特長

特に、「馬」と「バラ」について

チャールズ・キーピング
—自己表現としての絵本—
三宅 興子



ご紹介いただきました三宅興子です。私は、若い時からイギリス児童文学を専攻していき、イギリスの子どもの本というのは、さし絵を抜きに論じられないのではないかと思うようになりました。たとえば、『不思議の国のアリス』や『くまのプーさん』にしても、さし絵抜きには論じられません。そして、絵と文の関係性が出来上がっていく歴史に少しずつ興味を持ち始めたのです。今日お話しするキーピングも、20世紀後半に登場する絵と文の関係性の中で興味深い画家の一人なのです。こういうことに興味を持って勉強をしている時に、吉田先生と出会い、勝手に師匠みたいなつもりで、先生のお宅にうかがって、貴重な資料を見せていただいたりしてきました。今では、いろいろなものが公開されていますが、以前は、みんな秘蔵して少しずつ小出しにしているような時代で、研究者にとって資料を自由に閲覧することは、とても大変でした。吉田先生は、本当にオープンに、いろいろなことを教えていただきました。その先生から、今回の講演のお話をいただいて本当に光栄に思っています。この世界は、次から次へと、さまざまな関係性や、いろいろなものが見えてきて、また次へいけるというように、とても面白いのです。やり始めて40年くらいになりますが、ますますやりたいことが増えてきて、あとは神様にもう少しだけ寿命をくださいとお願いするような年代に入りましたが、全く飽きることがありません。人間がイメージを作って、それを人に伝えていくことは、重要なことで、人間にだけ許されていることですが、あまりに普通の営みなので、学問として取り上げることには困難があります。絵本を論じる時に、たとえばキーピングについては、評価がはっきりと二つに分かれています。

美術的には高く、いい絵を描くけれども、子どもには好まれない、したがって絵本作家としては疑問であるなど、論じる時にどの観点に立つかによって、評価が異なってくる人なので、最初にその点を整理しておきたいと思います。

絵本について、これがいい絵本ですというブックリストは、山ほど出ています。皆さんの図書館でも作っていると思います。それを、いったん、交通整理ではないですが、整理整頓してみたいと思いました。大きく広げて、これはこちら、これはあちらと整理するような仕事が、私は大好きです。これは目下自慢のリスト(注1)です。1回それをやってみたら、どんなことになるだろうと、加持ゆかさんが図式化してくれたものです。縦軸の上に「おとな派」、下に「こども派」を置きました。当然ですが、年齢対象によって見えてくる世界が違います。これを超えて0歳から100歳までに通じる絵本はあると思いますが、その部分は、アートや個人として、外の点線で書いています。

横軸に、『よい』絵本派があります。子どもに良い絵本を与えたいという考えは、とても強いです。悪い本を与えようとする人はいないと思うので、当たり前といえば当たり前です。でも、それは、ある一つのイデオロギーや考え方にとって良い絵本であって、「万人にとって良い絵本なんかはない」とキーピングはいつも言っていました。良い絵本という人たちを、キーピングは毛嫌いしていました。とにかく、『よい』絵本派は、とても力が強く、万人に良い絵本があるという考えに立っていて、ゆるぎない評価ということを行っています。それから、「無選別派」がいます。最初に考えられたのは、電話帳のように、子どもの要求から絵本を引ける『絵本の住所録』(舟橋齊

著 法政出版 1993) というもので、今は絶版になっている本です。たとえば、馬が出てくる絵本はないかと言われた場合、馬のところを引けば、馬が出てくるようなリストを作りました。これは、子どもの欲求から引くもので、今ではわりといろいろなところでやっている、キーワード検索のようなものです。その中に、「発達派」という心理学をやっている人たちの子どもの発達段階に応じたリストも含まれます。その横に、「古典作品派」があります。これは、少なくとも絵本は30年以上経ったものを子どもに与えたいとか、時代によって選別されていったものを良いものとしていく人たちです。子どもの反応などを見ていく実践の人たちも、そのあたりにいるのではないかと思います。それから、こちらの軸は、どちらかというとヤングアダルトといった、あまり小さな子には読めない本、あるいは、近頃、柳田邦男さんが大人の絵本と言いつけているように、大人の癒しになるような本や、少数派だけれど、ずっと読まれている本などです。それから、こちら側は、売れる絵本を中心にしたリストです。『幸せの絵本』（金柿秀幸編 ソフトバンクパブリッシング 2004）というのは、ネットで売れたものを中心に編まれたブックリストです。これは、100人中、8割くらいの人が好きな本だけをリストアップしています。少数派のものは一切出さず、売れるものだけしか出さないブックリストです。そのように見ていくと、自分がどんなところで絵本を考えているかが見えるかと思えます。

この作業を始めるきっかけとなったのは、1976年、『月刊絵本』（すばる書房）12月の「絵本の本棚」という増刊号でした。最初は600冊を選んで、それを400冊に絞り、また200冊に絞り、そしてその中から、7、8人の人たちが、私が選ぶ本、選ばない本に丸を付けました。なんと、200冊のうち、全員が丸を付けた本は1冊しかありませんでした。それから、面白いのは、作家やアーティストたちが全員丸を付けた本でも、図書館員や保育園の先生方はぜんぜん丸を付けなかったなど、立場によって選んでいる本がこんなにも違うことに気が付いたのが1976年のこの特集でした。それ以後、私は、良い絵本には、「いわゆる良い絵本」とい

うように、「いわゆる」をつけなければいけないことがわかったり、年齢別に読まれる本でも、たとえば、ヤングアダルトと思われている本を、ある一人の5歳くらいの男の子が好きだということもありうるので、そういうことを発言する時は、自分がどこの立場に立って、ものを言っているかということが、非常に大事だと気が付き始めたのです。絵本を語る時、たいていの人は、子どものものという頭があると思います。それは当然だと思います。主な読者であり、そこで発達してきましたから。でも、キーピングは、頑固に「そうじゃない」と、「自分が書きたいものを書く」と言っています。「一見、人を惹きつける要素、明るくて可愛い健康な子ども、上品で愛情いっぱいのお母さん、ぬいぐるみの動物たち、薫草の農家の戸口で手を振っている血色よく丸顔で微笑を絶やさないじいさん、糊のきいた白エプロンのばあさん、そういう人たちが出てくるような、実在したことがなかった前世紀の楽園といったところを描くような絵本は、売るためのものであり、固定観念と俗物根性を動員したもの」だから、自分は絶対にそういうものはやらない。「ねずみに洋服を着せてチュウチュウと可愛く描くような仕事は僕には言わないでくれ」（注2）という人でした。ですから、ある意味で、大多数の人に読まれるとか、可愛い本とか、口当たりのいいものは、自分のやりたいことではないということ、いつも言っていたのです。意識としてはそうでしたが、実際の作品ではそうでもないところも見ていきたいと思えます。

キーピングは、ロンドンのイーストエンドのいわゆる労働者の町の出身で、言葉もその言葉でしゃべりました。いろいろなインタビューが残っていますが、インタビュアーを困らせた人だったようです。というのは、自分の考えや哲学が頭からどんどん溢れてくるので、途中で全部言い終わらないうちに、頭が次のところへいくらしいです。だから、書き残されているものも、彼が本当にまとまった考えを言っていたかどうか、判断が難しいところがあります。よくしゃべっているし、実際に自分でもいろいろな絵本論を書いていて、足跡はたくさん残しています。今日は、そういうも

のを頼りにお話することになります。

では、私がどのように絵本を見ているかという
と、時代の古いものから見ていくと、通時的に絵
本は発達していくので、いくらキーピングだって、
何もないところから自分のイメージは出てこない
し、歴史的に見ることをやってきました。50年く
らい読まれても、次の世代に読まれない作品もた
くさんあります。100年を超えている作品は、本
当に少ないです。そういう意味では、ある永久に
通じる物差しがあって、それで計ってみて良い絵
本というのは間違いだと思っています。具体的に
この子にとってはどうかということを頭に描いて
このへんと言う必要があるのではないかと思っ
ています。それから、現在は赤ちゃん絵本がたく
さん出ていますが、そのほとんどが思いつきみた
いなもので、その中で残っていくものはとても少
ないのです。そういう時代にあって、そこから残っ
ていくもの、わかっていることは、たくさんある
ので、経験的な絵本の見方は意外に大事かと思っ
ています。個人のプライバシーなどがあり、なか
なか個人の読書記録が取れなくなってしまい残念
ですが、一人の読者の遍歴を見ていくと、さまざ
まなアプローチがあるので、小学生でも、ヤング
アダルトでも読む絵本はあるという考えをしてい
ます。前置きが長くなりましたが、このことをお
話しておかないと、キーピングを共通理解して
いくのは難しいと思います。2枚のレジユメの順
番に従ってやっていきます。

1. 「絵本」と「物語絵本」

まず、キーピングが活躍し始めたのは、60年代
から80年代です。だいたいこの30年の間です。
1950年から60年にかけて、第二次世界大戦後に、
イギリスでは、本が大量に出て、いろいろな作家
が活躍し、ヴィクトリア時代について黄金時代が
もう一度来たという評価を読まれたことがあると
思います。その中で、三人の新しい絵本クリエー
ターが出てきました。ブライアン・ワイルドスミ
ス、ジョン・バーニンガム、それからキーピング
です。ブライアン・オルダーソン（注3）という
人のものを読んでも、イギリス絵本の伝統として、
絵が物語っていくというスタイルを中心に論が進

んでいきます。しかし、この三人の中でこのスタ
イルをとっているのは、バーニンガムだけです。
ブライアン・ワイルドスミスは、最初に出てきた
時にはABCの絵本で、あとは数の本です。それ
が一種の画集のような形になっていて、絵が物語
るような部分はほとんどなく、むしろ色の面白さ
でゆっくりと読ませています。後になって、ワイル
ドスミスも物語絵本を作っていますが、成功し
ているのは少数です。初期の方が、はっきりと革
新的で面白いのです。でも、そういうものを評価
する方法が、その頃の人たちにはなかった。今も
それが続いているのですが。ですから、イギリス
の絵本の歴史では、ワイルドスミスやキーピング
は、なんとなく端っこのような感じで受け取られ
てきたと思います。日本では、ワイルドスミスの
美術館があって、好きな人も多いので、評価が高
いのですが、それは日本だけのようです。ワイル
ドスミスさんが日本に来られた時に、通訳をさせ
ていただいたのですが、自分の絵や絵本が正当に
評価されていないという思いをもっておられて、
画家として成功したいと、タブローの絵を描くよ
うに変わっていつてしまわれました。それには、
どう絵本を評価するかという問題がかかわってい
るのではないのでしょうか。

2. キーピング（1924-1988）の絵本の評価

そんな中で、キーピングはといいますと、キー
ピングの絵本が出た時に、批判として、子ども離
れ、物語性が弱い、ユーモアがないといわれまし
た。絵本は幼児のものとして考えると評価が低く
なります。ところが一方では、アートとして見た
時に、表現力が非常に優れていることや、色の使
い方が技術的に高く、デッサンとリトグラフはこ
の人の特技で、職人的にすごいものがあるので、
その点も含めて評価する人は、絵本は幼児のため
だけのものではなく、作品として優れていればそ
れで良いのではないかという意見になります。ま
た、ずっとキーピングの絵本を見ていくと、孤独
について、一人の人の持っている寂しさや孤独や、
アイソレーションという言葉が流行った時代です
が、疎外感のようなものをテーマにしていること
がわかり、キーピングの自己表現として絵本を見

ると、そのまま高い評価を与えてもいいのではないかという意見があり、評価が真二つに分かれています。キーピングの絵本は、一部の非常に高い評価を与える人は別として、現在のイギリスでは出版されていませんし、読まれてもいません。ですから、現時点で、どう考えるかは私たちに問われてくるので、今日は、全18冊ある絵本を全部、その一端だけでもお見せしますので、自分の感性と経験で考えていただけたらと思っています。

3. キーピングの経歴とさし絵

キーピングの経歴と、それから、さし絵の仕事がとても多いので、それについて絵本に入る前に触れておきます。キーピングはロンドンっ子です。イーストエンドの出身で、お父さんがボクサーだったとか、14歳の時に印刷屋に丁稚奉公に行き、できた原稿を届けるためにロンドン中を使い走りしていたとか、要するに、労働者階級の出身です。ロンドンのイーストエンドの匂いや文化や、そこでの子ども時代は幸せだったと、何度も言っています。そのことを作品で表現しています。イギリスの絵本を作るクリエイターに、労働者階級の出身が多いことに、私は注目してきました。というのも、タブローの仕事は、もちろん才能があればできないことはないのですが、働きながら絵の勉強をしている人にとっては、手っ取り早くお金になる仕事として、さし絵を付けるとか、ポスターを作る仕事があり、その世界で、ぐんぐん才能を伸ばすことができたからです。

キーピングも働きながら、戦後、美術学校に入ります。『スノーマン』(*The Snowman*, 1978)のブリッグズも、お父さんが牛乳配達屋さんだったことを、自慢げに書いています。この文化圏の人たちは、漫画などビジュアルなものへの触れ方が、中産階層、いわゆる教育のある家庭に育った方と、多少違い、幅広いと言えるのかもしれませんが。このへんは、きちんと突き詰めたわけではありませんが、先ほど吉田先生がお話されたアーディゾーニも、夜間の美術学校へ行ってイラストの仕事から始めています。やはり、階層とも若干関係があるとは思いますが、それについては、今日は横に置いておきます。面白いことに、そんな

労働者階級の町に育ったのに、テートギャラリーの斜め向かいあたりに住んでいたらしく、毎週日曜の午後に、ふらっと入って、ターナーの絵に魂を震わせていたようです。ターナーの絵は、抽象的な風景画ですが、それを子ども時代から観ている。ですから、環境的にとても面白いです。イギリスの美術館は無料で入れるので、絵の好きな人だったら、どんどん入って行って、心行くまで観ることができるのです。

戦争中は、海軍で、電信技士のような仕事をしています。帰ってからは、働きながら夜間の美術学校に入って絵の修行をするわけです。その時に、ものすごくデッサンが上手で、凝り性なので、リトグラフの技術も高かったようです。それから何年もその美術学校でリトグラフの教師をしています。とてもいい先生だったようです。いろいろな方が、キーピングがいかに魅力的だったかを語っています。絶対同じことをしたくないという性格で、最初はリトグラフを使いますが、自分が一番自信のあるものを使わないと決めて、頑張っただけで違う技法へいったりと、自慢のリトグラフすら使わなかった時期があります。

最初は、さし絵の仕事をいろいろやったのですが、私たちがよく知っているのは、ローズマリ・サトクリフの作品のさし絵です。オックスフォード大学出版局の名物編集者であるメイベル・ジョージが、キーピングのさし絵の持っている迫力やエネルギーを見つけて、ローズマリ・サトクリフの作品に絵を依頼してきます。そこから子どもの本との付き合いが始まっていきます。メイベル・ジョージが気に入って、ずっと使い続けますが、彼は何も子どもの本に関心があったわけではなく、ローズマリ・サトクリフの物語が好きだったわけでもなかったようです。その頃の作品に『銀の枝』(*The Silver Branch*, 1957)があります。さし絵を、文章を邪魔しないように入れるというのではなく、欄外にまではみ出して入れたりが好きでした。後の作品と比べたら、少し堅い線です。見開きのさし絵を入れるのは、左右のページを合わせないといけないのでとても大変ですが、このスタイルが好きなのです。最初からこういうことをやって、作者のサトクリフもそれを好

きだったようですし、編集者も、キーピングに描いてもらおうということでした。なぜかという、時代考証をあまりしていません。だいたいのことは勉強していますが、これだけ人数がいれば、変わった服を着ている人が一人や二人いてもいいというような、大雑把で、あまり細かな考証はしていないのです。後からついていって説明するのはなく、ジャズで言えば、合奏しているように、誰かが自由にのっていったら、後で違う楽器で追って行ってセッションする感じで考えていたと、説明しています。その感じは、非常によくわかります。

さし絵は、物語を語ったり説明したりするものではなく、文との間に違うもの、文の中に出ていないものを入れたり、先回りして予告を入れたり、いろいろなことをやっていますので、お時間がある時に、キーピングが何を考えてこんなところこんな絵を描いていたのか見ていったら、1作品ずつ本人なりに考えているので、面白いのです。絵本は、たった18冊ですが、さし絵の仕事を全部入れると200冊以上あります。ですから、全部見るのは大変ですが、サトクリフの作品をお好きでしたら、サトクリフだけでも、あまり絵の方からは見ていないと思うのでどうでしょう。見てみると、おかしなことをしています。でもそれには理由があるのです。決して、いわゆる素直な入れ方ではありません。歴史物語の中ではなくて、どこかの居間で誰かが寝そべっているような感じです。こちらとこちらの目線が中で合っています。ある意味では、絵本的です。このようなことを、とても工夫してやった人です。評価が高かったのでずっとさし絵の仕事はしていきます。

晩年は、古典豪華本の仕事もしています。あまりに絵が強烈なので、好きな作品にさし絵を描いてもいいという仕事まで舞い込みます。そうすると、フランケンシュタインやドラキュラといったものを、うれしくやっています。それから、ギリシャ神話の仕事もあります。彼は、イーストエンド、ロンドンの労働者階級の町をこよなく愛していたので、古典的な世界ですがディケンズのさし

絵も喜んでやっています。ディケンズのさし絵は、著名なさし絵画家なら1回はやらされるというか、名作ものなのです。それから、最晩年には、『黒馬物語』(Black Beauty, 1988 邦訳なし)にも絵を付けていて、そういう仕事が、絵本の仕事とは別に、ずっと平行してあります。両方をお話ししたらいいのですが、2時間では難しいので、省略します。

4. 特に*Cockney Ding Dong* (1975) についてと詩集のさし絵

労働者階級の町といっても、ぴんとこないと思うので、『ロンドンっ子のディング・ドン・パーティーた集』(*Cockney Ding Dong*, 1975 邦訳なし)をお見せしたいと思います。土曜日になると家族や親戚縁者が集まってホーム・パーティーをするのです。飲めや歌えです。その歌を集めて、音符なども入れ、1冊の本にしたもので、ずっしりと重いものです。実際に、ある家族が、どういう形で、どういう恰好で歌を歌って、どんなものだったかということは、あまり記録に残っていないので、一つの民俗学的な成果としても今となっては見られません。イーストエンドのランバス地区の家庭で週末ごとに繰り広げられていたパーティーや歌の様子を集めたわけです。それは、コミックソングやセンチメンタルソングや、ニーズアップとって足を上げながら皆で行進するようなものや、オールトゥギャザーソングと言って皆で歌うものや、パーティーソング、お別れの歌などがあり、そこに端書きを付けています。だんだんとロンドンの町の構造が変わってきて、キーピングのおじいさんとおばあさんがそうだったのですが、露店商人や労働者が住んでいた町も区画整理され、高層マンションになってしまったり、そういう所でピアノを弾いていたおじいさんが亡くなったりすると、それを継ぐ人がいなくなったりして、皆が近所に住んですぐに集まれたのに、バラバラになってしまったりと、そうした文化がだんだん崩れていきます。今はクリスマスだけはやっているけれど、週末ごとではなくなってしまった、でも、自分は、そういう伝統というものが続いているほしいと思うので、今これを編みましたとキー

ピングは書いています。そこには、彼自身の子ども時代やその地区への深い思いが入っていると思います。この作品の出版は1975年ですが、この辺からロンドンがぐっと変わります。後ほど、絵本を何期かに分けますが、60年から70年にかけて、70年から80年にかけて、それ以後というのは、彼の住んでいた周りの構造もかなり変化してしまい、テレビが入ってきてこういう世界がなくなると、それに対して、ノスタルジーだけではなく、もっと人間的なものがあつたことを表現したいと、熱い思いをもっていただと思ひます。ここに登場しているおじさんやおばさんへの画家のまなざしには愛情があります。

それから、キーピングの絵本には馬がたくさん出てきます。動物の中で、犬と馬をよく描いていますが、特に、馬が好きだつたようです。奥さんがこぼしておられたのですが、使い物にならなくなった馬を買い、馬車も買って、家からパブまでそれに乗って出かけて行つたそうです。昼から飲みに行つたのよとおっしゃっていました。馬車に皆を乗せたりすることが大好きだつたようです。馬の形が好きだし、匂いも好きだし、何もかも好きだと何度も語つています。馬の描き方や表現の仕方なども変化していくので見てください。こういう世界です。いかにもビールをたくさん飲みそうなお腹のおじさんも描いています。瓶から丸ごと飲んで、騒いでうれしそうです。表現が、ここからここまでに少しだけグラデーションを付けています。ほとんど赤とオレンジとピンクで、その流れがとても緩やかですが、すごい技です。皆飲んだくれていますが、それぞれ表情も違い、性格も違つているのがわかります。この鼻にお母さんの口紅を塗つて、めがねと帽子をかぶつたおじさんをごらんください。パーティを楽しむモードにひたつています。手には必ずビールのジョッキを持っています。パブが大好きな人で、イギリスに行つたらパブが好きになります。ゴタゴタした町で、ストリートに腰掛けて、所在なげに、鳥かごを持った人もいます。キーピングは鳥かごもたくさん描いています。檻のイメージ、どこかにはめ込まれて、そこで動けないというイメージにずっと取り付かれていたようです。それから、ニー

ズアップは、こんな感じで行列をつくつて踊ります。また、その辺にいそなおばさんを、楽しそうに描いたり、少し感じが違ひますが、鳥かごを持って、ジンの瓶を持っている人もいます。ジンは、労働者階級の典型的なお酒です。それから楽器を持った人も描かれています。彼の家にはピアノがあつたようです。このパーティには子どもも参加しています。子どももギターを披露しています。この子も自分で演奏しています。ある一時期まで歌というのは、聞いたり、テレビで見たりするものではなく、自分たちが演奏したり、参加したりするものだつたのです。その名残が、この画集に、画集と呼んでいいのかわかりませんが、色濃く入っています。これ、酔つ払いですよ。この人がこう見ているような感じで「やめておけよ」と言つている感じですが、こんなちょっとしたざらもあります。肩を組んで、皆で歌つているところを表紙にしています。こういう世界があつた、こういう世界の出身ということ、この画集でわかつていただきたいと思つていました。

それから、物語詩で『追いはぎ』(The Highwayman, 1981 邦訳なし)があります。これが2度目のケイト・グリーンウェイ賞受賞作です。1度目は、後で絵本のところで言ひますが、『しあわせどおりのカナリヤ』(Charley, Charlotte and the Golden Canary, 1967)という絵本で、一回目のケイト・グリーンウェイ賞をとつています。このケイト・グリーンウェイ賞は、絵本の賞のように思われていますが、実はそうではなくて、その年に出たもっとも画期的なイラストレーションに与えられることになっています。したがつて、絵本に与えられるものとは違ひ、さし絵の中ですばらしいものにも与えられています。『しあわせどおりのカナリヤ』は1967年の作品です。この色彩豊かな表現は60年代で、色をたくさん使つていました。こちらが2度目に受賞した『追いはぎ』です。色数を制限して、セピア色の濃淡で描く時期がしばらく続きます。この物語詩に風景画の技法を取り入れ、馬にまたがつた追いはぎが、ふつとやつてきそうな感じを巧みに出しています。色を制限した中で、遠近を出すやり方や構図を工夫することで闇の中で浮かび上がらせています。か

すかな光を当てながら、馬のもっている流れるような美しさを出しているのは、確かにケイト・グリーンウェイ賞を受けるに値する作品といえます。『しあわせどおりのカナリヤ』から『追いはぎ』まで画家として随分変革しているのがわかります。

それから、古典のさし絵は先ほどお話ししましたが、本当にたくさんの古典にさし絵を付けていて見事です。サトクリフの『運命の騎士』(*Knight's Fee*, 1960) に付けた絵は、線が非常に堅いですが、1973年の『山羊座の腕輪』(*The Capricorn Bracelet*) に付けたさし絵は、動きがあって、流れるような線になっています。それから、1988年の『ドラキュラ』(*Dracula* 邦訳なし) のさし絵を見ると、ドラキュラの走っている感じを出すための、線の持っている動きや、やわらかさ、ぼかし系といった表現もかなり変わっていています。堅い線から流れるような線になり、色もたくさん使っているものから制限したり、あるいは少しだけ使ったり、1点だけ使ったりと、いろいろな工夫をしていくので、絵本を見る時の参考にしてください。

5. 絵本の仕事

それでは、絵本に入っていきます。絵本は18冊あり、第Ⅰ期が、物語絵本です。第Ⅱ期が、「檻の中の子ども」と仮に私が名前を付けたのですが、何かに捕まってしまうと、一人ぼっちの、どこかにはまり込んでいるような、あるいは籠の中に入っているような、そういう子どもを描いた時期です。第Ⅲ期は、老人がイーストエンドの荒地のようになった所に取り残されていく過疎化現象を描いて、自分の愛して止まなかった町が荒地になっていくことをテーマに描いているものです。第Ⅳ期は、全く文字がなくなった、文字なし絵本を制作しています。それは必然だったと思います。それから、晩年は面白いことに、第Ⅰ期にあったような物語絵本がもう1度出てきます。1回全部解体してしまって極限までいって、いわゆる物語ることを拒否していたと思うのですが、それがもう一度何らかの形で統合されてくるという時期に回帰します。そのことをどれだけ意識していたか

わかりませんが、後からみると、最初の『しあわせどおりのカナリヤ』で、しあわせどおり(パラダイスストリート)が舞台です。そして最後の作品の『アダムとパラダイス・アイランド』(*Adam and Paradise Island*, 1989 邦訳なし)ではパラダイス・アイランドにいる老人と子どもです。遍歴してきたものが統合されたと考えられます。

第Ⅰ期

18冊の絵本を1冊ずつ年代順に見ていきます。

『黒馬ドリー』(*Black Dolly*, 1966 邦訳なし)は、絵本版『黒馬物語』のようなもので、Junk Cart Ponyとって、馬がひく、日本でいう廃品回収車の馬の物語です。もう今はほとんどなくなってしまいましたが、ロンドンの町で最後まで走っていた馬というのが、廃品回収の人たちのものだったのです。それと牛乳配達ですが、たぶん、廃品回収の方が、今も細々とですが生き残っています。キーピングは、ポニーを本当に愛していて、ずっと描いていますが、この作品はまだ、絵本というのは自分の表現だということを主張する前の、最初に彼の名前で出た絵本です。全部読んでみると、時間が足りなくなりますが、珍しいもので、一応全部お見せします。“My name is Black Dolly”として、自分の一生を語る形です。まるで『黒馬物語』です。相当文字の要素も強いのです。既に入って、そして車をひくようになって、それから歳をとってからの次の町にやってきます。ブラック、ホワイト、ブラウンと、3頭一緒に廃品回収の仕事に行くという物語です。車をひいているところ、歳をとってきて疲れているようなところ、食べているところ、ほっとくつろいでいるところを描いています。重い荷物を運ばないといけないのですが、シャフトが重くてなかなか上がりません。そこで倒れてしまいます。役立たずになると、この仕事から引退して、最後に生まれた所のグリーンデローに帰ってきて老後を過ごすという物語になっています。これが出た時には、『黒馬物語』の小型版として受け取られたと思うのですが、今の目から見たら、この表情の出し方や色の扱いに、のちのキーピングの片鱗が出ています。

次は、『となりのうまとおとこのこ』(*Shaun*

and the Cart-Horse, 1966) です。これは、お読みになった方がいると思いますが、『しあわせどおりのカナリヤ』と似たような色使いで、これも馬の話です。ショーンという子は、クイーンという馬がとても好きです。ショーンはおじいちゃんとロンドンに住んでいます。隣の家の後ろにある馬小屋に、クイーンがいて、ベストフレンドでした。とても仲良くしていたのですが、野菜や果物をマーケットへ運ぶ仕事をしていたある日、クイーンの持ち主が歳をとって動けなくなり、もう自活していくことができないので、馬を売ってお金に変えようとしていることがショーンの耳に入り、ものすごくショックを受けます。どうしようと思ひ、彼は頑張つて、露天商の仕事をしている人たちの間を走り回り、お金を集めます。オープン・エア・マーケットが開かれるとき、今はトラックで来るのですが、ちょうど1台分くらいのスペースでいろいろなものを売っている露天商たちのところを回っています。一つずつの露天商の感じもきれいにしています。ここでの色使いは、いわゆるリアリズムの色使いではないことを見ていただけたらと思います。どういうストウールなのか、アイスクリーム屋、古着屋、魚屋、コーヒー屋というように、それぞれ店の名前も書いています。こういう所を1軒ずつ訪ねてお金を集め、馬を買い戻そうとするのですが、クイーンがなかなか見つからなくて、もう遅かったのかと思ったところへ、クイーンがやって来て間に合ったという物語になっています。

もういないのかと落ち込んだ場面には、寒い色が付いていますが、彼の気持ちや、高揚したものを、色で表現しているのがおわかりになるでしょう。少しだけ明るい色が使われているのは、やっと再会して話をしているところです。お年寄りと子どもが対面して、対等に話をしている場面は、彼の本にはたくさん出てきます。明日の朝持ってきたきさい、そうしたら売りますよというやり取りがあって、次の日に成功します。男の子が駆け回つて、馬と別れなくてすむようになったという、ちょっとした人情話です。色の使い方も面白いし、日本で翻訳されているのもわかる気がします。とても単純ですが、いい話なので。思想的には次の

作品の前奏になったのかと思います。

次の作品が『しあわせどおりのカナリヤ』(Charley, Charlotte and the Golden Canary, 1967) だったわけです。これでケイト・グリーン・ウェイ賞をとったこともあり、キーピングが著名になった作品です。これはこんな話です。チャーリーとシャーロットは仲良しです。タイトルページですが、きれいな絵です。ここでわかるとおり、籠です。この中に入っているイメージです。二人の子どもが、ロンドンの町のパラダイスストリートでいつも一緒に遊んでいました。ここでも、鳥のストウール、小鳥売りのおじさんたちが出てきます。そして、ここに鳩などがいて、一緒に遊んでいます。しかし、ある日、高層ビルが建ちます。たくさん人が来て、昔の家を倒して、その中で一番にシャーロットの家もなくなってしまいます。そして、高層のアパートに住むようになります。それが急だったので、シャーロットがどこに行ったのかわからず、シャーロットも、高層マンションの上の方で、これもやはり先ほどの籠のイメージと同じイメージを使っていますが、一人ぼっちになってしまいます。“Missing her friend”と書いてあるので、友だちがいなくて寂しい思いをしているのです。もちろん、この男の子もそうです。“Golden Canary”を飼っているのですが、シャーロットのことを考えながら、いつもこの鳥を見ています。離ればなれになって、シャーロットはマンションの檻の中に入っているし、“Golden Canary”は文字通り籠の鳥です。こういう日々が続いて、カナリヤを慣らして、もう外に出しても信用できるようになったある時、カナリヤが、新しく建った高層アパートに飛んでいってしまいます。からになった籠を持って必死で探します。そのカナリヤが、高いところに止まったら、そこにシャーロットがいたのです。カナリヤを求めてシャーロットに会いに行き、二人がカナリヤのおかげで再会するという話です。ここの場面は、“Golden Canary”を真ん中にして二人が幸せになったイメージを送っています。

この絵本が出た時に、ストーリーに無理があるといった、いろいろな批判がありながら、籠の象徴性、友だちと急に別れなければいけない、それ

も都市化にともなう再開発で昔の暮らしが崩壊していく60年代の感じがよく出ていることや、表現の新しきで確かに賞をとった意欲的な作品と認められました。この作品は、いわゆる子どもの物語絵本の範疇の中に、友情があったり、テーマがはっきりしてわかりやすかったりしたので、それなりに評価されたのです。

この路線のものに『アルフィーとフェリーボート』(Alfie and the Ferry Boat, 1968)があります。これもロンドンのフェリーボートに乗って冒険する一人ぼっちの男の子の話です。これは、翻訳が出ていたので、ざっとやります。『しあわせどおりのカナリヤ』と同じような色使いをしています。男の子が間違っただけでフェリーに乗ってしまい、迷子になるのですが、無事に帰ってくるという話です。これから見ると、先ほどの、アーディゾーニの『チムとゆうかなせんちょうさん』のように、航海や船のことも出てきて、やはりどこかではそれまでの物語作りの中にあるのかと思いますが、表現は、何層かに風景を変えていくようにしたりと、相当凝って描いています。このページは、男の子が帰って来る時のうれしさを表現しています。最後に幸せでしたと終わるのがキーピングのやり方です。これも、『しあわせどおりのカナリヤ』の系譜として見ることはできますが、もっと過去のもを背負って生きているというテーマがあったのかもしれない。

第Ⅱ期

60年代の終わりになって、テレビで絵本をやらないう仕事ができます。テレビの画面で絵本を見せる仕事で、その中から出版に結びついたのが『ジョゼフのにわ』(Joseph's Yard, 1969)と『まどのむこう』(Through the Window, 1970)と『庭の納屋』(The Garden Shed, 1971 邦訳なし)です。この3冊を放送したらいいです。キーピングは、テレビがわりと好きで、視覚表現として大事な機会だと考えていたようです。ですから、自分が、イラストレーションの仕事をする時は、テレビにできないことをすると言っていました。それから、ビジュアルに見えることそのままを言葉にすることもないとも語っていて、この仕事

た時に、取り残された子ども、檻に入った子どものイメージ、『しあわせどおりのカナリヤ』の男の子と女の子は再会しますが、どちらもある時期すごく孤独です。アルフィーもある一時期一人ぼっちです。そういう子どものもっている孤独感やアイソレーションを、もっと深めていって、一番先にできたのが、『ジョゼフのにわ』という作品でした。

この作品が出てきた時に、表紙だけで嫌という人も多かったようです。最後に、「ジョゼフはしあわせでした」と書いていて、めくるとこの顔が出てくるのです。私がこれを買った時に、その当時教えていたクラスで、すぐにこれを読みました。すると、これがハッピーなのかと、受け付けられない人もかなりいました。逆に、この本はまるで私が思っていることが書いてある本だと、授業が終わった後すぐその場で、見せて見せてと、その時流行っていた歌の世界と響きあうと言って、熱烈に受け入れた人と、やはり二つの読者があったような気がしました。その時に、私が一番面白いと思ったのは、主人公をかつこよく書かないのが、キーピングらしいということです。近眼で、さえない男の子を描いています。キーピングも近眼です。ポーっとした感じで、決して利発そうに見えない。この主人公は、いくつくらいの子どもの見えますか。実際には、この絵本を受け入れられるというか、受け入れた年齢というのは、かなり高かったのではないかと思います。ブックリストとしては、ヤングアダルト絵本によく登場してきたと思います。この図書館のこちらの本は、相当色の感じが違います。こちらは、グリーンぽくなっていますし、こちらは少し黒っぽい感じだし、ジョゼフの顔も赤っぽいものと、かなりグリーンが強調されて寒々とした感じになっているものと、実際に比べるとかなり違います。これは、色校正の問題なので、原画と比べないと、どちらがどうということはいえないのですが、こうした印刷状態にも鋭敏になりたいものです。この作品は、絵の完成度が高いのですが、文字がとても読みにくいです。こういうところに入っていて。物語や言葉をそれほど力を入れて語っていないという気がしないでもないです。

「ジョゼフのにわ これは ジョゼフです」とまず入っています（いのくまようこやく らくだ出版 1971）。

「それから これは ジョゼフのいえの うらにわです。れんがのへいに、きのさく、いしだたみ。それに さびたてつのがらくた——このうらにわに あるのは それだけです。むしも いないし、とりも いないし、ねこも いません」と、すごく荒れた感じが文章にも出ています。この荒れた感じが、ここからずっと続いていきます。「うらにわに あめが ふりました。うらにわを たいようが てらしました。うらにわを かぜが ふきぬけました」。私はこの表現を見た時に、すごいと思いました。ここから身動きができない感じがしたのを覚えています。「うらにわを ゆきが かくしました」。季節の移りかわりが、これから繰り返し出てくるので、注意しながら見てください。

あるひのこと、ジョゼフは よびごえを ききました。くずやのおじさんが ふるいかなものや、がらくたの おはらいものは ありませんか、と あたりに こえをかけて いたのでした。

ジョゼフは さびたかなものをおじさんのところへ もっていきました。すると、おじさんは かわりに なえぎを いっぼんくれました。

ジョゼフは なえぎを がらんとなった うらにわに もっていきました。そして いしだたみのいしを いちまい はがしました。

いしをはがしたあとの じめんを ほって、ジョゼフは そこに なえぎをうえました。

文章は平易で平凡なものです。しかし絵は重層的で深い表現になるよう凝っていて、ページごとに工夫されています。キーピングの作品は、どこかで装飾的なところというか—本人はほとんど装飾ということは拒否していると言っていますが—さし絵の中で装飾性というのはとても大事なもので、そういう意味ではさし絵の伝統的なものを受け継いでいると言える気がします。

あめが ふり、たいようが てりました。そして なえは そだっていきました。

そのうち ちいさなつぼみが ひとつ つきました。ジョゼフは つぼみが はなに なるのを じっと みまもりました。

さいたはなが すきだったので、ジョゼフは はなを おりました。

はなのいろは だんだん わるくなっていきました。それから はなは かけました。—— はなは しんでしまったのです。

ジョゼフは うらにわで また ひとりぼっちに なってしまいました。

かぜが ふき、また ゆきが あたりのものを すっかり つつみかくしました。

これは、1 ページに、風が吹いているところと、雪が降っているところの二つを入れてあります。

ゆきのあとに はるのあめが つづいて やってきました。あたたかい たいようが てりはじめました。

ジョゼフは はなのきが いきかえったのをみました。

また あたらしいつぼみが つきました。そのつぼみが はなになったとき、ジョゼフは もう はなをおろうとは しませんでした。おれば はながしんでしまうことが わかっていたからです。

（中略）ジョゼフは うらにわにあった うつくしいものを しなせてしまったのです。はじめは はなが すきなばかりに、つぎには すきなはなを ほかのものにとられたくないと、やきもちを やいたばかりに。

かぜがふいてきたとき、はなのきは まるはだかでした。きに ゆきがつまりました。それから あめが やってきました。

今度は三つのものを一つのページに描いています。自然の運行をこういう表現と構図にしているのは見事です。

たいようが たり、また かぜが ふいてきました。ジョゼフは はなのきに さわりませんでした。はるや、なつや、あきや、ふゆがすぎて、きは ずんずん のびていきました。

そのうち うらにわは はなでいっぱいになりました。はなのあいだを むしがとび、えだには とりが とまりました。ねこは はなのかげに ねそべりました。そしてジョゼフは しあわせでした。

そのあと先ほどの図になって終わります。

日本で、らくだ出版という出版社が、チャールズ・キーピングとワイルドスマスを一緒に翻訳出版したのですが、キーピングの絵本は多くの図書館で拒否されたことを覚えています。理由は、男の子の孤独性といいますか、あまりにも孤独な辛い姿を出していたからです。明るくて、楽しいのが、良い子どもの本であるという考え方が、70年代にはあったと思います。その頃私は、キーピングの表現に注目していたので、なぜこれが図書館に入らないのか、あちこちでおかしいと指摘した覚えがあります。いわゆる選書の段階で入らなかったと思います。一部ではもちろん、こういう表現、こういう孤独な子どもを書く絵本があってもいいのではないかという考え方もありましたが、圧倒的に少数だったと思います。

次の作品の『まどのむこう』(*Through the Window*, 1970)も、カーテンの陰から、下で起こっているドラマを覗き見している子どもといますか、身動きできない子どもをテーマにしています。その頃、絵本は子どもの成長を助けるものだという考えがありました。したがって、何もしないで覗いているだけの男の子というのは、子どもの成長につながらないということで、これもあえなく図書館などの選書から外されました。こういう孤独や、成長しない子どものように見られても、心の中を動いていくものを取り上げていくのは、大人にはなかなか受け入れにくいのだと感じました。子ども離れというよりは、むしろそれを手渡す人のところで、キーピングの絵本は止められてしまったような気がします。

このことで、私が懐かしく思い出すことがあり

ます。私は、1964年の冬にアメリカにいたのですが、私がこういうことに興味があることを知った友だちの司書の方が、面白いからいらっしゃいと、図書館員の人たちが選書をする現場に呼んでくれました。その時に、モーリス・センダックの *Where the Wild Things Are* (1963) という作品が『かいじゅうたちのいるところ』と翻訳されていますが一選書にかかったのです。その時、私は、こんなすごい本は見たことないと思って、胸をどきどきさせていましたが、カリフォルニアの保守的なおばさんライブラリアンたちは、こんな品のない変な本ということで、見事に選書しなかったのです。最近のコールデコット賞の選者は、何を考えているのだろうと批判的でした。数年たって、実際に子どもと読んでみたら子どもの心を深く動かしていくということがわかったので、だんだんと認められていきました。ちょうど、ビートルズがアメリカにやってきた時でした。そのおばさんたちは、やかましい、品のない、悪ガキみたいな男の子たちが、ギャーギャー言っているだけと言っていたのです。今そう言うのは勇気のいることになってしまいました。

やはり、パイオニアの人たちというか、初期の頃というのは、私たち凡人は、固定観念を持っていて、その中で自分を防御しているので、こういう孤独な子どもを見せつけられた時に、なかなか認めてもらえないということは確かにあった気がします。今のような時代になって、子どもの自殺の問題やいろいろなことが起きてくると、これをなぜそれほど危険視して入れなかったのか、時代的にわからなくなっています。図書館員の方全員が保守的とは言いませんが、少なくともアメリカにおいては、保守的で、いわゆる良識派の方たちがそういう仕事に就くものと思われていて、若い人たちとの間のジェネレーションギャップがなかなか埋められずに、いろいろなところで烈しい論争があって、センダックはそのうちだんだん認められるようになっていったのです。ですから、時代というのはすごいと思います。

『まどのむこう』では、男の子が、こういう窓のところに座っています。「ジェコブは ひとりぼっちで とおりを みおろす へやに いまし

た」(いのくまようこやく らくだ出版デザイン 1971)と書いてあるだけで、お母さんもお姉さんもいなくて、一人でこの部屋に取り残されている子どもということしかわかりません。動けないところをみると、障害を持っているのか、その辺もよくわかりませんが、ここに座って、こういうふうに見ています。この目というのは、すごい迫力です。見ている世界が、「このとおりは ジェコブの せかいの ぜんぶ でした」と書いてあります。教会があって、石畳があるのですが、「みんなは あそこで けっこんしきを します—それから おそうしきも」と書いてあります。キーピングは、これは教会ですとは書きません。それは絵を見たらわかることです。けれど、結婚式や葬式というのは、言いたいわけです。そういう言葉の使い方をしたのです。でも拒否反応の人は、ここで怒り狂うわけです。教会はそんな所ではない。結婚式と葬式しかしないことはない。キーピングはその時にしか行ったことがないのではないかという意見が出たりしていました。

下の世界が順番に出てきます。老人と子どもというのがキーピングのテーマになりますが、せっけんばあさんというおばあさんが出てきます。そのおばあさんにふさわしいような、情けない犬を飼っていて、犬もおばあさんも孤独に暮らしていて、そういう風景を見えています。こういうのを繰り返し見ているという視点を出していくのも面白いです。それを私たちは見ているのですから。すると急に騒がしくなって、ビール工場の馬が制御できなくなって、暴れたことがわかります。この馬の絵は、『黒馬ドリー』のドリーと比べると、動きが出ていて、表現が変わっているのに気がつきます。人々がわーっと出てきて、せっけんばあさんも出てきます。何か起こったらしいです。やっと制御されて連れていかれますが、ぐったりとなった犬を抱いて、おばあさんが出てきます。

なぜ せっけんばあさんは いぬを だいて いるんだらうな？

ウイレットさんは なにを してるんだらう？

おじさんたちは なぜ あそこに たってい

るのかなあ?? うまは なに したんだらう??

そして、舞台に消えていくように、このおじさんも消えるのです。最後に、

ジェコブは まどのガラスに はあっと いきを ふきかけました。そして こんな えをかきました。

と終わっています。たぶんせっけんばあさんの犬は死んだのでしょう。でも、ジェコブはそれでは終われないのです。はあっと息をかけるというのは、これは生きていることです。ですから、これで、犬をこの世の中に生き返らせたのではないかという解釈をすれば成り立つのですが、何一つ文章では説明されていません。オープンエンディングになっていて、何が起こったのだらう、どうしたのだらうと言いながら終わってしまう形です。

ですから当然当時としては、完結性が悪く、成長ということには関わらないように思える絵本を受け入れることはできなかつたのでしょうか。今日目から見ると、人間はやはり全てのことに関わるといことは難しく、たいていのものについては、特にテレビはそうですが、向こうで勝手に動いていて、こちらは完璧な傍観者です。何かぶつぶつ言ったりしても、向こうに絶対通じません。キーピングは、そういう世界がとても気になっていて、創ったのではないかと思います。それほど分析的に語ったりはしていませんが、テレビ用の仕事だったと考えた時に、プラスチックのようなものに、カラーインクで色をのせているので、先ほどの絵とは違って、透明性が出ています。表現もそうですが、孤独が深まるというのか、先ほどの『となりのうまとおこのこ』の男の子だったら、馬がどこかへ売られそうになったら、自分が行動してお金を集めます。でも『まどのむこう』の世界は、ただ見ているだけで終わります。こういう世界は、どれだけ書いても行き詰まってしまうのではないかと思います。

次に『くもの巣』(The Spider's Web, 1972 邦訳なし)という絵本を出します。これは、この

男の子がフェンスの間から見ている世界です。いってみれば、『まどのむこう』の続きのような絵本です。この男の子が出てくるのは、表紙だけで、中身では出てきません。くもが巣を張るのを、じっと見ている男の子の物語です。表現的にとても上手い。絵を見ていくと、デザイン的に面白く、一つずつ完璧なまでに計算された美しさを持っているのです。本当にこのくもの巣は美しいです。それをじっと見ていて、あっという間にわたりが来たつとわかる。こういうのがどんどん来るのですが、この子は一切見ているだけです。するとそこに、女の子とおじいさんが現れます。少し動きがあるわけです。犬も来ます。キーピングが描く犬は少し不思議です。先ほどもこういう犬でした。男の子はやっと立ち上がります。馬が通って、こういうのが見えるのです。男の子がじっと見ていると、女の子が手を振ってくれます。でもこの子は動けないのです。この犬は、嫌なおいのする、しっぽなんか振っているけれど、嫌なやつだとしかこの子には思えない。でもこの犬は、男の人が好きだからしっぽを振っているのだろうけれど。僕だったらあんなやつ叩いてやるのに、と思っているのにこの子は動かないのです。それで、馬を連れて行ってしまいます。立ち上がると、女の子がまたいるのです。ここで何か始まるかと思ったら、そうではなく、もう1回壊れたくもの巣が、巣をかけ始めるというところで終わっています。若干のコミュニケーションはあるのですが、くもは生きていて、巣をきれいにかけます。それが壊れても、もう1回巣をかけます。自分は何もしなくて、じっとしていても、周りが動いていって、命が動いていくということを言いたかったと思いますけれど、これは、先ほどの『まどのむこう』や『ジョゼフのにわ』と比べて、何か行き詰った感じをさせた絵本でした。日本語の翻訳本は、確か出なかったと思います。

一つ飛ばしてしまいました。『くもの巣』の前に、『庭の納屋』(The Garden Shed, 1971 邦訳なし)があります。これは、もっと行き詰ったような本です。納屋を、穴から覗いている子どもの話です。ですから、このやり方は、手法的にとても面白いし、孤独みたいなものを共有することができるの

ですが、そこから抜けられないようなところにはまり込んでしまったと言えると思います。

第Ⅲ期

私は、『くもの巣』でキーピングは完全に行き詰ったと思っていましたが、ガラッと変わったものを出し始めます。これが*The Nanny Goat and the Fierce Dog* (1973) です。色の使い方も非常に制限されて、がらっと違います。ここで行き詰まりを出ようという感じはすごくあったのではないかと思います。表現は、今まで使ったものを、わりと使っていますが、しかし、色は全然違います。この絵本は小さいものでしたが、とても印象的で、『めすのこやぎとおそろしいいぬ』というタイトルで、日本語にも翻訳されたと思います。これはまだ延長線上の感じがしたのですが、その次に出た絵本が、「えっ、これがキーピング？」と思うくらい違ったものでした。

『リチャード』(Richard, 1973 邦訳なし)という絵本です。これは厩の絵です。こう上がって厩へ行くのですが、これは王室の印です。グレイトスコットランドヤードですから、警視庁のようなところで、馬車の行列や交通整理などに使うための馬を飼っているのです。その厩の物語です。そこにいる、ポリスホースのリチャードが主人公です。特にストーリーがあるのではなく、このリチャードがどんな暮らしをしていて、仲間の馬にどんな馬がいて、ということを描いただけの絵本です。この馬が、どんなに大事に育てられて、どんな環境で、どんな仕事をしているかを描いたものです。こういう絵をすごく描きたかったのだろうと思います。立派な絵です。馬が美しく表現されています。

キーピングというと、いわゆる体制に対して反対をしているとか、孤独な老人や子どもに対していつも気持ちを寄せているとか、そんなイメージでずっと創ってきた作家だととらえていました。これを見た時に、たぶん、キーピングにとってこのことはとても大事なことだったと思うのですが、馬が本当に魅力的な存在で、いつも馬と暮らしているというか、実際に飼ったりもしていましたし、好きという気持ちがわかりました。今まで

は、廃品回収業や使い物にならなくなっただけで生きていくような馬ばかりを描いてきた人です。ずっと一貫して彼の本を読んできた者にとっては、こういう立派な馬を描いたことが、初めはわからないような気がしたのですが、やはり原因は『くもの巣』にあったと思います。あれに引っかけかかってしまって、身動きできない時に、この馬の持っている美しさや躍動感を、描くだけで癒されたのではないかと思います。これは、衛兵交替の時に出てくる馬です。あの時に馬はたくさん出てきて整理していきます。それから、馬車行列の時も、きれいな馬がたくさん出てきて、行列の先頭に立ち、仕事が終われば既に戻って、こういう所で休むというそれだけの絵本を作ったのです。本当にほっとするような感じがします。イギリスの、特にロンドンの観光客にとっては、騎馬警官というのは名物です。人がたくさん集まるようなところにやって来て、交通整理をします。人間が、どけどけと言うよりも、馬でぽっぽと行った方が、人はスムーズにいうことを聞いてくれるそうです。ですから、交通整理にはもってこいだと言っているのですが、実際に馬を飼って、馬は落し物もしますし、たくさんの車の中に、馬を入れていくのは、時代的には逆らっているのです。しかし、これが立派に機能しているところに、キーピングの喜びもあったのではないかと思います。伝統ということでは、労働者階級うんぬんということではなく、暮らしの中の、一つのほっとする要素として、イメージとしては普遍的に、イギリスの人たちの中にあるのだと、改めて思いました。とても美しい絵本です。これを契機にキーピングはまた、変わっていきます。

『たそがれえきのひとびと』(Railway Passage, 1974)です。Railway Passageとは、日本では長屋のことです。煉瓦作りの古いビルを描く時のキーピングは、愛情を込めて一つずつ描いていきます。日本では安野光雅さんも、ヨーロッパの画集などを見ると、屋根を描く時に、細かく、愛情を込めて一つずつ屋根瓦を描いています。キーピングは、ロンドンの、放って置かれたような、何の変哲もない長屋を描いているのです。時代に取り残された煉瓦作りの家です。どこにどんな人が

住んでいるかということを一軒ずつ描いていて、それがとても面白いのです。どの家にも、テレビが描いてあるところが面白いです。どのように暮らしが変わったかが描いてあるのですが、ものすごく変わった人と、あまり変わらない人とがいろいろ描いてあって、この長屋の人たちの暮らしの、一人の人ではなく、いろいろな家族のいろいろなありように、目がいったのです。個を描いていた時期に比べると、全然違うものになりました。

その次に描いたのが、『空き地のサーカス』(Wasteground Circus, 1975 邦訳なし)です。これも、ロンドンの下町に、こういう男の子たちがいて、セピア色の、うらぶれた、取り残された、汚い町の感じに描いています。そこにある日サーカスがやって来て、サーカス小屋が建って、そして去っていくというストーリーです。男の子二人がサーカスにいくと、とたんにめくるめくサーカスの世界になります。日常の中の全く違う異空間のようなものを非常にきれいに描いていきます。そして、サーカスは去ってしまうわけです。この子たちの暮らしは全然変わらないのですが、でも何か彩りのある印象というのは残ります。こういう子ども時代のある1コマを、非常にきれいに切り取っています。

第Ⅳ期

その次には文字なし絵本がきます。全く文字を使いません。これは、実験的なものだったと思います。『快速電車』(Inter-City, 1977 邦訳なし)は汽車に六人の人が乗って、汽車が動いていくにしたがって、外と乗客たちがどう変化していくかだけを描いたものです。それがまたとても面白く、それまでキーピングが描いたような景色もたくさん出てきますし、時間の経過もこの乗客たちで表していきます。読みながら、この人たちを見ながら、いろいろトークができる絵本になっていて、文字がないのですが、意外に多くのことを語っています。時間の経過で見ていくと、靴をぬいでいる人、雨が降っている場面、次の町へ到着する、といった展開です。日本でも『やこうれっしゃ』(西村繁男さく 福音館書店 1983)など、後ほど出てきます。徹底的に、乗客と景色の変化だけを非

常に美しく描いたと思います。

次の『川』(*River*, 1978 邦訳なし)は、少しわかりにくいものです。川が流れていて、その景色の何層にもなっているところを描いています。これも全く文字のない絵本なので、ページをめくるだけにしますが、美しいものです。それとキーピングの表現力です。景色をターナー的ではなく、イギリスの風景画とは違ったやり方で、同じ場所を時間によって、グラデーションを使って描きます。同じ山が違って来るし、交互に川のそばに建つ昔の倉庫や、その上に鳥が止まっていたりして、過去に属するものの、まだ生きている情景を、実に見事に切り取っています。これもとても美しい本です。いろいろな解釈が成り立つ絵本です。

第V期

最後の解体と逃亡というところでは、『エミリーさんとまぼろしの鳥』(*Miss Emily and the Bird of Make-Believe*, 1978)は、取り残されたロンドンの地域に、こういうものが建って、一人ぼっちのおばあさんがいます。こざいにしてはいますが、とてもシャイな方で、あまり近所づきあいがありません。ある時、行商のおじさんの手押し車の上に美しい鳥を見つけ、これがいたら楽しいだろうと思い、その鳥を買うのです。持って帰って、やさしく話しかけたりするのですが、鳥がぐったりとしてしまったので、手にとると、色がつくので、この鳥の色は塗ってあるということがわかり、このおとなしいおばあさんがものすごく怒ります。一方、このおじさんは、いい加減なおじさんなのです。すずめを捕まえては、家でこうやって色を塗って売り物にしているのがわかるのですが、おばあさんはとても怒って、その怒っている後ろに子どもたちがついてきます。みんなでこのおじさんを徹底的にやっつけて、おばあさんの所に子どもたちが来て、やさしい気分が終わるのです。色を塗った鳥もきれいだったけれど、それを剥がして全部色をとってあげたら、すずめという身近な鳥がこんなに美しいというような、平凡なことへの賛歌があって、何重かにメッセージが入っています。物語絵本に戻ったというよりは、昔の物語のようなものとは違う物語へと発展したといっ

てもいいでしょう。都合よくできすぎている話だと言う人もいます。しかし、老人と子どもというテーマは、子どもの文学ではずっと書かれてきたものですが、そういうテーマを絵本にも見出していったというのは、非常に面白いと思います。

次の『ウィリーの消防車』(*Willie's Fire Engine*, 1980 邦訳なし)です。ウィリーという男の子が、消防車に憧れていて、ロンドンの昔の消防車の世界を描いています。これも、今までのものとは違った、孤独な男の子ですが、それに終わっていない結末がついています。

次は『ストリート・シンガーのサミー』(*Sammy Streetsinger*, 1984 邦訳なし)です。Streetsingerというのは、いわゆる野外で芸を見せる芸人です。アコーディオンといろいろな楽器をあやつる町のミュージシャンです。その人気者が、ある時テレビに出て有名になり、テレビのシンガーになります。テレビの世界は飽きやすいので、流行らなくなってしまい、また町に戻ってくるという物語です。その語り方が、この絵で本当によく表れています。町は、古くなって昔のような栄光は全然ありませんが、そこで、人々を楽しませて生きていく姿が描かれています。ここに主人公とその周りに子どもたちがいるという場面がありますが、そういうところへ帰っていったのです。人と人の交流が残っているのです。そして、遺作となったのが、『アダムとパラダイス・アイランド』(*Adam and Paradise Island*, 1989 邦訳なし)です。このParadiseというのは、『しあわせどおりのカナリヤ』のParadise Streetなど、楽園の意味でよく出てきますし、Adamというのも、非常に宗教的な感じがします。やはり、孤独な子どもが登場するのですが、これは、地域が再開発されて、小売商の人たちが、スーパーマーケットの中に店を出すかどうかを討議などをしていくという、今風の話です。そんな中で、やはりここを大事にしようという子どもと老人たちが、広場のようなものを作って、テレビのような近代的なものとは違う、一つのコミュニティを子どもと老人たちが作って、一種のパラダイス・アイランドが実現するという世界を、最後に、遺作として残していったのです。

こんなふうに見ていくと、一人のクリエイターが時代の波に押されながらも、今までのものとは違う世界、自分の表現としての世界、イラストレーションから始まったけれど、自分の哲学や考えを盛り込んでいく絵本を発見して、そこに全力を傾けていく感じが、切々と伝わります。ただそれを伝えるだけなら言葉だけあればいいのですが、それを色やデザインや手法をいろいろ工夫することによって深めていった。そして最後にまた物語が、老人と子どもたちが寄り添うようなところへ帰っていったというのは、一人のクリエイターの軌跡として円環をなしており、不思議に納得のいく結末でした。

6. 自己表現とイギリスの伝統

最後、表現の特徴や、イギリスの伝統をお話しなければいけません。作品を時代順に見ていくと、ロンドンという古い町、中心部はそんなに変わることはありませんが、周辺部では、労働者たちの住んでいた町は、完全に解体されて新しくなっていき、近代化していくわけです。その中で、どういものが本当は暮らしとして大事だったか、新しい暮らしを受け入れる中で、何を残したらいいのかということ、考え抜いた一人の誠実で頑固なクリエイターの生き方のようなものが浮かび上がってきます。私は伝統というのは面白いと思います。特に、「馬」と「バラ」の表現に見られます。ジョゼフの寂しい庭に咲いたのはバラの花です

し、バラというと、イギリスを、象徴するかどうかは別として、イギリス人の大好きな花であり、いろいろなところでロイヤルファミリーを思い出すようなところがあります。馬もそうです。そういうものを絵本で描いたということが、イメージの持っているとても不思議なところであると思います。キーピングは、そういうものに反抗して、挑発して、反対していたけれど、内ではそういうものを豊かに持って、そしてそれを自分なりの蒸留器にかけて、新しい形で出したのです。私たち、特に外国の者から見たら、イギリスの伝統ということから語れるクリエイターであったということが、非常に興味のあるところだと思います。

少し時間がオーバーしたようです。キーピングの絵本をもう一度見直すきっかけになればうれしいです。どうもありがとうございました。

(みやけ おきこ 梅花女子大学大学院教授)

(注1) 「絵本ブックリストのイメージ分布」(『ブックエンド』第3号 p.54-55)

(注2) 「まずものを見ること」(『子どもの館』第9号 p.48-59 海外作家インタビューシリーズ)

(注3) 『6 ペンスの唄をうたおう：イギリス絵本の伝統とコールデコット』(ブライアン・オルダーソン著 吉田新一訳 日本エディタースクール出版部)

「チャールズ・キーピングー自己表現としての絵本ー」紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	絵本ブックリストのイメージ分布 (『Bookend(ブックエンド)』第3号 所収)	作成：加持ゆか	絵本学会 2005.6	YZ726.5- ブツ
2	絵本の住所録：テーマ別絵本リスト	舟橋斉編著	新版 法政出版 1998.3	UP49-G20 (本館)
3	幸せの絵本：大人も子どももハッピー にしてくれる絵本 100 選	金柿秀幸編	ソフトバンクパブリッシング 2004.10	YZ726.5- カナ
4	「絵本の本棚」 (『月刊絵本』1976年12月増刊号)		すばる書房 1976.12	所蔵なし
5	海外作家インタビューシリーズ・英 国編⑦「まずものを見ること」 (『子どもの館』第9号 所収)	チャールズ・キーピング きぎ手 J・ウィントル 武田秀人、菅原恵子訳	福音館書店 1974.2	Z13-1277
6	Sing a song for sixpence : the English picture book tradition and Randolph Caldecott	Brian Alderson 著	Cambridge University Press in association with the British Library 1986	所蔵なし
	6ペンスの唄をうたおう：イギリス絵 本の伝統とコールデコット	ブライアン・オルダーソン著 吉田新一訳	日本エディタースクール出版 部 1999.1	YZ726.5- オル
7	The silver branch	Rosemary Sutcliff 作 Charles Keeping 絵	Oxford University Press 1957	所蔵なし
	銀の枝	ローズマリ・サトクリフ作 猪熊葉子訳 チャールズ・キーピング絵	岩波書店 1994	Y9-1172
8	Black beauty	Anna Sewell 作 Charles Keeping 絵	Gollancz Children's 1988	所蔵なし
9	Cockney ding dong	Charles Keeping 作・絵	Kestrel Books 1975	所蔵なし
10	The highwayman	Alfred Noyes 作 Charles Keeping 絵	Oxford University Press 1981	Y19-A727
11	Knight's fee	Rosemary Sutcliff 作 Charles Keeping 絵	Walck 1960	所蔵なし
	運命の騎士	ローズマリ・サトクリフ作 猪熊葉子訳 チャールズ・キーピング絵	岩波書店 1970	Y7-2407
12	The Capricorn bracelet	Rosemary Sutcliff 作 Charles Keeping 絵	H. Z. Walck c1973	所蔵なし
	山羊座の腕輪：ブリタニアのルシウ スの物語	ローズマリ・サトクリフ著 山本史郎訳	原書房 2003.5	KS171-H74 (本館)
13	Dracula	Bram Stoker 作 Charles Keeping 絵	Blackie 1988	所蔵なし
14	Black Dolly	Charles Keeping 作・絵	Hodder and Stoughton 1966	所蔵なし

チャールズ・キーピングー自己表現としての絵本ー

15	Shaun and the cart-horse	Charles Keeping 作・絵	Watts 1966	所蔵なし
	となりのうまとおとこのこ	チャールズ・キーピングえ・ぶん せたていじやく	らくだ出版デザイン 1971.11	Y18-N03-H521
16	Charley,Charlotte and the golden canary	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1967	所蔵なし
	しあわせどおりのカナリヤ	チャールズ・キーピングえ・ぶん よごひろこやく	らくだ出版 1972.5 (第2刷)	Y18-N06-H315
17	Alfie and the ferry boat	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1968	所蔵なし
	アルフィーとフェリーボート	チャールズ・キーピングえ・ぶん じんぐうてるおやく	らくだ出版デザイン 1971.11	Y18-N03-H520
18	Joseph's yard	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1969	所蔵なし
	ジョゼフのにわ	チャールズ・キーピングえ・ぶん いのくまようこやく	らくだ出版 1971.11	Y18-N03-H517
19	Through the window	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1970	Y17-B3873
	まどのむこう	チャールズ・キーピングぶん・え いのくまようこやく	らくだ出版デザイン 1971.11	Y18-N03-H522
20	The spider's web	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1972	Y17-B7875
21	The garden shed	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1971	所蔵なし
22	The nanny goat and the fierce dog	Charles Keeping 作・絵	Abelard-Schuman c1973	所蔵なし
	めすのこやぎとおそろしいいぬ	チャールズ・キーピングさく わたなべしげおやく	ほるぶ出版 1976.9	Y17-5264
23	Richard	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1973	Y17-B7876
24	Railway passage	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1974	所蔵なし
	たそがれえきのひとびと	チャールズ・キーピングさく・え わたなべひさよやく	らくだ出版 1983.11	Y17-9958
25	Wasteground circus	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1975	所蔵なし
26	Inter-city	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1977	所蔵なし
27	River	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1978	所蔵なし

28	Miss Emily and the bird of make-believe	Charles Keeping 作・絵	Hutchinson 1978	所蔵なし
	エミリーさんとまぼろしの鳥	チャールズ・キーピングさく やぎたよしこやく	ほるぷ出版 1979.5	Y17-6434
29	Willie's fire engine	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1980	所蔵なし
30	Sammy Streetsinger	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1984	所蔵なし
31	Adam and Paradise Island	Charles Keeping 作・絵	Oxford University Press 1989	所蔵なし
32	チャールズ・キーピングの軌跡ーさ しえ画家として絵本作家としてー (『イギリス絵本論』 所収)	三宅興子著	翰林書房 1994.10	YZ726.5- ミヤ
33	自己表現としての絵本 (『叢書児童文学 第2巻 絵本の時 代』今江祥智責任編集 所収)	チャールズ・キーピング著 三宅興子訳	世界思想社 1979.4	YZ726.5- イマ

レジュメ

シャーリー・ヒューズ—英国で最も敬愛される絵本画家—

灰島 かり

シャーリー・ヒューズは、英国を代表する絵本作家のひとりであり、英国では一般の人気も、また批評家の評価も高い。多くの人々に敬愛されているようすから、「国民絵本作家」と呼びたくなるほどだ。1927年生まれだが、今でも新しい絵本が出ている現役の作家である。これほど人気の作家であるというのに、日本では、ほとんど知られていない。英米絵本が次々に翻訳される日本で、なぜ彼女は紹介されないのだろうか？ この疑問をひとつのカギとして、シャーリー・ヒューズの作品にふれてみよう。

まず彼女の代表作を見てみよう。日本で翻訳されている絵本は『ぼくのワンちゃん』ただ一冊である（絵本ではないが、小学中級向けのユーモア小説『チャーリー・ムーン大かつやく』は、彼女が文も絵も手がけている。挿絵を描いたものは、マーガレット・マーヒー作『魔法使いのチョコレート・ケーキ』など何冊もある）。『ぼくのワンちゃん』はケイト・グリーナウェイ賞を受賞した傑作であり、この一冊だけでも、じっくりと味わうだけの価値がある。

彼女はリアリズムの作家だが、子どもの表情、仕草などをみずみずしく描いているところに着目してほしい。また子どもに注ぐ視線からは、豊かなヒューマニズムが感じられる。

作風は日本の作家でいうと林明子に近いものがありそうだ。同じ年頃の少女を描いているので、林明子の作品『はじめてのおつかい』と、ヒューズの*Moving Molly*を比較してみたい。

まずは色彩や子どもの描写から、英国と日本の好みの違いがわかるだろう。もちろん子ども観も異なる。林明子、シャーリー・ヒューズともに、子どもの姿を描いて一流の作家である点は共通している。だがその違いをさぐると、林明子には「小さなものをいとおしむ」という姿勢がかいま見られ、シャーリー・ヒューズは少し違って「子どもの成熟を尊重する」という姿勢が強いように思えるのだが、皆さんはどう感じるだろうか。

シャーリー・ヒューズの絵本にしみじみも現れている英国文化の特徴を探ることで、日英の比較文化論も試みることができたらと思っている。

シャーリー・ヒューズ

—英国で最も敬愛される絵本画家—

灰島 かり



イギリス人にとって特別の作家

おはようございます。尊敬する吉田先生からお声をかけていただき大変光栄に思っております。シャーリー・ヒューズについてお話するのは、今回が初めてです。図書館や小学校からの依頼で、絵本について話をすることはありますが、シャーリー・ヒューズは日本ではほとんど知られていませんので、触れたことはありません。

皆さんよくご存じのように、イギリスはすぐれた絵本作家を数多く輩出しています。たとえばビATRIX・ポターは、今でもよく読まれていますし、大変尊敬されています。今回の連続講座で取り上げられたアーディゾーニもキーピングも、すばらしい作家です。しかしシャーリー・ヒューズに対するイギリス人の反応は、他の作家とは別格なのです。「わああ、大好き！」とか「もうもう、絶対に忘れない絵本だわ」とか、必ず「わああ」とか「もうもう」とか「うーん」とか、感嘆詞が入ります。先ほど『絵本翻訳教室へようこそ』（研究社 2005）を紹介していただきましたが、この本のなかにも、わたしが体験したエピソードを書きました。わたしがイギリスの田舎で、Bed and Breakfastと呼ばれる民宿に泊まったときに、たまたまシャーリー・ヒューズの本が置いてあるのを見つけました。わたしが「この絵本、大好き」とつぶやいたところ、民宿のおばさんは「そうよ、そうよ。うちの子たちは、みんなこれを読んで育ったのよ」と熱く反応してくれました。それですっかりシャーリー・ヒューズの本について話してしまい、普通ならお茶とビスケットのところを、自家製のおいしいケーキをごちそうになりました。しかも翌日は、車で観光にまで連れて行ってもらったんですよ。わたしはシャーリー・ヒュー

ズを好きと言ったおかげで、ただの観光客からイギリス文化の理解者というか、イギリス人のお仲間に加えてもらったというわけです。そのくらいシャーリー・ヒューズは、イギリスの人たちに愛されているんですね。イギリスの国民絵本作家と呼んでもいいかもしれません。

なぜならシャーリー・ヒューズが書いているのはイギリス人の日々の暮らしそのものだからです。それゆえに、日本人にとってはわかりにくいところがあるのかもしれません。日本で言うと、いわさきちひろさんとか林明子さんが、子どもの姿をリアルに描いているという点で、似ていると思います。大衆性と作品の深みの両方を兼ね備えた国民作家という点では、漫画家の手塚治虫さんの存在に似ているかもしれません。ただ手塚治虫さんが持っている物語の壮大さとかファンタジーの要素は、ありませんけれども。ヒューズは、ファンタジー作品も書いていますが、残念ながら出来はあまり良くありません。

写真を見てください。これがシャーリー・ヒューズのポートレートです。現在79歳になりますが、今も現役の作家で次々と作品を出しています。代表作の『ぼくのワンちゃん』（Dogger, 1977）は彼女が50歳の時の作品です。大変息の長い作家です。

翻訳できるものとできないもの

シャーリー・ヒューズの話の前に、翻訳しにくい絵本とはどういうものだろうかということに、少しだけ寄り道をさせてください。

これは亡くなられた長新太さんが、2004年に出した絵本『そよそよとかぜがふいている』（教育画劇）です。少し読みますね。

ネコが できてきた。
ペッタン ペッタン。
こーんなに てがおおきい。
なんでかなあ、なんでかなあ。
ペッタン ペッタン。
タヌキに ぼったりあった。
ギューツ、ギューツ
タヌキは びっくりして
「なにをするの、なにをするの！」
タヌキは、おにぎりになった。

そうです、この本は、おにぎりをつくるのが大好きなネコのお話なんですね。それでタヌキもライオンも、カバだってワニだって、おにぎりにされてしまいます。最後には、山までおにぎりにされてしまいます。

みんな あつまると、おべんとう。
やまも おにぎりに されてしまった。
そよそよ そよそよと、
かぜがふいている。
おにぎりを つくるのが
だいすきな ネコの
おはなしです。

シャーリー・ヒューズとはぜんぜん違ってナンセンスなおはなしですが、実は長新太さんは、あまり翻訳されない絵本作家なのです。日本の絵本作家のなかで一番翻訳されているのは安野光雅さんでしょう。全世界的に翻訳されております。それから、きたむらさとしさんはイギリスで人気、というよりイギリスの作家ですね。14ひきのシリーズのいわむらかずおさんはフランスで大人気のように。それに比べると、同じすぐれた絵本作家でありながら、長新太さんはあまり翻訳されていません。ユーモアのセンスが国によって違うということもあるかもしれません。でもそれよりも、ご紹介したおにぎりネコの話は、おにぎりというものを知らないとおもしろさが伝わらないことがあります。

おにぎりというのは、バラバラのご飯粒を

キュッとにぎります。「おむすび」という言い方もありますよね。ご飯粒をつぶして、おもちにしてはいけません。もちろんパンのように、小麦を砕くわけでもない。それぞれ独立したかわいい白いご飯粒を、つぶさないようにふうわりと、でもばらけないようにしっかりと「結ぶ」のです。そのために手に力を入れすぎてはいけません。お米に対する愛情というか敬意というか、これがしっかり手に入って「やさしい手」でなくてはいけません。このネコは人の顔を次々におにぎりにしてしまうけれども決して人の顔をつぶしてはいけません。これを翻訳して、三角のライスボウルをつくる、とすることはできますが、手の力の入れ具合は伝わりません。そのために人の顔をつぶして、三角にしてしまうことになって、なんだかいやな感じになるのではないかと思うのです。顔を三角にされるなんて、誰だってイヤですものね。ふうわり、しっかりと「やさしい手」で結ぶおにぎりを知らない人におにぎり遊びをわかってもらうことは、至難の業かもしれません。

翻訳するのに難しいものに言葉遊びがあります。拙訳のロアルド・ダール作『へそまがり昔ばなし』(Roald Dahl's Revolting Rhymes, 1982 邦訳：評論社 2002)をよかったら読んでみてください。ライム、つまり脚韻があるものを日本語の頭韻にしたり七五調にしたりして遊んでいます。最近ではラップミュージックの影響でライムが知られるようになりました。『へそまがり昔ばなし』は昔ばなしのパロディですが、その中にシンデレラがあります。王子がやってきて、みにくいお姉さんのクビをちょん切る場面があります。わたしはその部分を、

たしかにみかけは ハンサムおうじ。
でも よく見れば もんだいじ。
人を殺して だいさんじ。

というふうに訳しました。こんなぐあい言葉遊びを別の言葉遊びに置き換えることは可能です。しかしおにぎりのような生活実感は、翻訳することは不可能です。長新太さんの絵本があまり翻訳されないのは、長さんのナンセンスが、わた

したちの身体性に結びついているからではないでしょうか。

ここでシャーリー・ヒューズにもどりますと、ヒューズの絵本は、いろんなところにイギリスの「おにぎり」が出てきます。だから翻訳出版されにくいのだと思いますが、どんなところが「おにぎり」なのか見ていきましょう。

『ぼくのワンちゃん』

シャーリー・ヒューズの絵本で、日本で翻訳出版されているのは、『ぼくのワンちゃん』(Dogger, 1977) たった1冊です。ほかにシャーリー・ヒューズが文章と絵の両方を書いた『チャーリー・ムーン大かつやく』(Here Comes Charlie Moon, 1980) が出ていますが、これは絵本ではなく児童書です。ほかにシャーリー・ヒューズのエッセイが『子どもはどのように絵本を読むのか』(柏書房刊。このエッセイは灰島かり訳) の中に、入っています。絵本作りについての、なかなかおもしろいエッセイですので、よかったら読んでください。皆さんが一番ご覧になる機会が多いのはマーガレット・マーヒーの『魔法使いのチョコレート・ケーキ』、それからドロシー・エドワーズの『きかんぼのちいちゃんいもうと』(My Naughty Little Sister, 1962 邦訳は堀内誠一絵)、このあたりの本の挿絵ではないかと思います。

今日は代表作の『ぼくのワンちゃん』を、じっくり見てみようと思います。大変シャーリー・ヒューズらしい傑作で、イギリスで最も権威のある絵本賞ケイト・グリーンナウェイ賞を受賞しています。あとで、この絵本と林明子さんの『いもうとのにゅういん』を比較してみましよう。

『ぼくのワンちゃん』は原題がDoggerです。Doggerは、男の子デイブがたいそうかわいがっている犬のぬいぐるみの名前です。dogを変化させた名前で、日本語にすると「いぬちゃん」＝「ワンちゃん」、シンプルなネーミングですね。デイブはうっかりとこのぬいぐるみを落としてしまい、それをおねえちゃんのベラが取り戻してくれるという家族の物語です。

わたしはシャーリー・ヒューズの絵本を出版してもらいたくて、いくつもの出版社へ持っていっ

たのですが、まず、子どもたちの顔がかわいくないと言われてしまいます。この絵本の主人公も、大変イギリスらしい顔をしていて、わたしたちから見るとちょっと異質。いわゆる外人の顔をしています。これがワンちゃんです。このぬいぐるみも、かわいいかという、どうもそれほどかわいくはないようです。片方の耳がぴんとたっていて、もう片方は、ぱたんと垂れています。かわいがられすぎて、中にはいっていた針金が取れたのでしょうか。ちょっと情けない顔をしています。どうして犬のぬいぐるみでなくてはいけないのか、後でもう一回このページに戻ることにしましょう。

ワンちゃんは、デイブが連れ歩くのですっかり汚れてしまい、お母さんが洗って干している場面があります(あらいゆうこやく 偕成社 1981)。

デイブの おとうとの ジョーは かたい
おもちゃなら なんでもすきです。

赤ちゃんの弟は、歯がはえかけているので、噛めるものなら、何でもいいんです。

デイブの おねえちゃんの ベラは、まいぼん
ぬいぐるみの クマを 七ひき ベッドに
もちこむのが おきまりです。だから かべに
ぴったり くっついて ねなくてはなりません。

でも、デイブが すきなのは、ワンちゃん
だけです。

ここまでで家族、兄弟が大変よく紹介されていることに気づきます。下の弟ジョーは、まだぬいぐるみへの情愛を知らない赤ちゃんであることが語られています。おねえちゃんは、ぬいぐるみ7匹みんなと一緒に寝ています。これもやはり、おねえちゃんの性格をよく語っています。この前のページ、ここで縄跳びをしているのがおねえちゃん、大変活発で体を動かすのが好きな子です。たくさんのぬいぐるみがみんな大切という女の子は、あまり物事に執着しない性格なのでしょう。それに対して弟のデイブはワンちゃんだけが好きで、ワンちゃんだけに執着しています。

さてデイブはお母さんと一緒に、おねえちゃんを迎えに学校にいきます。話が横道にずれますが、イギリスの法律では、子どもが11歳になるまでは、常に保護者が保護してはなりません。だから学校へも親か、親に代わる人が送り迎えをしなくてはなりません。働くお母さんにとっては、大変な負担です。それでイギリスではオペアガールといって、人件費の安い国から英語を学びにくる若い女性を、ナニーとして家に住み込ませて、子どもの世話をさせるという制度があります。

話を元にもどすと、デイブたちが学校の外で待っていると、おねえちゃんのベラが出てきます。そのときちょうどアイスクリーム屋さんが通って、ベラは「ママ、あたしたちにも アイスクリーム かってよ」と言います。ここでデイブの手が、お母さんの後ろに回っています。たぶんこのあたりで、デイブはワンちゃんを落としたのでしょう。アイスクリームのことを考えて、そっちに夢になっちゃったんでしょうね。

ここで絵を見ますと、とても茶色っぽいです。色彩は全体に、パステルカラーのような明るく柔らかい色ではなく、渋くて重い。実は英語版は、もっと茶色っぽいのです。偕成社から出版されている日本語版と並べてみると、違いがわかるでしょう。この色彩が、非常にイギリス的なんですね。日本の編集者には、「色が日本人読者の好みではない」と言われてしまいます。渋くて重い色彩は、イギリスのどんよりと曇った、少し湿気のある気候特有の色なのです。

さて一家は、アイスクリームを食べながら帰ってきます。おうちでもおねえちゃんは相変わらず活発です。ところが、デイブはなんだか元気がありませんでした。寝るときになってデイブが言います。「ぼくの ワンちゃんは？」。ワンちゃんは、どこにも見当たらないのです。このデイブの姿をみますと、大変リアルに描かれています。おねえちゃんは小学校に行っているのです、だいたい6歳ぐらいでしょう。デイブはまだ幼児体型をしていて、おなかがぽっこり出ていますから、4歳ぐらいでしょうかね。3歳よりは背が高いように思えます。シャーリー・ヒューズは3歳と3歳半と4歳とをきちんと描き分けることのできる画家で

す。さて、家族がどんなに探しても、ワンちゃんは見つかりません。

親切なおねえちゃんが「いっしょに ねんねしなさい」と自分のクマを貸してくれるのですが、デイブはワンちゃんのことを心配で眠れません。この子にとってワンちゃんは、他とは代え難い大切な存在なんですね。この絵の感じからも、どちらかという内向的な子どもであるのが見えます。

次の日は、小学校のバザーの日です。仮装行列がありました。そしてスプーンレース、手押し車競争、お父さんたちのかけっこもあって、ひとつひとつの絵を見ていると、さまざまな人生、さまざまなドラマが感じられます。特にお父さんの姿を見てみますと大変リアルで、一人一人の個性を非常によく捉えています。シャーリー・ヒューズは、人の姿勢や体の動きでもって、その人の性格や気持ちをうまく表現する画家です。

おねえちゃんは活発な子どもですから、二人三脚で1等賞になりました。デイブに「あんたもでてみない？」。たぶんデイブがしょんぼりしているからおねえちゃんは声をかけてくれたのです。大変やさしい、いいおねえちゃんです。やさしい、いいおねえちゃんをもっていると、弟はうれいでしょうか？ 活発でやさしいおねえちゃんがいて、よかったと思うこともあるでしょう。でも、それだけではないはず。一面では、目の上のたんこぶになることだってあるのではないかと思うのです。しかもおねえちゃんは福引を当てて、1等賞になって、大きなクマのぬいぐるみをプレゼントされます。こうなるとますます「おねえちゃんばかり、いろんなもの もらうんだから」とデイブはしょんぼりしてしまいます。こういうネガティブな気持ちが描かれているから、この絵本は深みをもっています。ステキなおねえちゃんがいることは、ありがたいことですが、同時にその下の兄弟にとっては、ひどく迷惑なことでもあるでしょう。そういう子どもの切ない思いが、デイブの身体の形に、よく表れています。

こうして複雑な気持ちのデイブは、おねえちゃんから離れて、お店の屋台のほうに行きます。古

いおもちゃが売られている屋台があるのですが、なんと他のおもちゃにまじって、ワンちゃんが売られていました。10ペンス、古いおもちゃのなかでも一番安い値段がついています。よごれて汚いので、安いんですね。デイベは「あそこにいるの、まいごになってた ぼくの ワンちゃんなんだよお！こんなところに まじってるなんて、どうなってるの？」と一生懸命、売り場のおばさんに言いますが、デイベの声は小さいうえに、大忙しの最中なので、聞き取ってもらえません。

存在の深みへ

デイベはパパとママを探しますが見つかりません。やっとおねえちゃんを見つけて「大変大変」と訴えると、ベラは走ってやってきてくれます。ほんとにやさしいおねえちゃんです。ところが困ったことになりました。ちょうど、小さい女の子がワンちゃんを買ってしまったところでした。その子はワンちゃんを連れて、さっさと行きかけました。デイベは泣き出してしまいます。そこでベラは女の子を追いかけて行って、頼みました。「それ、ほんとは おとうものものなの。まちがってうられちゃったの。ねえ、あたしたちにくってくれない？」。ところがその子は言いました。「いやよ。あたしが じぶんのおかねで買ったんだもん」。女の子はワンちゃんをきつく抱きしめました。小さい絵がいくつもありますが、どれも子どもの身体が、その子の気持ちをよく物語っています。いま、ワンちゃんを買った女の子は、おしゃれなワンピースを着て白いハイソックスに黒いストラップのついた靴をはいて大きめのリボンをつけています。大切にされている子どもであることが、よくわかります。この子は事情を話されても、まだ相手のいうことを聞いてあげることができない年齢であり、タイプとしても、自分のことに夢中でほかが見えない、いささかわがままな子どもではないでしょうか。シャーリー・ヒューズは、そういう子どもを文章で説明するのではなく、身体を描くことで、非常に鋭く表現しています。

実は作中人物のなかで、わたしが自分に最も似ていると思うのは、このわがままな女の子です。

いい年をして情けないと思いますが、わたしもまた、人に譲るといのがなかなかできません。自分の大事なものを人に譲るといのは、難しいことです。この女の子だって、自分のお金を出して一生懸命買ったのですから、泣き出すのも無理のない話です。なおデイベはここではもう手放して、ワアワアと大泣きしています。この様子は、ものすごくかわいくないですか？ 自分を表に出すタイプではない子が、もうコントロールが外れてしまって、恥も外聞もなくワアワア泣いています。

このとき、ベラが持っていた大きな黄色のクマが女の子の目にとまりました。女の子は見とれたあまり、泣き止んでしまいます。実は女の子は、まだワンちゃんに情愛をかけてはいません。ただ自分が買ったというので、自分を主張していたのです。そこでおねえちゃんは、いいことを思いつきました。「じゃあ、このクマちゃんとおとうとの犬を とりかえっこしてくれない？」。女の子はたちまち泣き止んで、にっこりしました。ベラはちょっとは、自分の得た賞品を手放すのが惜しいのです。だからいささか複雑な表情をしていますし、クマを押さえている手に、ふつうより力が入っています。シャーリー・ヒューズのうまさをじっくり味わってくださいね。女の子は100パーセントうれしいので、デイベのワンちゃんはさっさと返してくれます。デイベのこの両手をみてください。もう僕のだ、というのでほんとにうれしい。大切なものを取り返した瞬間です。

この絵を見ると、ベラのかawaiiさがあふれているようで、この子がいとしいなと思います。この子は、弟のために大きな自己犠牲を払いました。このワンちゃんが、弟にとってどんなに大事かを知っているからです。ベラが自分の得た賞品をあげてしまったのがちょっとつらいという表情を見せているからこそ、この子がかわいい。こっこの女の子の喜色満面の表情もみてください。まだ人の事情を思いやれない子が「ワーイ もらっちゃった」と得意になっています。でもこの子もとてもかわいいですね。デイベは「ありがとう、ベラねえちゃん」というふうにベラに抱きついてます。それぞれの子どものリアリティがあるので、絵本全体から存在の深みのようなものが漂う

ように思いますが、いかがですか？

次のページには、その夜の様子が描かれています。その晩デイブはいつものように、ワンちゃんを隣に寝させることができました。ベラはとなりで、でんぐり返しの練習をしています。「おねえちゃん、あのクマちゃんのこと、おしくないの?」。デイブはベラに訊きました。「ううん」ベラは言いました。「ほんという、あんまり すきじゃなかったの。大きすぎたし、すごい目してたもの。それに もう一ぴき ふえてみなさい、あたしのねるとこ、なくなっちゃうじゃない」。そう、ベラのベッドはぬいぐるみたちの大入り満員なんです。ベラがでんぐり返しの練習をしていることから、この子はそろそろぬいぐるみを必要としなくなっているのかもしれない、と感じさせます。でもここを見てください。ベラのぬいぐるみたちが、自分たちの持ち主を応援するかのよう、手を広げているでしょう。こんな小さなところから、シャーリー・ヒューズがベラに敬意を表していることが感じられます。ここに、ベラが1等賞をとったメダルが掛けてありますよね。ベラが自分を犠牲にして弟を守ったことに、わたしもシャーリー・ヒューズと一緒に1等賞のメダルを贈りたい。そう思います。最後の寝ている場面ですが、1等賞のメダルとたくさんのぬいぐるみとともに満足そうに寝ているベラと、ワンちゃんたった1匹を抱きしめて、やっぱり満足そうに寝ている弟のデイブの姿が描かれていて、読者も深い満足感とともに絵本を置くことができます。読み終わった後、まるで一冊の長い小説を読み終わったように、人生の深みに触れたという満足感を得ることができるように思います。絵本は、涼やかな見返しページがあって終わります。シャーリー・ヒューズは、小さくてそして限りなく大きな家族愛を見せてくれたのではないのでしょうか。

イギリス人と犬

元に戻りまして、ぬいぐるみのワンちゃんを見てみましょう。ぬいぐるみとして一番人気があるのは、クマです。なぜならクマは、直立して、2本足で立つことができます。2本足で立つと、クマの手があくので、あなたを抱きしめることがで

きるようになっていきます。あなたも、クマのぼくを抱きしめて。愛して愛して、とでも言うような形を、クマのぬいぐるみはしています。ぬいぐるみのことを英語でテディといいますけれども、クマのぬいぐるみがテディですね。ぬいぐるみ全般を、クマに代表させているわけです。

デイブのぬいぐるみのワンちゃんは、もちろん犬です。イギリスには、犬を友とする長い伝統があります。もともとが狩猟民族ですから、犬が狩猟のお供として、欠かせませんでした。だから少年は犬を飼って犬の世話をして犬を愛することで、成長していくという伝統があるのです。デイブが愛しているのがワンちゃんという犬のぬいぐるみということは、やがてデイブはぬいぐるみを卒業して、本物の犬を愛するようになるだろう、とちょっとばかり空想したくなります。わたしが訳したローズマリー・サトクリフの『ケルトとローマの息子』(*Outcast*, 1955)と『夜明けの風』(*Dawn Wind*, 1961)には、どちらも犬が出てきてとても重要な働きをします。もう一冊、ケルトの英雄の登場する『炎の戦士クーフリン』(*The Hound of Ulster*, 1963)。この本は原題が「アルスターの番犬」というタイトルで、こちらにも犬が登場します。サトクリフは歴史のなかで、ひとりの少年の魂の成長を描くのが得意な作家ですが、そういう物語には必ずといっていいほど、犬が登場します。ついでに今名前をあげたサトクリフの本も、読んでいただくとうれいします。イギリスの少年と犬との交流に長い伝統があるということがわかります。少年と犬のつながり、このあたりがちょっと「おにぎり」なのです。

もうひとつワンちゃんはずくまった姿勢のぬいぐるみです。両手を開いて「ぼくを愛して」と訴えているようなクマのぬいぐるみとは、違っています。ちょっと深読みかもしれませんが、ワンちゃんを好きというところは、この少年の内向きと呼応しあっているように思えてなりません。のびのびとした、やさしくて出来の良なおねえちゃんがいると、下の子はちょっと屈折しませんか？

そんな屈折からこの子は心を深くしていくのではないかと思いますけれども、内側にこもるところのある少年の気持ちにワンちゃんはピッタリと似

合っているように思います。

ぬいぐるみが主人公の傑作絵本に、『くまのコールテンくん』(Corduroy, 1968)があります。『くまのコールテンくん』の一番最初の姿を見ますと、コールテン君はクマですから直立して両手を少しだけ広げています。隣にいるお人形は、両手を大きく開いて、スカートもめいっぱい広げて、リボンも広げていて、わたしを買って、わたしを愛してと、自分を強く主張しているようです。もう一方の隣には白いウサギがいますが、こちら両手を広げて、耳も大きく広げて、やはり「わたしを」と主張しています。この中でクマのコールテンくんだけは、ボタンの取れたズボンをはいて、手をあまり広げずに、つまりあまり自分を主張せずに、でも愛情を求めて立っているようです。長いこと誰にも買ってもらえずにいたので、誰よりも愛情を求めているのです。それでいながら自分を主張しすぎない、慎ましい姿勢をしていました。それが、ひとりの女の子の注目を引くのです。ぬいぐるみがどんな形をしているのか、その形は、絵で語る絵本にとって大切な要素ですね。

『いもうとのにゅういん』と比較して

もちろん子どもの身体の形、つまり姿勢も、とても大切です。林明子さんの描く子どもたちと、比べてみようと思います。林明子さんの『いもうとのにゅういん』(福音館書店 1987)を見てみましょう。色彩は茶色がかったはいますが、ブルーがあったりクリーム色があったりして、シャーリー・ヒューズの色彩に比べるとソフトできれいです。林明子さんも、子どもの姿勢を捉えることにかけては、指折りの作家ですね。ここを見てください。自分の大事なお人形のほっぺこちゃんをいつも妹が勝手に借りて遊んでいるので、おねえちゃんが怒っている、その気持ちがこの子の姿勢によく描かれています。ほっぺこちゃんは返してもらいましたが、妹は具合が悪そうで、お母さんに連れられて病院に行きます。盲腸で入院することになってしまいます。

お母さんが病院に行ってしまう、友だちも帰ってしまってひとりぼっちになると、あさえは心細くなります。これが、やっとお父さんが帰ってき

てくれて、お母さんから「手術は大丈夫だった」という電話がきた場面です。この絵本は全体に、少し上からの視線で描かれています。それがこの絵でよくわかります。そうすると背の低い子どもは、頭が大きく足が小さく描かれることになって、不安定になります。子どものいたいけな姿が、いっそう強調されるというわけです。林さんはそれをさらに強調して、実際の子どもよりも頭を大きく、足を小さく描いています。こうすることで、おねえちゃんだけれどもまだまだ子どもで、心細いお母さんが恋しいというあさえの不安定な気持ち、読者に伝わりやすくなります。

『ぼくのワンちゃん』では、おねえちゃんのベラはたぶん6歳でしょう。こちらの絵本のあさえは幼稚園に通っていますが、年長さんの5歳ではないかと思えます。ベラとは年齢が1歳違いますが、林明子もシャーリー・ヒューズも、ずいぶん似た姿勢の少女を描いていますよ。同じ姿勢なので、その違いが非常にわかりやすいです。戸惑っているベラのポーズとあさえのポーズを比べると、年齢1歳の違い以上に、ベラのほうがずいぶん大人っぽいように感じられませんか？

困っているベラもあさえも、左を向いていることに気がついてください。横書きの絵本は右へ右へと進んでいきますから、右向きがポジティブの方向になります。右側を向くということは、ポジティブの方向を向くことになるので、読者はポジティブな気持ちを受けとります。非常に困ったときというのはネガティブな状況ですから、左向きに描いたほうがネガティブな印象になるのです。これが、めくるアートである絵本の基本構造です。左向きのあさえとベラですが、林明子さんは(たぶん無意識に)いたいけな少女というのを強調しています。シャーリー・ヒューズのほうは、ベラをもう少し大人っぽく、大人と対等な感じで描いています。

この絵を見ると、シャーリー・ヒューズは上からの視線ではなく、真横からの水平な視点で描いていることがわかります。シャーリー・ヒューズは子どもを描くときに、真横からの視点、つまり子どもの視点で描くことが多いのです。これがシャーリー・ヒューズの特徴であり、子ども

に向かう姿勢だと、わたしは考えます。

さて、あさえは妹のために折り紙をつかってあげて、さらに大きな包みを持って、お父さんとお見舞いに行きます。この日妹が、一番喜ぶのは何か、考えたんですね。そうです。大切なほっぺちゃんを、妹にあげることにしたのです。「おみまい」と言って、あさえがほっぺちゃんを渡すと、妹は大喜びします。あさえは大変犠牲的な妹思いの行為をしました。あさえの誇らしい様子が、とてもかわいらしく描かれています。相手が弟か妹かという違いはありますが、シャーリー・ヒューズも林明子も、どちらも自分より小さいもののために大きな自己犠牲を払った瞬間のおねえちゃんの姿を描いています。両方とも顔が右向き、つまりポジティブな向きになっていることに、気がついてください。

林明子さんの描くあさえの姿の中では、この場面が最も足が大きいです。地に足がついた大事な場面では、画家は文字通り、足を大きく描く傾向があるんですね。モーリス・センダックの『まどのそとのそのまたむこう』(Outside over There, 1981)では、主人公はアイダという少女ですが、このアイダの足は現実の少女の足よりも大きく描かれています。よかったら『まどのそとのそのまたむこう』のアイダの足を見てくださいね。とても印象的な、しっかりと自分を主張する足ですよ。林明子さんは、いたいけな少女が頑張った姿を、足を大きくして描いています。

ここでお母さんが、「あさえちゃん、たったひとぼんでほんとにおおきなおねえさんになったのね」と語っています。一方シャーリー・ヒューズの絵本では、ここで弟が「ありがとう、おねえちゃん」と言っています。ベラは手を広げていて「いたいけな」というより「雄々しい」少女の肖像になっているのではないのでしょうか。

もうひとつ気がつくことは林明子さんの絵本では、ここでお母さんが重要な役割を果たしています。あさえの犠牲的な行為を、ほんとに大きいおねえちゃんになったのね、と認めるとするのは、大切なことなんですね。ところがシャーリー・ヒューズの絵本では、大人の果たす役割は、少ないのです。この大事な場面でも、ぜんぜん出てこ

ない。デイブがワンちゃんをなくしたときには、お父さんもお母さんも、一生懸命探してくれているので、子どもを大事にしている両親であることはわかります。でも勤務所では、シャーリー・ヒューズは、子どもだけの世界に終始することが多いのです。これもやっぱり「おにぎり」ですね。

先日の吉田先生の話にもありましたが、イギリスは大人の世界と子どもの世界がはっきりと分かれている国なのです。メアリー・ポピンズの時代には、子どもは4階の子ども部屋で、ナニーと一緒に過ごしていて、親の顔を見るのは一日一回とか二回、本当に短い時間だけでした。子どもをかわいがるといえる点では、わたしたち日本人のほうがずっと上でしょう。わたしたちは、子ども中心の家庭を営んでいて、家庭は子ども中心に回っています。イギリス人は夫婦が中心ですから、子どもたちにとって大切なドラマは、子どもたちの間だけで起こることが多いようです。少女の気持ちには共通点がたくさんありますが、生活の細部の実感は、色々なところで違っているのです。

『ぼくのワンちゃん』は残念ながら、日本では品切れになっています。図書館によっては借りる人がいないので、閉架のところに入っているところもあります。しかし子どもに読んであげると、子どもたちの「のり」は、とってもいいですよ。子どもの気持ちが深々と描かれているからでしょう。ぜひもう一度、注目していただき、子どもたちに読んでいただけるといいなと思います。

シャーリー・ヒューズ略歴

それでは後半は、年代を追ってシャーリー・ヒューズのその他の作品を紹介することにしましょう。残念ながら、全部未訳の作品ですので、私が仮のタイトルをつけていますので、ご了承くださいね。これが70代にはいったシャーリー・ヒューズの肖像です。とてもステキでしょう？

シャーリー・ヒューズは、1927年にリバプールで生まれました。お父さんはたたきあげの人で、大きなお店をもっていて裕福な家庭だったのですが、シャーリーが4歳のときに亡くなりました。これが少女時代のシャーリー・ヒューズで、ふっくらした女の子です。オックスフォードにあるラ

スキン・アートスクールで美術を学びました。学生時代のヒューズは、何とかして自分のことをリタ・ヘイワースに少しでも似せたいと思っていたそうです。

学校を終えると、オックスフォードからロンドンに出てきて、先生の紹介で出版社をまわり、少しずつ挿絵の仕事をもろうようになりました。子どもを描く力は最初から認められていました。最初に依頼された挿絵は、少女向きの愛馬物語でした。イギリスは愛馬ものというジャンルがあります（『黒馬物語』(Black Beauty, 1877) がその筆頭です）。実はシャーリー・ヒューズは小さいころ馬に肩を咬まれたことがあって、馬がとても苦手だったそうです。何とか描いて編集者に見せたのですが、苦手な馬だったせいか「使い物にならない」と却下されてしまいました。

それでも何とか挿絵の仕事が順調に来るようになり、でもすぐに建築家の男性と出会って結婚することになり、やがて三人の子持ちになりました。自分で文章も書いた最初の絵本が『ルーシーとトムのいちにち』(Lucy and Tom's Day

邦訳なし)で、1960年の作品です。33歳のときの作品ですね。この作品は後にシリーズ化されますが、2作目の『ルーシーとトム、がっこうへいく』(Lucy and Tom Go to School, 1973 邦訳なし)が出たのは、一作目が出てから13年後のことでした。一作目を出してから、子育てが忙しくなってしまう、挿絵の仕事は何とか続けたものの、絵本を作るという仕事になかなか復帰できなかったのです。子育てが一段落した70年代に入ると、このルーシーとトムのシリーズが次々に出版されました。そして先ほどの『ぼくのワンちゃん』が1977年、50歳のときの作品で、50、60、70代で大きな仕事をした晩成型の作家です。

もう1枚の写真をご紹介しましょう。シャーリー・ヒューズが勲章をもらったときの写真です。後ろが旦那さんです。母親として、子どもを間近に見る機会に恵まれたこと。そしておばあちゃんになってからは、孫と身近に接していたこと。そういった人生の経験から、子どもの姿をビビッドにリアルに捉える、鋭く深く温かいまなざしが生まれたのではないのでしょうか。

『ルーシーとトムのいちにち』

シャーリー・ヒューズの最初の作品を見てみましょう。絵本の研究者から見ると、大変興味深い作品です。この絵本について、わたしは『たのしく読める英米の絵本』(ミネルヴァ書房 2006)に解説を書いています。ルーシーというおねえちゃんとトムという弟の1日がかかれていますが、まだ絵本作家になりきっていない、挿絵画家時代をひきずった作品です。子どもの姿はそれぞれいきいきと捉えられているのですが、ひとつの場面が、次の場面を導いていくという絵本のダイナミズムがまだ生まれていません。1場面1場面が独立していて、スナップ写真集のようです。それぞれの場面はそれぞれ魅力に富んでいますが、プツンプツンと切れたようなかたちで子どもの1日が描かれています。モノクロの絵とカラーの絵が交互にきているところが、カラー印刷が高価だった時代を物語っています。

まだ物語が弱いために、子どもの暮らしのスケッチ集といった趣ですね。絵本というのは、1枚の絵が次の絵を導かなくてはなりません。シャーリー・ヒューズ自身の言葉を借りると「一続きの絵が、物語を語るものなのです」。これが絵本を絵本たらしめる大切な要素です。それがまだ生まれていないんですね。お昼ごはんの後お昼寝して、そのあいだにお母さんはちょっと自分の時間を楽しんで、午後は公園に行って外で遊びます。男の子は三輪車が得意です。帰宅して4時に夕飯を子どもたちだけで食べます。これも吉田先生のお話にありましたが、イギリスの子どもたちの夕食は大変早いです。たいてい5時ですが、この絵本は年代が古いこともあって、4時ですね。しかも充実した食事ではありません。ティーと呼んでおりますがお茶とお菓子、サンドイッチか、せいぜいソーセージくらいのことが多いのです。イギリスの子どもたちは経済的に恵まれたお宅でも食生活が貧しくて、驚きます(イギリス人はグルメではないことにかけては定評がありますが)。イギリス厚生省が一般家庭向きの通達を出して、子どもの栄養をもっと考えてほしいと訴えるほどです。

それからお風呂に入り、寝る支度が調ったころ、

お父さんが帰ってきます。寝る前にベッドで、お話を読んでもらって、おやすみなさいとなります。こういう寝ている場面ひとつをとっても、絵自体に物語性が豊かです。下においてあるお人形とか描いてある絵とか、この子のぬいぐるみとか、それぞれが絵本に発展しそうな要素をもっていることがわかります。

シャーリー・ヒューズは、終始一貫リアリズムの作家であり、それから家庭生活を描く作家です。シャーリー・ヒューズの言葉を借りると「日常生活というのは、大きな驚きに満ちている」。本当に、そのとおりですよ。『ぼくのワンちゃん』でも、おねえちゃんはなんと大きなことを成し遂げたのでしょうか。また弟のダイブもなんと劇的な1日を過ごしたのでしょうか。シャーリー・ヒューズはそういう日常生活のなかにある、小さくて、でも大きなドラマを生き生きと描く作家であることが、最初の作品からも伺われます。

『うえへ、うえへ』

『うえへ、うえへ』(Up and Up 邦訳なし)は1979年の作品です。子どもたちに人気の高い作品で、ファンタジーです。マンガのようなコマ割が成されていて、文字はひとつもない。女の子が空を飛ぶ鳥を見て、自分も飛びたいと思います。助走のつもりで前を見ないで走り、石にぶつかってゴチンと転んでしまいます。女の子は鳥の羽を作って飛ぼうとしますが、やっぱり飛べません。次に風船を膨らまして、風船につかまって飛びますが、木に引っかかってしまい失敗。しかし不思議なたまごが見つかり、このたまごの中に入ったところ飛べるようになるのです。

シャーリー・ヒューズの絵本は主にBodley Headという出版社から出ていますが、この出版社にはジュディ・テイラーというすぐれた絵本の編集者がいました。ジュディ・テイラーの著書に『ビアトリクス・ポター—描き、語り、田園をいつくしんだ人』(吉田新一訳 福音館書店 2001)があります。シャーリー・ヒューズはジュディ・テイラーのところに「こういう本を書きました」と『うえへ、うえへ』を持っていきました。ジュディ・テイラーはコメントを手紙に書いて、届け

ます。「これはファンタジーだけれども、あなたは日常生活を描くほうが向いているように思う」。ジュディ・テイラーは少し迷ったようですが、この本自体の出来がよかったので、結局出版の運びになりました。絵本の世界では、編集者の役割が一般の本の編集者の役割よりもっと大きいように思います。文を書く作家と絵を描く画家をマッチさせるという仕事があることも、その理由のひとつでしょう。シャーリー・ヒューズは生涯に、何人かの大変すぐれた編集者と出会いますが、ジュディ・テイラーもその一人です。

『アルフィー、手をつなぐ』

80年代になると、新しいシリーズが始まります。それがアルフィーのシリーズです。長いシリーズでたくさん絵本があるのですが、そのなかから何冊かをお見せします。

最初の作品が『アルフィーが一番のり』(Alfie Gets in First, 1981 邦訳なし)。『アルフィー、手をつなぐ』(Alfie Gives a Hand, 1983 邦訳なし)、『アルフィーのおうちでの一夜』(An Evening at Alfie's, 1984 邦訳なし)、『アルフィーとびっくりバースデイ』(Alfie and the Birthday Surprise, 1997 邦訳なし)、この4冊を並べて見てください。表紙のアルフィーが、少しずつ大きくなっていくことがわかっていただけでしょう。最初の作品では3歳です。3歳児がだんだん4歳に近づいてきます。『アルフィーとびっくりバースデイ』では、5歳の後半でしょう。並べて見ると改めて、シャーリー・ヒューズが子どもの身体を非常によく捉えて、描写していることがわかっていただけだと思います。このアルフィーのシリーズが、シャーリー・ヒューズの作品のなかで一番人気のあるシリーズです。とても良くできています。

アルフィーが成長してしまうと、次にはアニーローズというアルフィーの妹が主人公となった絵本ができます。主人公が妹のほうへと移るわけです。

さて、『アルフィー、手をつなぐ』を見てみましょう。拙著の『絵本翻訳教室へようこそ』の中でこの絵本を例として取り上げて、絵本の翻訳をやっ

てみたいという人に訳してもらいましたので、興味のある方はそちらを見ていただけるといいと思います。

シャーリー・ヒューズは茶色がかった渋い色彩に特徴があることはもうお話しましたが、彼女の絵を見ると、同じく茶色で描いた線が目立っていて、線描の画家であることがわかります。シャーリー・ヒューズによると、最初に線をエンピツで描くとのこと。そこに不透明水彩絵の具で色をつけていくと、エンピツの線が消えます。最後にセピア色や黒の絵の具を細い筆にとって、これで線を復活させるそうです。

さてお話を紹介すると、アルフィーは幼稚園のお友だちからバースディの招待状をもらいます。お母さんの説明では、送り迎えはお母さんがしてくれるが、誕生会そのものにはアルフィーがひとりで参加することになっているとのこと。さあ、大変。これはアルフィーにとっては、初めての経験です。不安になったアルフィーは、赤ちゃん毛布を持っていくことにします。日本の子どもにも、タオルっ子だの、毛布っ子がいますよね。でも小さいころから自分の寝室で寝かされる欧米の赤ちゃんのほうが、愛用のタオルや毛布の必要度は大きいようです。

アルフィーが頼りにしている赤ちゃん毛布は、アルフィーの身体に比べると、とっても大きいのです。そんな毛布をかついでいくなると、と私なら反対しそうですが、アルフィーのお母さんは「みっともないわよ」などと止めたりしません。えらいですね。それでアルフィーは大きな毛布を肩にかついで、バースディパーティに出かけます。

バースディパーティの主役は、友だちのバーナードです。バーナードのうちの裏庭には、もう子どもたちがたくさん集まっています。アルフィーを迎えたバーナードのお母さんが「その毛布こっちに置いたらどう」と言ってくれるのですが、アルフィーはしっかりと持ったまま離しません。

バースディにはプレゼントがつきものですが、アルフィーのお母さんが持たせてくれたプレゼントは、クレヨンでした。バーナードにあげたところ、バーナードは興味が無さそうで、ポンと放り

投げてしまいます。活発な男の子にとって、クレヨンはあまりうれしいものではないのでしょう。その気持ちはわかりますよね。クレヨンは教育的でもあるので、お母さんたちがプレゼントとして選ぶ気持ちもよくわかります。クレヨンを投げられても、アルフィーはいやな顔をするどころか、自分もやってみたそうですよ。バーナードのお母さんは、息子の無礼を強く叱っています。ほら見てください。こんなに怒っています。

子どもたちはシャボン玉をして遊びますが、バーナードはずいぶん乱暴です。ハイライトのケーキを食べる場面になると、お母さんの顔がやつれているように見えませんか。わたしも経験があります。子どもにお誕生会をやってあげるのは大変なことなのです。バーナードは相変わらず大暴れをしています。アルフィーの毛布はお誕生日のごちそうまみれになって、もうベチョベチョです。

さて、バーナードがプレゼントのなかで一番気に入ったのは、トラのマスクでした。早速これをかぶって、女の子たちを脅かしにかかります。気の弱い女の子のミン（アジア系の少女ですね）は、バーナードに脅かされて、大泣きしました。お母さんは気分を一新しようと、「みんなで手をつないで遊びましょう」と言います。バーナードはアルフィーと手をつなごうと手をとりました。それを見てミンは、いっそう激しくワアワア泣きだしてしまいます。ミンは自分がアルフィーと手をつなぎたかったのです。ミンはアルフィーの優しさを感じるのか、アルフィーを頼りにしているんです。さてここで、アルフィーが大きな行為をしてくれます。片手で抱えている毛布を放せば、両手が空いて、バーナードとミンの両方と手をつなぐことができます。自分のためには放すことができなかつた毛布ですが、アルフィーはミンのために、毛布を手放す決心をします。

わたしたちの日常は、なんとまあ、さまざまなドラマに満ちあふれているんでしょう。この絵は、アルフィーが一番最初に毛布を取りに行ったところですが、アルフィーの後ろ姿はちょっと腰が引けています。ビクビクしているんですね。これに比べて、毛布をテーブルの下に置きに行ったアル

フィーの姿は、決断にあふれていますよ。ほら、腰が引けていないでしょう。アルフィーは子どもから少年への一步を踏み出したと言えるでしょう。みんなは手をつないで、ナースリーライム(アメリカではマザーグースと呼ばれますが、イギリスではこう言います)の“Ring-a-ring-o'-roses”(「バラのわっかを作ろうよ」)を歌って、グルグルまわってひっくり返るとい遊びをします。

こうしてパーティは盛り上がり終わります。迎えに来たアルフィーのお母さんに、バーナードのお母さんはこう言います。「アルフィーのおかげで助かったわ。ミンはアルフィーがいなかったらちっとも楽しくなかったと思うの」。このときもバーナードは自分のことに夢中です。友だちのために毛布を手放せたアルフィーと、まだブンブン暴れて遊んでいるバーナードが、この場面では対照的です。バーナードのお母さんは「いつかバーナードにも他の子への思いやりを持ってほしい」と語ります。バーナードも「そのとき」を迎えたときには、何かひとつ人のためにすることで、自分を確立していくことなのでしょう。そんなことを思わせる温かい場面です。こんなふうなアルフィーが、日常生活の小さな、しかし同時に大きなドラマを体験することで、少しずつ成長していくという、とてもかわいいシリーズです。

『庭園の魅惑』

1996年には、シャーリー・ヒューズは『庭園の魅惑』(*Enchantment in the Garden* 邦訳なし)というファンタジーをつくりました。これは日々の暮らしを描いたものではなく、完全なファンタジーです。背景をイタリアの町にしています。大変立派な家があって、ここに住んでいるのは、お金持ちの一家です。お父さんはレストランやホテルを何軒ももっていて、お母さんはアメリカ人の上流夫人でした。主人公の女の子バレリーは、そういうわけでイタリア人とアメリカ人のハーフです。この子はたくさんのおもちゃと服を持っていますが、友だちがいません。両親が大変忙しいので、マッケンジーさんという家庭教師に育てられています。公園にあった彫刻の「イルカに乗る少年」を見て、この子はとても惹かれました。そ

れで彫刻に「あなたに名前をつけてあげる」と言います。ケルビーノという天使の名前で石の少年を呼んだところ、この石像が命を持ちます。

「イルカに乗る少年」の少年の姿だけが消えてしまったので、女の子が探しに行くと、石像だった少年は生きて男の子になっているのです。この少年は素っ裸だったために、回りの人たちが騒ぎだします。「なんだ、なんだ、いったい誰だ お前どこから来たの? どうして裸なの? 親はいないの? おかしな子ね」。結局少年は、孤児院にやられてしまいます。孤児院での淋しい生活のせいで、男の子はどんどん生気を無くしていきます。

ところでシャーリー・ヒューズは画面の両脇にスペースをとって、ここに文章を入れ、ついでに小さなモノクロの絵も添えています。日本の能楽の屏風から、着想をもらったと語っています。能楽の屏風とはいささか違うような気がしますが、でもこの細いスペースを動かすことで、大きなスペースを作ったり、場面を分けたりと、おもしろい効果をあげています。

さて、バレリーもすっかり元気を無くしていません。お母さんが「その子を、探しにいきなさい」とハッパをかけたので、バレリーは孤児院に出かけ、ついに少年と巡り合います。少年はバレリーの家に引き取られ、庭師の家で育てられるようになります。女の子と男の子の楽しい日々が始まります。「あなたはどこから来たの」とバレリーが聞くと、少年は「ぼくは海の神ネプチューンの息子だ」と言います。「ネプチューンが昔、北アフリカである女の人に恋をして僕が生まれたんだ。何千年もあの彫刻の中に閉じ込められていたけれど、きみが呪文をといってくれたから、僕は生き返った」。でも「アフリカのあなたが生まれた場所は、今は砂漠になってるわ」と聞くと、沈み込んでしまいます。

夏休みがやってきて、少女の一家は例年どおり、海辺の美しいホテルでひと夏を過ごそうと一家をあげて移動します。庭師の男の子も一緒にきて、海を見に行きます。ネプチューンの息子と名乗る少年は、初めて海を見ました。そして海が自然のままの海でなく、開発されたリゾートになってい

るのを見て、怒り狂います。その日はこの美しい海岸は、大嵐となりました。この海岸では、季節はずれの台風が続き、ホテルのお客はこんなところにも仕方がないと、次々に帰ってしまいます。一方あの男の子は、荒れ狂ったその日から行方不明となってしまいます。

しばらくたったある日のこと、バレリーの家の庭園に、あの男の子がやってきました。「どうしたの」「お別れを言いに来た。僕はネプチューンの息子だから海が荒らされていくのが我慢できない。残された海を大事に守っていくために僕は行かなくてはならない」。女の子は言います。「待って。わたしはいいことを考えた。わたしはママのようにおしゃれてパーティに行くだけで、一生を過ごしたくないのよ。わたしは一生懸命、海について勉強する、あなたと一緒に自然のままの海を守るように努力するから、わたしが大人になるまで待っていて」と必死で頼みます。男の子は、ぼくは長い間彫刻になっていたから、もう待てないんだと言うと、ひらりと塀に飛び乗り、帰ろうとします。女の子が「これっきりで、もう会えないの」と大声で聞くと、「会えると思う。必ずどこかで会おう。ネプチューンが人間の女に恋をしたように、海の神は時々人間の女の子に恋をする。その恋は長く続くのだから」と言って、去っていきます。残された女の子は淋しい思いをします。

しかしあるとき、少年をなくしたイルカの彫刻が、庭園の奥のゴミ捨て場のようなところに、捨てられているのを見つけます。女の子はイルカに向かって「わたしと同じように、あの男の子がいなくなったのを、おまえも悲しんでいるのね。でもあの子は、また会えると言っていたのよ」とイルカを慰めます。いつか人の手に汚されていない海で、女の子は男の子に会えるかもしれません、というかたちで終わっています。

現代の環境の問題を視野に入れつつ、女性の生き方にも触れていて、堂々とした立派な絵本だと思えます。これが70代になってからの作品であることを思うと、そのみずみずしさに、感嘆の思いが深まります。

『チャンスをつかんだエラ』

このあと2002年に、もう一冊、これまでとはちょっと毛色の異なる絵本を描きました。シャーリー・ヒューズは『ぼくのワンちゃん』でケイト・グリーンナウェイ賞を受賞しましたが、この作品で二度目のケイト・グリーンナウェイ賞に輝きました。最初の受賞からちょうど四半世紀後の75歳での受賞ですから、めでたい限りですね。この作品からは、若い女性へのメッセージが感じられます。

『チャンスをつかんだエラ』(Ella's Big Chance 邦訳なし)という題で、1920年代に時を移したシンデレラの話です。ミスター・シンダーという洋服屋さん(オートクチュールのお店です)のお宅に、エラという娘がいました。シンダーさんちのエラですからシンデレラになるわけです。お母さんが亡くなってしまって、お父さんとエラが残されます。エラは手先が器用で洋服をつくるのが好きなので、お父さんから洋服作りを教わります。エラは大変有能なお針子さんになってたくさん洋服をつくってお父さんと一緒に暮らしていました。ここでもシャーリー・ヒューズは先ほどのファンタジーで使った手法、屏風のようなところに文字を入れる手法を使っています。エラ一家を支えているのはボタン君という男の子です。お店のエントランスボーイをやり、または配達もします。

ところが突然、楽しい日々が終わってしまいます。お父さんが大変美しい女性に恋して、二人の連れ子のある新しいお母さんがやってきます。このお母さんは大変有能な人でシンダーさんのお店をたちまち一流のブランドショップにしてしまいます。姉妹となった二人は大変美しく、モデルをやっています。1920年代のファッションがとても楽しいですね。ところが姉さんたちはエラを馬鹿にして、いやな仕事は全部エラに押しつけて、自分たちは怠けています。お店が超一流になりますが、人手を増やさないので、お針子のエラはいつも忙しくて疲れ果てています。お父さんは無力ですが、ボタン君は、エラを慰めてくれます。ほんの少しでも時間ができると、ふたりは楽しい時間を過ごします。

高級店となったこの店にあるとき公爵夫人がやってきます。上手なおもてなしが功を奏したら

しく、公爵家でのパーティへの招待状が届きます。姉さんたちは着飾り、エラは親切にドレスをつくってあげます。エラはちょっと太めに描かれています。モデル体型の姉さんたちはエラを馬鹿にして言います。「あんたなんか似合う服なんか、あるわけないわ」。エラはプライドがありましたから泣きませんでした。でもお姉さんが出て行った後ひとり残されると涙がでます。ボタン君が「僕たちで楽しい夜を過ごそう」と言ってくれたときも、星が光りゴッドマザーがやってきます。

この後はシンデレラのお話どおり、おもちゃの車が馬車ならぬロールスロイスとなり、猫が運転手になります。エラの美しい20年代のドレスを見てください。太め体型は見事にカバーされ、意気揚々と公爵家の舞踏会へ出かけます。エラのみずみずしさは人々の注目の的となり、公爵家の長男はエラに夢中になります。でもエラはそれほど惹かれませんでした。12時の鐘が鳴って、帰るときにガラスの靴を落としてきてしまいます。

帰ってきたお姉さんたちは、なんとなくご機嫌ななめです。いっぽうで公爵家の長男はエラのことを忘れられません。なぜならこれまで彼の周りには、きれいな女性がたくさんいたものの、みんなファッションブルでとてもクールでした。でもあの子は生き生きしていて、人生を楽しむ意欲にあふれていると思ったのです。そういうわけでガラスの靴をもって、あの女性を探しまわり、エラの家までやってきます。姉さんたちがはけない靴が、エラにはぴったりで、そのうえエラはもう片方の靴をもっていました。

さてここからがシンデレラとは違うところです。公爵家の長男は大喜びでプロポーズしますが、エラは断ってしまいます。そのとき向こうにいたボタン君の目がキラリと光りました。お母さんは「うちには他に娘が二人もおりますのよ」と一生懸命勧めますが、傷心のプリンスは寂しく帰っていきます。ボタン君が「公爵夫人になれるのに、どうして断ったの？」と尋ねると、エラは答えません。「毎日着飾って遊んで暮らしても、あんまり楽しくないと思う。それより、いいことを考えたの。ふたりで新しくお店を開かない」。

この先がシャーリー・ヒューズのいいところな

のですが、エラは「きれいな服をたくさんつくって売りたいわ。だけど一番きれいな服は、わたしが自分で着ることにしよう」といいます。かわいいでしょう？ やっぱりいい服を着たい、舞踏会にも行ってみたい、だから行ってみた。でも「わたしの人生はいいものをもらうためにでなく、いいものをつくるためにある」と、エラは自分を知っているんです。エラとボタン君は、ロールスロイスではなくて自転車に乗って、去っていきます。自転車の上でのキスシーンで、楽しく話が終わっています。このようにシャーリー・ヒューズはシンデレラの話を書き換えました。パーティに行くのもいいし、きれいなドレスもいい。こういうところは女性の気持ちがよくわかっていますよね。でもヒラヒラとパーティーに行くだけでは、人生はもったいない。何かをつくりだしてほしいし、何よりも自分の手で自分の人生をつくってほしい、そういうことを若い女性へのメッセージとしています。しかも細身モデル体型がやっているなかで、元気な太目ちゃんが幸せになるという話で、好感がもてます。日本でも出版したいのですが、どうも絵がかわいくないとふられてしまうのです。ところでふられた公爵はどうしたかというと、自分の飛行機を操縦してアフリカに行つてアフリカ探検をして、心の痛手を癒した、と書かれています。こういう絵本を75歳で描くシャーリー・ヒューズは、本当にすてきだと思います。

『モリーのおひっこし』

代表作のひとつである『モリーのおひっこし』(Moving Molly, 1978 邦訳なし)を見て、シャーリー・ヒューズの特徴をまとめたいと思います。『モリーのおひっこし』のモリーは『はじめてのおつかい』(福音館書店 1977)のみいちゃんと同じく5歳です。モリーが赤ちゃんだったときから、モリーの一家は半地下のアパートに住んでいます。

モリーにはお兄ちゃんとお姉ちゃんがいて、末っ子です。モリーが乗っていた乳母車はもう使わないというので、お兄ちゃんたちはこれを解体してゴーカートを作りました。モリーも時々乗

せてもらえます。この子たちは町っ子ですので道路で遊んでいますね。これがモリーのアパートからみる風景です。半地下なので人の足元がみえるのです。日本は湿気があるので半地下の部屋は好まれません、元々日当たりが悪くて湿気の少ないイギリスでは、落ち着くと言って、半地下を好む人もいます。お母さんは窓辺に緑を植えています。さてお父さんが、田舎に庭付きの一戸建てを見つけてきて、そこに引越しが決まりました。家族はそれぞれ、庭付きの一戸建てでどういう暮らしをしようかと夢見ています。

引越しが終わってガランとした家に、モリーは壁紙の切れているところを見つけて、モリーのMを文字で残します。MはメモリーのMでもあり、モリーにとってある時代が終わった記念です。引っ越した先で、初めて自分だけの部屋を持ちます。ところが良いことばかりではありません。引越し後、お父さん、お母さんは忙しいし、お兄ちゃん、お姉ちゃんは行動範囲が広がったため、モリーだけがひとりぼっちで取り残されてしまいました。何もすることがありません。あるとき庭の一番奥の隙間からとなりの庭に潜り込みます。隣は空き家だったので、庭がジャングルのように、猫がたくさんいました。そこは猫たちの天国になっています。

温室があって、モリーはこの植物に水をやります。これもちょっとした「おにぎり」かな。ガーデニングというのをイギリス人は大好きですし、傷ついた少年と少女が植物を育てることで自分を育てていく、子どもの本の古典の『秘密の花園』(The Secret Garden, 1911) という下敷きもあります。そういうわけでモリーがひとりぼっちでも、植物に水をやって楽しい時間を過ごすことに共感が高いのだと思います。モリーの孤独な時間の楽しさが、現実と空想を重ねたような絵から見えてくるようです。地味で見逃してしまいそうな絵ですが、モリーが積み木をしている後ろに、お城が見えるのがわかるのでしょうか。モリーが木に登れば、後ろに長い髪をたらしラプンツェルが描かれています。シャーリー・ヒューズはこういうファンタスティックな場面も、地味な茶色っぽい色彩で描いています。もしかしたらすごく華やかにな

りそうな空想の場面ですが、茶色い背景に沈むようにして描いている。画面は地味になりますが、子どもがファンタジーの世界で遊んでいる姿が、ジワジワと見えてきて、そこがいいんですね。そうしてわたしたち大人が知るべきことは、子どもには孤独な時間も必要なのだということではないでしょうか。子どもの孤独な時間の尊厳が感じられる絵本だと思います。

さて空き家だったお隣に、誰かが引っ越してきました。もうこれでジャングルのような庭で遊べなくなる、とモリーは心配します。ところが次の日、お隣との境の塀の隙間から、子どもの顔が二つのぞいているではありませんか。モリーはついに、お友だちを得たのです。みんなで植物に水をやったり、ブランコをしたり、ゴーカートに乗ったりして遊べるようになりました。モリーは空想好きな子どものようにゴーカートに乗っても、後ろにシンデレラの馬車が見えます。新しく引っ越してきた二人の子どものお父さんはガーデニングの趣味がないので、猫の天国はそのまま、という具合に話が終わっています。

ここでモリーが最初にゴーカートで遊んでいた場面をもう一度見てみましょう。こちらでは、モリーはゴーカートに乗せてもらって、お兄ちゃんたちに押ししてもらっています。ところが自分の友だちと遊ぶようになると、モリーはゴーカートを押す側に回っています。もちろんモリーが乗ることだってあるでしょうが、友だちを乗せて押しあげられるようになったモリーの成長ぶりが伺えます。

『はじめてのおつかい』と比較して

最後に『はじめてのおつかい』の林明子さんの子どもの描き方と、少しだけ比べてみましょう。『ぼくのワンちゃん』のときと同じですが、シャーリー・ヒューズの絵本では、子どもの世界が子どもだけの世界として描かれています。お母さんがどこかで支えてくれているのですが、背景のう〜んと後ろのほうに引っ込んでいて、ほとんど見えません。日本は親子のつながりがもっと強いですから『はじめてのおつかい』のみいちゃんのお母さんは、前面に出ています。

お使いに出かけた場面で、みいちゃんは右手と右足がいっしょに出ていますよね。緊張した子どもの姿をうまく捉えていると思います。お母さんの心配そうな姿もうまく出ています。お金を落としてみいちゃんがコテンと転んだ場面ですが、見上げた形で描かれているので、坂が大きく見えて、みいちゃんの姿はことさら小さく見えます。その次の場面で泣かずに立ち上がったみいちゃんの姿は大きく描かれています。

みいちゃんが「牛乳ください」と言ったのに、お店の人に聞こえなかった場面では、となりに太ったおばさんが出てきたことで、みいちゃんの小ささが強調されています。ほら、ほとんど見えないくらい小さいでしょ。さて表紙を除いて、絵本全部のなかで、みいちゃんが最も大きく描かれるのはこの次の場面です。この子がかんぼって大声をあげて「牛乳ください」と言ったところ、つまりこの子が一番かんぼったところで、この子の大きさは最大になります。

つまり林明子さんは、みいちゃんが一番かんぼったところで、みいちゃんの姿を最大に描いて、二番目にかんぼったところ（転んで立ち上がったところ）では、二番目に大きく描いているのです。しかもどちらの場合も、その前の場面で、みいちゃんの小ささが強調されています。おそらく林さんは、無意識だと思いますが、小さなものがかんぼる姿がかわいいと思っている。つまり小さいものを愛でるという気持ちがとても強いのだと思います。裏表紙には、足だけお母さんのヒザに乗せて、まだまだお母さんに甘えたいみいちゃんの姿がほんとうにかわいく描かれていて、小さいものをいたいけなものとする視点が感じられます。

それに対して子どもの世界だけが描かれ、しか

も孤独な時間を過ごしたために成長したモリーを描く描き方は、いたいけな子どもという捉え方とは違っていています。子どもはもっと大人っぽいというか、子どものなかの独立した個人が期待されているように思えるのです。シャーリー・ヒューズも林明子さんも、子どもを尊重していることは確かですが、その尊重の仕方がずいぶん違うことに、気づいていただけたでしょうか。小さなものを愛おしむ日本と、子どものなかに大人（＝ひとりの人間）を見るイギリスというふうには、大ざっぱですが分類できるかもしれません。わたしたち日本人は小さいものを愛おしむ気持ちは元々持っていますから、このイギリスの絵本から、子どもの孤独を尊ぶ、ひとりの人間として尊重する、そういうあり方を学ぶことができるのではないのでしょうか。

『ぼくのワンちゃん』のデイブは気の弱いタイプの男の子ですが、この子が成長してやがて犬を飼って、犬とともに成長して、大人の男性になったときにはとてもステキな男性になるだろうと想像をふくらませたくなります。これだけひとつのぬいぐるみを愛することのできる心の深さは、大人になってもずっと残ることでしょう。シャーリー・ヒューズが描く子どもたちは友だちになりたくなるような魅力があふれているように思いますが、いかがでしょうか。つまり彼女は生きていく子どもを本当によく観察し、温かく描き出しているということだと思います。

以上、時間がオーバーしましたがこれでシャーリー・ヒューズの紹介を終わらせていただきます。

(はいじま かり 翻訳家)

「シャーリー・ヒューズー英国で最も敬愛される絵本画家ー」 紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	絵本翻訳教室へようこそ	灰島かり著	研究社 2005.5	YZ801- ハイ
2	Dogger	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 1977	Y19-A344
	ぼくのワンちゃん	シャーリー＝ヒューズさく あらいゆうこやく	偕成社 1981.12	Y17-8157
3	そよそよとかぜがふいている	長新太作・絵	教育画劇 2004.10	Y17-N05-H671
4	Roald Dahl's Revolting rhymes	Roald Dahl 作 Quentin Blake 絵	J. Cape c1988	Y17-B2290
	へそまがり昔ばなし	ロアルド・ダール作 灰島かり訳 クエンティン・ブレイク絵	評論社 2002.3	Y9-N02-88
5	Here comes Charlie Moon	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 1980	所蔵なし
	チャーリー・ムーン大かつやく	シャーリー・ヒューズ作・絵 岡本浜江訳	童話館出版 1996.8	Y9-3442
6	Talking pictures: pictorial texts and young readers	Victor Watson, Morag Styles 作	Hodder & Stoughton 1996	所蔵なし
	子どもはどのように絵本を読むのか	ヴィクター・ワトソン、 モラグ・スタイルズ編 谷本誠剛監訳	柏書房 2002.11	YZ726.5- ワト
7	魔法使いのチョコレート・ケーキ： マーガレット・マーヒーお話集	マーガレット・マーヒー作 シャーリー・ヒューズ画 石井桃子訳	福音館書店 1984.6	Y8-1779
8	My naughty little sister storybook	Dorothy Edwards 作 Shirley Hughes 絵	Methuen Children's Books 1991	Y8-A5232
9	いもうとのにゅういん	筒井頼子さく 林明子え	福音館書店 1987.2	Y18-2436
10	Outcast	Rosemary Sutcliff 作	Walck 1955	所蔵なし
	ケルトとローマの息子	ローズマリー・サトクリフ作 灰島かり訳	ほるぶ出版 2002.7	Y9-N02-170
11	Dawn wind	Rosemary Sutcliff 作	Oxford University Press 1961	所蔵なし
	夜明けの風	ローズマリー・サトクリフ作 灰島かり訳	ほるぶ出版 2004.7	Y9-N04-H271
12	The hound of Ulster	Rosemary Sutcliff 作	Dutton 1963	所蔵なし
	炎の戦士クーフリン：ケルト神話	ローズマリー・サトクリフ作 灰島かり訳	ほるぶ出版 2003.3	Y9-N03-H118

シャーリー・ヒューズー英国で最も敬愛される絵本画家ー

13	Corduroy	Don Freeman 作・絵	Viking Press 1968	Y17-A87
	くまのコールテンくん	ドン・フリーマンさく まつおかきょうこやく	偕成社 1975	Y17-4439
14	Outside over there	Maurice Sendak 作・絵	Bodley Head c1981	Y19-A662
	まどのそとのそのまたむこう	モーリス・センダックさく・え わきあきこやく	福音館書店 1983.4	Y17-9347
15	Lucy and Tom's day	Shirley Hughes 作・絵	V. Gollancz 1985,c1960	所蔵なし
16	Lucy and Tom go to school	Shirley Hughes 作・絵	V. Gollancz 1973	所蔵なし
17	Lucy & Tom's Christmas	Shirley Hughes 作・絵	V. Gollancz 1981	Y19-A276
18	たのしく読める英米の絵本：作品ガイド 120	桂宥子編著	ミネルヴァ書房 2006.10	YZ726.5- カツ
19	Up and up	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 1979	所蔵なし
20	Beatrix Potter : artist, storyteller, and countrywoman	Judy Taylor 作	F. Warne 1996	YZ726.6P-B3
	ビアトリクス・ポター：描き、語り、田園をいつくしんだ人	ジュディ・テイラー著 吉田新一訳	福音館書店 2001.1	YZ726.62- ポタ
21	Alfie gets in first	Shirley Hughes 作・絵	Lothrop, Lee & Shepard Books 1982,c1981	所蔵なし
22	Alfie gives a hand	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 1983	所蔵なし
23	An evening at Alfie's	Shirley Hughes 作・絵	Lothrop, Lee & Shepard Books c1984	所蔵なし
24	Alfie and the birthday surprise	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 1997	所蔵なし
25	Enchantment in the garden	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head Children's Books 1996	所蔵なし
26	Ella's big chance : a fairy tale retold	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 2003	Y17-B3885
27	Moving Molly	Shirley Hughes 作・絵	Bodley Head 1978	所蔵なし
28	はじめてのおつかい	筒井頼子さく 林明子え	福音館書店 1977.4	Y17-5153

レジュメ

アンソニー・ブラウンの画像分析—イギリス絵本の伝統と革新—

藤本 朝巳

国際アンデルセン賞画家賞を受賞したアンソニー・ブラウンは、イギリス絵本の伝統を受け継ぎ、独特の絵本創りをしています。今回は、彼の生い立ち、画家になっただけでなく、きつななどを手がかりに、〈彼の絵本創りの基盤となっている要素〉を解き明かします。さらに絵本の絵のコードからみて、独特の表現法を解説します。同時に、作品の背景（未発表）と最新情報も紹介いたします。

はじめに

Anthony Browne の生い立ち

絵本画家になるまでの道のり

萌芽期 幼い日の遊び

父親の死 -----> ゴリラへの思い

準備期 — とりつかれた日々 — 医学教材制作 → グリーティング・カード制作
(精密描写) (愉快的絵) -----> 表現技法 の確立

学習 [模索] 期 — シュールレアリスム との出会い -----> 表現様式 の確立

完成期 → 登場人物・舞台・出来事など の創出・工夫 -----> 物語 の確定

作品分類

イギリス絵本の伝統的手法

ランドルフ・コールデコットの手法から

独特の展開手法

1. 背景の遊び絵—もう一つの物語

2. 独特の枠絵— I. 枠絵の多様性

II. 囚われしものまなざし

最近の活動

まとめ

(質疑応答)

(参考文献)

Martin, Douglas. *The Telling Line*. London: Julia MacRae Books, 1989. 279-290.

Browne, Anthony. "Making Picture Books", *The Prose and the Passion*. Ed. Morag Styles, Eve Bearne, Victor Watson. London: Cassell, 1994. 176-198.

藤本朝巳、『ぞうくんはどっちを向いている？ 楽しい絵本学』（フェリス・ブックス1）、フェリス女学院大学、2001年、103-125.

アンソニー・ブラウンの画像分析

—イギリス絵本の伝統と革新—

藤本 朝巳



はじめに

みなさん、こんにちは。本日はアンソニー・ブラウンさんと彼の作品についてお話ししたいと思います。私は彼と大変親しいおつきあいをさせていただいております。私たちはよく会って話をします。一緒に旅行したり、仕事をしたりする間柄です。私が彼に初めて会ったのは2000年の夏でした。この年は、彼が国際アンデルセン賞画家賞を受賞した年で、当時、彼は世界中で話題の人でした。ちょうどその年にケンブリッジのホマトン・カレッジという大学で世界の絵本のシンポジウムが行われまして、私はその会場で、英国在住の絵本作家きたむらさとしさんの紹介でアンソニーさんに出会いました。以来、大変仲のよい友人としておつきあいさせていただいております。

アンソニーさんはこれまで三回来日されています。一回目は1998年で、これは全国各地で原画展が行われまして、何人かの画家と一緒においでになっています。それから2003年に私どもの大学でご招待しまして、大学で二回、東京のJBBY（社団法人日本国際児童図書評議会）の会場で一回、講演会などを行いました。またこの年には、横浜で原画展を行いました。そのときは地方の会場でも一部の原画（40枚くらい）を展示いたしました。

また2005年に、友人たちと協力して、再度招待しまして全国各地で五回の講演会やワークショップを行いました。この年は長野県の小さな絵本美術館で、約70枚の原画を展示いたしました。そんなときに電車の中で、あるいは食事をしながら、観光地を一緒に歩きながら、いろんな話をいたしました。また私が英国に行きますと、彼はロンドンまで会いにきてくださいますので、ロンドンでもいろんな話をしております。本日は、そんなと

きにお伺いした個人的な話も含めて、お話をさせていただきたいと思っています。

国際アンデルセン賞画家賞を受賞したアンソニー・ブラウンさんは、イギリス絵本の伝統を受け継ぎ、独特の絵本作りをしています。今回は、彼の生い立ちや、画家になったいきさつなどを手がかりに、彼の絵本作りの基盤となっている要素をお話ししてみたいと思っています。なお、さらに絵本の絵の構造—絵本の絵を技術的、専門的に見て絵本の絵を分析したりできるのですが、そんなことも利用しながら、彼の独特の表現法についてお話をしてみたいと思います。最後に、最近知った彼の現在の状況なども付け加えさせていただきます。

アンソニー・ブラウンの生い立ち

さて、以降アンソニーと呼ばさせていただきますが、アンソニーは1946年、英国ヨークシャー州のシェフィールドという町で生まれました。英国では1800年代に工業が発展し、北イングランドの人口が増加していくのですが、シェフィールドという町は質の高い鋼鉄や銀のめっきなど金属製品で栄えた町です。なお、彼は生後まもなく、一家ともども北部のハリファクスに近いホーンという村に引越し、そこで育ちます。1946年ですから今年還暦を迎える、60歳になる方です。9歳のときにシュールレアリストの好む本の一つである、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』に強くひかれたと言っています。彼は少年の頃から、しかけのある隠し絵やだまし絵のような不思議な手法の絵に関心があり、また、ファンタジー作品に強く心ひかれていたようです。人の一生は、幼いときの体験に強く左右されるものですがけれども、彼

は少年時代に、すでに今の作家としての活動に深くかかわりのある体験をしていたと言えます。

アンソニーは以前、私に次のように語ってくれました。「幼い頃ぼくは、パブで、こんなことがあった」。パブというものをご存知でしょうか。イギリス独特の酒場ですね。「ぼくはバーに入っていっただけで、テーブルの上に立って、そこにいたお客さんたちに不思議な話を語ったんだ。その話の多くは、リク・ダン・タックルというスーパーヒーローが出てくる話でね。この名前は実際には意味もなく、ぼくは、そう呼んだ理由も特になかったけれどね……ぼくの家には子どもの本はあまりなかった。今ぼくたちが絵本と呼ぶような本はなかった。ぼくは『不思議の国のアリス』の奇妙な世界を恐れたことを覚えているよ。そしてテニエルの暗い感じのするイラストに、怖い思いをしたと同時に魅惑されたことも覚えている。ぼくはフェアリーテールと漫画が大好きだった。また、ロバート・ステイブンソンの『宝島』にアメリカのイラストレーター、N. C. ワイエスが怪奇な挿絵をつけたすばらしい本があったのを覚えているよ。その本は力強い挿絵で描かれていて、恐ろしい物語だった。でも、ぼくはそれを読んで動揺することはなかった。ぼくは見たいときにページをめくってあの恐ろしいロング・ジョン・シルヴァーや、盲目のピューを見ることができたんだ」。これがN. C. ワイエスの挿絵をつけた当時の本です。ワイエスはご存知でしょうか。ワイエス親子というアメリカンリアリズムの画家です。現実主義の、とてもリアルな絵を描く親子です。

彼は大変想像力の豊かな子どもで、言葉が含んでいるあらゆる喜びや恐れを豊かに想像して描いたそうです。もちろん例のリク・ダン・タックルの物語も想像していただいただけではありませんでした。それから、彼の何冊かの絵本によく出てくるのですけれども、夜中に寝室で夢を見て怖がるとか、出現して変身するお化けを怖がったとか、子どものときによくそういうことを体験したそうです。部屋の壁紙や染みが、想像力を通して怪物や侵入者になって自分を襲ってくるという体験を幼いときにずいぶんしたと言っております。

以下も彼が個人的に私に語ってくれたことで

す。「概してぼくは幸せな子どもだった。兄ともごく年齢が近く、あたたかでやさしい両親に深く愛されて育った。父と母は経済的には豊かでなかったけれども、お金のことで苦勞していることを子どもに気づかせないように配慮してくれていた。両親はよくぼくたちと一緒に過ごしてくれたし、よく本を読んでくれた。おしゃべりをし、ぼくたちの言うことを聞いてくれたものだ。両親は二人ともぼくたち子どもと絵を描いたり、一緒に遊んでくれたりした。両親はいろいろなことでぼくたちをもてなしてくれたのだけれども、彼らは毎週ぼくたちを映画に連れていってくれたものだ。兄と私は週の終わりには、映画に出てきた登場人物になりきって過ごした。今子どもの本を書いて挿絵をつける者として思うに、その頃のことがぼくに大きな影響を与えていたと思うよ」。アンソニーはこんな少年だったそうです。

絵本作家になるまでの道のり

今ご覧になっている写真は、*Piggybook* (1986) という本です。『おんぶはこりごり』というタイトルで翻訳出版されておりますけれども、彼は「本を作るということは一本の映画を作り上げるようなものだ」と言っています。絵本を作るときにはストーリーボードといわれる本を作って、その中に枠を書いて、一つの枠の中に、一枚の絵を描いて計画を立てる。一種のダミーです。画面の変化を順に示して絵を並べていくパネルです。こういったものを必ず作るのだそうです。これは *Piggybook* のダミー集です。なお、彼の場合には、最初に物語を書いて、その後に絵をつけるのではなくて、二つの要素、言葉と絵が同時に進行していくのだそうです。そうやって本を作ると言っております。

それでは、アンソニーの絵本作りについて、また彼が絵本作家になったいきさつについてお話しします。

アンソニーが絵本作家になるには、面白い経緯がありました。その一つは子どもの頃の遊びです。次のように彼は述べています。「ぼくは長い時間をかけて大きな絵を描いたり、微に入り細に穿って絵を描いて過ごしたりしたものでした。たいて

いの絵は、兵隊たちやカウボーイや、よろいに身をまとった騎士たちが戦う場面でした。その絵をちょっと見ると、最初はひどい暴力シーンと思えるかもしれませんが、よく見てくださるとわかるのですが、ユーモアたっぷりに細かい絵が描いてありました。それは今の私の絵に似ていないこともないのですが……」と言っています。彼は、絵の中に言葉を書くとき、吹き出しや絵が何を示しているのかがわかる説明を書き込んだそうです。子どもの頃からこういうことを習性としてやっていたそうです。「そうやって絵と言葉の組み合わせを楽しんできたんだ」と言っています。ご覧のようにこれは下の方に“Tonny Browne age 6”と書いてあります。6歳のときの絵です。

1963年、アンソニーが17歳のとき、敬愛していたお父さんが、突然目の前で心臓発作を起こし、亡くなります。リーズ美術大学に入学して絵の勉強を始めたばかりのアンソニーにとっては、それは大変ショックな出来事でした。この出来事と父親への思いは、作品『うちのパパってかっこいい』(My Dad, 2000) や『どうぶつえん』(Zoo, 1992)などに表現されています。アンソニーの青年期からその後の作家活動について、研究者であるマーティン・ダグラスという人が次のように言っています。「1963年、アンソニーの父親が突然亡くなる。その精神的につらく、また厳しい体験が、後に現実、それは人間の持つ強さともろさにおいて形成されるものであるが、その現実と正面から立ち向かう力になったと言える。また父親の死は、幼い人のために調和の取れた世界を創造しようという願いを持ち得たことと深く関係している。このようにして達成された彼の世界は賞賛に値するものであるが、実は大変苦勞して達成されたものなのである」(注1)。この言葉のとおり、アンソニーにとって父親の死は、大変大きな出来事であり、彼の絵本作家としての生き方に大きな影響を与えたものでした。

この写真は、お父さんが愛用していたガウンだそうです。このガウンをあるとき母親のスーツケースの中に見つけて、かび臭くて、腰紐はなくなって、虫食いをしていたけれども、彼はそのにおいをかいでお父さんを思い出したと言っていま

す。思わず抱きしめて、本当に悲しくなった。彼がお父さんの絵本を作ろうと思って作ったのが『うちのパパってかっこいい』という絵本です。これは最後の方のシーンです。お父さんは例のガウンを着ています。きっとこの子どもはアンソニーの自画像だと思います。

アンソニーは、好ましい父親像の絵本を作りたいといつも思っていたのですけれども、『ヘンゼルとグレーテル』(Hansel and Gretel, 1981 邦訳なし)では弱い父親、『おんぶはこりごり』ではわがままな父親、『すきですゴリラ』(Gorilla, 1983)では冷たい父親、『どうぶつえん』では短気な父親、そんな父親ばかり描いてきたけれども、ここにぼくの本当に好きなお父さんを描いたんだ、と言っています。

そのお父さんという人は大変大柄な人だったそうです。第二次世界大戦に参戦し、あるときはプロのボクサーをしていたそうです。ラグビーが得意で、アンソニーとお兄さんが子どものときには、「どンドン体を鍛えるんだ」と、子どもたちをしっかりと鍛えた人だそうです。ラグビーやボクシングと一緒にし、重量上げの練習をしたそうです。アンソニー自身も大変スポーツの好きな人です。その一方で、お父さんは絵を描いたり詩を書いたりする人だったそうです。時には模型の船を作ってくれたり、という手先の器用な人でもありました。「力強い」と「繊細」、「強い」と「やさしい」、という両極端な性格を持った人がお父さんだったそうです。そして、その姿が彼にとってはゴリラを思い出させるのです。「ゴリラは大きく獐猛な顔つきをしているけれども、実はやさしく大変友好的な生きものである」と彼は言っています。

私はあるときアンソニーと自分たちの両親について長く話したことがあります。彼は17歳でお父さんをなくしたのですけれども、私も17歳の時に母親をなくしました。父と母という違いはあるのですが、青年期に親をなくすという共通の体験があって、いろんなことを話し合いました。そのときにアンソニーがいかにお父さんに強い思いを抱いているかがよくわかりました。また、彼の青春時代、それから20代は、父親像が彼を強く縛っていたのです。特に、お父さんが心臓発作でなくなっ

たので、死というものに大変恐れを感じていました。それから、人体というのはいったいどうなっているのだろう、体の中身はどうなっているのだろう—そんなことに不安を覚えて過ごしていたようです。

アンソニーは美術大学では、グラフィックデザインを学びました。その学びは彼には容易なことではありませんでした。グラフィックデザインは見せかけのうすっぺらなものと思えたそうです。ですから彼は、学生時代はとて反抗的に過ごしたようで、大学の先生からいろんな課題を与えられると、まったく逆のことばかりやって、嫌われていたそうです。退学させられなかったことは不思議だ、というくらいの学生生活だったそうです。当時学生は、ありもしない会社のロゴマークをデザインする、そんなことばかりやらされて、大学は面白くなかったのです。そしてひそかに「自分はfine art（純粋芸術）を描く。画家になりたい」と思っていたのだそうです。一方で、写生のクラスは大変好きで、一人で写実的な絵を描いていたそうです。これは当時の絵の一枚です。美学生としては落ちこぼれ、ひどい成績で大学を卒業するのですけれども、これからいったい何をしていいかわからない、そんな日々が続きます。

あるとき、彼は図書館で本をばらばらとめくっていたそうです。そんなときにMedical Art（医学美術）という言葉に出会うのです。これは人体の内部と絵を結びつける仕事だろう、と彼は直感的に思ったそうです。一年後に、彼はマンチェスター大学の医学教材を製作するアシスタント画家になっていました。幸いなことに、彼は自分のしたいことをして収入を得ることになったのです。そこで、手術と検死をじっくり見学してスケッチしました。水彩画で写実的に描きました。ちょっと気持ちの悪い絵ですが、これは、その頃描いた内臓の絵です。「これは絵を学ぶ場としては実によい学びの場になった」と彼は言っています。そこで二年間働いて、美術大学で四年間学んだよりもはるかに多くのことを学ぶことができた、と彼は言っています。このような経験と努力は、後の作品でゴリラやチンパンジーや写実的な絵を描くときの土台になっているわけです。こうして医学

教材画家として生活していたのです。二年半後、彼の生活は変わるのですけれども、もう少し説明いたします。これも解剖図です。手術というのは大変複雑で、手術の間は、血管があり組織があり、先生や看護師さんの腕や道具が動く。写真で示そうとしてもそれは不可能だそうです。ですから画家が医学教材図にしてそれを医学生に見せるわけです。動脈はこうなっている、静脈はこうなっている、と色を違えて描いたりするわけです。そうやって彼は、医学画家と呼ぶのでしょうか、そういう仕事で生活をしていたわけです。

解剖学をわずかししか知らないアンソニーにとって、この仕事は非常にむずかしいものでした。しかしこの時代の修行は実に有益な学びとなった、と述べています。また、この仕事がお父さんの死以来の、人の死と人体の内部に対する彼の恐怖を払拭してくれたそうです。やがて、こんな絵ばかり描いていて、彼は遊びのある世界一本来のジョークが出てくる絵に戻りたいと思ったそうです。そこで、この生活をきっぱりとやめます。しかし、どうやって生きていっていいかわからない、そんな日々を過ごすのですが、ただ、医学画家としてやったこと一番の利点を次のように言っています。「むずかしいことを絵でわかりやすく語る。これが医学画家の仕事である」。むずかしいことをわかりやすく絵で語る—この学びが今、絵本作家になっている基本になっているわけです。すなわち彼はこの時代に絵で物語るということの基本を学んだのです。

さて、医学画家をやめて、次に彼が始めたのはグリーティングカードのデザインでした。この段階でも、子どもの本を書くということは、まだ考えていなかったそうです。以来15年間、カードデザイナーとして生活をしていきます。その間に結婚をして二人のお子さんに恵まれています。しかしこの仕事もまた、子どもの本を描くのに大変役立ったと言っています。というのも、カードデザインの多くは子どもを対象にしていたし、それが今の絵本の滑稽な絵や楽しい絵の基本になったからです。カードデザインを始めて約一年後、彼は英国のある出版社にデザインをいくつか送ってみたそうです。そして、出版社の方から「絵本

を一冊描いてみないか」という申し出を受けるのです。彼はすぐに、ジャングルで道に迷ったゾウの子どもの他愛ない物語を作るのですが、それは物語としても成り立っていないし、絵本にならなかったそうです。

やがて、そういう試行錯誤を重ねた挙句、30歳のとき、1976年に最初の絵本を出版しました。『魔法の鏡を通して』(*Through the Magic Mirror*

邦訳なし)という作品です。これは、シュールリアリストのルネ・マグリットの絵が着想になったそうですけれども、これが絵本作家のスタートでした。その後、彼は着々と力をつけて、絵本作家になっていくわけですが、この左の絵は彼の名作と言われている『ヘンゼルとグレーテル』(*Hansel and Gretel*, 1981 邦訳なし)の最後のシーンです。向かって右の壁に、絵が描いてある。ちょっとわかりづらいのですが、この作品の秘密はこの絵に隠されているのだそうです。この話をし出すと30分ぐらいかかりますので、今日は話ませんが、この絵をぜひご覧になってください。ある有名な絵がここに隠されています(注2)。「『ヘンゼルとグレーテル』は大変むごい話だ」と彼は言っています。「親が子どもを殺す、捨てる話である。そんなむごい話は、ぼくは汚い絵でしか描けなかった」。しかしながら、最後のシーンはヘンゼルとグレーテルが戻ってきて、父親と再会する場面で閉じています。母親はすでに死んでいます。そこで彼はどうやってラストシーンを描こうかと悩んだそうです。いろんな絵を描いてみたけれども納得できない。結局このように、後姿の父親と抱き合う子どもたちの喜びとか当惑とか—自分を捨てた親に、戻ってきて会うわけですから—こういう姿で描き上げたそうです。しかしながら、左の方にはマグリット風の青い空が描いてあり、そして開け放たれたドアは希望を感じさせる、そんな絵作りをしたのだそうです。

右側はキング・コング、これも最後に近いところのシーンです。こういった描写は医学教材を描いたときに身につけた技術であると彼は言っています。ところで、昨年私はキング・コングの絵本を訳しましたが(『アンソニー・ブラウンのキング・コング』平凡社 2005)、そのときにずいぶんメー

ルをやり取りしまして、彼は父親とゴリラとキング・コングは一線上に並んでいるということを強調していました。それから、マグリットの絵に大変影響を受けて描いた作品だということも言っております。

さて、いろいろお見せしてきましたが、ここで彼の作品の分類と、キーワードを挙げてみたいと思います。私は次のように分けてみました。「1. お父さん(ゴリラ)をテーマにしたもの」、「2. シリーズ ウィリー」、「3. 悪夢、不安、恐れをテーマにしたもの」。もちろん、こういう分類はいろんな分け方ができますし、またキーワードも他のものを挙げることもできますので、これは一つの参考にしていただければと思います。以上で、アンソニーが絵本作家になったいきさつを終わらせていただきます。

イギリス絵本の伝統的手法

続いて、イギリスの絵本の伝統的手法、ランドルフ・コールデコットの手法等から見てアンソニーの絵本作りがどうなっているかを考えてみたいと思います。今回の講座は「絵本の愉しみ—イギリス絵本の伝統に学ぶ—」というテーマで行われています。みなさんはすでに吉田先生、三宅先生、灰島さんから有意義なお話をお聞きになったと思います。そこで私も先生方のご著書などから学んだことを参考に、アンソニーの絵本作りの手法がどのようにイギリスの絵本作りの伝統に基づいているか、そして、彼がそれを壊し、逸脱し、発展させていった点はどこであるか、ということをお話してみたいと思います。

ここで、いったんアンソニーから離れて、絵本そのものについてお話してみたいと思います。絵本の基本的な話におつきあいください。私は絵本は生きているものと思っています。もちろん絵本の本体そのものは、紙や糸や糊でできています。これは無機質なものです。しかし絵本というものは、まるで人体のように多くの部分が組織されて出来上がっているものです。この各部分が一定の目的、たとえば物語を伝えるというような目的のもとに統一されて、部分と全体が必然的な関係を持って機能するものが絵本である、と私は思いま

す。そういう意味で絵本は生きもののように命を持って読者に働きかけてくるものです。

一方、その絵本を生かすのは、実は読者なのです。読者による参加がないと絵本は機能しません。読者が手に取ってページをめくるとき、絵本は不思議な働きを始めます。こうして絵本は読者に読み始められると、まるで心臓が動き出すように鼓動をし始めます。生きて読者の心に響き、絵本と読者の間に関係を生じ、読んだ人や、あるいは子どもであれば、読んでもらった人に、心の中に何かを残していくものだと思います。そういう意味で私は絵本は生きものであると考えています。

さて、絵本は生きているもの、その絵本に命を与えるのは読者、また絵本は生きものである、と申しましたが、絵本が生きているということを別の観点から言いますと、絵本は「語り」であると言えます。語りは生きものです。みなさんたちの中にも語りをなさる方がいらっしゃると思いますけれども、絵本は絵と文章によって語る生きものです。一般的に私たちは、絵は見るものと思っています。そして文章は語るものと思っています。しかし絵本では文章は読むだけではなく、見るものでもあります。絵は見るだけでなく、読むものでもあります。その理由は、絵本では文章を読んで、ある種の絵が見えてくるときがあり、また、読んでもらい聞いているうちに浮かんでくるイメージというものがあるからです。そういう意味で、絵本の絵は読むものである、ということが言えると思います。一方、絵本では絵ですべてを見せることはできません。文章ですべてを語るということもできません。一番大事なことは、絵と文章の両者が互いに補い合い、互いに助け合って情報を伝達するということです。そこでは文章で語れないものを絵が示し、絵では示せないものを文章が語るということが起るわけです。

絵本の研究者でマリア・ニコライエヴァという人がいまして、最近、非常にすぐれた研究論文を次々と発表しております。昨年は日本に来て、大阪で講演をなさいましたけれども、彼女の本で、*How Picturebooks Work* (2001 邦訳なし) という絵本研究書があります。『絵本はいかに機能するか』というものですが、その中の中心的な考

え方はこういったことなのです。「絵本の絵は複雑な図による記号であり、絵本の言葉は複雑な言葉による記号である」。絵も言葉も彼女は記号と言います。「絵の記号というのは描写することであり、表現すること、言葉の記号というのは語ることである。しかしながら、両者が協力するだけではなくて反発をしたり緊張したりするところに絵本の面白さが出てくる」(注3)ということを書いているのです。そのことをこれから、名作といわれる絵本のあるページを用いて考えてみたいと思います。

みなさんは『ひとまねござるときいろいぼうし』(*Curious George*, 1941) という絵本をご存知ですね。好きな方が多いと思います。冒頭の方で、こういうシーンがあります。「おおきな きいろい ぼうしの おじさんは、じょーじを ちいさなぼーとに のせました。それから、ひとりの すいふが ぼーとをこいで、みずのむこうの おおきなふねへ わたしてくれました。じょーじは、かなしくなりました」(光吉夏弥訳 岩波書店 1966) と書いてあるのです。文章で読むと悲しくなったと書いてあります。文字の読めない子どもは、この文章を聞かせてもらったときに、ジョージは悲しいんだ、住み慣れたジャングルから連れ去られるんだ、これからいったいどうなるんだろう、と感じてしまうわけなのです。かわいそうに、と思うに違いありません。ところが、絵の方を見ますと、悲しいはずのジョージは、海底の魚を楽しそうに、さも興味深そうに見ています。悲しくなったと書いてあるのに、彼はちっとも悲しい顔をしていないのです。絵はむしろ楽しい雰囲気を与えています。用いてある色合いも、紙面は、白の背景に青色の海、服、袋、船の船体に黄色を用いたりして、そして赤いアクセントがあって、波の様子もとても楽しい雰囲気を表しています。ですから、この絵を見ている子どもにとっては、ジョージは囚われの身で悲しいとは思えない。絵の方はとても楽しい、わくわくするような絵が描いてあるのです。悲しいと伝えながら、絵を見ると、ジョージはこれから起こるであろうことに興味津々であり悲壮感はないと感じてしまうのです。言葉と絵が相反することを表している。これ

が、H. A. レイのうまいところですね。こうしてこれから楽しいことが起こると予感させているわけです。このように文章の途中まで、相反する言葉と絵を味わいながら見ていき、そしてこのページの最後にくると、“George was sad, but he was still a little curious.”と出てくるのです。「それでもやっぱり、めずらしいものが おもしろくてたまりませんでした」と訳してあります。文章を読んでもらう子どもは聞きながら、耳では悲しいと聞かされ、絵では楽しいと思わされ、そして最後に楽しいと追い討ちをかけるように語られるわけですね。これが絵本の絵と文章の面白さです。相反する、あるいは緊張するような関係で、両者が絵本を面白くしていくわけです。

さて、絵本の言葉と絵の、今述べたような関係を19世紀にすでに始めたのが、ランドルフ・コールデコットという人です。そのことは吉田先生のお話で、みなさんはきっとお聞きになったことと思います。

私はこの夏、イギリスのケンブリッジに二か月半ほどいたのですけれども、何度もアンソニーとメールのやり取りをして、お互い会おう会おうと言って、結局今年は見えませんでした。彼はデンマークに行っていて、そこで絵本を描いたり、絵本作家の友人の絵の手伝いをしたりしていたそうです。帰ってきて会おうと思ったら、すぐにボストンに行ってしまうと、アメリカで仕事をして、その頃、私の方の研究が忙しくなって、時間がもう取れなくなってしまったのです。向こうから、会うから出て来いと言ってくれたのですが、今度は私の方が動けなくて、結局会わずじまいで過ごしてしまいました。それから私が帰国する直前に来日の話があがってきました。日本のある団体が、アジアやアフリカの絵本原画のコンクールをするので、彼にその審査員を務めてほしい。そこで、私を通してアンソニーに依頼してほしいということになって、私はたぶん無理だろうと思ったのです。この12月に行うというのです。「急なので、たぶん受けることができないと思うけれども、こういう話が来ている」ということを伝えました。彼は一週間くらい悩んでいたのですが、結局私の方に何度かメールが来て、どうしたらいい

と思う、と聞いてきたのです。条件を聞きましたら、関係の方がいらっしゃったら申し訳ないのですが、エコノミー席で往復をして、三日間の拘束、そしてボランティア（謝礼なし）だということです。絵本作家というのは必ずしも豊かな人ではありません。国際アンデルセン賞を受賞していても、絵本を描いて生活しているわけですから、生きていくためには、それ以外にも常時何かのイベントに参加するなど、本当に忙しい毎日です。ですから、本心を言うと、ちょっとこれでは行けないと言ってきたのです。それで私は「また呼ぶから、今回は仕方がないですよ」ということで、残念ながら今年の来日は流れてしまいました。しかし、近い将来、彼は日本が大好きですから、来年か再来年にはまた来てくれるものと思います。彼は新作を次から次に準備していますので、来日は可能ではないかと思えます。つい最近、*Silly Billy* (2006) という作品が、9月でしたかイギリスで発表され、ほとんど同時に、今日おいでの灰鳥さんの訳で『びくびくビリー』（評論社 2006）という題で出版されています。とても良い作品です。

さて、それでは話に戻りますが、絵本の流れということを見なさんと一緒に確認してみたいと思います。絵本では、ページをめくりますと、絵が文章とともに読者の目を導いていきます。これは、文字の流れにそっているわけです。西洋では文字を横書きに書きます。ですから、目は、文字を追うように左から右へと動きます。そして上から下に書いていきますから、左から右へ、上から下へ絵本は流れていくわけです。総合して言いますと、左上から右下へ、というのが絵本の基本的な流れです。これは理にかなっています。私たちも実はこういった流れの方向に影響されて生活しています。看板を見ても、情報の多くは左から右に書いてあります。絵を描くときもこういう流れで示すことが自然なのです。しかしながら、実際にはそういった流れは、単純に描いてあるわけではありません。絵本の表現方法は、複数の絵の関係から見えないと、わからないのです。

ランドルフ・コールデコットという人は、こういった動きの原理を忠実に使って絵本を作りまし

た。英国の絵本のページというのは右から左にめくります。しかし、絵の流れはあくまでも左から右に流れるのが基本です。当然、文章の流れも左から右です。また、コールドコットの本の特徴の一つは、主なる物語と副なる別の物語が描かれていることです。たとえば、この絵本（注4）はもしかすると吉田先生がすでにご説明してくださったかもしれませんが、あるおちぶれた地主の息子が、その母親に「資産家の娘さんをお嫁さんにするように」と言われて探しに出るのですけれども、お百姓の娘さんに出会うのです（口絵参照）。一種の恋物語です。世の中のことを知らない貴族の息子が田舎の若い娘さんに恋心を抱いて結婚を申し込みます。首尾よく運ぶと思われそうですが、結局失敗に終わります。世間知らずの息子と百姓で苦勞している娘さんの話です。こういう若い二人の話が主であって、一方で、貴族の連れてきた犬とお百姓さんの娘のところの犬が同じく恋をするというかじゃれあっている場面が描かれているのです。実際に若者同士の恋も犬たちの恋もうまくいかないのです。そういう物語です。主なる物語と副なる物語が描かれています。

ところで、絵本ではことがうまくいく場合はこういうふうに左から右にどんどん進めていくわけです。しかし、ことがうまくいかない場合に、私たちはマイナスのコードと呼んでいます。逆に右から左に動かすのです。この場合、犬たちもうまくいかないから、右から左という方向で示すわけです。こういうところをコールドコットは大変上手に使っています。そのことを、アンソニーは忠実に守って絵本を描いているということ、後ほど示したいと思います。

さて、アンソニー・ブラウンの独特の展開手法は次の三点です。「背景の遊び絵」、「文章と絵の基本的な配置。すなわち基本的なページ運び」、そして「独特の枠絵」です。これから絵を示しながらご紹介していきたいと思います。

まず、「背景の遊び絵」です。これは『こうえんで…：4つのお話』(Voices in the Park, 1998)という数年前に日本でも翻訳された絵本のひとこまです。コールドコットの絵本に、主なる物語の他に、もう一つの物語があるということを紹介し

ましたが、ご覧のように、この絵本でも、前方に人間ならぬゴリラとチンパンジーがいて、後ろに犬がじゃれあっているところを描いているのです。裕福な家庭のお母さんと息子が公園に遊びにいきます。そして、貧しい家庭のお父さんと娘と出会って、子どもたち同士はすぐに心を通わせるのですが、親は見向きもしない。特に裕福な方の親は貧しい親に目もくれないといった話なのです。そういったことを大変皮肉っぽく描いた作品です。この少年は、貧しい家庭の娘さんに大変心ひかれる。一方で、お金持ちの家の血統書つきの犬は、貧しい家庭の雑種の犬を追いかけるとい設定があるのです。こういったところは、アンソニーはおそらく古い絵本を見ながら参考にしたのではないかと思います。実はアンソニーには、まったく同じあらすじの絵本がありまして、かなり初期に描いた作品です。ですから、この作品は描き直しです。先ほどの「背景の遊び絵」、あるいは、主なる物語と副なる物語が同時に進行していく、つまり英国の絵本の伝統的な手法を彼は忠実に守っているということが言えると思います。

次も「背景の遊び絵」の例ですが、これは遊び絵の好例です。アンソニーという人は絵本の中でずいぶん遊びをしています。たとえば、これは『アンソニー・ブラウンのキング・コング』(Anthony Browne's King Kong, 1994)という絵本の中のひとこまなのですが、左の方は主人公の女性アンが空腹のあまり、リンゴを盗もうとするシーンです。絵の影の部分をご覧ください。蛇のような魔物のようなものが描いてあります。そしてそれを市場の主人に見つかってつかまるのですけれども、まるでゴリラのような手がぎゅっとアンの腕を握る絵として描いています。それから、右の方も同じく『アンソニー・ブラウンのキング・コング』の一部ですけれども、アンが映画のプロデューサーに見込まれて、しばらくぶりにまともな食事にありついて食べるハンバーグの中にゴリラがいます。こういったところでさりげなく彼は遊んでいます。ちょっと気持ち悪いですね、ゴリラを食べるみたいで。このリンゴが実はこの絵本の基調色になっていまして、アンの服は始めから終わり

まで朱色です。いたるところにこのリンゴの朱の色が出てきます。同じく、左は『アンソニー・ブラウンのキング・コング』の男性の主人公ですが、これは船員さんですが、帽子のところにゴリラの絵が描いてあります。

こちらは『どうぶつえん』という絵本の冒頭のシーンです。ここにもずいぶん遊び絵が描いてあります。父さんと母さんが幼い兄弟を連れて動物園に出かけるのですが、出かけたとたん渋滞にはまってしまいます。父さんはいらいらして子どもたちはけんかを始めます。あまりに車の動きが遅いものですから、画面の上にかたつむりがポンと飛び出しています。アンソニーはバナナが大好きだそうです。ゴリラもチンパンジーもバナナが好きだと思いますけれども。(トラックの荷物にバナナの模様がついているのを示して) こういった遊びをしています。

同じく遊び絵ですが、左側は『アンソニー・ブラウンのキング・コング』の一枚です。キング・コングが怒る場面ですね。ご覧のように頭の上に角が出ています。これは『どうぶつえん』のお父さんが怒ったときのシーンですが、これもマグリット風で、後ろの雲が角のように描いてあります。これでお父さんの怒りを表しているわけですね。こういった遊び絵が、彼の絵本の絵の特徴の一つです。

独特の展開手法

アンソニーの絵本の文章と絵の基本配置はこのようになっています。見開きページの左側の上に小さな枠を作る。そしてその下に文章を書いて、右側には枠を使って絵を入れる。これが彼の基本的なパターンだそうです。初期の絵本はほとんどこの形になっています。これをどんどん壊して、と言いますか発展させて今の絵本があるわけです。さて、これから、日本ではまだ翻訳されていませんけれども、*The Tunnel* (1989) という絵本を使いながら、どのようにページ運びをしているか、どういう絵本の手法を使っているかということ、物語を追いながらお話ししてみたいと思います。

いくつかの手法が用いられていますが、一つは

先ほども言いましたように、左から右への進行方向です。まずは、小道具によるほのめかしが事前に伏線を敷いています。それから背景画による暗示。絵本のページには、安全な位置と危険な位置、また冒険に入っていく位置、というパターンがあります。そういうものを実に忠実に彼は使っています。また、形態や色による心理表現があります。こういったものが彼の絵本作りの基礎になっているわけですね。

それでは、*The Tunnel* です。「仲直り」と訳していいと思いますが、兄と妹の日常的な生活のひとこまを描いた作品です。表紙にはトンネルに入っていく妹の後姿が描いてあります。これは見返しです。絵本では物語に入る前に見返しがあるのですが、見返しはとても大事なのです。ここに実はいろんな仕掛けがあったり、印象を持ってもらうために挿絵が描いてあったりします。ここでは、左側が妹のページで、右側が兄さんのページなのです。そして、妹は本が好きですから、本がさりげなく描いてあります。登場者の紹介がなされますけれども、これは妹のページ、こちらはお兄さんのページです。先ほどの見返しの図柄が背景に描いてあります。二人は兄妹けれどもあまり似ていません。妹の方は内気で、家の中で本を読んだりするのが好き、一方、兄さんの方は大変元気のいい子どもで、外に出て友だちと騒いだり、スポーツをしたりするのが好き、と書いてあります。これは個性を小道具や場所でほのめかしているわけですね。次は、これは見開きページですが、兄さんは昼間元気よく遊びますから夜はぐっすり寝てしまう。妹はいつも家の中にうじうじとしていますから、夜になってもなかなか寝つけないわけです。そこで兄さんは時々、妹の部屋に行き、オオカミの真似をしておどかしたりする、と書いてあります。ここには背景に赤ずきんの絵が描いてあったり、赤ずきんのようなコートが描いてあったり、オオカミの仮面といったもので、背景によってこの妹の状況が暗示されているわけです。二人は一緒にいるといつもけんか(言い合い)をしているのです。兄さんが指さしています。これはマイナスのコードで後ろ向きといえますか、あまりいい雰囲気ではないのです。お母

さんが怒って、外に出て遊んでいらっしやい、と二人は追い出されてしまう。「仲直りするまで帰ってきちゃだめよ、お昼になったら帰っておいで」と言われてしぶしぶ出かけていくところです。お母さんの指が行く方向を示しています。兄さんは本当は妹を連れて出て行きたくなかなかかった、というようなことが書いてあります。二人はごみ捨て場に行きます。西洋の絵本では、普通は左側が安全な位置、右側が危険な位置という設定をしています。ですから妹の方はいつも左側にいます。兄さんは冒険が好きですから右の方にいるわけですね。今言っておりますことは、先ほどのマリア・ニコライエヴァがよく解説しています。このような見方は、解釈はだいたい当たっていると思います。

もちろん彼は無意識に絵を描いているわけであって、ある程度は意識しているけれども、実際に描くときはそんなに意識していないのだということを言っています。でも出来上がった作品を見ると、みんなが言う通りになっているね、と言って笑っていました。ある講演会で彼が話して、私が文章を訳して読んだとき、こんなことがあったのです。私は彼の絵をずっと見ていて、明らかにマグリットの影響だろうということを思っていました。ある絵を見たときに、「これはマグリットの絵の模写ですよね」と思わず言ってしまったのです。そうしましたらアンソニーは「え、そうかな」と言いました。「そっくりですよ」と言ったら、「ぼくはそんなことは考えていなかった」と言っていました。でも私がそう言ったものですから、彼は気を使ってくれて、「いや、そうだったと思う」と後で言ってくれましたけれども、実際には描くときはあまり意識していないのでしょう。出来上がった結果は理論通りだったり、他の人の言う通りだったりするのですけれども。絵描きさんたちは、描くときは勢いにまかせて描きますから、必ずしも意識して描いているわけではないと思います。

安全な位置は左で、この絵では右側にいますから冒険ですね。そして後ろ向きに暗がりに入っていき、不安な方向を示している、と言われていきます。兄さんはボールを残していきます。妹は好き

な本を手元に持ったままです。左側と右側、見開きページですが、妹のいる空間とこれから妹の入っていく空間が相似形で描いてあります。枠を使っています。心理状況や行動をこういう記号化された枠で描くのが彼の特徴です。左から右に、妹は暗いこわいトンネルの中を抜けていきます。「トンネルは暗かった。じめじめしてぬるぬるしてこわかった」と書いてあります。こわいところに入っていきシーンですね。ちょっと操作をして透視処理をしてみますと、明暗が上手に使われていることがわかります。光と陰影を上手に使っています。それから、実際にそのトンネルを抜けて森に行き着いた場面ですけれども、左側が本来の景色です。何の変哲もない森なのですけれども、妹にとっては大変こわく見えてしまうのです。ですから、こわいものが、うじゃうじゃと周りに描いてあります。妹には見えないものが見えてしまう。ここは文字なしで描いてあります。オオカミやいろんなものがひしめいています。

やっと兄さんを見つけるのですが、黒い枠の中に後姿で、「石の像に固まってしまっていた」、と書いてあります。西洋では、たとえば聖書の中で、石の柱になるとか、石の像になる、という場面が時々出てくるのですが、罪に囚われた状況をよくそういう形で表します。呪いがかかった状態です。妹は兄さんに飛びついてしっかりと腕で抱きしめます。そうすると兄さんは色が戻ってきて、暖かくなって柔らかくなって妹を抱っこするので。ここで二人は仲直りをする。連続コマを使って、色の変化を使い、そして兄さんと妹が向き合う、という形でこの状況を上手に表現しています。枠の中もだんだん明るくなっています。

最後も文字なしで描いてあるのですけれども、ここでは兄さんは後姿、妹の目があたたかに親しげに兄さんの顔を見ています。ここにはもう枠はありません。枠があるというのは、一つのこだわりであるとか、束縛であるわけです。その枠を最後にはずしています。終わりの見開きでは、妹の空間と兄さんの空間に兄さんのボールと妹の本があります。最初の見開きから、こういったふうに変化させているわけです。

これがペーパーバックの裏表紙なのですが、私

は絵本を見るたびに時々がっかりします。今、本屋さんはバーコードをつけています。裏表紙もやはり意味があるわけで、良心的な本屋さんははがれるバーコードにしています。こんなところに値段や出版社の名前がぺたんと無造作に貼り付けてあって、とても残念です。なるべくこういったものはひかえめにしてほしいと思っています。以上が、彼の絵本の様々な展開手法です。

独特の枠絵

次に紹介するアンソニーの絵本の特徴は、枠絵の使用法です。枠を上手に使うという手法ですね。これは『どうぶつえん』という絵本の一枚ですが、ご覧のように枠に入れられたゴリラが悲しげな目で外を見つめています。しかも、その枠に檻といえますか、十字が描いてある。このような細工を実にうまく使っています。このまなざしが何ともいえず悲しい叫びを訴えるわけです。こういった絵は、やはり手術の説明図、生物画、人体画などを何度も描いたときに身につけたものだと思います。彼は死んだウサギの解剖図などを描いたと言っています。毎日毎日、ウサギの脚を切ってそれをずっと描いていた。二年半もそういう仕事をしていたのです。そういったときに考えることがあったのだと思います。同じく『どうぶつえん』の中の挿絵です。左はオランウータン、右はチンパンジーです。

続いて、様々な枠を紹介していきます。枠がある場合、枠がない場合、複数の枠を使う場合、四角ではない枠、変形の枠、囲い線のある枠、絵の一部が枠をはみ出す場合、枠を切り取る場合、枠に動線を使う場合。動線というのは漫画で使うような、動きを表す線です。こうして、物語絵本で枠を併用していく。こういった様々な枠を上手に使っています。絵本で使う枠にはいろんな機能があります。「枠に入れる」という言葉があります。枠の機能の一つは束縛です。拘束する場合に使う。それから、昔話絵本や物語絵本のように現実ではない話、現実の時空間ではない、というときに枠の中に入れて象徴的に暗示するわけです。このように、枠がある場合は囚われの者であるとか、束縛されているとか、窮屈である、という状態を表

すときです。

これは『ボールのまじゅつしウィリー』(Willy the Wizard, 1995)の物語の冒頭です。主人公のウィリーがまだ夢を持ち得ない、何か悲しい現実を生きているときの絵です。この絵では枠がありません。ウィリーが秘密の靴を手に入れるのです。これから彼の能力が発揮される、夢が実現するのではないか、ということで枠が取れてしまいます。

これは複数コマの例です。左の方では靴を手に入れたウィリーと靴の手入れをするウィリーが描いてあります。ウィリーは気弱な少年なのですが、顔を洗って歯磨きしてパジャマを着てトイレに行ってベッドに飛び込む、という生活一日々のルーティーン(日課)ですね—こういうふうにするのだというのが順番に描いてあります。漫画の枠によく似ています。基本的には左から右に、左上から右下にという動きです。こういったところが、人間が文字を読むときの動き、原理にかなっていると思われま

す。次は変形コマの例です。複数のコマですが、これも魔法の力を持った靴を手に入れたウィリーが、とたんにサッカーが上手になって、自由自在に相手をかかわしてボールを蹴る場面です。面白いのは、この場面です。ウィリーが枠を越えて、空間を自由に飛び越えて動いているという、手が二つの場面にわたって描いてある。「はみ出し」といいますが、飛び出すと元気が出るといえますか、発展性が生まれるわけです。そういったところも上手に使っています。

次は、変形枠です。丸枠。右側は別のウィリーのシリーズですが、弱々しいウィリーが広告を見て、こんなに強くなりたい、というところ。手で引きちぎった紙切れを貼り付けたようなデザインです。この広告を見ているウィリーはエクササイズを始めるのです。ちょっと変わった枠です。

次はくずし枠といえますか、本来枠は四角であるはずなのですが、ここでは一方を壊しています、くずしているというか。サッカーの選手を見てあこがれるシーンです。彼の夢が育まれていくというシーンです。

次は囲い線のある枠で、左側は、明らかに枠に囲まれています。上手な選手の中で、ユニフォー

ムも買ってもらえない、靴もないウィリーが一人取り残されている。仲間に入れなくて、つまはじきにされている、というシーンを、かっちりとした枠で描いているわけです。こちらは、夢と希望を持って飛び出していくシーンですけれども、枠を突き破っています。下は、明日試合だと不安で怯えるシーンです。黄色と黒、これはイギリスもそうなのですが、注意信号（危険を暗示）ですから、彼は不安な顔で黄色と黒の中にいます。

これもちょっと変わった枠ですけれども、左側は『かわっちゃうの?』(Changes, 1990) という作品で、この少年には自分の妹が生まれることになります。子どもというのは、お子さんをお持ちの方はよくご存知ですけれども、下の子が生まれるときに神経質になります。「お母さんが奪われるんじゃないか」と。この子も下の子が生まれると聞いて非常に神経質になって不安な時間を過ごすのですけれども、ボールを蹴ると卵になって卵からコウノトリが飛び出す、というところを描いたものです。なお、これは彼からこっそり聞いた話なのですけれども、彼の大好きな絵本の一つはこの『かわっちゃうの?』だそうです。なぜかという、この少年は彼の息子さんがモデルだからです。顔もそっくりに描いたと言っています。彼は、「ぼくには絶対売りたいくない作品が二つある」と言っていました。一つは『すぎですゴリラ』。これは彼の代表作で「これは売らない」と言っていました。そして『かわっちゃうの?』は「息子の絵だから売らない」と言っています。

右側は、『ボールのまじゅつしウィリー』でウィリーが魔法の靴をはいて自由自在に相手をかわしていく場面ですね。ここには枠からはみ出すウィリーと動線が描いてあります。動きを表すのです。最近、絵本作家でこういう線を使う人は増えています。

はみ出しです。これは『おんぶはこりごり』(Piggybook, 1986) のシーンですが、この本をご存知ですか。愉快な本で、お母さんたちは喜んで読んでくださいますが、お父さんたちはこれを見ると「ちょっと困ったな」という顔をしてしまう本です。いつもいつも男どもに仕えて、こき使われているお母さんが、怒って家を出てしまう話な

のです。最後は戻ってきて、男どもは反省をして仲直りをしてめでたしめでたし、なのですけれども、この絵はお母さんが飛び出していく場面です。置手紙を置いていきます。そこには、“You are pigs”と書いてあります。「あんたたちはブタよ、もうこりごりだわ」という感じの置手紙なのですね。これが枠から飛び出して書いてあります。右側は反対にお母さんが帰ってきたところで、お母さんは男どもの社会の枠を飛び出るわけです。上からにらむように男どもを見えています。枠を突き破るといいますか。帰ってきたお母さんに対して、男たちは家事を手伝い、炊事を手伝い、というふうになります。男の偏見というかわがまを突き破る、という象徴です。やはり枠を飛び出しています。

これはお母さんが飛び出していったときの絵です。暖炉の上に置手紙があって、その上にイギリスのある有名な絵（注5）が描いてあります。これがその原画なのですけれども、理想的な夫婦、相思相愛、美しい家庭の奥さんがいなくなっているのです。その絵をもじったのだ、と彼はいっています。

次は物語絵本を描く場合の枠です。昔話や神話や伝説のような本は、本来テキストのみで出来上がっている本です。絵がなくてもいいわけです。そういったものに、あえて絵をつけて出すものが昔話絵本などです。結構長いテキストのものが多くて、昔話でも20分、それから『アンソニー・ブラウンのキング・コング』ですとゆっくり読めば40分以上もかかります。そんな本を作るとき、彼はこういったパターンを使うのですね。片方にはテキストを入れて、片方に絵を入れる。こうやって画面を上手に使っています。これはしゃれこうべ島に着いたときに、島が見えるというシーンですが、島がゴリラになっています。ご覧のように文字もすべて枠に入れてあります。これは冒頭のシーンですけれども、左側は上に枠、下に枠に入った文字、右側は上に枠、下は六つのこま絵を使っています。こういったいろんな複雑なパターンを使って展開しています。

絵本の語り

さて、ここでまとめに入りますけれども、本日は、絵本では絵は単に絵を示すだけではなく、絵が文章のように何かを語る、ということを示し上げました。絵本は読者が絵を見ながら、いろいろな情報をまるで文字を読むように読み取るわけです。絵から何かを読み取っていく、これが絵本です。ですから、絵本の絵は一種の語りであることを示し上げました。これはコールデコット以来のイギリスの伝統手法であると思います。

一方、絵本では文章は単に言葉で語るだけでなく、文章が読者に絵を見せてくれる。自由に想像したりイメージをふくらませたりして、読者は文章から絵を想像していきます。ですから文章は一種の物語る絵であると言えます。やはり語りであると私は思っています。しかし、大切なことは、これらの機能—文章の機能、絵の機能—が別々に起こるのではなくて、これが必然的な関係を持って起こっていくわけです。絵と文章が協力しながら、ときには反発し合い、ときには緊張し合いながら、助け合い補い合って物語を伝達していく、これが絵本です。アンソニーはそういったことが実に上手な絵本作家であると思います。

私はこのように、絵と文章が協力して語っていく手法を「絵本の語り」ということにしています。この場合の語りには絵も文章も含めた語りです。絵本では絵と文章が協力して語ることによって読者に働きかけ、読者の心に響き、読者に何かを残していきます。そのような意味で、先ほど、絵本は生きている、ということを示し上げました。

しかしながら、絵本そのものに命を与えるのは、読者です。読者が働きかけることによって初めて絵本が機能します。絵本は、アニメーションやテレビ、映画などと違って、人が自分の手でページをめくらないと読むことができない。しかも、子どもであれば大人に生の声で読んでもらわないと読むことができない。とても原始的なものです。この原始的なところが大変いいのです。親子であれば一緒に時間を共有できます。小学校では読み聞かせなどが大変盛んですが、読み聞かせをしている小学校では学内の雰囲気が大変良くなっています。私どもの住んでいる茅ヶ崎でも大変盛んで

して、たとえば、ある婦人は週に三回小学校に通っています。朝20分の時間をいただいて、子どもたちに絵本を読んでやったり、素話をしたり、手遊びをしたりしています。そんな中で絵本は大変いい機能を果たしています。絵本はまさに生きもので、子どもたちと触れ合うことによって、あるいは大人や先生と一緒に読むことによって、大変いい効果を与えているのではないかと思います。

本日おいでのみなさんは、図書館にお勤めの方、あるいは文庫で活躍している方が多いと聞いておりますが、どうぞ読書普及活動に励んでいただきたいと思います。私たちは子どもに何か残してやりたいと思っても、子どもにしてやれることは少ないです。私は三人子どもがおりますけれども、何を残してやれるかという、たくさん絵本を読んでやったとか、語りを聞かせてやったとか、昔話を読んでやった、というような、子どもたちの心の中に、あるいは身体の中に、何か種を植えた、と言いますか、そんなことが唯一親としてできたことじゃないかな、と今思っています。末っ子は6年生ですけれども、まだ絵本が大好きです。夜寝る前に母親に絵本を読んでほしいといまだに言います。毎日のように語りを聞いたりして、そこが我が家の交流の場になっているのです。図書館でも近所のお子さんたちがたくさん来ると思っていますので、よい本をそろえて、よい読書活動といえますか、子どもたちにたくさん絵本を見せ、物語を聞かせてあげてほしいと思います。

ここで、もう一度大切なことをまとめておきますと、絵本では絵と文章の両者が互いに足りないところを補い合いながら情報を伝達して語るので、文章では語れないものを絵が示し、絵では示せないものを文章が語ります。あるいは両者が反発し緊張して読者に語りかける、そういったものが絵本の表現方法の基本であろうかと思います。アンソニー・ブラウンという人は古いイギリスの伝統的手法にのっとりながら、彼独特の手法をそこに持ち込んで絵本作りをしてきた人です。

日本では言葉について「調べ」ということを言いますが、私は絵本の絵にも一種の「調べ」があると思っています。本当に理解しようとするれば、絵本の絵の行間を読み取る必要があると思いま

す。たとえば、文章であれば私たちは行間を読むということを行いますね。文章には書いていないけれどもそこに含みがあるとか、文章の間に隙間があってそれを埋める、とか。絵本ではそれを文章と絵が両方で行うわけです。絵と絵の間に描いてある微妙なもの、あるいは別の言い方をすれば絵の働き、その働きを知ることによって絵本の楽しさが深まっていきます。もちろん今日私が申し上げたように、絵本はいちいち解説をして見るようなものではありません。まずは楽しむということが一番大事なことで、楽しんだ後に少し専門的になぜ面白いのだろうか、と思って見直していくと、このような様々な仕掛けがあるということがわかってくるのです。こういったものを知っておくと多少は読書活動にも役に立つのではないかと思います。学生たちは絵本の手法を分析することが大好きです。研究の対象とするときはこういったことが面白いわけで、しかし、それは二の次で、本当は楽しむということが大事だと思います。

絵本作家というものはそれを自然にさりげなくやってのけなくてははいけないわけで、アンソニー・ブラウンはそういったことを実に上手に使っている作家であると思います。絵本の調べを見事に絵と言葉で表現した作家である、と言えると思います。

アンソニー・ブラウンのこれから

最近のことを少しご紹介します。先ほども申し上げました『びくびくビリー』(*Silly Billy*, 2006)という本が最近出ました。それから少し前に*My Mum* (2005) という作品が出ましたが、これも評論社から『うちのママってすてきな』という邦題で最近出ています。2007年には*My Brother* という本が出る予定だそうです。これはサイト情報にはもう出ていまして、アンソニーも着々と準備をしているそうです。その他、実は彼にはいくつかのテーマがありまして、今計画をしております。日本の絵本を描く、と言ってくれています。それから、先ほど言いました『びくびくビリー』もたぶんシリーズとして続いていくと思います。幼い頃の体験、子どもの恐れ、不安、そういったものをやさしく温かく解きほぐしていくような作

品です。そういったものが続いて出るのではないかと思います。

この夏のことは先ほど申し上げましたけれども、私はいくつかアンソニー・ブラウンさんについてわからないことがあります。一つは作品を見ていくときに、何か暗い影があるということです。そういったものがいったいどこから出てきているのか。しかし、それがないと作品はいいものが描けないのでしょうか。彼の生活の中に何かそういったものを感じてしまいます。そういったところを作品を通してどう解消していくのか、もう60歳ですから、実は体力に自信がなくなってきた、ということをごぼしています。彼は小柄な方で165cmくらいなのですけれども、あるとき別れ際にハグをしたことがあるのです。そうしたら彼はゴリラのような体型でした。ぶ厚い胸をして、腕は大きくて、やはり西洋の方だな、と思いました。アンソニーは大きなスーツケースを二つ持って階段を駆け上ります。若いときからスポーツをして鍛えた体がありますので、いろんなサポートがあれば、ますます活躍して、いい作品を描いてくれるのではないかと思います。

本人はまた日本に来たいと言っています。ただ、呼ぶとなると予算も必要ですし、人脈も必要です。アンソニーの絵本を楽しみたい方が協力してくだされば、全国の3、4か所で講演会をしたり、サイン会をしたり、本の販売をしたりしていただければ、彼を呼ぶことができますので、ぜひネットワークを広げてアンソニーをもう一度日本に呼ぶことができると思います。これは2005年の春にイギリスで会ったときの写真です。原画を手渡しするときにお嬢さんが来てくださりまして、お会いしました。ウィリーが恋焦がれる女の子のイメージにそっくりでした。面白いですね、彼の絵本の登場者の顔を見ていくと、たいていウィリーの顔とゴリラの顔とアンソニーの顔が重なります。お嬢さんはアーティストです。息子さんは音楽家です。奥様も音楽の先生です。一家そろって芸術家です。

今日は最後の講義ということもあって、なるべく楽しい話をしたいと思っていたのですが、十分な話ができませんでした。つい最近イギリスから帰ってきたばかりで、今私はフェアリーテールの

研究に追われていまして、この仕事が一段落すると、また絵本の仕事などもできるのですが、気持ちと時間に余裕がなくて、あわただしく過ごしております。今回は、吉田先生からのお話をいただき、また図書館員の方のご理解とご協力がありまして、こういう講座に出席させていただきました。本当に感謝しております。

(ふじもと ともみ フェリス女学院大学教授)

(注1) Martin, Douglas. The Telling Line. London: Julia MacRae Books, 1989. 279-280.

(注2) Böcklin, Arnold. The Isle of the Dead. 1880. Kunstmuseum Basel, Basle: Oil on canvas, 111 x 155 cm.

(注3) Nikolajeva, Maria. and Scott, Carole. How Picturebooks Work. New York and London: Garland Publishing, 2001. 1-2.

(注4) Randolph, Caldecott. The Milkmaid. George Routledge & Sons, 1882.

(注5) Thomas, Gainsborough. Mr and Mrs Andrews. 1748-49. National Gallery, London: Oil on canvas, 70 x 119 cm.

「アンソニー・ブラウンの画像分析—イギリス絵本の伝統と革新—」 紹介資料リスト

No.	書名	著者名	出版事項	請求記号
1	Piggybook	Anthony Browne 作・絵	Dragonfly Books 1990, c1986	Y17-A7597
	おんぶはこりこり	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	平凡社 2005.3	Y18-N05-H173
2	My Dad	Anthony Browne 作・絵	Farrar Straus Giroux 2001,c2000	Y17-A7696
	うちのパパってかっこいい	アンソニー・ブラウンさく 久山太市やく	評論社 2000.6	Y18-N00-250
3	Hansel and Gretel	Grimm 作 Anthony Browne 絵	Julia MacRae Books 1981	所蔵なし
4	Zoo	Anthony Browne 作・絵	Julia MacRae Books 1992	Y17-A7284
	どうぶつえん	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	平凡社 2003.5	Y18-N03-H409
5	Gorilla	Anthony Browne 作・絵	Julia MacRae 1983	Y19-A311
	すきですゴリラ	アントニー・ブラウン作・絵 山下明生訳	あかね書房 1985.12	Y18-1624
6	Through the magic mirror	Anthony Browne 作・絵	Walker Books 2000	Y17-A6563
7	How picturebooks work	Maria Nikolajeva,Carole Scott 作	Routledge 2006	YZ726.5-B108
8	Anthony Browne's King Kong	Edgar Wallace & Merian C. Cooper 作 Anthony Browne 絵	Julia MacRae Books 1994	Y17-A6850
	アンソニー・ブラウンのキング・コ ング: エドガー・ウォレス&メリア ン・C・クーバー原作による	アンソニー・ブラウン作 藤本朝巳訳	平凡社 2005.12	Y18-N06-H58
9	Curious George	H.A. Rey 作・絵	Houghton Mifflin c1993	Y17-A4265
	ひとまねこざるときいろいろし	エッチ・エイ・レイ文・絵 光吉夏弥訳	岩波書店 1966	Y17-215
10	Silly Billy	Anthony Browne 作・絵	Walker Books Ltd. 2006	所蔵なし
	びくびくビリー	アンソニー・ブラウンさく 灰島かりやく	評論社 2006.9	Y18-N06-H301
11	Voices in the park	Anthony Browne 作・絵	Doubleday 1998	Y17-A7472
	こうえんで…: 4つのお話	アンソニー・ブラウンさく 久山太市やく	評論社 2001.6	Y18-N01-243
12	The tunnel	Anthony Browne 作・絵	Knopf 1989	所蔵なし

13	Willy the wizard	Anthony Browne 作・絵	Knopf c1995	Y17-A1178
	ボールのまじゅつしウィリー	アンソニー・ブラウンさく 久山太市やく	評論社 1998.1	Y18-M98-207
14	Changes	Anthony Browne 作・絵	Julia MacRae Books 1990	所蔵なし
	かわっちゃうの？	アンソニー・ブラウンさく さくさくまゆみこやく	評論社 2005.3	Y18-N05-H141
15	My mum	Anthony Browne 作・絵	Doubleday 2005	所蔵なし
	うちのママってすてきな	アンソニー・ブラウンさく 久山太市やく	評論社 2006.10	Y18-N06-H332
16	The telling line : essays on fifteen contemporary book illustrators	Douglas Martin 作	Julia MacRae Books 1989	YZ726.5-B15
17	Making picture books by Anthony Browne in the prose and the passion	Morag Styles, Eve Bearne, Victor Watson 編	Cassell 1994	所蔵なし
18	子どもに伝えたい昔話と絵本	藤本朝巳著	平凡社 2002.6	YZ388- フジ
19	ぞうくんはどっちを向いている？: 楽しい絵本学	藤本朝巳著	フェリス女学院大学 2001.12	YZ726.5- フジ
20	絵本はいかに描かれるか: 表現の秘密	藤本朝巳著	日本エディタースクール出版部 1999.10	YZ726.5- フジ

レジュメ

国際子ども図書館のコレクションから —コールデコット、ポター、アーディゾーニ関連資料—

千代 由利

*それぞれの項目内の資料の配列は書名のアルファベット順。書誌事項末尾の（ ）は、国際子ども図書館請求記号。前に国立国会図書館とあるのは、国立国会図書館本館の所蔵資料です。

1. ランドルフ・コールデコット関係資料

<伝記・評論>

- 1-1 *Caldecott & Co.: notes on books and pictures / Maurice Sendak..* — 1st ed.. — New York : Farrar, Straus, and Giroux, 1988.. — 216 p. : ill. ; 24 cm. “Michael di Capua books.” — Edition limited to 250 copies. NDL copy no. 60.. — Bibliography: p. [215] -216. (YZ726.6C-B5)
[翻訳]
『センダックの絵本論』 / モーリス・センダック著 ; 協明子, 島多代訳. — 東京 : 岩波書店, 1990.5. — 246,3p ; 23cm (YZ726.62-セン)
- 1-2 *A Caldecott celebration: six artists and their paths to the Caldecott medal / Leonard S. Marcus..* — New York : Walker & Co., c1998.. — 49 p. : ill. (some col.), ports. ; 28 cm. Includes index. (YZ726.6C-B3)
- 1-3 *Randolph Caldecott: 1846-1886 : an appreciation / by Mary Gould Davis..* — Philadelphia : J.B. Lippincott, c1946.. — 46 p. : ill. ; 26 cm. (YZ726.6C-B6)
- 1-4 *Randolph Caldecott: a personal memoir of his early art career / by Henry Blackburn..* — London : S. Low, Marston, Searle, & Rivington, 1886.. — xvi, 216 p., [1] leaf of plates : ill., port. ; 27 cm. Includes bibliographical references. (YZ726.6C-B4)
[翻訳]
『百年前の絵本：R・コールデコットの前半生』 / ヘンリー・ブラックバーン著 ; 高橋誠, 桑子利男共訳. — 所沢 : ブック・グローブ社, 1997.5. — 264p ; 19cm (肖像あり) (YZ726.62-コル)
- 1-5 『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品：現代絵本の父』 / ジョン・バンクストン著 ; 吉田新一訳・解説. — 東京 : 絵本の家, 2006.5 — 79p ; 22cm (YZ726.62-ラン)
[原著] *Randolph Caldecott and the story of the Caldecott Medal by John Bankston.*

Mitchell Lane, Publishers, Inc. 2004

- 1-6 *Randolph Caldecott, "lord of the nursery" / Rodney K. Engen..* — London : Oresko Books, c1976.. — 104 p. : ill. (some col.), port. ; 30 cm. Bibliography: p. 104 (Y6-A78)
- 1-7 *A sketch-book of R. Caldecott's / reproduced by Edmund Evans..* — London: G. Routledge & Sons, [18--?] . — 48 p. : ill. ; 18 x 26 cm. (Y17-B3661)

<その他>

- 1-8 *Caldecott on the Net: reading & Internet activities / Ru Story-Huffman..* — Fort Atkinson, Wis. : Alleyside Press, c1999.. — 93 p. ; 28 cm. Includes bibliographical references (p. 88-89). (YZ726.5-B34)
- 1-9 *Teaching with Caldecott books : activities across the curriculum / by Christine Boardman Moen..* — New York: Scholastic Professional Books, c1991.. — 179 p. : ill., port. ; 23 cm.. — (Teaching strategies) Bibliography: p. 171-178. (YZ726.6C-B1)
- 1-10 *Using caldecotts across the curriculum: reading and writing mini-lessons, math and science spin-offs, unique art activities, and more! / by Joan Novelli..* — New York : Scholastic Professional Books, c1998.. — 112 p. : ill. ; 28 cm. "Grades K-2" — Cover. (Y5-A306)

2. ビアトリクス・ポター関係資料

<和図書>

- 2-1 『ピーターラビットの世界』 / 吉田新一著. — 東京 : 日本エディタースクール出版部, 1994.10. — 272p ; 21cm (YZ726.62-ポタ)
- 2-2 『ビアトリクス・ポターの生涯 : ピーターラビットを生んだ魔法の歳月』 / マーガレット・レイン著 ; 猪熊葉子訳. — 東京 : 福音館書店, 1986.10. — 316p ; 26cm ビアトリクス・ポターの肖像あり はり込図1枚. — 付:ビアトリクス・ポターの本一覧 (YZ726.62-ポタ)
[原著] *The Magic Years of Beatrix Potter / by Margaret Lane.* Frederick Warne & Co. Ltd. 1978.
- 2-14 *The tale of Beatrix Potter: a biography / by Margaret Lane..* — London : F. Warne, c1946 の増補改訂版
- 2-3 『ピーターラビットの生みの親ビアトリクス・ポター』 / エリザベス・バトリック著 ; おびかゆうこ訳. — 東京 : ほるぷ出版, 1994.11. — 377p ; 19cm. — (シリーズ<生き方の研究>) (YZ726.62-ポタ)
[原著] *Beatrix Potter's tale: A Fictional Portrait / by Elizabeth Battrick.* 1993.

<伝記・伝記資料>

- 2-4 *The art of Beatrix Potter / with an appreciation by Anne Carroll Moore and notes to each section by Enid and Leslie Linder..* — Rev. ed.. — London ; New York : F. Warne, 1972.. — xxvi, 406 p. : chiefly ill. (some col.), facsim., port. ; 24 cm. Bibliography: p. 401-406 (国立国会図書館 KC311-22)
- 2-5 *At home with Beatrix Potter: the creator of Peter Rabbit / Susan Denyer..* — New York : Harry N. Abrams, 2000.. — 144 p. : col. ill., col. map ; 26 cm. Includes bibliographical references (p. 143) and index. (YZ726.6P-B19)
- 2-6 *Beatrix Potter : artist, storyteller, and countrywoman / Judy Taylor..* — New ed.. — Harmondsworth, Middlesex, England ; New York, N.Y., U.S.A. : F. Warne, 1996.. — 224 p., [16] p. of plates : ill. (some col.) ; 25 cm. Includes index.. — Bibliography: p. [219] (YZ726.6P-B3)
[翻訳]
『ビアトリクス・ポター：描き、語り、田園をいつくしんだ人』 / ジュディ・テイラー著；吉田新一訳。 — 東京：福音館書店, 2001.1. — 321,9p；22cm (YZ726.62-ポタ)
- 2-7 *Beatrix Potter : the story of the creator of Peter Rabbit / Elizabeth Buchan..* — New ed.. — London: F. Warne, 1998.. — 77 p. : ill. (some col.), ports. ; 22 cm.. — (World of Peter Rabbit) A biography of the creator of “Peter Rabbit” and many other books whose characters became world famous. (Y8-A5149)
[翻訳]
『素顔のビアトリクス・ポター：＜ピーターラビット＞の作家』 / エリザベス・バカン著；吉田新一訳。 — 東京：絵本の家, 2001.6. — 73p；22cm 肖像あり (Y3-N01-44)
『ビアトリクス・ポター：ピーターラビットはいたずらもの』 / エリザベス・バカン作；上田まさ子訳。 — 東京：佑学社, 1989.1. — 117p；22cm. — (愛と平和に生きた人びと) 解説:いわむらかずお (Y8-5902)
- 2-8 *Beatrix Potter, 1866-1943 : the artist and her world / Judy Taylor .. [et al.] ..* — [New ed.]. — London : F. Warne : the National Trust, 1995, c1987.. — 223 p.: ill. (some col.), ports. (some col.) ; 26 cm.
Includes bibliographical references (p. 214) and index. (YZ726.6P-B16)
- 2-9 *Beatrix Potter's Lakeland / Hunter Davies ; photography by Cressida Pemberton-Pigott..* — London : F. Warne, 1999, c1988.. — 191 p. : ill. (some col.), ports. ; 26 cm. (YZ726.6P-B13)
- 2-10 *Beatrix Potter's letters / selected and introduced by Judy Taylor..* — London : F. Warne, 1989.. — 478 p., [8] p. of plates : ill. (some col.), ports., facsim. ; 25 cm. Includes index.. — Bibliography: p. 469-470 (YZ726.6P-B14)

- 2-11 *A children's literature tour of Great Britain / Mark I. West..* — Lanham, Md. : Scarecrow Press, 2003.. — xi, 133 p., [16] plates, : ill. ; 22 cm.. — (On the road with Mr. Toad ; no. 1)
 Related URL: Table of contents <http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip046/2003015229.html>.
 — Includes bibliographical references (p. 125-126) and index. (YZ935-B1)
 King Arthur — The Rev. W. Awdry and Christopher Awdry — Sir James M. Barrie
 — Michael Bond — Frances Hodgson Burnett — Lewis Carroll — John Cunliffe
 — Roald Dahl — Ian Fleming — Kenneth Grahame — Thomas Hughes Charles
 Kingsley — Rudyard Kipling — Edward Lear — C.S. Lewis — A.A. Milne — E. Nesbit
 — Philippa Pearce — Beatrix Potter — Arthur Ransome — Robin Hood — Robert Louis
 Stevenson — J.R.R. Tolkien — Mary Tourtel.
- 2-12 *The journal of Beatrix Potter, 1881-1897 / transcribed from her code writings by Leslie Linder ; new foreword by Judy Taylor..* — Complete ed.. — London ; New York : F. Warne, 1989.. — xxviii, 468 p., [8] p. of plates : ill. (some col.), facsim., geneal. tables, ports. ; 25 cm. Includes bibliographical references and index. (YZ726.6P-B15)
The journal of Beatrix Potter from 1881 to 1897 / transcribed from her code writing by Leslie Linder, with an appreciation by H. L. Cox.. — London ; New York : F. Warne, c1966.. — xxix, 448 p. : ill. (some col.), facsim., geneal. tables, ports. ; 25 cm. Includes bibliographical references and index. (国立国会図書館 KS127-A12 KS167-17)
- 2-13 *Marseilles, Genoa & Pisa : a Beatrix Potter photograph album representing a pictorial biography..* / — Facsim. ed.. — [Los Angeles?] : Cotsen Occasional Press, 1998.. — 1 v. (unpaged) : chiefly ill., ports. ; 35×44 cm.
 “... most [of the photographs] were taken by Rupert Potter, an amateurphotographer and the father of Beatrix Potter, in an arrangement telling the story of her life” — Introd.. — Introduction by Ivy Trent, Los Angeles ([10] p.) inserted in pocket.. — Includes bibliographical references (introd., p. [8]). (YZ726.6P-B18)
- 2-14 *The tale of Beatrix Potter: a biography / by Margaret Lane..* — London : F. Warne, c1946.. — 175, [1] p., [28] leaves of plates : ill. (some col.), ports. ; 22 cm. “Books by Beatrix Potter” : p. 175- [176]. (YZ726.6P-B4)
 Revised ed.. — London ; New York : F. Warne, [1971] . — 173 p. 47 plates, illus. (some col.) , ports. 22 cm. “The Beatrix Potter books”: p. 167-168. (国立国会図書館 KS127-2)
- 2-15 *The tale of Mrs. William Heelis — Beatrix Potter / John Heelis..* — New, rev., and reillustrated ed.. — Thrupp, Stroud, Gloucestershire : Sutton Pub., 1999.. — xiv, 98 p. : ill., ports. ; 25 cm. (YZ726.6P-B17)
- 2-16 *The ultimate Peter Rabbit : a visual guide to the world of Beatrix Potter / Camilla Hallinan [senior editor] ..* — 1st American ed.. — New York : DK Pub., 2002.. — 128 p. : ill. (some col.), col. maps ; 31 cm. “A Dorling Kindersley book.”. — Includes index. (YZ726.6P-B11)

(児童向け)

- 2-17 *Beatrix Potter / written and illustrated by Alexandra Wallner..* — 1st ed.. — New York : Holiday House, c1995.. — 1 v. (unpaged) : col. ill. ; 24×26 cm. (Y17-A1151)
- 2-18 *Beatrix Potter and Peter Rabbit / text by Nicole Savy and Diana Syrat..* — London : F. Warne, 1993.. — 43 p. : ill. (some col.), ports. ; 15 cm.. — (World of Peter Rabbit) (Y17-A6437)
- 2-19 *Letters to children / Beatrix Potter..* — Pbk. ed.. — [Cambridge, Mass] : Harvard College Library, Dept. of Printing and Graphic Arts, 1986, c1966.. — 48 p. : ill. ; 19 cm. (Y8-A1454)

<書誌・目録>

- 2-20 *The Beatrix Potter papers at Hill Top: a catalogue of the manuscripts, miscellaneous drawings and papers at Hill Top, Sawrey, belonging to the National Trust / compiled by Leslie Linder..* — Stroud: I. Hodgkins, 1987.. — xi, 28 p. ; 22 cm. (YZ726.6P-B22)
- 2-21 *Beatrix Potter, the V & A Collection: the Leslie Linder bequest of Beatrix Potter material : watercolours, drawings, manuscripts, books, photographs and memorabilia : catalogue / compiled by Anne Stevenson Hobbs & Joyce Irene Whalley ; with the assistance of Emma Stone & Celia O'Malley ; under the general editorship of Joyce Irene Whalley..* — London : Victoria and Albert Museum : F. Warne, 1985.. — 240 p. : ill. (some col.); 26 cm. Includes bibliographical references (p. 230-233) and index. (YZ726.6P-B1)
- 2-22 *Beatrix Potter's art: paintings and drawings / selected and introduced by Anne Stevenson Hobbs..* — London : F. Warne, 1989.. — 192 p. : ill. (some col.); 26 cm. Includes bibliographical references and index. (YZ726.6P-B5)
- 2-23 *Wayside and woodland Fungi / [by] W. P. K. Findlay; with 59 colour illustrations of fungi by Beatrix Potter, 28 by R. B. Davis and 20 by E. C. Large..* — London : F. Warne, [1967] .. — xi, 202 p. col. front., illus., 50 plates (some col.) , diags. 22 1/2 cm.. — ([The Wayside and woodland series]) Bibliography: p. 193-194. (国立国会図書館 RA621-8)

<研究書>

- 2-24 *Beatrix Potter / by Ruth K. MacDonald..* — Boston : Twayne Publishers, c1986.. — 148 p. : port. ; 23 cm.. (Twayne's English authors series ; TEAS 422) Includes index. — Bibliography: p. 140-144. (国立国会図書館 KS127-A1)
- 2-25 *Beatrix Potter : writing in code / by M. Daphne Kutzer..* — New York : Routledge, 2003.. — ix, 182 p. ; 24 cm.. — (Children's literature and culture ; 27) Includes bibliographical references (p.171-175) and indexes. (YZ726.6P-B21)

- 2-26 *Beatrix Potter to Harry Potter : portraits of children's writers / Julia Eccleshare ; foreword by Anne Fine..* — London : National Portrait Gallery, c2002.. — 136 p. : ill. (some col.), ports. (some col.); 21 cm. Includes bibliographical references (p. 132-133) and index. (YZ909-B128)
- 2-27 *Beatrix Potter's Peter Rabbit : a children's classic at 100 / edited by Margaret Mackey..* — Lanham, Md. : Children's Literature Association and the Scarecrow Press, 2002.. — xv, 200 p. : ill. ; 23 cm..
(Children's Literature Association centennial studies ; no. 1) Includes bibliographical references. (YZ726.6P-B9)
- 2-28 *The case of Peter Rabbit: changing conditions of literature for children / Margaret Mackey..* — New York. Garland Pub. 1998. — xxiv, 214 p.: ill. ; 23 cm. Garland reference library of the humanities ; v. 2115. Children's literature and culture ; v. 7 Includes bibliographical references (p. [191] -203) and index. (YZ726.6P-B12)
- 2-29 *Don't tell the grown-ups : the subversive power of children's literature / Alison Lurie..* — 1st Back Bay pbk. ed.. — Boston : Back Bay Books/Little, Brown, 1998, c1990.. — xv, 235 p. ; 21 cm. Originally published: Boston : Little, Brown and Company, 1990 with the subtitle Subversive children's literature.. — Includes bibliographical references (p. 221-226) and index. (YZ930-B68)
Subversive children's literature — Folktale liberation — Fairy tale fiction : Fitzgerald to Updike — Braking for elves : fashionable folklore for adults — Child who followed the piper : Kate Greenaway — Tales of terror : Mrs. Clifford — Ford Madox Ford's fairy tales — Animal liberation : Beatrix Potter — Modern magic : E. Nesbit — Boy who couldn't grow up : James Barrie — Happy endings : Frances Hodgson Burnett — Back to Pooh Corner : A.A. Milne — Heroes for our time : J.R.R. Tolkien and T.H. White — Power of Smokey : Richard Adams — Games of dark : William Mayne — Folklore of childhood.
- 2-30 *A history of the writings of Beatrix Potter, including unpublished work / by Leslie Linder..* — London; New York: Warne, c1971.. — xxvi, 446 p. : ill. (some col.), facsims. (some col.), ports (some col.) ; 25 cm. Includes bibliographical references and index. (YZ933P-B4)
- 2-31 *The remarkable Beatrix Potter / by Alexander Grinstein..* — Madison, Conn. : International Universities Press, c1995.. — xvii, 328 p. : port. ; 24 cm. Includes bibliographical references (p. 317-321) and index. (YZ726.6P-B2)
- 2-32 *A Victorian naturalist : Beatrix Potter's drawings from the Armit collection / Eileen Jay, Mary Noble, Anne Stevenson Hobbs..* — London : F. Warne, 1992.. — 191 p. : ill. (some col.), ports. (some col.); 26 cm. Includes bibliographical references and indexes (YZ726.6P-B6)

[翻訳]

『ピーターラビットの野帳』 / ビアトリクス・ポター絵 ; アイリーン・ジェイ, メアリー・ノーブル, アン・スチーブンソン・ホップス文 ; 塩野米松訳. — 東京 : 福音館書店, 1999.11. — 197p ; 31cm (YZ726.62-ポタ)

3. エドワード・アーディゾーニ関係資料

<和図書>

3-1 『エドワード・アーディゾーニ友へのスケッチ』 / エドワード・アーディゾーニ著 ; ジュディ・テイラー編 ; 阿部公子訳. — 東京 : こぐま社, 2001.6. — 142p ; 15×22cm (YZ726.62-アデ)
[原著]

Edward Ardizzone: sketches for friends/chosen and introduced by Judy Taylor..
— London: John Murray, 2000. — 127 p. chiefly ill. (some col.) ; 15×23cm

<洋図書>

3-2 *Edward Ardizzone: a bibliographic commentary / by Brian Alderson..* — Pinner, England : Private Libraries Association, 2003. ; London : British Library ; New Castle, Del. : Oak Knoll Press. — 309 p., [4] p. of plates : ill. (some col.); 26 cm. Includes bibliographical references (p. 278-286) and index. (YZ726.6A-B3)

3-3 *Edward Ardizzone's world: the etchings and lithographs: an introduction and catalogue raisonne / by Nicholas Ardizzone ; with a foreword by Christopher White ; and a preface by Paul Coldwell..* — London: Unicorn Press and Wolseley Fine Arts, 2000.. — 144 p.: ill. (some col.); 28 cm. Includes index.. — Bibliography: p. 136-139. (YZ726.6A-B2)

3-4 *The young Ardizzone : an autobiographical fragment / Edward Ardizzone..* — 1st American ed.. — New York : Macmillan, c1970.. — 144 p. : ill. (some col.); 26 cm. Reminiscences of the English author/artist's childhood. (YZ726.6A-B1)

国際子ども図書館のコレクションから

—コールドコット、ポター、アーディゾーニ関連資料—

千代 由利

私の講義は、今回の連続講座のテーマ「イギリス絵本の伝統」に即して、各先生方が取り上げてくださる絵本作家それぞれの関係資料を、国際子ども図書館のコレクションから選んでご紹介するものです。

関係資料といいますのは、伝記、書誌、研究書などを意味しています。ただし、日本語のものにつきましては、皆様方の図書館、あるいは、身近な図書館でご覧になれるので、ご紹介する資料は、主として外国語の資料に限らせていただきます。ただし、原書のないものについては、日本語訳を紹介させていただきます。また、翻訳のある資料については、原書と併せてご紹介いたします。先生方が取り上げてくださる資料とは、なるべく重複しないようにするつもりです。なお、チャールズ・キーピング、シャーリー・ヒューズ、アンソニー・ブラウンに関する資料は、当館の所蔵を調べたところ、所蔵していないということが判明いたしました。今回は、ランドルフ・コールドコットと、ビアトリクス・ポター、エドワード・アーディゾーニ関係資料の紹介に限らせていただきます。

1. ランドルフ・コールドコット関係資料

まず始めに、ランドルフ・コールドコットの関係資料から、ご紹介させていただきます。10点の資料をご紹介します。伝記・評論と、その他に分けてあります。レジュメの配列はタイトルのアルファベット順に掲載してあります。書誌事項末尾の括弧内は請求記号です。

<伝記・評論>

1-1 *Caldecott & Co.: notes on books and*



pictures Maurice Sendak. 1st ed. New York: Farrar, Straus, and Giroux, 1988. 216p. ill. 24cm. "Michael di Capua books." Edition limited to 250 copies. NDL copy no.60. Bibliography: p. [215]-216. (YZ726.6C-B5)

これは、『かいじゅうたちのいるところ』(*Where the Wild Things Are*, 1963) でコールドコット賞を受賞した、皆さんよくご存知のモーリス・センダックの著書です。原書名が、*Caldecott & Co.* とありますが、日本語に訳しますと、「コールドコット商会」あるいは、「コールドコットと仲間たち」という意味になります。センダックはコールドコットを崇拝しており、このタイトルが示しているように、その流れを汲む絵本作家、画家たちを取り上げた評論、談話32編を収録してあります。

第1部は、コールドコット、アンデルセン、マグドナルド、メッゲンドルファー、ポター、ディズニー、アーディゾーニなどを取り上げた評論です。

コールドコットについては、その業績を「言葉と絵を両方併置する天才的なやり方を考案して、絵本を発明しました。コールドコットは、イラストレーターであり、作詞家であり、振付師であり、舞台監督であり、装飾家であり、演劇人でもあります。とにかく彼はすごいのです」と、べた褒めです。

第2部では、センダックがコールドコット賞、国際アンデルセン賞、ローラ・インガルス・ワイルダー賞などを受賞したときの演説、それから、対談などを通して、センダック自身の仕事に関する

る考え方などが語られています。これは、先ほど吉田先生からもご紹介がありましたが、日本語訳が出ています。脇明子先生と島多代先生の訳で、『センダックの絵本論』(1990)というタイトルで岩波書店から出版されています。大変面白い本ですので、ぜひ、お読みになってください。

[翻訳]

『センダックの絵本論』 モーリス・センダック 著；脇明子、島多代訳。東京：岩波書店，1990.5. 246,3p；23cm (YZ726.62-セン)

1-2 *A Caldecott celebration: six artists and their paths to the Caldecott medal. Leonard S. Marcus.* New York: Walker & Co., c1998. 49p. ill. (some col.), ports. 28cm. Includes index. (YZ726.6C-B3)

この本は、絵本画家に与えられる最も権威のあるコールドコット賞制定60周年を記念して、コールドコット本人、あるいは、彼を記念するコールドコット賞の起源についての詳細な説明と、6人の受賞者についての解説です。取り上げられた6人は、第1回コールドコット賞(1938)から60年の歴史の、それぞれの10年を代表する画家たちを取り上げています。エピソード等を通して、作品がいかに創造されたか、インスピレーション、制作過程などが解説されています。一番最初の作品は、マックロスキーの『かもさんおとおり』(*Make Way for Ducklings*, 1941) だったと思います。コールドコット自身については、あまり多くは書かれていません。

1-3 *Randolph Caldecott: 1846-1886: an appreciation by Mary Gould Davis.* Philadelphia: J.B. Lippincott, c1946. 46p. ill. 26cm. (YZ726.6C-B6)

子ども向けに書かれたランドルフ・コールドコットについての伝記です。生い立ちから、成功を夢見てロンドンに出て成功し、1886年に初めて訪れたアメリカで病に倒れてしまいます。ご存知

かとは思いますが、コールドコットは、アメリカの方が気候がいいということで、フロリダに行ったのですが、そのフロリダがすごい寒波に襲われ、コールドコットは、そこで風邪を引いて、肺炎になり亡くなってしまいます。亡くなるまでを事実面に即して、エピソードを交えながら語っています。

コールドコットの絵本についてと、伝記部分の2部構成になっています。コールドコット自身の挿絵が豊富にちりばめられています。巻末に作品リストがあります。

1-4 *Randolph Caldecott: a personal memoir of his early art career by Henry Blackburn.* London: S. Low, Marston, Searle, & Rivington, 1886. xvi, 216p., [1] leaf of plates ill., port. 27cm. Includes bibliographical references. (YZ726.6C-B4)

これは、タイトルが示すとおり、コールドコットの初期の作品、特に白黒のペン画を対象にした考察です。絵本については詳細な評価はしていません。彼の最高の作品は1874年及び1875年の、一連の「絵本」に着手する以前の作品であるという評価をしています。また、コールドコットは装飾デザインに最も向いていたと言っています。ほぼ全頁に図版を掲載し、計172枚を収録しています。補遺の部分に、1878年から1885年に刊行された絵本のリスト及び「イソップ」、「スケッチブック」、「ブルターニュの人々」の表紙画が掲載されています。著者は、コールドコットがデビューする以前から、雑誌『ロンドン・ソサエティ』の編集者として個人的に親しく付き合い、コールドコットの豊かな才能を引き出した親友といわれているヘンリー・ブラックバーンです。コールドコットが亡くなった直後の1886年の刊行です。日本語訳は、『百年前の絵本：R・コールドコットの前半生』(1997)というタイトルで、ブック・グローブ社から出版されています。大きさは、新書判くらいの小さな本ですが、とても面白いので、どうぞお読みになってください。

[翻訳]

『百年前の絵本：R・コールドコットの前半生』
ヘンリー・ブラックバーン著 高橋誠, 桑子利
男共訳. 所沢: ブック・グローブ社, 1997.5.
264p 19cm (肖像あり) (YZ726.62- コル)

1-5 『ランドルフ・コールドコットの生涯と作
品：現代絵本の父』ジョン・バンクストン
著；吉田新一訳・解説. 東京：絵本の家，
2006.5. 79p；22cm (YZ726.62- ラン)

[原著] *Randolph Caldecott and the
story of the Caldecott Medal
by John Bankston.* Mitchell
Lane, Publishers, Inc. 2004

この『ランドルフ・コールドコットの生涯と作
品：現代絵本の父』(2006) は、吉田新一先生に
よる日本語訳です。今年の5月に出版されたばかり
です。原書は当館には所蔵されていません。子
どもにも読めるように、平易な文章で書かれてい
ます。最後の2章に、原書にはない解説が付され
ています。

1-6 *Randolph Caldecott, "lord of the
nursery". Rodney K. Engen.* London:
Oresko Books, c1976. 104p. ill. (some
col.) , port. 30cm. Bibliography: p.104
(Y6-A78)

これは、「おとぎ話の王様」とでも訳すのでし
ょうか。コールドコットの、小さな村での質素な生
活や、銀行員としての初期の生活から、才能が開
花して、数々の雑誌の挿絵画家として活躍した伝
記、それから、有名な「絵本シリーズ」の発行な
ど、コールドコットの生涯を、有名な本や雑誌の
挿絵のみならず、あまり知られていない油彩画や
彫刻などの100枚以上の図版（その内9枚がカ
ラー）を用いて解説しています。また、付録とし
て、コールドコットの作品を、単行本、雑誌、油
彩画、彫刻、展示会に分けて記載した完全な作品
リストが掲載されています。

著者で、ヴィクトリア朝の挿絵画家についての

専門家である Rodney K. Engen は、この他、コー
ルドコットの同時代の画家、ウォルター・クレイ
ン、ケイト・グリーンハウエイについても、同種の
シリーズを刊行しています。

1-7 *A sketch-book of R. Caldecott's
reproduced by Edmund Evans.*
London: G. Routledge & Sons,
[18--?] .48p. ill. 18 x 26cm. (Y17-B3661)

吉田新一先生のお話にも出てきましたが、エド
マンド・エヴァンズがコールドコットのスケッチ
ブックを複製したものです。先ほどご紹介しまし
た『百年前の絵本：R・コールドコットの前半生』
に、このスケッチブックについての説明が出てい
ます。

一八八三年三月、表紙が帆布^{カンヴァス}で装丁された横
長の小型本『コールドコットのスケッチブック』
が出版された。同書には、個性溢れる楽しい挿
絵が満載されていた。ほとんどの挿絵は色刷り
で、エドマンド・エヴァンズが彫版し、印刷し
たものだった。同書はあまり知られていないが、
画家の手が動きを止めた今、そこには、大いに
個人的関心をそそるスケッチが収録されてい
る。彼を知る者が『コールドコットのスケッチ
ブック』を見れば、さまざまな思い出が心に浮
かぶだろうし、次から次へと連想をかき立てら
れずにはいないだろう。

と、ヘンリー・ブラックバーンは書いています。

<その他>

これからご紹介する資料は、厳密な意味では、
コールドコット関係資料とは言えないのですが、
コールドコット賞受賞という質の保証された作品
を、学校の教材として使おうというものです。最
初にご紹介する資料は、その教授法についての本
です。公共図書館や、学校図書館の司書の方がお
いでになっているので、ご興味があるかと思いま
したのでご紹介します。

1-8 *Caldecott on the Net: reading & Internet activities. Ru Story-Huffman.* Fort Atkinson, Wis. Alleyside Press, c1999. 93p. 28cm. Includes bibliographical references (p.88-89). (YZ726.5-B34)

これは、コールドコット賞受賞作品を使って、子どもたちにインターネットの検索技術を習得させよう、あるいは、読書(図書館活動)とコンピューターリテラシー(教科学習)を結びつけようということを目指した指導書です。コールドコット賞の歴史や、コールドコット賞受賞作品を取り上げた18の質問事項が準備されています。質問事項には、生徒への手引き、課題、注意深く選ばれた3~4のウェブサイト、それから、ウェブサイトを使って答える4~5の質問、課題解決のためのアドバイス、検索技術強化のためのウェブ演習、10~20のウェブサイトや資料を含む図書館員やこれを使って授業をする教師への注意が含まれています。著者はケンタッキーの公共図書館員で、著書に、本書の姉妹編 *Newbery on the Net* (1998) や *Nursery Rhyme Time* (1996) というようなものがあります。

1-9 *Teaching with Caldecott books: activities across the curriculum by Christine Boardman Moen.* New York: Scholastic Professional Books, c1991. 179p. ill., port. 23cm. (Teaching strategies) Bibliography: p.171-178. (YZ726.6C-B1)

コールドコット賞受賞作品を国語教育に使うことを主張したもので、個々の作品を取り上げて、具体的な教授法を解説しています。巻末に参考図書のリストを付してあります。著者は元教師で、この本を書いたときは、教育関係のフリーランサーでした。

1-10 *Using caldecotts across the curriculum: reading and writing*

mini-lessons, math and science spin-offs, unique art activities, and more! by Joan Novelli. New York : Scholastic Professional Books, c1998.. 112 p. ill. 28 cm. "Grades K-2"--Cover. (Y5-A306)

この本は、コールドコット賞受賞作品を国語や美術のみならず、社会科、算数にも使おうというものです。『かもさんおとおり』(*Make Way for Ducklings*, 1941) から、『バックルさんとめいけんグロリア』(*Officer Buckle and Gloria*, 1995) まで、19冊のコールドコット賞受賞作品が取り上げられており、それぞれ、社会科の場合、算数の場合というように、教授法が解説されています。

これは、内容をみるとなかなか面白いので、ご興味のある方は、ぜひご覧になってください。

2. ビアトリクス・ポター関係資料

続いて、ビアトリクス・ポター関係資料についてご紹介いたします。

ビアトリクス・ポター関係資料は、32点あり、洋図書は、伝記・伝記資料、書誌・目録、研究書に分類してあります。

最初に和図書を3点ご紹介します。

<和図書>

2-1 『ピーターラビットの世界』 吉田新一著。東京: 日本エディタースクール出版部, 1994.10. 272p ; 21cm (YZ726.62-ポタ)

この本は吉田新一先生のご著書です。皆さんもすでによくご存知で、お読みになられた方も多いかと思います。簡潔ですが、ポターの生涯、作品について総合的に把握できる1冊です。これから私がご紹介するポター関係資料も、ほとんど取り上げられています。まず、これをお読みになって、見たいな、読みたいなという時に現物にあたってみていただければよいかと思います。

それから、先ほど吉田先生が、ポターの作品を取り上げていろいろご説明くださいましたが、資料の後ろの方に掲載の作品論には、同じような作

品が取り上げられ論じられていますので、もう一度読んでみてください。

2-2、2-3の二つにつきましては、先ほど申し上げましたとおり、日本語訳で、当館に原書がないものなので、取り上げました。

2-2 『ビATRIX・ポターの生涯：ピーターラビットを生んだ魔法の歳月』 マーガレット・レイン著；猪熊葉子訳．東京：福音館書店，1986.10. 316p；26cm ビATRIX・ポターの肖像あり はり込図1枚．付：ビATRIX・ポターの本一覽 (YZ726.62-ポタ)

[原著] *The Magic Years of Beatrix Potter by Margaret Lane.* Frederick Warne & Co. Ltd. 1978. 2-14 The tale of Beatrix Potter: a biography by Margaret Lane. London: F. Warne, c1946の増補改訂版

著者は、最初にビATRIX・ポターの伝記を書いたマーガレット・レインです。この、1978年に出版された原書は、1946年刊初版の増補改訂版で当館では所蔵しておりませんので、ここでは日本語訳をご紹介します。

2-3 『ピーターラビットの生みの親ビATRIX・ポター』 エリザベス・バトリック著；おびかゆうこ訳．東京：ほるぷ出版，1994.11. 377p；19cm. (シリーズ〈生き方の研究〉) (YZ726.62-ポタ)

[原著] *Beatrix Potter's tale: A Fictional Portrait by Elizabeth Batrick.* 1993

この原著も当館では所蔵していません。日本語訳は、上記のとおり、おびかゆうこの訳で出版されております。

それでは、本題の洋図書に入らせていただきます。

<伝記・伝記資料>

2-4 *The art of Beatrix Potter with an appreciation by Anne Carroll Moore and notes to each section by Enid and Leslie Linder.* Rev. ed. London; New York: F. Warne, 1972. xxvi,406p. chiefly ill. (some col.), facsimils., port. 24cm. Bibliography: p.401-406 (国立国会図書館 KC311-22)

この初版は1955年に出版されました。日本語訳は「ビATRIX・ポターの画集」、レズリー・リンダーが編集したものです。アメリカの有名な児童図書館員で、生前ポターと親しかったアン・キャロル・ムーアの鑑賞文が掲載されています。イーニッド・リンダーという人は、レズリー・リンダーのお姉さんです。イーニッドとレズリーの詳細な解説文が付されています。

第1部は、ポターの作品を主題別、作成年代別に掲載してあります。この花の絵と毛虫の絵は、ポターが8歳から9歳の時に描いたものです。

第2部には、出版された本、それからスケッチ、手紙類から取られた絵が収録されています。カラーのものは、カラー図版で掲載されています。

初版が1955年で、この本は、その改訂版です。当館では、残念ながら、初版を所蔵していません。先ほどご紹介いたしました、吉田先生の『ピーターラビットの世界』によりますと、改訂版は、収載資料も初版とはかなり変えられているようです。ですから、改訂版というよりは、別資料として扱ってもよいということでした。

2-5 *At home with Beatrix Potter : the creator of Peter Rabbit. Susan Denyer.* New York: Harry N. Abrams, 2000. 144p. col. ill., col. map 26cm. Includes bibliographical references (p.143) and index. (YZ726.6P-B19)

美しい150枚の写真とイラストで繰り広げられる紙上のツアーです。ポターの九つの代表作が生まれ、彼女が守り慈しんだ英国湖水地方の美しい

自然の風景と農場、ポターが暮らした当時のたたずまいをそのまま残すヒルトップの家、その一つ一つの部屋や庭をめぐっていくツアーです。巻末に、ポターの略史と所有した地域を示す湖水地方の地図が付してあります。

著者は、長年湖水地方の自然保護、建物の保存などに携わってきました。英国のナショナル・トラストに属し、現在、開発途上国関連のコンソーシアムの議長も務めています。他に *Traditional Buildings and Life in the Lake District, Beatrix Potter and Her Farm* (YZ726.6P-63) などの著書もあります。

2-6 *Beatrix Potter: artist, storyteller, and countrywoman. Judy Taylor.* New ed. Harmondsworth, Middlesex, England; New York, N.Y., U.S.A.: F. Warne, 1996. 224p., [16] p. of plates ill. (some col.) 25cm. Includes index.. Bibliography: p. [219] (YZ726.6P-B3)

吉田先生のお話に度々出てきたジュディ・テイラーの著書です。これは、ポターのロンドンでの子ども時代から湖水地方で農業に従事し、亡くなるまでを描いた7章構成の伝記です。裕福な家庭の出の若い女性が、商業美術の世界に入ることなど考えられなかった時代に、彼女の才能が認められるには多くの曲折がありました。しかし、ピーターラビットが世に出て、10年足らずで何百万部も売れるベストセラーになりました。そのことが結果的に、憧れの湖水地方での農業という彼女の第2の人生を可能にすることになりました。

初版は、1986年に出版されています。本書はその10年後に刊行されたものであり、新発見資料や、未公開の写真を収録しています。最終章は、作者没後に、ピーターラビットの名声がいかに広がったかを述べています。写真、図版を多数収録し、巻末に索引を付してあります。

吉田先生が先ほどご紹介くださいましたように、ジュディ・テイラーは、ビアトリクス・ポター・ソサエティーの会長もなさっています。ジュディ・テイラーのポターに関する著書は他に、後の2-8

の、*Beatrix potter, 1866-1943: the artist and her world* (J.I.Whalley, A.S.Hobbs, E.M.Battrickとの共著)、2-10の *Beatrix Potter's letters*、それから、*Beatrix Potter and Hill Top, Beatrix Potter and Hawkshead, The Choyce Letters : Beatrix Potter to Louie Choyce 1916-1943* (編) などがありますが、後の2点は、当館では所蔵していません。

本書は、吉田先生の日本語訳が出版されています。

[翻訳]

『ビアトリクス・ポター: 描き、語り、田園をいつくしんだ人』ジュディ・テイラー著; 吉田新一訳. 東京: 福音館書店, 2001.1. 321,9p; 22cm (YZ726.62-ポタ)

2-7 *Beatrix Potter: the story of the creator of Peter Rabbit. Elizabeth Buchan.* New ed.. London: F. Warne, 1998. 77 p. ill. (some col.), ports. 22cm. (World of Peter Rabbit) A biography of the creator of "Peter Rabbit" and many other books whose characters became world famous. (Y8-A5149)

日本語訳が2冊出版されています。1冊は、『素顔のビアトリクス・ポター: <ピーターラビット>の作家』です。もう少し幼年向きに、『ビアトリクス・ポター: ピーターラビットはいたずらもの』という本がもう1冊です。

[翻訳]

『素顔のビアトリクス・ポター: <ピーターラビット>の作家』エリザベス・バカン著; 吉田新一訳. 東京: 絵本の家, 2001.6. 73p; 22cm 肖像あり (Y3-N01-44)

『ビアトリクス・ポター: ピーターラビットはいたずらもの』エリザベス・バカン作; 上田まさ子訳. 東京: 佑学社, 1989.1. 117p; 22cm. (愛と平和に生きた人びと) 解説: いわむらかずお (Y8-5902)

2-8 *Beatrix Potter, 1866-1943: the artist*

and her world. Judy Taylor. [et al.]. [New ed.]. London: F. Warne: the National Trust, 1995, c1987. 223p. ill. (some col.), ports. (some col.) 26cm. Includes bibliographical references (p.214) and index. (YZ726.6P-B16)

これも、先ほど出てきました、ジュディ・テイラーの著書です。この本は、ナショナル・トラスト100周年を記念して出版されました。ポターは、ナショナル・トラスト運動の初期の支援者であり、湖水地方は保存運動として最初に指定された地域でした。本書は、1987年から1988年にロンドンのテート・ギャラリーで開催された展示会の際に出版されました。

ポターの芸術家、児童書の作家、また後の農婦や自然保護運動家としての生涯が彼女の作品と、450枚以上のカラー・モノクロ写真、イラストで解説されています。前半は、作品論であり、後半は湖水地方でのポターの生活が描かれています。ジュディ・テイラーの他、J. I. ウェイリー、A. S. ホブズ、E. M. バトリックの3名による共著です。

2-9 *Beatrix Potter's Lakeland Hunter Davies; photography by Cressida Pemberton-Pigott.* London: F. Warne, 1999, c1988. 191p. ill. (some col.), ports. 26cm. (YZ726.6P-B13)

ポターが魅せられ、描き、耕し、次の世代に残すために奔走した湖水地方と、そこでのポターの生活や作品について、挿絵やスケッチと写真を中心に語られています。ポターが描いた湖の美しさと現代の写真との比較、そして、彼女の情熱がどのように生かされているかを見る楽しみもあります。ポターは、生前ヒルトップで、羊飼いとして忠実だったトム・ソーリーに、自分が死んだら、火葬にして、遺灰をヒルトップの畑に撒いて欲しいと言っていたそうです。しかも、その場所は、誰にも言わないようにと命じていたようです。そのことについては、最後のページに書かれています。編者のハンター・デイビスは、アナウンサー

であり、ジャーナリストです。著書に、*The Good Guide to the Lakes* などがあります。それから、写真を担当した風景写真家のペンバートン・ピゴットは、子ども時代、休日には『ベンジャミンバニーのおはなし』のマグレガーさんの野菜畑のモデルになったダーウェントウォーターで過ごしていたようです。

2-10 *Beatrix Potter's letters selected and introduced by Judy Taylor.* London: F. Warne, 1989. 478p., [8] p. of plates ill. (some col.) , ports., facsimis. 25cm. Includes index. Bibliography: p.469-470 (YZ726.6P-B14)

これは、ビアトリクス・ポターの書簡集です。ポターは、生前、自分のことを語るのを好みませんでした。しかし、非常に多くの手紙を書いています。それらは、フレデリック・ウォーン社、ナショナル・トラスト、ヴィクトリア・アルバート博物館のレズリー・コレクション、トロント公共図書館、それから、個人のコレクターのほか、多数の機関に所蔵されています。ジュディ・テイラーは、こうした1,400通余りの手紙の中から、ポターについて、彼女自身の言葉で語らせるために400通を選んでしています。手紙は、ポターのスペリング、句読点どおりに印刷し、ジュディ・テイラーの解説が、イタリック体で付されています。収録されているスケッチや水彩画は全てポターが描いたものです。巻末には、参考文献、ポター作品リスト、索引が付してあります。

2-11 *A children's literature tour of Great Britain. Mark I. West.* Lanham, Md.: Scarecrow Press, 2003. xi, 133 p., [16] plates, ill. 22 cm.. (On the road with Mr. Toad; no.1) Related URL: Table of contents <http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip046/2003015229.html>. Includes bibliographical references (p.125-126) and index. (YZ935-B1)

King Arthur - The Rev. W. Awdry and Christopher Awdry - Sir James M. Barrie
- Michael Bond - Frances Hodgson Burnett - Lewis Carroll - John Cunliffe
- Roald Dahl - Ian Fleming - Kenneth Grahame - Thomas Hughes Charles Kingsley - Rudyard Kipling - Edward Lear - C.S. Lewis - A.A. Milne - E. Nesbit - Philippa Pearce - **Beatrix Potter**
- Arthur Ransome - Robin Hood - Robert Louis Stevenson - J.R.R. Tolkien
- Mary Tourtel.

イギリス児童文学に関係のある24人の作家・作品に関する49の重要な場所をめぐるツアーガイドブックです。各章は、作家またはアーサー王やロビンフッドなど登場人物の背景説明、生誕の地、墓所、風景、ギフトショップなどの情報のほかに、文学の巡礼者と観光客に対するヴィジター情報を掲載。多くは子ども向けのコースですが大人向けもあります。著者自身が撮影した写真を添えてあります。ポターは、93～103ページに掲載され、ヒルトップ農場、グロースター、ヴィクトリア・アルバート博物館など、ポターゆかりの6か所が紹介されています。巻末に参考文献と索引が付いています。著者はノースカロライナ大学で児童文学等を教える英語教授で、著書に*Psychoanalytic Responses to Children's Literature* (1999), *Everyone's Guide to Children's Literature* (1997) があります。

2-12 *The journal of Beatrix Potter, 1881-1897 transcribed from her code writings by Leslie Linder; new foreword by Judy Taylor.* Complete ed. London; New York: F. Warne, 1989. xxviii, 468 p., [8] p. of plates: ill. (some col.), facsimis., geneal. tables, ports. 25cm. Includes bibliographical references and index. (YZ726.6P-B15)
The journal of Beatrix Potter from

1881-1897; transcribed from her code writing by Leslie Linder, with an appreciation by H. L. Cox. London ; New York: F. Warne, c1966.. xxix, 448 p. ill. (some col.), facsimis., geneal. tables, ports. 25cm. Includes bibliographical references and index. (国立国会図書館 KS127-A12, KS167-17)

先ほど吉田先生のお話に、ポターの日記がでてきましたが、これがその日記です。ポターは、15歳から30歳まで、暗号による日記を書いていました。この期間のポターについては、それまで秘密のベールに包まれていましたが、1958年に、レズリー・リンダーが暗号を解読しました。これで、ヴィクトリア時代のアッパーミドル階級に属したポターの生活が明らかにされました。

ポターは、周囲で起こった事件に非常に詳しく、関心、興味を持っていました。それから、人間を見る鋭い観察力、自然史や芸術を愛する心、鋭いユーモアの心などが、この本から読み取れます。

1989年刊の本版では、ジュディ・テイラーによって、最近明らかになった情報などにより、初版では抜けていた部分が補われ、改訂が加えられています。また、カラー図版には、この時期のポターの最良のまた興味ある作品及び、日記に描かれた人々や場所の写真が挿入されています。巻末に索引があります。

初版は1966年に出版されていますが、国際子ども図書館ではなく、国立国会図書館に所蔵されています。

2-13 *Marseilles, Genoa & Pisa: a Beatrix Potter photograph album representing a pictorial biography.* Facsim. ed. [Los Angeles?]: Cotsen Occasional Press, 1998. Iv. (unpaged) : chiefly ill., ports. 35×44cm.
“... most [of the photographs] were taken by Rupert Potter, an amateur photographer and the father of Beatrix Potter, in an arrangement telling the

story of her life"--Introd. Introduction by Ivy Trent, Los Angeles ([10] p.) inserted in pocket. Includes bibliographical references (introd., p. [8]). (YZ726.6P-B18)

最初のタイトルだけ見ますと、何だろうと思うかもしれません。ポターが、タイトルにあるフランスやイタリアを旅行したのかと思いました。しかし、中を見ますと違いました。アマチュアカメラマンだった、ポターのお父さん、ルパート・ポターが、ビアトリクス・ポターを幼少時代からほぼ一生にわたって撮影した写真集です。これはごらんのように大変大きい本です。ポターの幼少時代から、亡くなる直前までの写真によるアルバムとして作られています。大変興味深い写真がたくさん掲載されています。

元々は、湖水地方のギフトショップで、こういう体裁で売られていたものを、たまたま求めた人がしばらく持っていた後、競売にかけて、それを手に入れた人が複製版として出版したものです。元々の形がこういう緑色のアルバムとして出ていたそうです。このアルバムの後ろの方に、確かにマルセイユやジェノヴァ、ピサの写真が載っています。しかし、これはビアトリクス・ポターとは関係がありません。

2-14 *The tale of Beatrix Potter: a biography by Margaret Lane.* London: F. Warne, c1946. 175, [1] p., [28] leaves of plates: ill. (some col.), ports. 22cm. "Books by Beatrix Potter": p.175- [176]. (YZ726.6P-B4)

The tale of Beatrix Potter: a biography by Margaret Lane. Revised ed. London; New York: F. Warne, [1971]. 173p. 47plates, illus. (some col.), ports. 22cm. "The Beatrix Potter books": p.167-168. (国立国会図書館 KS127-2)

これが、2-2で紹介しましたポターの伝記の原

著です。ヴィクトリア時代の淋しい子ども時代、自立を勝ち得ようとした闘い、不幸な恋愛と幸福な結婚、才能を開花させた偶然の出来事、ソーリーでのヒーリスとの結婚生活など、8章構成の伝記です。世界中の子どもたちに何よりの楽しみを与えた創造的な芸術家を研究する上で詳細で貴重な情報が得られます。ポター没後程なくして出版されたもので、家族の好意的な協力により、貴重な写真や手紙、書類が提供されました。カラー図版4枚、白黒図版・写真17枚が収載されています。国際子ども図書館が所蔵しているものは、1946年の初版です。1968年に改訂版が出ていますが、東京本館で、1971年版の第3刷を所蔵しています。なぜ改訂版が出版されなければならなかったのかといいますと、先ほど申し上げました、2-12の日記*The journal of Beatrix Potter, 1881-1897*が刊行されたことにより、今までわからなかったことが明るみに出たために、改訂版を出さざるを得なくなったためということです。

2-15 *The tale of Mrs. William Heelis—Beatrix Potter John Heelis.* New, rev., and reillustrated ed. Thrupp, Stroud, Gloucestershire: Sutton Pub., 1999. xiv, 98p. ill., ports. 25cm. (YZ726.6P-B17)

これは、ポターのご主人、ウィリアム・ヒーリスとの関係からみたポターの伝記です。著者は、夫ウィリアム・ヒーリスの従甥(甥の息子)のジョン・ヒーリスです。未刊行の手紙類からの抜粋も紹介されています。ポターとルーイ・チョイスの間で交わされた手紙で、ソーリーでのヒーリス夫妻の生活が語られています。ポターと共に生きた人々が語っており、直接の思い出であることが強みです。この本には、何かと話題になっていた“ポターは、本当は子どもが大嫌いだったのか”という1章も設けられています。

これは、ロアルド・ダールが、雑誌『サンデー』紙に、「彼女は子どもが大嫌いであり、子どもが近寄ってくるのを見ると、石を投げつけたものだ」という記事を書き、それを読んだビアトリクス

甥の娘が、皆の気持ちを代弁して、サンデー紙の編集長に書いた抗議の手紙が紹介されています。ポター大お婆さんは、いかに素晴らしい女性であったか、子どもたちがいかに優しくあったかを述べて、「石をぶつけるなど、カモやアヒルに対してふざけてやったとしか思えません」とそんな事実はないことを訴えています。

2-16 *The ultimate Peter Rabbit: a visual guide to the world of Beatrix Potter.* Camilla Hallinan [senior editor]. 1st American ed. New York: DK Pub., 2002. 128p. ill. (some col.), col. maps 31cm. "A Dorling Kindersley book." Includes index. (YZ726.6P-B11)

これは、ポターの原画、スケッチ、写真、書簡集、日記及び切抜きなどで、ポターの生涯と作品を綴ったビジュアルガイドです。キャラクターグッズなどもたくさん出てきます。

<児童向け>

これからご紹介します以下の3冊は、子ども向けに書かれた伝記です。図書館などで、外国の子どもさんが訪れて、ポターの伝記を外国語で読みたいというような要望がありましたら、こういう本をお薦めになるとよいと思います。

2-17 *Beatrix Potter written and illustrated by Alexandra Wallner.* 1st ed. New York: Holiday House, c1995. 1v. (unpaged) col. ill. 24×26cm. (Y17-A1151)

とても簡単な英語で書いてあります。

2-18 *Beatrix Potter and Peter Rabbit, text by Nicole Savy and Diana Syrat.* London: F. Warne, 1993. 43p. ill. (some col.), ports. 15cm.. (World of Peter Rabbit) (Y17-A6437)

これは、とても小さい本です。ピーターラビットの絵本と同じ大きさの絵本です。

2-19 *Letters to children. Beatrix Potter.* Pbk. ed. [Cambridge, Mass] Harvard College Library, Dept. of Printing and Graphic Arts, 1986, c1966.. 48p. ill. 19cm. (Y8-A1454)

これは、ポターが子どもたちに宛てて書いた自筆の手紙9通をファクシミリ版で複製したものです。巻末に活字版を付してあります。

これらが、児童向けに書かれたポターの伝記3点でした。

次に、書誌・目録を紹介いたします。

<書誌・目録>

2-20 *The Beatrix Potter papers at Hill Top: a catalogue of the manuscripts, miscellaneous drawings and papers at Hill Top, Sawrey, belonging to the National Trust compiled by Leslie Linder.* Stroud: I. Hodgkins, 1987. xi, 28p. 22 cm. (YZ726.6P-B22)

「ビアトリクス・ポター文書」です。ヒルトップに保存されていたポターの手紙、スケッチ類です。出版された作品の挿絵等は含みません。第1部は出版された作品関連資料、第2部は作品関連資料だが出版されていないもの、第3部は、スケッチブックからの作品やスケッチ、第4部は、Story - Lettersからのコピー、第5部は暗号で書いた文章や手紙、その他の文書類です。全部で72点が収録されています。これは、レズリー・リンダーが編集したもので、初版は1955年に出版されました。限定17部でした。第2版も限定で、450部しか出版されていません。最初に、ポターの伝記を書いた、マーガレット・レインによるレズリー・リンダーの業績を賞賛する前書きが収録されています。

2-21 *Beatrix Potter, the V & A Collection:*

the Leslie Linder bequest of Beatrix Potter material :watercolours, drawings, manuscripts, books, photographs and memorabilia : catalogue, compiled by Anne Stevenson Hobbs & Joyce Irene Whalley; with the assistance of Emma Stone & Celia O'Malley; under the general editorship of Joyce Irene Whalley. London :Victoria and Albert Museum :F. Warne, 1985. 240 p. ill. (some col.) 26cm. Includes bibliographical references (p.230-233) and index. (YZ726.6P-B1)

ポター関係資料のコレクター、レズリー・リンダーにより、ヴィクトリア・アルバート博物館に寄贈された2,000点以上のポター関係資料の目録で、現在までに刊行された最も網羅的なものです。水彩画、原画、初版本、書簡類、初期の作品、写真、思い出の品々など、ポターの広範な作家活動を示す資料及び、ポター家、家族の作品からなっています。

目録の記述は、レズリー・リンダーが最初に作った手書き目録に基づいていますけれども、現在の目録形式に修正してあります。目録は、動物などの主題で分類された絵画類と手稿・単行本・記念の品々等の2部に分かれ、補遺として、リンダーの姉イーニッドの死後(1980)に寄贈された分が追加されています。目録中には関係する図版、写真が多数挿入されています。レズリー・リンダーにはこれらの資料に基づく著書*A History of the Writings of Beatrix Potter.* (Warne, 1971) (2-30 ビアトリクス・ポターの著作の歴史)があります。

2-22 *Beatrix Potter's art: paintings and drawings, selected and introduced by Anne Stevenson Hobbs.* London :F. Warne, 1989. 192p. ill. (some col.) 26cm. Includes bibliographical references and index. (YZ726.6P-B5)

ヴィクトリア・アルバート博物館ナショナル・アート・ギャラリーの学芸員アン・ステイーブンソン・ホブスが、ビアトリクス・ポターコレクションから選んだ選りすぐりの絵画及びスケッチ209点を収録しています。これは、画集と一緒にご覧になるといいと思います。初期の生物研究や、ペットやさまざまな場所でのスケッチ、昆虫やキノコの細密描写などが含まれ、ポターの幅広い主題と画風全体をカバーしています。

編者ホブスにはジョイス・イレヌ・ウェイリーとの共著*Beatrix Potter: The V & A Collection* (2-21 リンダー寄贈資料カタログ)があります。1987年にロンドン、テート・ギャラリー、ニューヨーク、ピエポント・モーガン図書館で開催された「ビアトリクス・ポター作品展」の監修者の一人であり、展示会と同時に出版された*Beatrix Potter, 1866-1943: The Artist and Her World* (2-8)の寄稿者でもあります。

2-23 *Wayside and woodland Fungi [by] W. P. K. Findlay; with 59 colour illustrations of fungi by Beatrix Potter, 28 by R. B. Davis and 20 by E. C. Large.* London: F. Warne, [1967]. xi, 202p. col. front., illus., 50 plates (some col.), diags. 22 1/2 cm.. ([The Wayside and woodland series]) Bibliography: p.193-194. (国立国会図書館 RA621-8)

タイトルは「道端や森に生えるキノコ」という意味で、山や野を歩く人たちが、キノコの名前、種類、分類等を調べるためのガイドブックです。ポターの59枚のキノコの絵が収録されています。この本は、ポターのキノコの絵を出したために出版されたのですが、ポターの絵だけではページが足りなかったため、他の二人に援助を求めたということです。中の絵を見てみると、ポターの絵が一番上手だと思います。絵に、H.B.P(ヘレン・ビアトリクス・ポター)とサインのあるのが、ポターの作品です。

<研究書>

2-24 *Beatrix Potter by Ruth K. MacDonald.* Boston: Twayne Publishers, c1986. 148p. port. 23cm. (Twayne's English authors series; TEAS 422) Includes index. -- Bibliography: p.140-144. (国立国会図書館 KS127-A1)

第1章で、ポターの生涯と、20世紀最初の10年間の絵本作家としての成功を論じた後、第2章からは、ピーターラビットシリーズ23冊の作品論になります。こうした作品を生み出した、ポターのニア・ソーリーでの生活についての考察、ポター文学の息の長さの源についての考察など、全5章で構成されています。巻頭に、1866年から1873年までの主要な出来事、それから、作品刊行のポター関係年表、巻末に、参考資料及び作品が付されています。

著者は、ニューメキシコ州立大学の英語教授です。MLA (Modern Language Association) の児童文学の部会長でもあります。この資料は、Twayne's English authors seriesの中の1冊です。

2-25 *Beatrix Potter: writing in code by M. Daphne Kutzer.* New York: Routledge, 2003. ix, 182p. 24cm. (Children's literature and culture; 27) Includes bibliographical references (p.171-175) and indexes. (YZ726.6P-B21)

ピーターラビット誕生100年記念の出版です。ポターの26作品を伝記的、文化的側面から検証し、物語の筋や、想像力がポターの生涯や社会的・政治的関心と、いかに密接に関連しているかを示したものです。また著者はポターの絵本には、彼女の生涯や政治観や商才が形を変えて表れていると述べています。7章構成で、巻末にポターの著作及び関連資料の書誌、索引が付いています。著者 M. Daphne Kutzer はニューヨーク州立大学英語教授で、著書には *Writers Multicultural Fiction for Young Adults* などがあります。

2-26 *Beatrix Potter to Harry Potter: portraits of children's writers. Julia Eccleshare; foreword by Anne Fine.* London: National Portrait Gallery, c2002. 136 p. ill. (some col.), ports. (some col.) 21cm. Includes bibliographical references (p.132-133) and index. (YZ909-B128)

これはビアトリクス・ポターから、皆さんよくご存知のハリー・ポッターまでという意味の「ポターからポッターへ」という、児童文学の流れを追った資料です。20世紀の英国は、児童文学の金鉱といえるような多彩な作品が多数生み出された時代でした。このなかには、次の世代に読み継がれている作品がたくさんあります。

1900年代のビアトリクス・ポター、ミルン、トールキン、そして90年代の魔法の世界のハリー・ポッターの J. K. ローリングまで、英国の児童文学作家54名を取り上げて解説したものです。最初にポターが取り上げられています。肖像画か肖像写真入りで作家一人についてほぼ2〜3ページをあてています。70枚の挿絵（半分はカラー）も収載しており、巻末に参考文献リストと索引が付いています。編者のジュリア・エクルズヘアは、作家でアナウンサー。Guardianの児童書部の編集長で、2000年のエリナー・ファージョン賞の受賞者でもあり、著書に *A Guide to the Harry Potter™ Novels* 等があります。もう一人の編者アン・ファインは40冊以上の著書があり、カーネギー賞も2回受賞。2001年のChildren's Laureateに選ばれています。

2-27 *Beatrix Potter's Peter Rabbit: a children's classic at 100 edited by Margaret Mackey.* Lanham, Md.: Children's Literature Association and the Scarecrow Press, 2002. xv, 200p. ill. 23cm. (Children's Literature Association centennial studies; no.1) Includes bibliographical references. (YZ726.6P-B9)

これは、『ピーターラビットのおはなし』の出版100周年を記念して、Children's Literature Associationと共同で刊行された論文集です。

Text (テキストについてのセクション: 現代の都市の子どもたち5歳から6歳の346人の「ピーターラビット」への反応他1編)、Pre-text (作品が生み出された背景とポターの芸術家としての人生、ポター研究者ジュディ・テイラーとジョイス・イレヌ・ウェイリーの論文他1編)、Con-Text (ポターを今日的な観点と永遠のテーマから、現代文学の登場人物とピーターとの比較による心理学的・社会学的真理を考察した論文他5編)、Post-Text (改作・編、翻案、続編など作品が刊行された後の作品の生命: ピーター・ホルンデルによるポター作品の自然科学者の正確さについての考察、本の受容に関する市場インパクトなどの論文他1編)の4部構成となっており、計13篇の論文を取めています。

吉田新一先生が日本人として論文を寄せておられます。Post-Textの部のPeter Rabbit in Japan and My Approach to Beatrix Potter's Worldで、ピーターラビットの日本における受容、最初は海賊版で1971年まで正当な翻訳が出なかったことなどが語られています。また、以後30年間先生自身が研究者としてビアトリクス・ポターを世界的に広める役割を果たしたと先生の業績が評価されています。編者のMargaret Mackeyはカナダ、アルバータ大学図書館情報学科助教授、中等教育学部助教授。*The Case of Peter Rabbit: Changing Condition of Literature for Children* (Garland, 1998) (2-28)の著者です。

2-28 *The case of Peter Rabbit: changing conditions of literature for children. Margaret Mackey.* New York. Garland Pub. 1998. xxiv, 214 p. ill. 23cm. Garland reference library of the humanities v.2115. Children's literature and culture; v.7 Includes bibliographical references (p. [191]-203) and index. (YZ726.6P-B12)

情報技術の進展により、子どもが物語に出会うのは本だけではなく、特に現代は、子どもたちは数多くのメディアに囲まれているとともに、身の周りにはあふれるキャラクターグッズで、頻繁に物語の主人公に出会っています。

こうした、変わりつつある児童文学の状況を、『ピーターラビット』を例に取り上げて、原文の改作・改編、絵の描き直し、再話、その他のメディア、Activity Book (学習帳)、CD-ROM、所有権の問題、商品としての作家など13章に分けて考察しています。『ピーターラビット』の著作権を保有し、出版を続けてきたフレデリック・ウォーン社がすでに国際的なコングロマリット、ピアソン社に買収されていることなどにも触れています。巻末に参考資料、『ピーターラビット』の各版のリスト、索引が付いています。

2-29 *Don't tell the grown-ups: the subversive power of children's literature Alison Lurie.* 1st Back Bay pbk. ed.- Boston: Back Bay Books/Little, Brown, 1998, c1990. xv, 235p. 21cm. Originally published: Boston: Little, Brown and Company, 1990 with the subtitle Subversive children's literature.- Includes bibliographical references (p.221-226) and index. (YZ930-B68)
Subversive children's literature - Folktale liberation - Fairy tale fiction: Fitzgerald to Updike - Braking for elves: fashionable folklore for adults - Child who followed the piper: Kate Greenaway - Tales of terror: Mrs. Clifford - Ford Madox Ford's fairy tales - **Animal liberation: Beatrix Potter** - Modern magic: E. Nesbit - Boy who couldn't grow up: James Barrie - Happy endings: Frances Hodgson Burnett - Back to Pooh Corner: A.A. Milne - Heroes for our time: J.R.R. Tolkien and T.H. White - Power of Smokey: Richard Adams - Games of dark: William Mayne -

Folklore of childhood.

16章に分け、ルイス・キャロルからドクター・スース、古典的な童話からA.A.ミルン、ビアトリクス・ポターからJ. R. R. トールキンまでを取り上げ、児童文学の不朽の名作は大人の文学に負けない価値を持っていることを論じています。ポターは、pp.90~98「動物の解放：ビアトリクス・ポター」として、取り上げられています。

2-30 *A history of the writings of Beatrix Potter, including unpublished work by Leslie Linder.* London; New York: Warne, c1971. xxvi, 446p. ill. (some col.), facsim. (some col.), ports (some col.) 25cm. Includes bibliographical references and index. (YZ933P-B4)

これは、レズリー・リンダーが編集した「ビアトリクス・ポターの著作の歴史」です。ポターの全著作の履歴を記した詳細な研究書です。これは、2-4でご紹介した、芸術家としてのポターについての研究書*The art of Beatrix Potter* (1955)の姉妹編となります。“レズリー・リンダーのポター研究集大成”といわれるものです。1. 子どもたちへの手紙、(絵手紙、ミニレター)、2. 単行本(刊行、未刊)、3. その他の著作、付録からなっています。第一部の絵手紙はそのまま複製され、ポターが送ったムーア家の子どもの、受け取ったときの年齢がわかるように誕生日が記されています。付録は、ポターの色々なサイズで出された作品のそれぞれのページ数や、版ごとの出版部数などの詳細な記録、点字で出版された作品リスト及び各国語に翻訳された作品リストなどを含みます。裏表紙のデザイン、湖水地方の風景写真、作品に関係した家や人々などの写真など170枚以上の図版を収録しています。

2-31 *The remarkable Beatrix Potter by Alexander Grinstein.* Madison, Conn.: International Universities Press, c1995. xvii, 328p. port. 24cm. Includes

bibliographical references (p.317-321) and index. (YZ726.6P-B2)

著者は、臨床心理分析学者です。元のポター家の邸宅の近くに住み、ポターの作品を読んで大きくなった著者は、職業的な興味から、非常に複雑で創造的な個性を持ち、断固たる存在であるポターの理解を心理分析により試みたものです。芸術的な才能と、鮮やかな文体の組み合わせにより生み出された物語全作品が詳細に読み解かれています。それから、彼女の手紙や日記など、既知の資料類と未刊行の手紙類に関連付けながら、ポターの多面的な個性と魅力的な内なる世界に照明を当てて、全34章に分けて解説してあります。

2-32 *A Victorian naturalist: Beatrix Potter's drawings from the Armit collection.* Eileen Jay, Mary Noble, Anne Stevenson Hobbs. London: F. Warne, 1992. 191p. ill. (some col.), ports. (some col.) 26cm. Includes bibliographical references and indexes (YZ726.6P-B6)

ポターが1913年に会員になった、英国湖水地方のトラストであるアーミット図書館に寄贈したポター・コレクションについての考察です。化石や、考古学上の発見、苔・地衣類の研究、細密画からなり、先ほどご紹介いたしました、特に精密なキノコのスケッチ画は、コレクションの中でも圧巻です。アーミット・トラストの名誉主宰アイリーン・ジェイがポターとアーミットコレクション及びポターの考古学について語り、また、メアリー・ノーブルは、スコットランドの郵便屋であり、在野の自然科学者でもあるキノコや菌類に詳しいチャールズ・マッキントッシュとポターとの間にかわされた手紙から、ポターのスケッチの解説や当時男性支配が強かった科学学会で彼女の業績を認めさせる努力などについて明らかにしています。また、ヴィクトリア・アルバート博物館の学芸員アン・ホップスがポターの作品や想像力は科学観察からいかに大きな刺激を受けたかを語って

います。巻末に参考文献及び索引が付いています。

これは、ピーターラビットのフィールドワークということで、日本語の翻訳版も出版されておりますので、翻訳で読んでいただいてもいいと思います。

[翻訳]

『ピーターラビットの野帳』ビアトリクス・ポター絵；アイリーン・ジェイ,メアリー・ノーブル,アン・スチーブンスン・ホップス文；塩野米松訳. 東京: 福音館書店, 1999.11. 197p；31cm (YZ726.62-ポタ)

3. エドワード・アーディゾーニ関係資料

時間がなくなりました。エドワード・アーディゾーニについては、資料が4点だけですので、駆け足でご紹介させていただきます。

<和図書>

3-1 『エドワード・アーディゾーニ友へのスケッチ』エドワード・アーディゾーニ著；ジュディ・テイラー編；阿部公子訳. 東京：こぐま社, 2001.6. 142p；15×22cm (YZ726.62-アデ)

[原著]

Edward Ardizzone: sketches for friends chosen and introduced by Judy Taylor.--London: John Murray, 2000. 127p. chiefly ill. (some col.) 15×23cm

アーディゾーニの生誕100周年を記念して出版されたものです。ポターの所でおなじみになったジュディ・テイラーが編集しています。アーディゾーニの1935年から40年間にわたる手紙類からスケッチを選び出したものです。「1935年-1949年の手紙から」、「1950年-1953年の手紙から」、「1954年-1959年の手紙から」、「1962年-1976年の手紙から」、「スノッドグラスへの手紙」の5部構成です。

この原書は当館では所蔵しておりませんので、翻訳書でご紹介させていただきます。

<洋図書>

3-2 *Edward Ardizzone: a bibliographic commentary by Brian Alderson.* Pinner, England: Private Libraries Association, 2003. London: British Library; New Castle, Del.: Oak Knoll Press. 309 p., [4] p. of plates: ill. (some col.) 26cm. Includes bibliographical references (p.278-286) and index. (YZ726.6A-B3)

これは、ブライアン・オルダーソンが編集したアーディゾーニの作品書誌です。編者のブライアン・オルダーソンは、最初にアーディゾーニが挿絵を描いた200冊以上の本や、パンフレット（そのうちのかなりは文も書いています）の作品リストを、*The Private Library* (Private Libraries Association) の1972年春号に掲載しました。その後、アーディゾーニ自身及び彼の家族の協力を得て、増補版として刊行したのが本書です。

本文は、単行本（181タイトル）、その他のグラフィック作品、補遺の3部構成になっています。グラフィック作品には、ブックカバー、商業的・リーフレット、チラシ、雑誌掲載スケッチ、戦争作品、版画、ポスター、蔵書票など150点以上を含んでいます。補遺には、アーディゾーニ自身による論文「本の挿絵について」、「技術についての考察」、それから、彼のお気に入りの作品である *Peacock Pie* と *Peter Pan* についての論文が収められています。また、巻末にはガブリエル・ホワイトのアーディゾーニに対する追悼文を掲載。各部は作品初版の刊行年順に収録し、同じタイトルの刷、版、各国での翻訳書を年代順に並べています。作品に通し番号を付して、詳細な書誌事項・出版事項・対照事項を記載、巻末に参考文献と索引を収録しています。

3-3 *Edward Ardizzone's world: the etchings and lithographs: an introduction and catalogue raisonne by Nicholas Ardizzone; with a foreword by Christopher White and*

a preface by Paul Coldwell. London: Unicorn Press and Wolseley Fine Arts, 2000. 144 p. ill. (some col.) 28cm. Includes index. Bibliography: p.136-139. (YZ726.6A-B2)

エドワード・アーディゾーニは、英国の線描画家のキーン、クルックシャンク、ローランドサンの系列に繋がるのは紛れもないのですが、版画の領域においても、ホガース、ドーミエ、ドーレの正統な後継者でもあります。

本書は、挿絵画家や、水彩画家としてはよく知られていますが、版画家としてはあまり語られていない彼のエッチングやリトグラフの業績に光をあてたものです。

編者のニコラス・アーディゾーニは、エドワード・アーディゾーニの次男で、前言を寄せているクリストファー・ホワイトは、アーディゾーニの甥で、アーディゾーニの60冊のスケッチブックを始めとするアーディゾーニ・コレクションを擁するオックスフォードのアシュモリアン美術館の前館長です。前書きはキャンベル芸術大学のポール・コールドウェルで、海辺や船、生活光景、町の風景、バー、恋人たち、学校・大学・過去の情景を題材に描いたアーディゾーニの版画について述べています。柔和で親しみやすく、スケッチをこよなく愛したアーディゾーニは、路上や、パブ、海辺で観察した人々の弱さやもろさなどを好んで描き、子どもをやさしい目で見続けながら家族の憩

う様を描きました。「小さなドラマがいつも進行しており、そこにはウィットやユーモアがある」と語っています。多数の図版を収録しています。

3-4 *The young Ardizzone: an autobiographical fragment.* Edward Ardizzone. 1st American ed. New York: Macmillan, c1970. 144p. ill. (some col.) 26cm. Reminiscences of the English author/artist's childhood. (YZ726.6A-B1)

これは、アーディゾーニ自身による自伝です。彼の子ども時代から、芸術家としてのキャリアをスタートさせるまでを語っています。全ページに本書のために書き下ろした単色カラーと白黒の挿絵が入っています。

アーディゾーニは、ポター以来国際的な人気をほしいままにしてきた数少ない画家であり、作家ですが、とりわけ、ティムとルーシーのシリーズがよく知られていて、祖父母、親、子どもの3世代にわたって読み継がれています。そのアーディゾーニの自伝です。

大変申し訳ありません。駆け足で、3作家の関連資料について解説をさせていただきました。ありがとうございました。

(ちよ ゆり 国立国会図書館総務部司書監)

レジュメ

絵本ギャラリーの紹介

小沼 里子

「絵本は舞台－19世紀英国の3人の絵本作家によるお話しと童謡と詩の世界」(平成12年5月公開)

絵入り雑誌や絵本が市民生活の中に積極的に取り入れられた19世紀後半のイギリスの絵本の世界を紹介するプログラム。長くイギリスで語り継がれてきた物語や絵本を題材に、華やかに絵本の舞台が開幕したこの時代を代表する作家のうち、ランドルフ・コルデコット、ケイト・グリーンナウェイ、ウォルター・クレインの3人の絵本を紹介している。

「コドモノクニ－1920年代の日本・子どもたちを見つめた画家のまなざし」(平成14年5月公開)

1922(大正11)年1月に創刊された雑誌『コドモノクニ』の初期の10年間に掲載された約300枚の絵を中心に紹介している。「ギャラリー」では、『コドモノクニ』の代表的な画家たちが、どのように子どもたちを見つめ、芸術家として子どもたちのために、どのような自由な表現をしようと試みたか展示している。

代表的な画家：岡本帰一、武井武雄、竹久夢二、東山新吉、安井小弥太など

「ユーゲントシュティルと絵本画家たち」(平成17年5月公開)

19世紀末から20世紀初頭にかけて、「ユーゲントシュティル」(または「アールヌーボー」とよばれる様式)に従って創作した絵本作家の作品を紹介している。欧米諸国で出版された8か国11冊の絵本の原書を、朗読や内容にあわせた音楽とともに紹介している。

掲載作品：「ばらの輪 わらべうた絵本」「リーサの庭の花まつり」等

「子どもの本 イメージの伝承」(平成18年5月公開)

絵本が市民生活の中に積極的にとり入れられた19世紀の資料を中心に、算数や読み書きの本、行儀の本、昔話や冒険物語など、子どもたちの身近にあった本や、当時の著名な挿絵画家の作品、現代のアルファベット絵本の源ともいえるホーンブックなど、29作品の絵本画像約2,000枚を紹介する画像データベース。

掲載作品：「不思議の国のアリス」「ラ・フォンテーヌの寓話集Ⅰ」「美女と野獣」等

「江戸絵本とジャポニズム」(平成18年5月公開)

江戸時代の庶民に親しまれた草双紙の中から10作品を選び、その全ページを、和楽器による背景音楽にのせ、落語家らがわかりやすい現代語訳で朗読している。併せて、江戸絵本から影響を受けた西洋の絵本2作品を紹介している。解説では、当時の庶民文化や社会状況を多くの図版と共に概観するとともに、江戸時代の表現技法が西洋の絵本画家に及ぼした影響についても触れている。

掲載作品：「ぶんぶく茶釜」「鬼の四季あそび」「桃太郎宝の蔵入り」等

絵本 ギャラリー

挿絵本の時代 絵本の時代 絵本の黄金期

1750 1870 1900 1920 1930

- 子どもの本
イメージの伝承**
絵本の画像データベース
ビュイック クルックシャンク
テニエル ドレ アプトン 他
- 絵本は舞台**
イギリス絵本の古典
コルデコット クレイン グリーナウェイ
- ニガハヒコ**
日本を代表する絵雑誌
武井武雄 本田庄太郎 初山滋 恩地孝四郎
安井小弥太 古賀春江 竹久夢二 岡本帰一 他
- ユーゲン
シユティルと
絵本画家たち**
ヨーロッパ絵本の名品
ラッカム ロビンソン ブルック フレーザー モンヴェル エレ カスパーリ
レフラーとウルバーン ビリーピン ベスコフ シャイネル 他
- 江戸絵本と
ジャポニズム**
江戸の草双紙
桃太郎 金太郎 ぶんぶく茶釜
はちかづき姫 鼠の嫁入り 舌切り雀 他
イギリス絵本にみるジャポニズム
ニコルソン クレイン

ご覧になりたいタイトルのボタンを押してください。

English

国立国会図書館国際子ども図書館

<http://www.kodomo.go.jp/gallery/index.html>

絵本ギャラリーの紹介

小沼 里子



国際子ども図書館企画協力課企画広報係長の小沼です。先ほど、半数の方を見学案内させていただきました。この講義では「絵本ギャラリー」の説明をさせていただきます。

この「絵本ギャラリー」は、マルチメディアの特性を生かしまして、絵本の発生から今日までの発展の流れを、内外の貴重な絵本の画像や音声によってインターネットで紹介するサービスです。

国際子ども図書館では、2000年の開館当時から電子図書館事業を進めています。その一つの柱として、「デジタルミュージアム」を制作しています。今映し出されていますのが、国際子ども図書館のトップページです。ページの右側に「絵本ギャラリー」の項目があります。ここをクリックしますと、このように「絵本ギャラリー」のページに飛びます。今回は、日ごろ使ってくださいている方もいらっしゃるかもしれませんが、「絵本ギャラリー」というプログラムを初めて見たという方のために、簡単に使い方をご説明しながら、「絵本ギャラリー」では、どんな画像を見られるのかということをお話したいと思います。

お手元に、レジュメを1枚お渡ししてあります。このレジュメの裏に、「絵本ギャラリー」の体系がわかるような年表と各コンテンツが並んでいます。レジュメの一番下に絵本ギャラリーのURLを記載いたしましたので、お帰りになりましたら、こちらの方からアクセスしてみてください。

1. 「絵本は舞台—19世紀英国の3人の絵本作家によるお話しと童謡と詩の世界」

まず始めに、当館は「絵本は舞台」というコンテンツを制作しました。このコンテンツは、2000年の部分開館に合わせて公開しました。

これは、絵入り雑誌や絵本が市民生活の中に積極的に取り入れられた、19世紀後半のイギリスの絵本の世界を紹介するコンテンツです。昨日、吉田新一先生から、ランドルフ・コルデコットの紹介がありましたが、「絵本ギャラリー」の中でも、絵本の創始者と言われているランドルフ・コルデコット、ケイト・グリーンナウェイ、ウォルター・クレインの3人の絵本を紹介しています。

「はじまる」というボタンをクリックして、コンテンツに入ってみます。画面上の左下に、「トップ」、「この展示について」、「凡例」、という三つのボタンがありますので、まず「この展示について」というボタンをクリックしますと、この「絵本は舞台」がどういう展示であるのかという説明があります。また、「凡例」というボタンをクリックしますと、他のコンテンツにも共通していますが、各々のボタンの説明があります。

それでは、簡単に一つ一つご紹介していきます。まずは、ランドルフ・コルデコットの作品です。こちらの絵本ギャラリーでは、この赤い◆印が付いている作品に関しては、作品の全ページを見ることができます。昨日吉田先生からのお話がありました『ヘイ・ディドウル・ディドウルとおくるみ赤ちゃん』(Hey Diddle Diddle and Baby Bunting, 1887 [初版1882])という作品は、こちらで見いただけます。

また、このコンテンツには、「オプション」というボタンが付いています。ここをクリックしますと、「じまくオン」、「じまくオフ」という機能があります。「じまくオフ」という機能は、画像を原文のまま、オリジナルの元の姿で見いただくことができます。画像の文字をもっと大きくして見たいという場合は、「じまくオン」を選択し

てください。それから、「プレイ」というボタンを押しますと、音楽と共にお話が始まります。映像をちょっと止めて見たいなという時は、この「ポーズ」というボタンを押していただくと、このように画面を止めて見ることもできます。いま映し出している画像は、昨日吉田先生がお話になられた、ネコがヴァイオリンを弾いて、ウシが踊っている風景です。再び「プレイ」ボタンをクリックしますと、また音楽が流れてお話が進みます。再び画面に戻りたい場合は、「もどる」ボタンですとか、「すすむ」ボタンをクリックします。

「オプション」で「じまくオン」ボタンを選択しますと、上の方に日本語の訳文が載ります。画面は片側表示になりますので、もう片側には英語の本文が載ります。

このコンテンツには、昨日、吉田先生のお話がありました、『6ペンスの歌を歌っておくれ』(*Sing a song for Sixpence*, 1887 [初版1880]) や『ハートの女王様』(*The Queen of Hearts*, 1887 [初版1881]) という作品も入っています。こちらも全ページご覧いただけます。

あまりお時間がありませんので、簡単にご紹介いたします。お時間のある時に、インターネットの見られる環境でご覧になってください。

続きまして、ウォルター・クレインの作品です。こちらは、『赤ん坊のオペラ』(*The Baby's Opera*, 1899 [初版1877])、『赤ん坊の花束』(*The Baby's Bouquet*, 1899 [初版1878])、『赤ん坊のイソップ』(*Baby's Own Aesop*, 1899 [初版1887]) という三つの作品が絵本ギャラリーでご覧になれます。こちらの『三つ子』(*Triplets*, 1899) という作品に関しましては、解題と本の表紙しかご覧になれません。

『赤ん坊のオペラ』という作品は、昨日の吉田先生のお話にもありましたが、こちらのカバーの表紙が、コルデコットの『ヘイ・デイドゥル・デイドゥル』の絵になっています。先生のお話のとおり、扇子を持ったスプーンと、着物を着たお皿が登場します。

それから、ケイト・グリーンナウェイの作品です。これは、最初にグリーンナウェイが挿絵を付けた『窓の下』(*Under the Window*, 1878) とい

う作品です。こちら、「プレイ」を押しますと、音楽が流れて、朗読が始まります。このように、「絵本ギャラリー」は、本を自動的にめくりながら、音楽と朗読によって、楽しんでいただけるようになっています。右下に「索引」というボタンがありますので、これをクリックしますと、『窓の下』の作品が一覧で出てきます。こちらの中から、好きな作品を選んで、その作品から読み始めてみることもできます。

「絵本は舞台」というコンテンツは、イギリスの作品を紹介し、英語で朗読を行っています。背景に流れるこの音楽は、その時代に合わせた音楽を使っています。

ケイト・グリーンナウェイの作品はその他に、『マザー・グース』(*Mother Goose*, 1881)、『ハムリンの笛吹き』(*The Pied Piper of Hamelin*, 1888) をこのプログラムで見ることができます。また、左下の「作家について」というボタンをクリックしますと、各々の作家の解説を読むことができます。

「絵本は舞台」には、表紙の画像のみしか入っていない作品は9作品、全ページ見られる作品が15作品で、タイトル数は全部で24作品収録されています。

2. 「コドモノクニ—1920年代の日本・子どもたちを見つめた画家のまなざし」

続きまして、2002年5月の全面開館に合わせて公開しましたコンテンツ、「コドモノクニ」をご紹介します。

1922 (大正11) 年1月から1944 (昭和19) 年3月まで、22年間に渡って刊行された『コドモノクニ』という絵本雑誌がありました。このコンテンツでは、初期の10年間に掲載されました『コドモノクニ』の約300枚の絵を中心に紹介しています。画面中央部分に、「ギャラリー」、「童謡」、「『コドモノクニ』の画家たち」、「『コドモノクニ』の子どもたち」、「この展示について」、という項目があるので、見たい項目をクリックしてください。

「ギャラリー」では、『コドモノクニ』の見開き1ページで完結している絵を楽しんでいただけるようになっています。最初に武井武雄の作品が出

てきます。下部に本文が掲載されています。それから、右下の「リスト」というボタンをクリックしますと、このギャラリーで紹介している画像のリストが出てきます。

それから、右側の「武井武雄について」というボタンをクリックしますと、このように、画家の年表や、どういう画家であったか、どういう作品を作っていたかという説明を読むことができます。

皆さんがよくご存知の画家に、竹久夢二がいます。竹久夢二は、一般的には、大正ロマンの香りが漂う美人画がよく知られていますが、『コドモノクニ』に描いている作品の中に、非常にかわいらしい子どもの絵があります。普段知られている竹久夢二の絵とまた違った雰囲気を楽しめるのではないかと思います。文章も竹久夢二の作だそうです。こちらにも、画家の解説に飛ぶ窓が付いています。

恩地孝四郎という画家は、北原白秋や山田耕作と組んで、子どもの本や楽譜の草稿をしていました。恩地は特に北原白秋に気に入られて、『コドモノクニ』の1927（昭和2）年の12月から、翌年の9月にかけて、白秋の童謡8編に絵を添えています。

次に、「童謡」というボタンをクリックしますと、このように童謡のページに飛びます。下部に「歌を聴く」というボタンがありますので、ここをクリックして、音楽を楽しむことができます。

私は、小さい頃に母に歌ってもらったりしたのですが、最近は、若いお母さんたちの中で童謡というものを知らない方も多いため、是非、この「絵本ギャラリー」の歌を活用して、昔の歌に慣れ親しんでいただけたらと思います。こちらにも右下にリストがあります。ここをクリックしますと、各々のページに飛びますので、また童謡を聴くことができます。

続いて、「『コドモノクニ』の画家たち」という項目をクリックしますと、「コドモノクニ」の表紙のページを飾った画家たちの解説が載っています。また、「『コドモノクニ』の子どもたち」の項目には、その時代の子どもの遊び、生活の解説が載っています。

この「コドモノクニ」というコンテンツは、インターネット版では、ギャラリーや、童謡などの一部の項目しか見られないのですが、当館のホールの後方に、「メディアふれあいコーナー」というコーナーがあります。この連続講座の期間中は休室していますが、そのコーナーにあるパソコンには、この項目以外に「お話」という項目が備わっています。また、その画家の年表も付してあります。その時代に画家たちが何歳で、どういった時代背景にどのような作品を描いていたのかということを見ていただけます。もし、国際子ども図書館のお近くにいらっしゃって、お時間がある方がいましたら、別の機会に楽しんでいただければと思います。

3. 「ユージェントシュティルと絵本画家たち」

続きまして、昨年の5月に公開しました「ユージェントシュティルと絵本画家たち」というコンテンツをご紹介します。「ユージェントシュティル」という言葉は、あまり聞きなれない方もいると思いますが、意味は「アールヌーボー」と考えていいかと思います。アールヌーボーが、絵本画家たちにどのような影響を与えているかということ画像で見られるように作ってあるのがこのコンテンツです。

こちらでは、8か国のそれぞれ11作品を見られるようになっています。絵本の原書に合わせまして、日本語で朗読した作品や、原語で歌っている作品などがあり、内容に合わせた音楽と共に見ることができます。

イギリスでは、昨日の吉田先生の講義にも出てきました『ばらの輪 わらべうた絵本』(*Ring O'roses: A Nursery Rhyme Picture Book*, 1922) という作品があります。コルデコットのお弟子さんとして紹介されましたレズリー・ブルックという作家が描いた作品です。これは、レズリー・ブルックの遊びが散りばめられていて楽しく演出された絵本となっています。

それから、現在、国際子ども図書館のミュージアムでは、北欧の絵本の展覧会を開催しておりますが、スウェーデンを代表する絵本作家エルサ・ベスコフの代表作、『リーサの庭の花まつり』

(*Blomsterfesten i tappan*, 1914) を、絵本ギャラリーの方でも紹介しています。

このコンテンツですが、絵本を見開きのページを片ページずつ見たい場合は、「片ページ」というボタンをクリックしますと、表示が大きくなって、文字が大きくなります。この本は原書ですが、先ほど聞いていただきましたように、日本語で朗読しています。

このコンテンツでは、最初の画面で“Japanese”、“English”の文字の選択ができるようになっています。ここで、“English”を選びますと、英語で朗読を聞くことができます。目次のページの右下に「解説」が付いていますので、ユーгентシュティルが絵本画家たちにどのような影響を与えたかという解説を、ナレーションや音楽を聴きながら読むことができます。

4. 「子どもの本 イメージの伝承」と「江戸絵本とジャポニズム」

今年の5月に公開したコンテンツが二つあります。「子どもの本 イメージの伝承」と「江戸絵本とジャポニズム」です。

まずは、「子どもの本 イメージの伝承」です。29作品の絵本画像、約2,000枚を紹介する画像データベースとなっています。絵本が市民生活の中に積極的にとり入れられた19世紀の資料を中心に、算数や読み書きの本、昔話や冒険物語など、子どもたちの身近にあった本などを紹介しています。こちらには索引が付いていて、キーワード検索などもできるようになっています。こちらの「絵本さくいん：年代順」というボタンをクリックしますと、1766年の作品からずっとたどって、年代順に並んで表示されます。このように、自分の好きな作品を選ぶことができます。これは画像データベースですので、特に音楽や朗読などは付けていません。各作品は、画像が自動的に動くようになっています。適当なところで「ポーズ」をクリックして止めて、「この本について」というボタンをクリックしますと、この本の解説が出てきます。最初に戻りまして、「絵本さくいん：画家名」というボタンをクリックしますと、今度は五十音順に画家名が並んでいます。ここから画家を探すこ

ともできます。これは、挿絵画家として有名なジョン・テニエルの『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures under Ground*, 1899 [初版1865]) を電子化した画像です。

このコンテンツは、途中から始めることもできます。止めたい時は、この「ポーズ」というボタンをクリックしてください。この画面の左下の方には、誰の絵であって、いつ刊行されたかという説明が書いてあります。

それから、「キーワードけんさく」というボタンをクリックしますと、子どもたちでも簡単に探せるようにひらがなで、「けもの」、「むし」、「のりもの」などといったキーワードが付いた画面に飛びます。今映し出されている画面では、全作品の中から「のりもの」に関する画像を取り出しています。見たい画面をクリックしますと、これがトマス・ビュイックの『四足獣の歴史』(*General History of Quadrupeds*, 1791 [初版1790]) に出てくる動物であるということがわかると思います。

また、「この本について」というボタンをクリックしますと、このように『四足獣の歴史』の詳細を見ることができます。

このコンテンツには、「子どもの本 イメージの伝承」というタイトルが付いています。これは、活字文化の初期の頃の作品が中心です。この頃は、子どもの本という概念がほとんどなく、挿絵入りの知識の本や、聖書などが出版され、それを子どもが読むということが主流でした。子どもの本がイメージとしてどのように伝承されていたかということはこのコンテンツで見られるようになっています。

最後にご紹介するのは、「江戸絵本とジャポニズム」というコンテンツです。「江戸絵本」がタイトルに付いておき、江戸絵本の中から10作品を選び、これらの作品を落語家の方の朗読や、三味線などによる音楽を付けて楽しんでいただけるようなコンテンツになっています。

このコンテンツは10作品ありますが、先ほどご紹介したコンテンツのように、好きな作品を選ぶと始まります。今日は、『桃太郎宝の蔵入り』(1830-40年頃)をさわりの部分だけ見ていただき

ます。この作品のナレーションは、落語家の林家正雀さんです。

この「江戸絵本とジャポニズム」というコンテンツでは、江戸絵本がウォルター・クレインや、ウィリアム・ニコルソンなど西洋の絵本画家にどのように影響を与えていたのかが見られるように、西洋の2作品を紹介しています。

それから、右下の解説の中に、「欧米の絵本にみるジャポニズム」という項目があります。この中で、実際に日本の絵本が西洋の絵本にどのような影響を与えていたのかということ画像で紹介しています。

日本の江戸絵本が、イギリスのウォルター・クレインなどに影響を与えていた。そして、19世紀に入ってヨーロッパで起こった「アールヌーボー」

などがまた、日本の大正時代の画家たちに影響を与えていた。そういった、絵本で見られる面白さというか、不思議さというものを「絵本ギャラリー」を通じて見るができると思います。

今日は「絵本ギャラリー」の簡単なさわりだけしかご紹介していませんので、ご興味のある方は、後でじっくり見ていただきたいと思います。

「絵本ギャラリー」では、今年はモダニズムに関連する絵本を紹介するコンテンツを作成する予定です。こちらの方もまた、見ていただけたらと思います。それでは、簡単ですが、「絵本ギャラリー」の説明を終わらせていただきます。

(こぬま さとこ 企画協力課企画広報係長)

講師略歴（五十音順）

灰島かり（はいじま かり）

1950年生まれ。国際基督教大学卒業。PR誌編集を経て、英国のサリー大学ローハンプトン大学院で児童文学を学ぶ。子どもの本の翻訳者、研究者。白百合女子大学他講師。絵本学会理事。日本イギリス児童文学会監事。

著書 『絵本翻訳教室へようこそ』、『絵本をひらく』（編著）、『英米児童文学ガイド 作品と理論』（共著）、『英米児童文学の宇宙』（共著）等

訳書 『アーサー王の剣』、『ケルトの白馬』、『チューリップタッチ』、『へそまがり昔ばなし』等

藤本朝巳（ふじもと ともみ）

1953年生まれ。青山学院大学英米文学科卒業。米国ポートランド州立大学留学、白百合女子大学児童文学科博士課程終了。フェリス女学院大学英文学教授。日本イギリス児童文学会理事。

著書 『子どもに伝えたい昔話と絵本』、『絵本はいかに語れるか』、『ぞうくんはどっちを向いている？楽しい絵本学』、『絵本のアナトミー』（仮題）等

訳書 『リベックじいさんのなしの木』、『おとうさんの庭』等

三宅興子（みやけ おきこ）

1938年生まれ。大阪市立大学大学院家政学研究科終了。梅花女子大学大学院文学研究科（児童文学専攻）教授。日本イギリス児童文学会理事。絵本学会理事。

著書 『もうひとつのイギリス児童文学史』、『イギリス児童文学論』、『イギリス絵本論』、『イギリスの絵本の歴史』、『児童文学12の扉を開く』（共著）、『フィリパ・ピアス』（編著）、『学校図書館発絵本ガイドブック』（共著）、『絵本と子どものあふ場所』（編著）等

吉田新一（よしだ しんいち）

国立国会図書館客員調査員（平成17年度～）

1931年生まれ。立教大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程終了。立教大学、日本女子大学勤務を経て、立教大学名誉教授。日本イギリス児童文学学会会長、絵本学会初代会長を務める。

著書 『イギリス児童文学論』、『絵本の愉しみ』、『絵本の魅力』、『ピーターラビットの世界』、『絵本・物語るイラストレーション』等

訳書 『ランドルフ・コールデコットの生涯と作品』、『宝さがしの子どもたち』等

Pleasure of picture books: learning from
the tradition of British picture books
Transcript of the ILCL Lecture Series
on Children's Literature, 2006

Contents

Foreword	Yukiko Saito	3
Randolph Caldecott	Shin' ichi Yoshida	6
Beatrix Potter	Shin' ichi Yoshida	29
Edward Ardizzone	Shin' ichi Yoshida	53
Charles Keeping			
— Picture books for self-expression	Okiko Miyake	82
Shirley Hughes			
— The most popular picture-book artist in England	Kari Hajjima	104
Analysis of Anthony Browne's picture books			
— The tradition and innovation of British picture books	Tomomi Fujimoto	123
Reference books about Caldecott, Potter, Ardizzone			
— From the ILCL collections	Yuri Chiyo	142
Introduction of Picture Book Gallery	Satoko Konuma	165

平成 18 年度国際子ども図書館 児童文学連続講座講義録
「絵本の愉しみ—イギリス絵本の伝統に学ぶ—」

平成 19 年 10 月 11 日 発行

編集・発行 国立国会図書館国際子ども図書館
〒110-0007 東京都台東区上野公園 12-49
電話 03-3827-2053 FAX 03-3827-2043

印刷・表紙デザイン 株式会社 丸井工文社
〒107-0062 東京都港区南青山 7-1-5

I S B N 9 7 8 - 4 - 8 7 5 8 2 - 6 5 8 - 3 C 0 4 9 1

本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課協力係に連絡してください。本誌のPDF版を国際子ども図書館ホームページ (<http://www.kodomo.go.jp/>) でご覧いただけます。なお、訂正があった場合は、ホームページ上に掲載いたします。

